忍法創世記

山田風太郎

小学館文庫

山田風太郎（やまだ ふうたろう）
一九二二年、兵庫生まれ。東京医科大卒。四六年「達磨峠の事件」で作家デビュー。以来、ブームを巻き起こした「甲賀忍法帖」「魔界転生」等の忍法帖、推理、ホラーを初め「警視庁草紙」等の明治開化小説や独自の死生観を示す「人間臨終図巻」「死言状」等名著多数。二〇〇一年没。

カバーデザイン／川上成夫
装画／天野喜孝

忍法創世記

山田風太郎

や4
1

山田風太郎
忍法創世記

小学館文庫
695

ISBN4-09-408053-8
C0193 ¥695E

定価：本体695円＋税

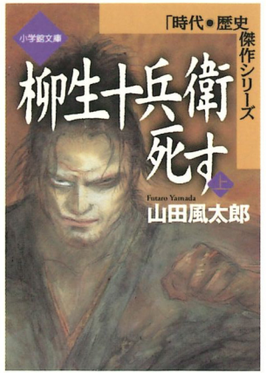
伊賀と柳生の境にある月ヶ瀬に伊賀から花嫁行列、柳生から花婿行列が同時に到着した。今まさに奇妙な和合合戦が行われようとしていた！三組の男女が和合し、敗者が勝者に嫁入り、婿入りするというのだ。

柳生に剣法、伊賀に忍法が誕生した由来を描き、すさまじい三種神器の争奪戦がくり広げられる。長い間抗争を続けていた柳生vs伊賀の戦いは南朝vs北朝へと……。

幻の長篇忍法帖、初文庫化。

（解説・縄田一男）

小学館文庫
好評既刊



◆山田風太郎傑作選
柳生十兵衛死す　上・下
武蔵野水滸伝　上・下
御用侠

カバー製版：株式会社昭和ブライト
カバー印刷：文唱堂印刷株式会社

小学館文庫

小学館文庫

忍法創世記

山田風太郎

小学館

忍法創世記

山田風太郎

小学館文庫

小学館文庫

忍法創世記

山田風太郎

小学館文庫

忍法創世記　目次

伊賀と柳生の結婚式 6
梅花しとね合戦 18
桃香野の勝敗 31
中条兵庫頭 45
悲願大塔衆 58
悲願菊水党 72
柳生郷関を出づ 84
忍法伊賀を胎とす 98
柳生流先史時代 112
この将軍この宰相 124
神器論 137
伊賀流創世時代 151
花の御所 163
豆を焚く詩 175
忍剣第一勝負 188
京の五条の橋の下 201
忍剣第二勝負 214
京の五条の橋の上 228
忍剣第三勝負 240
忍奴 254
大命逃るべからず 266
逢うは別れの 279
南北 292
くノ一、神器を護れ 306
大塔衆笄玄之丞 320
菊水党八葉寺隼人 332
大吉野 344
天界魔界 357
死人剣の姫宮 369
菊水党猪丸塔五郎 381
大塔衆網戸天杖 394
如意輪堂悲歌 406
大塔兵斎・菊水監物 418
勾玉かくし平 432
国栖哀歌 445
南山巡狩録 458
歌書よりも忍書に悲し 471
嵐のあと 484
虚天平安 497
秘すれば花 510
あとがきにかえて 山田啓子 525
解説 縄田一男 528

伊賀と柳生の結婚式

「千年の宿敵」ともいうべき縁が歴史の上にある。日本でいえば源平甲越、西洋でいえば曾てはドイツとフランス、現代ではアラブとイスラエルなどがそうである。

こういう悪縁を永遠に断つにはどうすればよいか。最良の法は両者の混血である。これを徹底させようと思えば、両国の男女を絶対に相手国の異性と結婚させることである。極言すれば、これが唯一の方法ではないかと思われるが、実際問題として決して行われない。

これを事実行おうとした者がある。

甲越などいう大国ではない。二小族、或いは二つの土豪といった方がいいかも知れない。大和の柳生と伊賀の服部であった。大和と伊賀、住する国の名は異にするが、両者相隣りし、柳生の庄と服部の郷を直線距離で結べば二十キロ足らずに過ぎない。これが源平のころから相和したり、相争ったり——どうしても争うことが多かった。例えば、両国の交会する地たる月ヶ瀬のごときも、江戸時代の藤堂藩の儒者斎藤拙堂の「梅渓遊記」によれば、「月ヶ瀬村、古くは伊賀に属し、戦国の際この地はじめて大和に属す」とあるが、これも寸土を争った例だ。

ただし、これは室町時代のまっただ中、南朝暦でいえば元中七年、北朝暦でいえば明徳元年——つまり一三九〇年からはじまる物語。

三月にちかい早春の午後、というといまの暦でいうと三月下旬にあたるだろうが、伊賀盆地をめぐる山々には、まだ薙刀みたいに残雪がひかっている。

伊賀は寒いところだ。その寒さも、底冷えがして、ジーンと骨に徹するようなところがある。

しかし、服部郷のその名も服部川にのぞむ服部屋敷からは、あきらかに春の匂いが流れ出た。——花嫁の行列が。

山中の一土豪から出る花嫁とはいえ、平家の末孫たる格式を保って、それは古雅でもあり、華麗でもあった。

貝桶、色直しの長持、厨子、黒棚、唐櫃、長櫃、屏風。——それらが、門火の燃える門から続々と出てゆく。おびただしい道具だが、よく見ると、それらがどれも三組ずつある。

こんな花嫁行列は珍しい。

第一に、出てゆく花嫁が三人である。

第二に、道具類のいちばんあとに、いちばん尊げに、十徳に白い帯をしめた男二人が、それぞれ白銅の鏡、碧玉の勾玉をつらねた首飾りを台にのせて捧げてゆく。これは一組ずつしかない。

そして第三に、三人の花嫁が輿に乗るときから、まわりに集まった男女が口々に、

「負けてはなりませぬぞ、双羽さま！」

「きっと花婿どのを負かしておやりなされよ、環さま！」

「お鏡さま、必ずすぐにお帰りなされませよ！」

と、必死に呼びかけているのであった。負けるな、勝て、とか、さらにすぐに帰れとは、花嫁を送り出す家の人間の挨拶としては常識外である。

輿の上で、三人の花嫁は、或いはうなだれ、或いはきっと宙を見つめ、或いは頬あからめて消えも入りたげに見えた。三人三様だが、いずれもたぐいまれな美しさであった。

婚礼に綿帽子或いは角かくしを用いたのは後年のことで、いま彼女たちの顔はあらわに春日を浴び、そろいの練紅梅の下着に白小袖、矢筈車の紋をつけた純白の裲襠の姿は匂うばかりであった。

三人は、姉妹だ。父は先年亡くなったが、これはいまも生きている領主服部半阿弥の孫娘にあたる。

双羽。

環。

お鏡。

門のところで肩衣をつけたその服部半阿弥は、浄めの門火にみずから麻幹を加えながら、

「わしもすぐゆくぞや」

と、近づいて来る馬に眼をやっていた。頭は剃っている、というより禿げていて、胸まで垂れた髯は真っ白で、馬に乗れるかどうか怪しいほど老いぼれている。どこかもう棺桶に片足つっこんだような感じがある。

「どうじゃな？」

と、もつれた舌でいって、そこでとまった輿の上の三人の孫娘を見あげた。三人の花嫁はこれはいっせいに頬を染めただけで返事もしない。老人はあわてたようにいった。

「いや、勝負は天の運命、どうなろうと爺は満足するぞ。ではゆけ」

と、白い髯をふった。

花嫁たちの輿は出ていった。それに服部の郷士たちがつづく。半阿弥は馬丁に「いざ」とうながされて、やっこらしょと馬の鞍に這いあがったが、ふと門の中にたくま

しい三人の男が、肩衣もつけず腕組みをして仁王立ちになっているのを見ると、馬をその方へ向けた。

「宇波、木ノ目、大弓」

けげんな眼色で、見下ろしていう。

「うぬら、いってやらぬのか」

「仰せの通り」

と、その一人が仏頂面でうなずけば、もう一人が吐き出すようにいう。

「服部家秘蔵の娘御たちが、相手もあろうに相手の倅どもと祝言をなさる——どころか、野天で交合なさる、左様な姿、見とうはござらぬ！」

「このたびの婚儀の意味はくれぐれも申しきかせたではないか」

老人は顔を朱に染めていう。

「また桃香野のまぐわいの儀は、うぬらがいい出したことではないか」

「いかにもいい出したのはわれらでござるが、それをわれらが見るとは申しておりませぬ」

また一人が声ふるわせて、

「しかも、ただいまの花嫁御寮ぶりを拝見するに……ひょっとすると、こりゃ三人とも柳生にとられ申すぞ」

「ということは、つまり服部が全面的に柳生に吸収されるということでござる」

「さて、そうなったあかつき、われらがいかに処すればよいか——」

半阿弥老人は青筋浮べて叱りつけた。

「たわけ、このたびの合体は、服部柳生千年の和楽のために柳生のお石婆とこの半阿弥が談合し、その約定には決してそむかぬと、うぬらも連判をつらねたものを、何をいまさら。——」

「それは、その通りでござるが。——」

三人の武士は困惑と苦悩の表情で、

「ともあれ、拙者ら、桃香野へ参りとうはありませぬ！」

と、だだっ子みたいに下唇をつき出し、てこでも動かぬようにまた腕を組んだ。

——と、その一人が、ふとその腕を解いて門の外へ眼を向けて、

「はてな」

と、いった。

「あれへ来たのは世阿弥どのではないか」

南へ消えた花嫁行列とは反対の北側から、八人の男が近づいて来た。

七人は修験者だが、先頭をやって来るのは黒い十徳に頭巾をつけた三十前後の色白の男であった。

「おお世阿弥。――」

と、半阿弥もつぶやいて、いぶかしげに見守った。

「伯父御、お久しぶりです」

近づいて来た男は、頭巾をとった。阿弥というが、髪は総髪にしている。実に清爽な美男であった。そのくせどこか女のような物腰がある。

伯父御と呼ばれたが、べつに伯父甥の関係ではない。しかし、服部一族にはちがいない。ただ幼童のころその父親につれられてこの伊賀を去り、いまは京の室町御所で公方さまの御寵愛の能役者としてときめいている男であった。

「世阿弥、何しに来たか」

三年ばかり前にいちど帰って来たときは、大勢の能役者の弟子をつれて来て郷党の人々をよろこばせたが、きょうは妙な同伴者をともなって、当人も何やら密行でもして来たらしい風体である。しかし半阿弥はそれを怪しむよりもせきこんだ。

「いや、挨拶はあとでする。待っておってくれい。わしはちとこれから出かけねばならぬ用があるのじゃ」

「はて、何事が起ったのでござる？」

世阿弥は門の中をのぞきこんだ。行列は出ていったが、波のひいたような、ふつうでない気配を彼も感じとったらしい。

「いや、きょうはこれから祝言でな。いま花嫁を送り出したところじゃ」

「花嫁――とは、どなたで？」

「孫娘の双羽、環、お鏡よ」

「や、あの三人が、どちらさまへ？」

「隣りの柳生じゃ。柳生の三人息子と、これから月ヶ瀬の桃香野で両家合体の縁組みをするのじゃよ」

世阿弥はうしろの七人の山伏と顔見合わせた。

「――さあ、しまった！」

と、彼はつぶやいた。

もう馬を歩ませかけていた半阿弥老人は、くびをねじむけた。

「何がしまった」

「は。――」

「その山伏の衆は何者じゃ」

世阿弥はためらい、やがて小声で、しかし決然としたようにいった。

「これは楠木の衆で。――」

同じ日のほぼ同じ時刻、柳生谷の小高い丘の上にある屋形からも、鎧櫃、唐櫃、長

櫃、それに鹿の皮や鞍馬や——決して豪華ではなく、むしろ質朴だが、しかし重厚の気を失わない道具類が三組ずつ混った行列が下って、東へ進んでいった。その中に、一振の太刀だけが特別うやうやしく捧げられていた。

やはり、ここでも見送りの人々の中から、

「負けてはなりませぬぞ、舟馬さま！」

「きっと花嫁を負かしておやりなされよ、七兵衛どの！」

「又十郎さま、必ずすぐにお帰りなされませよ！」

と、花婿を送り出すにしてはあまりにも風変りな挨拶が飛んだ。

純白の小袖に吾亦紅の定紋染め出した肩衣をつけて、三頭の馬にゆられているのは三人の若い武士であった。

柳生舟馬。

柳生七兵衛。

柳生又十郎。

この順に兄弟で、長子はいかにも沈毅で男らしく、次子はどういうわけか右眼が糸のようにとじられてみるからに凄味のある風貌で、末子はまだ美少年といっていいやさしいからだつきなのに、燃えるように情熱的な顔をしている。

黒ずんだ大きな門の下で浄めの門火を焚いているのは、白髪で腰が釘みたいに折れ

曲った老女であった。三兄弟の父はすでにないが、祖母の石刀自である。

いつまでも東へゆく行列を見送っていたが、やがてそれも見えなくなって、侍女にうながされて引返そうとした彼女は、ふと北の方から柳生の庄へ入って来た八人の男に眼をとめた。

「はて？」

笠をかぶっているが、あきらかに武士姿の八人の男は、やがてこの屋形への短い坂道を上って来た。若党が数人走っていって迎えると、先頭の武士が笠をとって挨拶するのが聞えた。

「京の柳営に勤仕いたす中条兵庫頭長秀と申す者でござるが、柳生七兵衛どのにお目にかかりたい。先年七兵衛どのが上洛いたされた際、親しく語り合った者でござる。——」

「おお中条兵庫頭どの。——」

石刀自はフガフガした声でさけんだ。

「お名前は七兵衛より承わっておる。こちらへござれ」

中条兵庫頭と名乗った武士は五十年輩の、秋の霜みたいにきびしい顔をした、しかしひきしまったからだは妙にしなやかな人物であったが、近づいて来て、石刀自を柳生七兵衛の祖母と知って改めて挨拶をした。

「公方さまの、たしか剣術とやらの御師範をしておられるそうな」
「七兵衛どのが左様なことまでお話しでござったか。――して七兵衛どのはおわすか」
「おります。いや、おりませぬじゃ」
「――とは？」
「ホ、ホ。それが妙なというか、めでたいというか、たったいま花嫁を迎えに、伊賀との境、月ヶ瀬の桃香野というところへゆきましたわいの」
「えっ、花嫁？――そりゃ、いずれさまから？」
「伊賀の服部家から」
中条兵庫頭の顔に愕然としたものが動いた。やがて、まばたきしていう。
「伊賀の服部と申せば……この柳生家とは積年不仲の家と承ったが。……」
「そんなことまで御存知か」
刀自はきゅっと歯のない口で笑った。
「さ、そのような縁ゆえ、このたび服部のあるじ半阿弥どのととっくり談合いたし、両家で祝言をあげようとして――七兵衛のみか、兄の舟馬、弟の又十郎も、三人とも花婿として出てゆきましたわいの」
「花婿？　服部家に婿にやられたのでござるか」
「それがわからぬのじゃ、花嫁たる服部の娘をつれてこの柳生へ帰って来るものか、

花婿として伊賀へとられてしまうか。――」
中条兵庫頭は首を傾げ、けげんの面もちである。
「こういっただけではおわかりになるまい。かいつまんで申せばな、わたしと服部半阿弥の談合での、これより当分、柳生の男は必ず伊賀の女をめとり、伊賀の男は必ず柳生の女をめとる約定を交わした。その手はじめとして、当家の三人の兄弟と、服部の三人の姉妹を祝言させることになったのじゃが。――」
刀自は話し出した。
「さて、嫁に迎えるか、婿にゆくかで話が揉めた。二人ずつならとりかえっこということも出来ようが、三人ずつではどうしても不公平が起る。そこで、どうしようぞいの、と難しゅうなっての。かような話ゆえ、事荒立てては面白うないし、すべてがぶちこわしになる――と苦慮していると、向うさまから途方もない思案が持ち出されての」
蒼白い老女の顔に、ふしぎな血潮が上った。
「それは、双方の行列が出会った桃香野で、花婿花嫁を交合させる」
「――えっ？」
「伊賀の服部家には、昔より伝えられておる家宝の鏡と首飾りがあるそうな」
「――は？」

「さて、花婿花嫁が順次交合しての。終るやその鏡を花嫁の口にあてる。鏡はそのはげしい息で曇るであろう。その鏡の曇りが消えて、また顔がうつるようになるまでに、花婿はおのれの男のものにその首飾りをぶら下げての」

中条兵庫頭はもう声も出さなくなった。

「これが碧玉の勾玉をつらねただけの重さのものじゃそうなが、それを男のものにかけて持ちあげられるか、どうか。持ちあげることが出来たら、花婿の勝ちで嫁はこちらにもらう。持ちあげることが出来ぬうちに、鏡に花嫁の顔がうつったら、花嫁の勝ちで、こちらは婿にゆく。――」

老女の声は静かではあったが、やや不安げな眼色になったのを兵庫頭はみとめた。

「可笑しいことは承知の上じゃ。が、それだけに勝負の結果がどう出ても笑ってすませることが出来るであろうと承知をしたが、さてだれが勝つか。三人とも勝つか、それとも三人とも帰って来ぬか。――さて、喃?」

梅花しとね合戦

「なに、楠木?」

服部半阿弥は思わず高い声をたてて、世阿弥を見まもった。

が、すぐに、

「楠木の話など、ききとうはない」

と、吐き出すようにいった。

「楠木やら足利やら、だれが敵やら味方やらわけがわからぬ。南朝北朝の悶着ももう飽き飽きした。それゆえ柳生と一つになって、そんなものと無縁な桃源の小天地を作ろうと思い立ったのじゃわい。……ま、その話はあとできこう。待っておれ、わしは孫娘どもの祝言にゆかねばならぬ」

「お待ち下され」

と、世阿弥はとめた。

「得べくんば、その柳生との祝言の話、やめていただきたいが」

「なに?」

半阿弥は眼をむいた。

「伊賀を捨てたおまえが伊賀の縁組みに何をくちばし入れるぞ」

少し離れたところに立って、じっとこちらの話をうかがっていた伊賀の地侍の宇波帆平、木ノ目周助、大弓銀平次が眼をひからせて近づいて来た。

「なんじゃと? 柳生との祝言とりやめよと? それは何ゆえでござる?」

世阿弥は彼らに眼で久闊の挨拶をして、

「ことは急ぐが、しかし話をきいてもらわねば御納得いただけまい。ほんのしばし時をお借りしたい」

と、気ぜわしげにいった。服部半阿弥は鞍から下りようともせず、

「いや、こちらこそ急ぐ」

と、また馬を歩ませかけた。世阿弥は鋭い声でいった。

「南朝さまよりの御密旨でござるぞ！」

とたんに、反射的に服部半阿弥はヨボヨボの老体にばねでも入ったようにぱっと馬から跳び下りた。——

南北朝の争いは長い。一三三六年、湊川に楠木正成が戦死し、後醍醐天皇が吉野に逃れられ、いわゆる南北朝がはじまって以来ことしまで五十有余年。南風競わずとはいえ、京の足利公方に対し、南朝はいまも吉野の一角にある。

実は服部半阿弥は、若いころ、その楠木方に参陣して、赤坂千早でもたたかった男なのであった。

しかもそれが、いまここにいる世阿弥の縁によってなのだ。世阿弥の祖母が、楠木一族の女性であったのだ。なおこのことについては後に説くであろう。

然るに——その後、天下の雲ゆきは甚だ怪しげなものになった。

まず第一に、「七生までただ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばや」と祈って悲壮な戦

死をとげた正成の子、同時に「あなたなものし八万騎」と四条畷に駈け向って討死した正行の弟たる楠木左衛門尉正儀が——すなわちそれ以後楠木一族の頭領たる正儀が北朝に寝返った。七生どころではない。彼は敵味方の冷笑のうちに七年ばかり前にこの世を去ったが、二代目にして楠木の名を裏切りの汚名にまみれさせてしまったのである。

第二に、服部一族を楠木につなぐ楔となった世阿弥——正確にいえば世阿弥の父観阿弥が、これまた伊賀を出奔して京に出て、足利公方お抱えの能楽師になってしまったのだ。

「……ばかばかしい」

服部半阿弥が次第にこういう心境になったのもむりはない。

三年ばかり前、この世阿弥がいわば錦を飾ってここへ帰って来たときは、ともかくもいま天下に号令している足利家お抱えの能楽者であるし、また伊賀を捨てたのはいまは亡き観阿弥であって、そのころこの世阿弥はまだ少年であったこともあるし、半阿弥はさりげなく一応のあしらいはしたものの、ほんとうのところは心中釈然としないものがある。

いまふたたびはからずも世阿弥を迎えて、服部半阿弥がばかに不愛想であったのはそのためだが、その世阿弥から、

「――南朝さまよりの御密旨でござるぞ！」

と、思いがけぬ声の一撃をくらって、たちどころに下馬して、一瞬かしこまったのは、そもそも世阿弥に釈然としない根本原因、すなわち若き日の半阿弥の心性にからみついてしまった南朝への固着観念が、はからずも反射的に出てしまったものであった。

「おまえが、南朝さまの御密旨を伝える。――」

ともかくも彼らを座敷へ通した老半阿弥の顔は、むしろむっとしていた。先刻の自分のあわてぶりに、自分で腹をたてたせいもある。

「解せぬ。おまえは北朝をいただく公方家に仕える者ではないか。またそこの山伏衆は楠木の一党じゃと申したな。楠木といえばこれまた南朝の裏切り者。――」

「……伯父御」

と、世阿弥はいった。

「そう仰せられるであろうと覚悟しておりました。またそう仰せられると一言もござらぬが……申さねばここに決死の密行して来た甲斐がない。――まずおきき下され、わたしのからだには楠木の血が流れております」

「じゃから、裏切者という。――」

「また、この楠木の衆も仰せの通り、いまは公然とは吉野に顔をさらすことも出来ませぬ始末」

「じゃから。――」

「それゆえに、南朝方のおんために働きたいのでござる。罪滅ぼしの悲願のために。――」

「なに、罪滅ぼし？　罪滅ぼしのために、南朝方のおんために何をしようとするぞ」

「忍びの術を以て、南朝さまをお守り申しあげたい、とこの衆が申される。いや、そのことについては、ひそかに南朝さまのお許しを得ましたそうで」

「忍びの術？」

「詳しくは申しておるひまがない。ただ正成さまの赤坂千早に於けるいくさぶりをお思い出し下され、忍びの術と申しあげただけで、伯父御にも何やら御想像いただけるでござりましょう。この七人の衆は、その術を心得ておる。ただ、何をなすにつけても七人ではいかにも小勢、と嘆いておるのをわたしがきき、卒然としてここの伊賀衆を思い出したのでござる」

世阿弥とこの楠木の残党と結びついたのは、半阿弥にもわからないではない。――では、その世阿弥は、楠木とこの服部を改めてまた結びつけようというのか？

「術は忍び、その性質上、なるべく服部一族以外に知られとうない。それがいま思いもかけず、隣りの柳生と合体なされようとするのをきいて、わたしが、さあしまった、

とさけんだのはそのゆえでござる。——とくに柳生は、ひょっとすると北朝につくおそれがござれば——ただいまのわたしの身分、万が一にもこのことが世に洩れてはすべては破滅と相成りまする」

「柳生が北朝につく？　そんなことはあるまい。そんなことのあろうはずがない。——」

と、半阿弥がくびをふったとき、そばについていた三人の伊賀侍——服部家の家の子郎党ともいうべき宇波帆平、木ノ目周助、大弓銀平次の三人が、眼をぎらぎらさせてひざを乗り出した。

「柳生と合体するは不可と申されるか」

「それが南朝の御意志だといわれるか」

「それは容易ならぬことじゃが」

が、三人の精悍な顔にはまざまざと焦燥が現われた。

「ああしかし、やがて桃香野では伊賀と柳生の祝言が行われる。——」

「それが終ってはもう手遅れ。——」

「この期に及んで、その話流せといってもそれはむりではないか！」

——すると、このときまで、七羽の闇の鴉みたいに黙々とならんでいた山伏の一人が重々しくいった。

「その法をとりいそぎ、われらから御伝授申そう。すなわち忍びの術の一例として」

伊賀と柳生の境にある月ヶ瀬。

奇峰ともいうべき山影の相迫る谷を、これまた怪石にしぶきをあげる河が流れる。五月川という。

その水から山へかけて、白紅の雲がたなびいているようだ。渓流の魚でさえ、その香に酔うだろう。実に幾万株とも知れぬ梅の花はいままっ盛りであった。

この山中に観光ということのまずあり得ない時代に、どうしてこのような壮観が実現したか。それはこの梅から実をとり、実から染料をとって売るためだが、しかしその花がいっせいに繚乱と咲けば、むろんそんな現実を忘れさせる天界の風光に相違なかった。

この一帯を月ヶ瀬というが、その南岸に桃香野と呼ばれるところがあり、名は桃でも、やはりいちめんの梅花の里だ。その万朶の花がいま早春の光にひかりそよめいていた。

四周梅に囲まれた中に、野というべきほどでない野がある。

ここに伊賀服部郷からの花嫁行列、大和柳生谷からの花婿行列が、ほとんど同時に到着した。

西と東にそれぞれ貝桶、長持、厨子、唐櫃、屏風、また鎧櫃や、槍、薙刀、鞍馬などがずらっとならび、供の男女が堵列している。何だか合戦でもはじまりそうだ。

いや、事実或る合戦がこれから行われようとしているのだ。そして、対陣している双方の男女のあいだにも何やら殺気に近いものがながれていた。

ただ、その両側からやや前に出て、三つずつ置かれた輿に坐った都合六人の男女を除いては。

伊賀側の三人の花嫁はさすがにさしうつむいている。まんなかの草の上に、二つの枕をならべた赤い毛氈が敷いてある。両側に三個の三方が置かれて、うやうやしく鏡と首飾りと刀がのせてある。柳生側の三人の花婿は、これは頭をしゃんとあげて、前方に眼をすえていた。

が、やがて三人の花嫁がそうっと顔をあげると、三人の花婿の方がうつむいた。

また、ややあってこれも顔をあげ、眼が合った。

双羽と柳生舟馬と。

環と柳生七兵衛と。

お鏡と柳生又十郎と。

こんどはまた双羽とお鏡がぼうと梅花を映したように頬を染めてうつむいたが、まんなかの環だけは頭をたてている。すると、こちらの柳生七兵衛が徐々にうつむいて

いって——ふいに猛然とその顔をふりあげた。

「まだかっ」

と、彼はさけんだ。

「いつまで待てばよいのか。——服部半阿弥老を」

さすがに伊賀の花嫁側は、やや困惑のざわめきをあげて、うしろの方をふりかえった。

柳生七兵衛はなおさけぶ。

「そもそも、半阿弥老がどうしてもおいでなされる必要があるのか。こちらの祖母も参ってはおらぬ。祝言は二人だけの勝負じゃ。どこに娘の初ちぎりを検分に来る父親があるかっ」

正確には孫娘と祖父だが、そういえばまあその通りだ。しかし、この花婿は甚だ挑戦的である。

「三組もあるのじゃ。ことと次第では日が暮れるぞ。この勝負の決着、早くつけたい。——」

緊張に耐えかねたせいもあろうが、この男はせっかちでもあるらしい。

「やれ、第一番——に、又十郎！」

「かしこまってござる！」

第一の輿から地に立った柳生又十郎は、実にほっそりとなよやかな美青年で、その物腰も優雅で落着きはらっていたが、しかし思いは兄と同じであったと見える。

シトシトと緋の毛氈の方へ歩いていって、

「お鏡どの、ここへ。――」

と、白い手をあげてさしまねいた。

まるで見えない糸に引かれたように、お鏡はふらふらと立ちあがった。

柳生又十郎は毛氈のところで袴をとき出した。五、六歩輿からこちらへ泳ぎ出していたお鏡は、そこで立ちどまった。紅梅のように可憐な顔が、みるみる蒼く変った。

伊賀組の男女も、名状しがたいどよめきをあげた。嬋娟たる美少年とも見える柳生又十郎のあらわした男根は、実にからだにふさわしからぬ――常人の一倍半はあるとも思われる雄偉なものであったからだ。

「ござれ、ござれ」

と、彼はまたまねき、ただ立ちすくんでいるお鏡に、

「柳生伊賀合体のかたちを決める大事でござるぞ！」

と叱咤した。

お鏡はあやつり人形みたいに歩き出した。

又十郎は仄かな笑いさえ浮かべて、二、三歩そちらに出て、いきなりぐいとひきずり寄せた。繊手に転がると抱きあげて、緋毛氈の上に横たえた。――

「伊賀の衆、参られよ」

と、彼は花嫁のもすそをかきわけながら、ふりむいて、

「鏡と首飾りを用意して、事終ったあと、わしの陰茎に首飾りをかけるのを見てもらわねばならぬ。花嫁の息で、鏡が曇っておるあいだに、それがかかるか、かからぬか。――」

身を重ねようとして、

「や！」

と、さけんだ。

「息で曇るも曇らぬも、花嫁は気を失っておる。――」

服部の人々が叫喚をあげて走って来て、もすそをひらかれたまま気絶しているお鏡の姿に立ちすくみ、ただうろたえた。又十郎は落着いてそのもすそをかき合わせ、にいっと笑んで人々をふりむいた。

「鏡と首飾りのことをいい出したのはお手前方じゃ。それなのに、交合以前に失神してしまったというのは、こりゃ放棄試合じゃな。……伊賀の負けと認めてよいな？」

「――お鏡さま」

やっと伊賀の男女が駆け寄ろうとする前に、大男根をぶら下げた美少年はゆらりと

立ちふさがった。

「待った。伊賀が敗れた上は、花嫁は柳生へもらってゆく」

そして、ぬいだ袴を肩にかけ、気を失ったお鏡を両腕にかかえあげて、またシトシトと柳生側へ戻りながら、

「第二番、七兵衛兄上、どうぞ。――」

「ううむ、心得たり」

異様なうめきをあげて、前方をきっとにらみつけながら、柳生七兵衛も輿から出た。これはその位置でがつがつと袴をとりながら、はったとにらんでいる眼は左眼だけで、それが凄味のある彼の顔に、いっそう妖気を加えている。

彼がただならぬ眼をむけたのは――このとき伊賀側の第二の輿から二人めの花嫁がみずから起って来るのを見たからであった。

環も七兵衛をきっと見つめたまま近づいて来る。黒い瞳がどこか青味をおび、唇がややまくれあがって、くらくらするほど肉感的な女人であった。それが。――

歩みながら、純白の裲襠をとった。帯を解いた。白小袖を捨てた。そして――練紅梅の下着をぬいだ。

それが緋毛氈のところへ、雪のような全裸の姿として立ったとき、柳生七兵衛はまだ数メートルの距離にあったが、はじめ鋼鉄の板みたいに見えた長身が、ふいに苦しげにくねり出したのが、柳生側からもはっきり見えた。

何か苦痛に襲われたもののごとくである。――彼は立ちどまった。両手で股間を抑えたようだ。

「――われ敗れたりっ」

凄味のある顔の口から出たとは思われない哀しげなさけびが流れるとともに、その股間からビューッと白濁したものがほとばしるのが見えた。

そのまま柳生七兵衛はヘタヘタとうずくまってしまった。

「柳生の負けでございますね?」

と、環が、梅花の斑を乳房の下側にまで映していった。

「花婿どの、伊賀へおいでなされて下さいますね?」

七兵衛が、背をまるくして、ア、ウ、ア、ウと意味不明瞭なうめきをもらしているあいだに、環はふりかえった。

「第三番、双羽姉上さま、御用意なされませ」

桃香野の勝敗

第三の輿にひかえた柳生舟馬と双羽は、環に叱咤されても容易に動かなかった。

が、不甲斐なくも自沈してしまった仲兄七兵衛を無念げににらんでいた又十郎の、
「いざ、兄上っ」
という声の鞭に、
「……どりゃ」
と、舟馬は不透明なそんな声とともに、ようやくのそりと立ち上った。と、見て、伊賀側の双羽もふらふらと身を起そうとして、よろめいた。
やがて、二人は中央の緋毛氈めがけて歩き出した。柳生舟馬はよくいえば沈毅重厚、とくに、坐っていると実に堂々たる風貌だが、立ち上ると思いのほかにずんぐりむっくりしていて、さらに動き出すと——かかる事態のせいかも知れないが、むしろ鈍重で、手つき足どりなど何やらぎごちなく見える。これに対して双羽の方は、裲襠の中に実体がないかのごとく、まるで軽羅そのものが歩いているようだ。うつむいている優婉な顔だちが、蒼ざめているのを通り越して、半透明にさえ見える。二人は緋毛氈の両側に立って、そしてまた動かなくなった。
「兄上！」
「姉上さま！」
帛を裂くようなその声に、二人が双方から両腕をさしのばしたとき——どっと服部側の方でどよめきが起り、ふいにわらわらと乱れ立った。すわ何事か、と色めきたった柳生側の人々は、東から駈けて来る数騎の蹄のひびきをきいた。
「待った！　待った！　待った！」
まだ遠いのに、その蹄の音をひッ裂くようなさけびであった。声と蹄はみるみる近づいて来て、二つに分れた伊賀の人々のあいだから三騎の武士が現われた。
「——なに？　もはや例のまぐわいの儀をはじめたと？」
「まだ半阿弥老がおいでにならぬのに、何たることじゃ！」
「——な、なんと、環さまは勝たれたが、お鏡さまは敗れなされたと？」
彼らは息をはずませ、蒼くなり、赤くなって、服部の人々とそんな問答を交わしたが、やがて馬から相ついで飛び下りて、つかつかと中央へ歩いて来た。
「お待ちあれ、双羽さま、その儀は相成らぬ！」
さけんだのは、服部の郷士大弓銀平次だ。声を重ねて、木ノ目周助もいう。——
「このたびのこと中止せよとの半阿弥老の仰せでござるわ」
「なに、中止？」
柳生又十郎が、お鏡を抱いたままいった。お鏡はようやく失神から回復したらしいが、よろりと又十郎にもたれかかっているような立姿であった。
「中止とは何じゃ。このたびの儀は、服部側から申し入れて来たことではないか。それをもしそちらから破約するというのなら、こちらの不戦勝と認めるぞ！」

「破約はつかまつらぬ」
と、宇波帆平はいった。又十郎はまたいう。
「中止すなわち破約ではないか」
三人は顔をつき合わせ、ひそひそと何やら談合した。やがて大弓銀平次がいい出した。
「いまきけば、環さま対七兵衛どの、お鏡さま対又十郎どのの交合試合は、たとえおん実技以前であったとは申せ、ともかくもそれぞれ一勝一敗であったという。勝負はあいこでござる。このうえ双羽さまと舟馬どのがおん実技に及ばれれば、いずれが勝っても、いずれかに傷がつく。――」
「そんなことは、はじめからわかっておるではないか。だから、どちらが勝つことになろうと文句はいうまいとの約束であった」
「しかし、それにしても、やっぱりこれは取返しのつかぬこと。――」
と、木ノ目周助がくびをふると、
「ええ、何をもたもたと悠長なことわりをいっておる」
と、宇波帆平がかきのけて、前に出た。
「破約はせぬ。――代りにわれわれがやる」
「なに、おまえらが？　何をやるのじゃ？」

「交合戦を」
「だれと？」
「そこにならんでおる柳生の女衆と。――だれでもよい」
「たわけ、おまえらが何をしようと、それはこのたびの柳生伊賀の祝言の代りにはならぬわ」
と、又十郎は細い肩をゆさぶったが、
「とにかく、柳生方の女人を九人――われら一人について三人ずつお出しなされ。われら、三人ずつ始末して、しかも鏡が曇るも曇らぬも、即刻例の首飾りを宙天に振り飛ばして御覧に入れるでござろう」
という宇波帆平の言葉に、「……？」というように顔色を改めた。
木ノ目周助がいう。
「ともあれ、伊賀の男の情の強さを見た上で、伊賀の女人を女房にする気があるかないか、とっくり思案していただこう」
「こうまで申して、なおいやだと仰せられるか。それほど伊賀の男が恐ろしゅうござるか？」
と、三方から刀の柄に手をかけて、じりっと柳生又十郎をとり囲んだ。
ふしぎなことがある。むろん又十郎は見るからに弱々しげな美少年だが、先刻から

の行状を見るに思いのほかに気性が烈しいらしく、しかもお鏡を軽々と抱いて歩くなど見かけによらぬ大力の持主らしいのに、このときふいに落着かない表情になり、顔色さえも酔いがさめたように蒼醒めていたことだ。

「そ、それは筋違いじゃ。このたびの約定とはちがう。……」

と、ふるえ声でいったとき、向うから、

「やるかっ」

と、凄絶な声がかかった。

「太刀討ちするなら、おれが相手になるぞ！」

なんと、これがさっき環の前で自沈した柳生七兵衛なのであった。ようやく起き上り、隻眼を妖しくひからせて来ようとする前に、環が立ちふさがった。

「あなたは負けた人です。もうたたかう資格はありません」

七兵衛はどぎまぎした顔になり、口の中でもごもごと何やらつぶやいた。

「又十郎」

緋毛氈のところで、長兄の舟馬がいった。容貌の通り、声も重々しい——というより、鈍重といっていい声であった。

「そのようにいうなら、ひとまずその申し入れ通りにさせたらよかろう」

「ち、ちいっ」

と、向うで、七兵衛がまたうめいた。

「三人と交合して、なお首飾りを振り飛ばすなど……やれるものなら、やって見ろ。……」

柳生側から九人の女を出せ。この申し入れの結果は、むろん柳生側の女に一大恐慌を来した。彼女たちは主家の子息たちのおん一儀を、絶大なる不安と期待と好奇心を以て、しかもただ見守るつもりでこの桃香野にやって来たのに、なんぞはからん、風がとんでもない向きに回って、当人たちがあの緋毛氈の上に横たわらなければならぬことになったとは。

さて、だれが出るか、一騒動である。

「お若い方がいいな。あとで、婆ぁゆえ負けたといわれてはこまる」

と、宇波帆平が勝手なことをいう。そして。——

「出ないのか、柳生の女。では、これで柳生の全面的敗北と認めてよいかっ」

と、大弓銀平次が咆哮するに及んで——ついに、九人の女が押し出された。いずれも若く、かつ、この上もない悲壮な表情であった。

「よし、三組いっしょに見せる。——毛氈はいらぬ。いずこも毛氈に劣らぬ梅花のしとねじゃ」

と、木ノ目周助が左右にあごをしゃくった。

それから三人の郷士は、衆人環視のうちに袴をとき、おのれのものをあらわにしたのだが、――これが、どう見ても常識的である。その勢いすらも凡庸といっていい。いま大変な豪語をしたのが、法螺としか思えない。――彼ら自身、ちらっとのぞきこんで、やや心もとない顔をした。

彼らはくるっと柳生側に背を向け、何やら手を動かしているようであった。呪文のごとく唱えた。

「七難速滅！」

「七生滅敵！」

「七復連生秘！」

それからまたこちらに向き直り、眼前の九人の女を見つめたときは、彼らの男根は異様に黒びかりして、まるで三本の鉄筒がそこにつき刺さったかのごとくに見えた。

彼らはそれぞれ、一人ずつの柳生の女をとらえて、梅花のしとねで犯し出した。

「あ……あ……あ……あ！」

敵も味方も、あんぐりと口をあけた。

なんたる猛烈な運動だろう。いやもう忙がしいの何の――まるで杵の早搗きだ。彼らの腰にばねじかけの機械でも入っていて、彼らの意志とは無関係の打撃を加えはじめたかのように見える。……

なんじょう、たまろう。……「ああーっ、ああーっ」と、女たちはさけび出した。もがいて、のがれようとするが、三人の郷士は離さない。それが、数分にして、彼らが離さないというより、物理的に離れないように見え、さらに、女たちの方が離さないように見えて来た。男の打撃に女たちが反動するのが、これまた女の腰にばねが入っているように見えた。

「ああーっ、ああーっ、ああーっ」

女たちは獣のような声をあげた。それが、必ずしも苦痛と恐怖のさけびのみではないようだ。……あの、たったいま悲壮な顔をしていた女が。

その声が、かすれて、ついに消えた。

「一人目は終った！」

郷士たちは離れた。

「次っ」

時間にすれば、ほんの数分である。しかし、女たちの股間は血まみれになり、いずれも草の上にあおむけになったまま、白い泥みたいにみな動かなかった。

郷士たちは、恐怖に立ちすくんでいる二人目の女をとらえた。

同じことであった。しかも、それが終っても、彼らはなお鉄筒のごとくであった。

「三人目！」

すでに三人目の女は、先刻のお鏡のごとく失神状態にあったが、彼らは放棄試合とは認めなかった。郷士たちは容赦なくこれを蹂躙した。

しかもなお。——なんたること、鉄筒の勢いは毛ほどの衰えも見せなかったのである。

大弓銀平次ごときは、

「もし所望するならば、四人、五人でも引受けるぞ！」

と、わめいたほどである。

柳生側は粛として、声もない。——が、遠くから、かすれた声で、やっと七兵衛がいった。

「その女ども、どうした？」

「よろこび死したぞな」

と、木ノ目周助がいった。

惨とした風が柳生側を渡ったが、あまりのことに胆を奪われて、だれ一人駈け寄って来る者もない。——

「舟馬どの舟馬どの」

と、宇波帆平が声をかけた。

「首飾りの件、お頼み申す」

「……む」

柳生舟馬は、われに返ったように三方の上の首飾りを見た。その件については、たしかに先刻帆平が豪語した。しかし、その懸け役になれとは——拒否するかと思ったら、舟馬はのそのそと三方の方に近づいた。なりゆき上、拒否出来ないと判断したのか、ほんとうに帆平の豪語のごとく出来るのかと好奇心を起したのか、それともただ圧倒されて昏迷状態におちいったのか、見たところ、鈍重の外貌からその心理の見当もつかない。

舟馬は首飾りを手にとり、宇波帆平のところに持っていった。勾玉の連なりが、見るからに重げであった。彼はそれを懸けた。

「おさえて下され」

「うむ。……こうか？」

「それっ」

声とともに、首飾りは三十センチもはねあげられた。

「次は、おれがやる。こちらも頼む」

と、木ノ目周助がいった。柳生舟馬は梅花の斑の中に落ちた首飾りを拾って、その

方へ運ぶ。——

「……兄上！」

柳生七兵衛がしゃがれ声でさけんだ。たまりかねたようである。

「柳生家のあととりが、あまりといえば馬鹿げた役を……いいかげんになさらぬか！」

「左様かな。……」

と、舟馬はおのれの手中の首飾りと、木ノ目周助の股間を見くらべて、

「しかし、珍しい見世物ではないか」

と、重々しくいって、周助にそれを懸けた。こんどは首飾りは一メートルもはね上げられた。

「柳生衆っ」

と、三番目にそれをかけられたとき、大弓銀平次は大音声を張りあげた。

「近くば寄って眼にも見よ。——どうじゃっ」

すると、ぶるんっというような音につづいて、石と肉の相搏つ音があがった。気合を入れるためにややへっぴり腰になり、四角な顔をつき出した大弓銀平次のあごの下へ、首飾りははげしく衝突したのである。——

「——いかがっ」

と、顔をひきゆがめて銀平次はさけんだ。

「わかった」

と、舟馬はいった。例のごとく鈍重ではあるが、しかしたしかに感銘した表情であった。

「わかったとは？」

舟馬は草の上に死んでいる九人の柳生の女を見下ろし、しばし黙想している風であったが、やがて重々しくいった。

「……ともあれ、かかる死びとまで出した上は、柳生と伊賀の縁組は……しばらく見合わせるほかはなくなった、と見なければならんであろう喃。……」

「その通りじゃっ。いうまでもなく乱離骨灰じゃ」

と、三人の伊賀の郷士はさけんだ。

まさにその通りだ。彼らの飛び入りの行為は、本来の約定とは筋ちがいである。それは又十郎も指摘した通りだが、結果としてはこれで祝言などあげられる事態ではなくなったことはたしかだ。それこそが——そして、それだけが三人の郷士の馬に泡をかませて馳せつけて来た目的なのであった。大弓銀平次は伊賀の人々にむかって声明した。

「みなの衆、見た通りじゃ。——かかる力を持った男がウヨウヨしておる服部から嫁にゆく、またその服部へ婿に来るなど、なみの男では話にならぬ。服部郷は、服部の

男にまさる男でのうては、服部家の息女の夫にするわけには参らぬ。——おきのどくじゃが、柳生家ではその資格なしと認められたものと認めざるを得ない。——」

伊賀の男女は、しかし呆れ顔である。この三人の男にこれだけの力があろうとは、彼らもいままで夢にも知らなかったのだ。

「では、そこの柳生七兵衛どのを柳生へお返し申せ！」

と、木ノ目周助がいった。そういっているあいだも、他の二人と同様、なお彼の鉄筒は頑然と高姿勢を維持している。

「お鏡さま、こちらにお帰りなされ。——」

と、宇波帆平もさけんだ。——すると、いままで黙ってこのなりゆきを見ていた服部の第二女環が声をかけた。

「お待ち。——それはならぬ」

「なに、ならぬとは？」

「そなたらのなされたことは、わたしとは関係ない。——わたしはこの柳生七兵衛どのに勝った。それゆえ七兵衛どのは伊賀へつれてゆく」

「えっ？」

三人の男は甚だしく狼狽した。三人の男のみならず、柳生七兵衛もひどくあわてたようだ。で、その三人に合わせて、七兵衛も同じさけびを発した。

「そ、それはならぬ」

「お黙りなさい！」

と、環は凛然としていった。

「わたしは約定通りにしているのです。その三人も、七兵衛どのも、わたしに何の異議を唱える資格がありますか？」

中条兵庫頭

柳生七兵衛の顔は赤くなり、また蒼くなった。

「——さ、いらつしゃい！」

環に命じられて、七兵衛はちらっと兄の舟馬の方をふりかえった。舟馬は憮然たる表情でいった。

「おまえが負けたと思うなら、環どのの申されるようにするほかはあるまい。……」

七兵衛は、もういちど環を見つめ、それからその隻眼をまばたきさせて、まさに喪家の狗のごとく、環の方へ歩み寄った。

「あ、待て」

と、ふいに舟馬は叫んだ。

「七兵衛、そこの金剛丸を持ってゆけ」
柳生側から持参して、しとねのそばの三方にのせてあった一振りの刀である。
「その昔、後醍醐のみかどより賜わった柳生の宝剣、それを婿のひきでものとしておまえにやるゆえ、伊賀にいってよりそれを護り刀とせいよ」
柳生舟馬は長兄らしい口調でそういって、しかし沈痛なおももちで末弟をうながした。
「又十郎、ゆこう」
「……は」
柳生又十郎はふらふらと兄の方へ歩いて、ふとふりかえった。
うしろから、やはりふらふらとお鏡がついて来る。
「……はて、そなた、どういう気じゃ？」
お鏡は、いったいどういう心情か、いっぱいに涙をたたえた眼で、ひたと又十郎を見つめている。
「そなた、柳生へ来るつもりか？」
お鏡はこっくりした。
「――ば、ば、ばかなっ」
それまで、口あんぐりとあけてこの経過を見ていた三人の伊賀郷士は、このときわれに帰ってわめき出した。
「ならぬ、ならぬ、とんでもないことじゃ！」
「それでは、われらの来た甲斐がないではないか！」
「われらは何のために、いまあのように精根をしぼったのか！」
実にふしぎなことがある。こうさけびたてる大弓銀平次、木ノ目周助、宇波帆平の三本の男根は、なおむき出しのままであったが、このときに至ってもまだ直立し、彼らが地団駄踏むたびに猛烈に振動した。それはふしぎというより、何やらもの恐ろしい観物であった。
「七兵衛どのが……あえて伊賀に来るというなら、人質の意味でまだしものこと」
「しかし、お鏡さまが柳生にゆかれることは金輪際まかりならぬ！」
「腕ずくでも、やりはいたさぬぞ！」
彼らが刀の柄に手をかけると、相手方の男たちがどよめき立った。
すると、伊賀方の男たちも、ばらばらと三人の郷士の方へ助勢に駈けつけて来ようとする。
「待って！」
女の声がかかった。
「おやめ！」

細い、やさしい声であったのに、伊賀の男たちは踏みとどまって、その方を見た。双羽であった。彼女はみなにくびをふった。

「お鏡が負けたと思うなら、あれを柳生さまへやるよりほかはないでしょう。……」

なお泡を吹いて何やらわめこうとする三人を制して、彼女はお鏡の方を見ていった。

「お鏡、そこの菊水の鏡を持っておゆき。わが祖父の半阿弥が、その昔、楠木兵衛正成さまより拝領した鏡、それを柳生にいってからおまえの守護神とするがよい。……」

ことここに至って、三人の郷士は懊悩のために全身をのた打たせた。そのたびにまた直立したものが左右に揺れる。

が、柳生七兵衛とお鏡がおずおずと戻って来て、それぞれ三方の上の刀と鏡をうやうやしくおしいただき、それを持ってまたひき返そうとするのを見ると、大弓銀平次は恐ろしいしゃがれた声を発した。

「や、柳生……伊賀と柳生の縁は乱離骨灰となったといまいったことを忘れたか。それを承知でなお左様なことをするのか?」

「承知しておる」

と、柳生舟馬が重々しくいった。

しかし、眼はじいっと双羽を見つめている。

双羽もまた舟馬を凝視している。

……ふと、舟馬が手をさしのばすようにあげかけて、途中でとめて、それを振った。

柳生の郷士たちがたまりかねて走り出て来たからである。

「待て、ここはがまんしてくれ。向う側には七兵衛がとらえられておる。――」

と、制し、

「それより、死んだ女を収容せい。柳生へ運んで帰るのじゃ」

と、いった。

いま「姦殺」された九人の女のことである。そして。――

「双羽どの」

と、おちついた声でいった。

「いずれ改めて御挨拶することになると思うが……どういう挨拶になるか、帰って祖母と談合し、もういちどよく思案して見ねば、見当がつきかねる。何はともあれ、きょうの桃香野の儀はこれで終りということに相成るな」

ここまではまずいいとして、あとの歯切れが少々悪い。

「わしは、この儀、終りということにしとうなかったが。……」

双羽は、影のようにうなずいた。終りということにうなずいたのか、終りにしたくないということにうなずいたのか、どっちだか不明である。

もう夕映えといっていい色に染められた山間の道を、柳生の行列が帰ってゆく。

怒り、無念、驚き、悲哀——ちょっと、何といっていいか、彼ら自身にもわからないほどな激情を波打たせながら。

ふしぎなことに、この激情の中に、相手方との和平が破談になったということが運命的当然といった感じがあって、味方の女九人をも怪死させられながら、柳生方をともかくもあそこで引揚げさせた最大の理由は、この思いからであったかも知れない。

しかし、伊賀側と決裂したというのはまことであるか。

来るとき三兄弟を乗せていた三頭の馬のうち、一頭の鞍に柳生七兵衛の姿はない。

そして、その代りに一挺の輿には、又十郎の花嫁たるべき伊賀の花嫁が、たしかに一人揺られている。

しかし、そのお鏡はいったいどういう心境なのか。

彼女はほんとうに又十郎の花嫁になるつもりなのか。——心は知らず、鏡を抱いて輿の上にうなだれている純白の衲襖の姿は桃香野から散って来た梅花の精のように可憐であった。

これにくらべて、激情をもっとあらわに行動に見せているのが又十郎で、柳生の男たちに背負われている九人の女の死骸を見下ろして、

「ち、ちいっ。……さるにても、あの伊賀の男ども、奇態なやつら。……」

と、眼を背後の夕空にむけて歯ぎしりし、馬を走らせておのれの花嫁の輿とならび、

「ううむ、柳生へ来て見よ、こんどは気を失っていようがいまいが、おれもやり殺してくれるぞ」

と、にくにくしげににらみつけ、また馬を走らせて、こんどは兄の舟馬の馬のそばに寄る。

「兄上っ、なぜあの場を黙って引揚げられたのか！」

「……」

「黙って、どころではない。あろうことか、敵の一物に首飾りを懸けるというばかげたまねまでして」

「……」

「あまつさえ、七兵衛兄上と金剛丸の宝剣をみすみす敵に渡して」

「……」

「耳がないのか、牛っ。ふだんから煮え切らぬ人じゃと思うておったが、このたびのことで愛想もこそもつき果てた。爾今、舟馬といわず、牛馬を名乗られるがよい」

何といわれても、長兄舟馬は黙々と馬に揺られている。いうべき言葉がないとか、きいても我慢しているというより、ほんとうに思案にふけって聞えないような表情だ。

——それにしても、この柳生又十郎、先刻、伊賀の郷士につめ寄られたときには一

大恐慌を来したように見えたが、ここに至ってまた別人のように甚だ元気がよろしい。
「モウとでも鳴いて見られい。これ、兄上っ」
やっと舟馬が口をひらいた。
「何か仔細があると思うたからよ」
「仔細とは？」
「それがわからぬが……とにかく、伊賀側に何か変った事態が起きた。七兵衛をやったのは、それを探らせるためもある。……」
「ほほう？」
気鋭の末弟は、はじめてこの鈍重な兄の思慮に、ちょっと見直したように口をあけた。舟馬はしかしまたつぶやいた。
「もっとも、七兵衛が果してこちらの役に立つか、どうか、心もとないふしもあるが。……」
問いかけて、又十郎はふと前方を見て、
「はて、あれは？」
と、馬上にのびあがった。
山路を下って、やや平地に入ったところである。
西の方から、一団の人影が急ぎ足で歩いて来た。柳生谷に留守をさせておいた侍た

ちの姿も見えるが、笠をかぶった旅姿の八人の武士が混っている。みな、見知らぬ顔だ。
「おうっ。……殿！」
その柳生侍たちが駈けて来た。馬や輿を見あげて、
「月ヶ瀬のおん儀、いかが相成りました？」
「七、七兵衛さまは？　や、宝剣がない？」
「あっ、その血まみれの女どもはどうしたことでござるか！」
と、口々にさわいだ。
それには答えず、舟馬は不審な眼を八人の武士に投げた。すると、その八人の中から、五十年輩の武士が、一人つかつかと近づいて来て、目礼した。
「柳生舟馬どのか。……拙者は京の幕府に剣法を以て仕える中条兵庫頭と申す者じゃが、七兵衛どのからおきき及びではないか？」
「剣法？　中条兵庫頭？」
舟馬はキョトンとした表情をしている。
「いや、御存知ないか」
相手はしぶく笑った。
「いささか依頼の筋あって柳生谷へまかり越したものじゃが、先刻石刀自にお目にかかり、きょうの儀のこと承わった。そのなりゆき懸念に耐えず、ついに御家来にここ

まで御案内を願って出て参ったが、服部との御婚儀いかが相成ったか」

「……はじめて柳生に来られた方が、服部とのなりゆき懸念に耐えず、とはどういうわけか」

と、又十郎が鋭くきいた。

秋の霜のようにきびしい顔をした中条兵庫頭はしずかにいった。

「ありていに申せば、わしはこの話、破談になることを願うておる。――」

中条兵庫頭長秀。

――いうまでもなく中条流剣法の開祖である。そしてまた日本に於ける剣法の開祖といっていい。なぜなら、このころまで日本には剣法――少くとも「流」と名づくべき刀術は存在しなかったからだ。

これまで日本に兵乱は数限りなく多い。とくに源平の戦いから、いまの長い南北朝の抗争のあいだにこれといった刀法が発生しなかったのはふしぎなようだが、まだ人間の頭が、いくさにはただ腕力体力があればいいといった認識を持つだけの粗放なものであったのだろう。それよりも、このころまでの部族的集団戦には、弓矢或いは槍薙刀の方が実用的であると考えられていたのは当然だ。

しかし、この時代――時あたかも京に足利義満が君臨する時代に至って、はじめて剣法なるものが編み出された。一方に南北の争いは依然つづいているとはいえ、ともかくも「花の御所」なるものが京に出現する一面泰平の時代である。いくさはゲリラ的であり、いつ個人が襲われるかわからない世となった。人間はいつも弓や槍など持って歩けるものではないし、とくに屋内では使用が困難だ。常時携えることの出来るのは刀である。ここに於て、個人的に刀を以て防衛し、また敵を斃す必要が生じ、かつその必要を満たすだけの工夫を凝らし得る沈思の時がようやく到来したのではなかったか。

つまり、その最初の人がこの中条兵庫頭なのであった。

むろん伝説によれば、義経が京八流という秘太刀を編み出したとか、その前後に鹿島に関東七流と称する刀術が発生したというが、その行跡は煙霧の中におぼろおぼろとしている。またこの中条兵庫頭長秀の父、中条出羽守頼平も刺撃の名人であったとか、或いは長秀の師に念阿弥慈音という剣法僧がいたとかいわれていて、必ずしも突如としてひとり兵庫頭が刀術に開眼したものではあるまいが、とにかく彼が「流」と呼ぶべき刀法の祖であったことにまちがいはない。

塚原卜伝の師といわれる天真正伝神道流飯篠長威斎や、上泉伊勢守の師といわれる陰流の愛洲移香斎などが出たのは、これより数十年後のことである。そしてまたこの中条流から後年富田流、一刀流、小野流という系譜が発生してゆくのであった。

この中条家は鎌倉評定衆であったが、兵庫頭長秀に至って、とくに京に召されて、将軍義満の剣法師範となった。そもそも剣法師範なる職がこれを以て嚆矢とし、いかに彼の特異の才が出色のものであったかが推量される。

——さて、その人の名を柳生舟馬は知らない。又十郎も知らない。しかし、先年京へ遊びにいった柳生七兵衛はこの人物と逢い、かつそのことを祖母の石刀自にも語ったという。だから、ほんとうは舟馬も又十郎もきくにはきいたが、忘れてしまったのかも知れない。ともかくも剣法なるものに知識がないのだから、印象が薄かったのであろう。

が。——

最初見たときには、ただこのあたりの山侍にくらべてひどくひきしまった知性的な容貌を持った中老人だなと思い、また中老人にしては妙にからだの動きがしなやかだな、と感じただけであったが、さてその夜、柳生屋敷の一書院で、改めて語り合っているうちに、ようやくこれがただならぬ人物であることがわかって来た。舟馬が——とくに又十郎が、きょうのいきさつについて祖母に話し、それを傍聴していてこの兵庫頭が、ただ、ふむ、ふむ、とうなずいているあいだにもである。

「ふうむ、七兵衛どのが向うにゆかれたとは、それは残念。——」

と、途中で兵庫頭は嗟嘆した。

「あの御仁は、実によい剣法の素質を持っておられたが」

兵庫頭に同座をゆるしたのは祖母の石刀自である。彼女は何か兵庫頭の用件をきいているらしい。しかし、舟馬と又十郎にはどうも気にかかる。兵庫頭だけでなく、彼について来た七人の武士が、やはりそのうしろで黙々と傍聴しているのも気にかかる。

そして。——

「……しかし、このたびの柳生と服部の縁組み、まずは破れたのは、当方にとって天の助け。——」

と、兵庫頭がまたしてもほっと安堵の吐息をもらすのをきくに及んで、ついに又十郎が、

「なぜでござる？　そもそもあなたはいかなるわけでこの柳生へお越しなされたのです？」

と、ひらき直るに至った。

「舟馬、又十郎」

と、石刀自が厳かな顔をこちらに向けた。

「中条どのは、大塔衆のおん使者であらせられる」

「大塔衆？」

「わたしも、はじめて承わったが、熊野のさるところに、南朝さまとはべつに大塔の

宮のお曾孫姫君がおわし、そこにおる七人の衆は、その姫君に仕えまつるいわゆる大塔衆と呼ばれる方々であるそうな」

「――へっ？」

舟馬は眼を見張ってふりむいたが、すぐにふりむいて、

「しかし、兵庫頭どのは、いまは足利公方に御奉公なされておると申されたではござらぬか？」

と、いった。

「さい喃」

と、石刀自はうなずいて、うやうやしげに彼らを見ていった。

「一応は、その大塔衆も京にあって、兵庫頭どのの剣のお弟子ということになっておる。しかし、その衆を弟子となされておることを見てもわかるように、この中条どのは実は大塔の宮さまの御子孫に忠心を失われぬお方じゃそうな。と申すは、大塔の宮さまが鎌倉に御幽閉なされておられたとき、そのお世話をなし参らせたのが、この兵庫頭どのの父御であったゆえからなそうな」

悲願大塔衆

大塔の宮護良親王。

後醍醐天皇の第六皇子。――元弘の政変に際し、北条氏を打倒し天日を皇統に返した第一の殊勲者である。で、中興ののち、征夷大将軍に任ぜられたが、その精悍豪宕の気性をおそれた足利尊氏の謀計にかかって、かえって父帝の猜疑を受けることとなり、捕われて鎌倉へ送られた。二階堂ヶ谷の東光寺の塗籠に幽閉されること八カ月、ついに尊氏の弟直義の放った淵辺伊賀守義博以下七人の刺客のために殺された。時に建武二年七月、おん年二十八歳。

それから五十五年たつ。――そして、その大塔の宮のお曾孫姫が、いま熊野の一角におわすとは？

「――宮はいつとなく闇の夜のごとくなる土牢の中に、なお灯をかかげて御経遊ばして御座ありけるが。……」

石刀自は歯のない口で口ずさんだ。

「――淵辺が、お迎えに参って候よしを申して、御輿を庭に舁きすえたるを御覧じて、なんじはわれを失わんとの使いにてあらん、心得たりと仰せられて、淵辺が太刀を奪わんと走りかかり給いけるを、淵辺持ちたる太刀を取直し、お膝のあたりを、したたかに打ちたてまつる。……」

「太平記」中最も凄惨な一節であった。

「――宮は半年ばかり牢の中に居かがまらせ給いたりければ、おん足も快く立たせざりけるにや、御心はやたけに思召しけれども、うつぶせに打倒され、起きあがらんとし給いけるところを、淵辺おん胸に乗りかかり、腰の刀を抜いて、おん頸をかかんとしければ、宮おん頸をちぢめて、刀のさきをしかと銜えさせ給う。……」

うっ、とうなる声がした。中条兵庫頭のうしろにひかえている七人の武士がうつむいて眼を押えていた。――なるほど「大塔衆」に相違ない。

「――淵辺したたかなる者なりければ、刀を奪われ参らせじと、引合いけるあいだ、刀のきっさき一寸あまり折れて失せにけり。淵辺その刀を投捨て、脇差の刀を抜いて、まずおん胸もとのあたりを二刀刺す。刺されて宮少し弱らせ給うていに見えるところを、おん髪をつかんでひきあげて、すなわちおん首をかき落す。……」

石刀自の皺のひだみたいな眼からも涙がながれ出した。まだ仔細のよくわからないところがあり、キョトンとしていた柳生舟馬と又十郎も、さすがに心打たれてやや粛然とした。

「――牢の前に走り出でて、明るきところにておん首を見奉りけるに、喰い切らせ給いたりつる刀のきっさき、いまだおん口の中にとどまって、おん眼なお生きたる人のごとし。……」

中条兵庫頭の顔もやや蒼白くなっていた。

「――というときにの、折悪しく、宮のお世話をし申しあげていたこの兵庫頭の父御出羽守どのはよそにおられて、何も知られなんだそうな」

と、石刀自はいった。

「もっとも、たとえ知っていたとて、足利家に仕える者としてどうすることも出来なんだかも知れぬが、と申されるものの、とにかく中条家ではそれ以来、大塔の宮さまに深く罪業の心を持たれて喃。かくて――宮のお曾孫、いたましやその名も牢の宮と仰せられる姫宮さまと、それを守る大塔衆にひそかに心を通じておられると申されるわいの」

舟馬と又十郎は改めて兵庫頭を見た。

「――それは相わかったが、で、何のために柳生へおいでなされたのか」

と、又十郎がまたいう。

「柳生は……もう南朝の、北朝のという悶着にかかわらぬことにしたい――と仰せられたのは、お祖母さまではござらなんだか」

と、舟馬もいう。

「さ、そういわれると心ひるむが」

中条兵庫頭は沈痛な表情をした。

「さればとて、申さねばここに密行して来た甲斐がない。――実は、お助け願いたい

のじゃ。大塔衆、いや、牢の姫宮のおんために」

「え？　大塔の宮の御子孫のために――柳生に何をせよと仰せられる？」

と、舟馬がきく。兵庫頭はしばし眼をとじていたが、やがて心決したらしくいった。

「御承知のごとく、吉野にはただいま南朝さまがおわす。南朝の後亀山天皇さまは後醍醐帝の第五皇子の御直系であらせられる。さればこれを立てて、大塔衆もひそとして熊野にただ牢の宮をお守りして隠棲しておるが――御存じでもあろうが、少し以前から南朝さまが京にお帰りなされて北朝と御合体になる、という噂がある。南朝守護の柱であった故楠木正儀どのが北朝に心を通じたなどというのが、その現われ。――」

「……」

「大塔衆は、これを事実上、南朝の北朝への敗北と見る。牢の姫宮さまは、これを決して許せぬと仰せある」

「……」

「されば、もしそのような事態が生ずるときは」

冷徹とさえ見える中条兵庫頭がごっくりと唾をのみこんだ。

「三種の神器は北朝へは渡せぬ、との御決意じゃ」

「おお」

と、思わず舟馬と又十郎もうめいた。

「かしこくも天照大神より伝えたまう八咫鏡、草薙剣、八尺瓊勾玉、天皇おわすところ必ず神器あり、げんに神器はいま吉野の行宮に護持されておる。――」

「――それを？」

「万一、南朝が北朝へ屈せられるときは」

兵庫頭の眼が森厳なひかりを帯びた。

「それを奪いたてまつれ。――そのときは、神器は大塔の宮の裔が護持するであろう。――やむを得ずんば、すべて打砕け。――決して北朝に渡してはならぬ」

「ああ！」

「――とは、牢の姫宮の御意志でござる。しかも、これは、もし、とか、万一、などいう想定ではない。遠からず、必ずそのときが来るであろうと。――」

一息おいて、又十郎が三たびきいた。

「それで、あなたがここへおいでなされたのは？」

「さればでござる。かくのごとき憂い生ずるほどに南風競わずとは申せ、また京軍もしゃにむに攻め滅ぼすことは叶わぬ南朝の守り、大塔衆だけにてはこの大事をしとげるになにぶん心もとなく――いかがはせんと諮られて、そこではからずも思い出したのがこの柳生一族のこと。もとよりそれは柳生七兵衛どのを知ったからでござるが」

と、兵庫頭はいった。

「七兵衛どのに、なみなみならぬ剣法の素質ありと見たゆえではあるが、そのほかにもこの柳生、山中の小国ながら、久しき南北の争乱のただなかにあって、いまも厳として一国を保っておることは、この谷に住む侍が弱兵であっては叶うことではない。――」

「……」

「さらにまた、これほどの秘事、わしが関わり合っておると公方がたに知られたらもとより無事にはすまぬ。いや、わし個人の安全はひとまずおいて、かんじんの大事が破綻を来す。さればとて、西の河内や東の伊勢はもともと南朝色の濃いところとして京の眼がひかっておる。ここにぽっかりと、ただ柳生のみが左様な猜疑の死角にある。――」

「……」

「すなわち、われら柳生衆のお力をかりたいのでござる」

「……」

「――と、思うて参ったが、その七兵衛どのがおられぬとはまことに以てあてはずれ、途方にくれてとみには何と申してよいやらわからぬほどじゃが、何でござると？　あの七兵衛どのが、伊賀の女人に敗れたと？」

「七兵衛兄は、男には勇猛をきわめるが」

と、又十郎が大軽蔑の息を吐いた。

「女にはからっきし弱いお人じゃ！　前からうすうす感じてはおったが、きょうこそは、それをいやというほど思い知った！」

「ほほう、七兵衛どのが女に弱い？」

くびをかしげる兵庫頭を、やや落着きをとり戻した眼で見て舟馬がきく。

「で、その七兵衛がおらぬが、どうなさる」

「いや」

中条兵庫頭は決然たる眼で二人を見まもった。

「それは、やはりお願いいたしたい。そもそもわれらの参ったのは、もとより七兵衛どの一人をあてにして来たのではない。柳生衆でござる。そして柳生家へ参って、さきほどからそのたたずまいを見ただけで、士風山気、いずれもこの秘命に叶うと見込みをつけた。なかんずく舟馬どの、又十郎どの、つらつらうかがうに、さすがに七兵衛どのの御兄弟みがけば当代稀なる剣の珠玉となる素質充分」

「それが、面目ないが、わしは」

と、舟馬は苦笑した。

「からだだけは、御覧のごとく頑健で、弓馬には何とかおぼえもあるが、打物とって

の働きは得意な方ではない。そちらの運動機能はあまり発達しておらぬようだ」

そして、又十郎をかえりみた。

「これが、女が見ておると甚だ向うッ気が強く、また女そのものに対してはばかに猛勇のたちじゃが――いざ、男同士の喧嘩沙汰となると、からっきし意気地がない。――」

「ほほ、又十郎どのは、女だけに強い？」

兵庫頭はまたくびをかしげて、又十郎を見まもった。逢ったときから、女のような美少年にしては存外気が強いようだ、と見ていたが、そういわれてしげしげと、その風にもえたえぬ姿態を眺めると、女だけに強い、ということがわかるような、わからないような。

「いや、舟馬どの又十郎どの」

兵庫頭は頭をふった。

「御両人とも鍛えようによっては必ずものになる。わしがそう保証する。わしの眼力に狂いはない。――京へ来られい。もとより、はじめから柳生衆ことごとくわれらに加担されては、かえってすべてぶちこわしとなる。わしはまず柳生の御兄弟を京へ招いて、剣法の修行をさせようと思って参ったのじゃ」

「そ、それはまったく迷惑」

又十郎は狼狽その極に達した。せっかくの美貌が酢をなめたような表情になって、

「しかもそれが、さ、三種の神器を奪うためなどとは――な、何たる途方もない――」

からださえ、小刻みにふるえ出した。

中条兵庫頭はしばし黙然としてそれを眺め、また石刀自の方を見やった。柳生舟馬と又十郎は、ふいに無数の蛍が眼前で息をしはじめたような気がした。それは兵庫頭のうしろに坐っている七人の大塔衆の眼であった。

「そもそも、なにゆえわしが、かようなことを打ち明けたか御承知か」

と、兵庫頭はしずかにいった。

「また、伊賀との縁が切れたのをよろこんだのはなにゆえか御存知か」

この人物の沈んだ眼の色がいちばん恐ろしかった。

「それは必ずきいていただかねばならぬ大事だからじゃ。またよその耳に入ってはならぬ秘事だからじゃ。……従って、このこと耳に入れて、しかもきき入れられぬときは、御両人、このままにはおかれぬ、と覚悟していただくよりほかはない。――」

「な、何と申される？」

いまやこの中条兵庫頭が柳生へ、驚くべき目的を以てスカウトにやって来たことはあきらかだが、こんな高圧的な依頼人があるであろうか。これはもう脅迫である。

——彼はいった。

「とは、すでにお祖母さまの御了承を得ておる」

「——えっ、お祖母さまが？」

兄弟は石刀自をふりかえった。又十郎がさけんだ。

「お祖母さま、お祖母さまは、南北、或いは東西の修羅の争いはもう打ち止めにしたいとて、このたびの伊賀の縁組を仰せ出されたのではありませぬか。父を殺した服部と。——」

「さい喃」

石刀自はうなずいた。

「きょう兵庫頭どののお話をきくまではじゃ」

ふだん霞んだような祖母の眼が、これまた青い蛍みたいにひかっているのに兄弟は気がついた。

「もったいなや、大塔の宮の血をひかれる姫宮さまのお頼みとあれば、左様な小さい小さい望み、風に捨てるよりほかはない、捨てて悔いはない。——なんとなれば」

来年まで生きているかどうか、とさえ思われる老いさらばえたからだに、何かが吹き込まれたような姿勢であった。

「聞きゃ、舟馬、又十郎」

「——は」

「あの金剛丸の宝剣はなにゆえ柳生にあるぞ。いまきけば、それを舟馬は伊賀へいった七兵衛へ持たせてやったとか。そういうことも覚悟はしておったが、いまとなれば、とりかえしのつかぬことをしてくれたと、身もふるえるほど恐ろしい。あれは、そなたらの曾祖父が大塔の宮さまから賜わったものじゃ」

「——へ」

「いなとよ、そのころ失っておったこの柳生の庄そのものと共に」

もとより、舟馬又十郎がその柳生家の歴史を知らないはずがない。

曾祖父の名を柳生播磨守永珍という。もとこの柳生谷は奈良春日神社の社領で、柳生家はその社人であり、同時にここの地頭であった。それが荘園制度の崩壊とともにいつしか柳生家のものとなったが、播磨守のとき、執権北条氏の意にそわぬことがあってその領を失い、逃れて笠置寺の衆徒となり、中坊と称して雌伏していた時代があった。柳生家が柳生の庄を失った、短いが最もつらい一時期であった。

あたかも元弘元年夏八月、後醍醐天皇、北条の手をのがれて笠置に走られ、一夜夢みたまう。

紫宸殿の庭とおぼしきところに大いなる橘の木が茂って、そのあたり百卿がいながれていたが、木の下の南へ向いた上座は空いたままになっている。と、いずこからと

もなくみずらに結った童子二人が現われて、「しばらくここに御座候え」とその座に招じ、そのまま天へ消えたと見えて、おん夢はさめた。

木の下に南面の座、これは何を意味するか、と御思案ののち、天皇はこの夢のクイズを解かれた。木と南。——すなわち楠。ずいぶん苦しいが、何しろ夢の話である。

さて夜明けて、「もしかすると、このあたりに楠という武士はないか」とおたずねになったときに出て来たのが、柳生中坊である。すなわち奉答していう。

「河内国金剛山の西にこそ、楠木多聞兵衛正成とて、弓矢取って名を得たる者は候なれ」

かくて千早の義戦の幕はあがり、回天の事は成ったのだが、この運命的な紹介の功で、中坊永珍はのちに大塔の宮から「金剛丸」と名づける御剣を賜わったのみか、柳生はふたたび柳生のものとなった。

このとき柳生播磨守に戻った永珍は、一族の手兵二百七十騎をひきいて天皇軍に馳せ参じたという。——一方、それまで仲の悪かった伊賀の服部半阿弥も楠木軍に参加したというから、これは柳生と伊賀が友軍関係にあった珍しい一時期といえるであろう。ただし、そのあとふたたびもとの犬猿の仲に戻って、永珍の孫、すなわち舟馬らの父孫次郎家宗は強弓よく奈良坂八丁を射通すほどの弓勢で知られたというが、まだ兄弟が幼年のころ、伊賀衆とのたたかいで討死している。——これから見ても、このたびの婚儀はよくよく恩讐を超えたこころみであったわけだ。

ともあれ、石刀自が「太平記」を朗唱したのもむべなるかな。——

「これは柳生に、敵伊賀と乳繰り合う、なんぞという血迷うたまねはしておられぬぞよ、との天の声ではある」

まるで自分のいい出した企てをけろりと忘れ果てた顔つきで石刀自はいい、さらに、と、厳然と命じた。

中条兵庫頭はうすきみの悪い会心の笑いをもらし、改めてそこにひかえた古参の弟子——大塔衆を紹介しはじめた。

「熊野にて姫宮をお守り申しあげておるめんめんはござれど、この七人こそ大塔衆中の精鋭。……」

牛袋兵斎。
輪ノ内彦四郎。
網戸天杖。
笄玄之丞。
蜀剽鬼。
山国軍兵衛。

枕坂獄門。……

——彼らは、柳生兄弟を両掌合わせてふし拝み、それから蛍みたいな眼で、じろっとにらんだ。

悲願菊水党

……ほぼ同じころ、伊賀の服部屋敷では、あるじの半阿弥をとりかこむようにして、京から来た帰郷者世阿弥、同伴した七人の修験者たちと、月ヶ瀬から帰った伊賀衆の主だっためんめんが対坐していた。

桃香野に於けるその後のなりゆきを半阿弥はきいて、撫然とした表情になったが、しかしこれは柳生に於ける同様の場合の石刀自の驚きよりも少なかったかも知れない。すでにこちらから配下の郷士大弓銀平次、木ノ目周助、宇波帆平の三人が馬で駈け出していったときからほぼ見当がついていたのだ。

「で、改めてききたい」

と、その大弓銀平次がきいた。

「なぜ、伊賀と柳生が合体してはならんかということを」

彼らはその理由をよくもきかずに、とるものもとりあえず、桃香野の婚儀ぶちこわしのために飛び出していったと見える。——しかしまた、木ノ目周助がいう。

「双羽さま、環さまのためにも」

で世阿弥は語り出した。……すでに半阿弥にはくわしく話してあるらしいが、改めて自分たちが伊賀へ来たわけを説明しはじめたのだ。

「それはまず三種の神器をお護りするため、と申してよかろうか」

「えっ、三種の神器を？」

劈頭からあまり途方もない話なので、双羽も環も、月ヶ瀬から持って帰った昂ぶりなどいちどにけし飛んでしまったような声をたてた。

南北朝相争うこと五十有余年、南風競わずとはいえ、三種の神器は厳としていまもなお吉野にある。

京にも北朝の天皇を抱いているのに、足利将軍が南朝をはばかっている最大の理由は、理念的にはそれの有無であり、かつ強攻してその紛乱の中にもしその神器に万一のことがあれば、という実質的な怖れからでもある。神器は南北朝を超えた存在なのだ。

しかるに。——

南朝方に於ても、実はさまざまの分脈異党あり、大別すれば徹底的抗戦派と条件和平派を両極とするが、その間にはさまざまの色調がある。これは当然のことである。

ところがここに、同じ北朝への敵対派ながら、まったく別の野心を抱いた一党がある。いや、同じく後醍醐天皇の諸皇子の血をひく方々を奉ずる、そんな存在は、日本じゅうに数党あるといわれているが。——

「なかでも恐るべきは、熊野に大塔の宮のおん血をひく大塔衆という一派」

「大塔衆」

「大塔の宮そのひとが、第六皇子でおわしながら、最も御野心ありと見られて、父帝より足利家へその御処分を委されたおん方、いわば天皇に売られたおん方でござる。されば後醍醐帝第五皇子の血をひかれるいまの南朝さまへ、そのお血筋の方が釈然たらざるもののあることは推量がつき申すが」

「な、なるほど。——」

と、三人の郷士も口をあけてうなずく。

「この一党が、なんと南朝の神器を奪い、まことの天皇家としての旗をひるがえさんとしておわすとか」

「ほほう」

「——と、この菊水党の衆が申される」

世阿弥は背後に居ながれている七人の山伏をかえり見た。

「菊水党、さきほど申した通り、楠木正儀どのの残党。——楠木一族のうちの或るものは、いまも南朝さまのために働いてござるが、この正儀どのにつながる一党ばかりは、裏切者として吉野の天日に顔はさらせぬ存在。それだけに何とぞして罪滅ぼしの御奉公をいたしたいと、みずからひそかに菊水党と名乗って悲願を抱いておるところに、いまの大塔衆の話をきいた。かくてもし大塔衆が三種の神器を奪おうなどと動かれるならば、未然にこれを防ぎたいとの望み。——」

七人の山伏は粛然としてうなずいた。

「ところがさる日、その大塔衆が柳生を味方にひき入れたいと計っておるとの内密の噂をきいた。いや、ひょっとすると、その誘いの使者が、きょうあたりにも柳生へいっておるかも知れぬ。——」

「——やっ？」

と、服部の人々は眼を見ひらいた。

「しかるに菊水党でも、大塔衆とたたかってまずまずとの自負を持っておるのは、この七人のみ、とみずからいう。

なにぶんにも小人数、向うは柳生を誘いにゆくというのに如何はせん、と相談受けて、そこで思い出したのがふるさとたるこの伊賀の服部郷。——」

と、世阿弥はいった。

「御存知のごとく、わたしは楠木の血につながる。南朝さまへの罪滅ぼしの心はこの

衆に劣らぬが、なにぶんにもいまは足利家の能楽師という運命、公然とは動けぬ。また動こうにも、非力なわたしに何が出来るとも思われぬ。さればこそ、この服部へお願いに参った次第」

「……」

「このこと、ひそかに南朝の後亀山天皇さまにも人を介して申しあげたところ、吉野にはまだ楠木正儀の一族をさげすむ者の多ければいまは表に出せぬが、もし服部と力を協せ神器を護りぬいてくれるならば、将来必ずゆるしてやろうとの綸言でござった由」

「……」

「すでに南朝さまもお認めでござる。何とぞ服部一族、聖なる神器を守るために助けて下さらぬか？」

つまり世阿弥は、この伊賀へスカウトにやって来たわけだ。このとき彼のすずやかな眼には涙さえあった。

すでにこの話はきいたはずだが、老半阿弥のくぼんだ眼窩の奥にも同じ光がやどっている。ちらっとそれを見て、宇波帆平がいう。

「大塔衆、しかし左様なものの存在を知っておるならば、それが神器奪取などの妄動に出るのを待つことなく、いまのうちに処置すればよいではござらぬか」

「大塔衆は、しかしやはり同じ南朝方と申してよい衆でござる」

「……」

「いわば、菊水党とは骨肉の縁。おわかりか」

「……」

「それに、いまだ何もせぬものに、こちらが何をするというわけにも参らぬ。——これは、万一にそなえての用意でござる」

「手が出せぬというのに、伊賀にいま何をせよといわれるのか」

「されば、忍法の修行で」

「忍法。——」

三人の郷士は、ちらっと自分たちの股間を見た。むろんもう袴はつけているけれど、そのうちにあるものが、もう半日も、いまになってもなお鉄筒のごとく直立しているのを彼らが自覚していないわけがない。

忍法、そんな言葉を彼らはきょうはじめてきいた。

先刻彼らは、実は股間のものを、七人の山伏に舐められたのである。甚だぞっとしない難行で、そのときはむしろ萎靡縮小したほどであったが、さて桃香野の現場へいって、「七難速滅」「七生滅敵」「七復連生秘」と、教えられた通りの呪文を唱えなが

らみずからしごくと——なんと鉄筒のごときものに変ってしまい、精気満々として腰のあたりばねでも入ったような感じになったのである。そして、交合をはじめると、腰が機械みたいに運動してやまない。——

「これが忍法？」

山伏たちが陰々と口を切った。

「そればかりが忍法ではござらぬ」

「そのわざ、そこまで達するまでにも容易でないが」

「ほかにもまだ数々のわざあり」

「その修行は汗が血となるほどでござる。——」

大弓銀平次が、ふと不安げな顔になってきいた。

「これは、いつまでこうなっておるのでござるか？」

「七生生まれ変るまで」

三人はぎょっとして股間をのぞきこみおたがいの顔を見合わせた。

そのとき、服部半阿弥が沈痛悲壮な口調で朗唱しはじめた。

「——楠木が一族十三人、手の者六十余人、六間の客殿に二行に並みいて、念仏十ぺんばかり同音に唱えて、一度に腹をぞ切ったりける。正成座上に居つつ、舎弟の正季に向って、そもそも最後の一念によって善悪の生を引くといえり、九界のあいだ何か

御辺の願いなると問いければ。……」

その眼窩から涙がながれ落ち出した。

「——正季からからと打笑って、七生までただ同じ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候え、と申しければ、正成世にも嬉しげなる気色にて、罪業ふかき悪念なれどもわれもかように思うなり、いざさらば同じく生を替えてこの本懐を達せん、と契って兄弟ともに刺しちがえて、同じ枕に伏しにけり。……」

そして彼はつぶやいた。

「わしは湊川にゆかなんだことを、いまも無念に思うておる」

南北の争いには飽きたといい出したくせに、やはりこの老人は機さえあれば楠木軍に参加して敢闘した若き日の血が涙となってよみがえるのを、どうすることも出来ないと見える。

「お祖父さま」

と、環が気づかわしげに呼びかけた。

「世阿弥どののおすすめ、おききになるおつもりですか？」

「——おおさ、南朝さまおじきじきのお呼びとあれば」

と、半阿弥はいった。むしろこのときは欣然たる声のひびきに変っていた。

「菊水党とやらの悲願、だれよりもわしにはようわかる。相手がだれであれ、服部一

族に神器を護れ、と？　おお、何たる光栄の綸言。――」

世阿弥も、にっと笑った。

「ああ、わしの眼に狂いはなかった。よう受けて下された！　しかも、わしはこの山国伊賀の気風を思うてその役目ならばと信じたが、この菊水党の衆もさきほどから、ここの衆にはたしかに忍者の素質があると申される。――」

そして、彼らを改めて紹介した。

阿波座監物。
板曳民部。
馬潟八十次。
切畑彦兵衛。
八葉寺隼人。
猪丸塔五郎。
腰越蠟念。……

みなまできかず。――

「お祖父さま、柳生はどうなさるのでございますか」

と、双羽が哀しげな声を出した。

「柳生には……お鏡がいっております」

環がいった。

「そして、こちらには柳生七兵衛どのが来ています」

柳生七兵衛は別室にいた。

「おおっ、柳生っ」

三人の郷士がさけび出した。

「かかる事態となれば、いよいよ以てお鏡どのをとりかえさねばならぬ」

「お鏡どのを柳生に渡すなど、それでなくてさえ要らざることを。――」

「しかも、念入りに、楠木正成どのから伝えられた服部家の宝鏡までも！」

彼らははじめからこんどの柳生との合体には大反対であった。桃香野のまぐわいの儀など持ち出したのは彼ら自身だが、それもこれを何とか破談にしたいという苦しまぎれの難題に過ぎない。それでもあえて和楽の道をえらんだ半阿弥の一念と、それをまた承知した柳生の意外な反応に、不承不承に沈黙のやむなきに至ったのだから、世阿弥の申し込みに得たりやとばかり、ひたすらぶちこわしに駈け出していったのだ。

「よしっ、それでは、これからわれら柳生へいって、お鏡どのを取返して参る。……」

「いや、その前の血祭りとして、あの七兵衛を成敗してくれる！」

三人は立ちあがろうとした。

「なりませぬ」
きっとして環がいった。
「あれはもはや服部衆に婿に来た人です」
「伊賀の婿となるべからざる人間となった、ということはいまの話でおわかりではないか？」
「柳生からの人質と思えばいいでしょう」
三人はしばし絶句し、しかしまたほんとうに立ちあがった。
「では、ともかくお鏡どのは取返して参るぞ。——お鏡どのを、こちらからの人質にせよとはどなたも申されまい？」
こんどは環が沈黙したが、世阿弥がくびをふった。
「お待ちなされ、その柳生のことでござるがな、いま申したようにこのたび伊賀と菊水党とのこと、なるべく秘密にいたしたいというわけはおわかりでござろうな。柳生との合体もそのために望ましゅうないと申したのでござるが、さればとて公然柳生をいま敵に回すことも好ましゅうない。たとえ大塔衆がいったとて、柳生の風がどう吹くか、まだわからぬのじゃ。いずれにせよ、伊賀と柳生が全面的にいくさをはじめて、その理由を天下に知られては、これまたもとも子もなし。——」
「われらだけがゆくと、申しておるのじゃ！」

三人の郷士はいらだたしげにさけんだ。もともと精悍（せいかん）なことでぬきんでていた三人であったが、いまはむしろ凶暴の相にすら変っていた。
お鏡のこともあるが——彼らの凶暴の力は、実はまだ衰えぬ鉄筒から発している。
「少くとも、柳生の様子を探って来るだけでもようござろうが」
「その大塔衆とやらが来ておるか、どうか。——」
「そして、もしお鏡どのを奪い返す機会があれば奪い返す。——」
黙々として坐っていた七人の山伏のうち、阿波座監物がいった。
「よろしかろう。おゆきなさい」
三人の郷士は、獣のごとく駈け出していった。
山伏たちは、何かいいかけた服部半阿弥を眼で抑えた。板曳民部がつぶやいた。
「……あの三人の衆、とうてい忍者となる素質がござらぬ。ここで消えてもらった方が、これより忍法をこの伊賀に植えつけるのにかえって不純物を除くことに相成る」
「あの三人が消えると？」
半阿弥がくびをかしげた。馬潟八十次がいった。
「そのわけは、もう数刻のうちにもわかるでござろう」
「あの三人は、この服部でも最も強い男たちじゃが……ではこの服部郷でも、どのようなやつが忍法とやらに叶（かの）うておるというのか」

「それは」

と、切畑彦兵衛が答えた。

「先刻、いっしょに帰って来た方々のうち、あの花婿どの。――」

「なに？」

半阿弥は眼をまるくして、

「しかし、あれはこの服部の男ではない。――」

「かえって、女人の中にござる」

と、八葉寺隼人がいった。

「そこにござる、双羽どの、環どの。――」

柳生郷関を出づ

「お鏡」

柳生又十郎は呼んだ。仁王立ちになったままである。

坐っていた伊賀の花嫁は、なお月ヶ瀬からここまで散って来た梅花のひとひらのような姿であった。見上げた眼には、涙がいっぱいだ。

又十郎は首をかしげた。泣くくらいなら、なぜこの柳生に来たのかと。

何もむりむたいに自分がひっさらって来たわけではない。桃香野でこの娘の方から勝手にくっついて来たのだ。――しかし、だからといって、もう帰すわけにはゆかない。それどころか。――

「おまえはわしの花嫁じゃぞ」

と、彼はいう。

「ただ、今宵一夜の。……なんとなれば、今夜でおまえのいのちはないからじゃ」

冷然たる調子で、

「殺してくれる。月ヶ瀬で殺されたわが柳生の女どもと同じように。――それは覚悟しておるか？」

すると、お鏡はかすかに、しかしこっくりとした。又十郎の腰から袴がずり落ちた。ぱっときものをまくる。その動作も美少年ともいうべき優雅な姿にふさわしからぬ勇ましいものであったが、現われ出でた一物がまた、そのほっそりとした体格とは全然不つりあいな猛気に満ちたものであった。

お鏡はそれを見ていた。月ヶ瀬でこれを見て、彼女は蒼くなり、さらには失神してしまったのだが、いま又十郎は、お鏡の反応がそのときとはちがうことに気がついた。小刻みにふるえてはいるが、眼をいっぱいに見ひらいて、むしろ好奇心にかがやいてのぞきこんでいるように見える。――

「こわくはないか？」

やや うろたえて、彼はいった。お鏡はまたこっくりと——いや、首を横にふった。

「なに、こわくない？　これで殺すことも出来るのだぞ。伊賀の男どもは、これで柳生の女九人も殺しおったのだぞ！」

——あれを思い出すと、柳生又十郎、実は自信を失う。あのようなやつら、あのような出来事、はじめて見た。が、同時に、それを思い出すと、怒りに血も逆流する思いで、

「死んだ九人の女の亡魂を弔うためにもやわか、うぬをやり殺さでおくべきか！」

美しいだけに、いっそう凄絶の相貌でこうさけんだとき——遠く、東の方から蹄の音が柳生の庄に入って来るのが聞えた。一騎ではない。少くとも、二、三騎だ。

「——はて？」

数分のちに、屋形の門の方から騒ぐ物音が聞えた。

又十郎は、あわてて袴をつけて、その初寝の部屋から駈け出した。廊下を走ってゆくと、ちょうどそこで、侍が息はずませて、兄の舟馬に報告しているところであった。馬で来たのは、三人の伊賀の郷士だ。それが、

「こちらに人質となっておる服部家のお鏡さまにお目にかかりたい」

と、口上をのべているという。嫁に来たものとは認めていない、人質ときめつけて、

「お鏡さまのお口からじかに承わらねばならぬこと、こちらより申さねばならぬことが出来した」

と、当人たち自身の声も、門の方から鳴り渡って来た。

「例の三人でござる」

侍は上ずった声で、

「あのやり殺しども。——」

「た、たわけっ」

又十郎がさけんだ。

「きゃつらを、なぜ門前まで来らせたのか。伊賀との手切れ明白となったきょうの今夜、なんの見張りもしておらなんだのか。それとも、来たのがきゃつらで、みなふるえあがって通したのか！」

「いや、決して見張りを立てておらなんだわけではなく、また恐れたわけでもござらぬが、まさかきゃつらが推参するとは——あまりに不敵ゆえ。——」

「——よしっ」

と、又十郎はいったが、とたんにややひるんで、兄の顔を見た。侍のいう通りだ。ものの三人、しかもその三人だけで今夜押しかけて来るとは実に勇猛なやつらといわなければならぬ。

「わしが逢うてやろう」

舟馬はいって、ゆっくりと歩き出した。

夜更けのことで、蹄の音はよくひびいて聞えたし、又十郎もいったように、あの騒ぎのあった日の今夜のことだ。だれもまだ眠っている者もなく、それが数十人飛び出して、屋形の門前にひしめいている中に、三人の郷士は馬から下りて、傲然と立っていた。

「ええ、望むなら相手になってやる。その前に服部家の御息女を出せ、いうことがあるのだ。相手になるのはその後でよかろう。人質に逢わせるのも怖ろしいか！」

まだ寒月といっていい光が、空にあった。陰翳が濃いため、真昼よりも鮮かに見えるのではないかと思われるその光を浴びて、わめく彼らの顔は凶暴そのものであった。柳生方を圧倒したのはまさにその迫力であったにちがいない。

柳生舟馬がのっそりと出て来た。

「お、舟馬。――」

大弓銀平次は、もう呼び捨てにした。

「きょう月ヶ瀬で、いずれ改めて挨拶するということであったが、伊賀に対してどう出るか、もはや決ったであろう。それをきこう」

「いや――まだ決ってはおらぬが――」

「なに、まだ決らぬ？　相も変らず鈍いやつめ。それではこちらから先に挨拶しよう」

と、木ノ目周助が進み出た。

「きょう、そちらの柳生又十郎、お鏡さまに勝ったつもりでお鏡さまをつれていったが、しかし、つらつら考えるに、やはりわれら不服である。見たであろう、おれたちの力を。――おれたちばかりではない、伊賀にはおれたちほどの力を持った男はウジャウジャとおる。そのような伊賀から、へなへなの柳生に嫁にゆくことはない。――」

又十郎が、舟馬のうしろからちょっと顔を出して何かいいかけたが、すぐにまたひっこんだ。しかし宇波帆平は目ざとくそれを見つけて、

「又十郎、お鏡さまをどうしたか？」

「まだじゃ」

又十郎はいった。少し声が慄えている。

「まだとは？」

「まだ――やり殺さぬ」

三人は愁眉をひらいた。

伊賀では、柳生に偵察にゆくといい残して来たが、これは偵察というものではない。強談だ。それというのもお鏡さまがどうなったか、その首尾をたしかめるのは一刻を

も争うという彼らだけの焦燥から発した行動であった。
「そうか、まだか」
「たとえやったとしても、うぬのやったなどは、やったうちに入らぬ」
「やり殺すなど——ようもぬかしおった！」
三人は笑い声をどよめかした。やおら、銀平次がいう。
「おい、又十郎、伊賀へゆこう」
「なに？」
「花嫁だけを返せとはいわぬ。おまえもいっしょに服部へゆこう」
「ば、ばかな！」
「そして、七兵衛ともども、伊賀の強精の修行をさせてやる。どうじゃ？」
そして、三人はまたわめき出した。
「ともかくもここへお鏡さまを出せ。そのお口から、この思案についての御意見をきく。いや、この案は服部一統で決ったことじゃ。お鏡さまのお気持などきく必要はないが——ともかくも、ここへお出し申せ！」
むちゃくちゃな要求だ。彼らはさすがに菊水党のことは口にしなかったが、それを抑えているだけに、論理は飛躍的で、せっかちで、強圧的なものとなった。
すると。——

「しょせん、このままではすまぬようじゃな」
だれか、こうつぶやいた者がある。
月光をさえぎって墨のような門の蔭から、しずかに八つの影が現われた。すぐ前に立っていた柳生舟馬たちも、いつ彼らがそこまで出ていたかまったく気がつかなかったのである。
ぎょっとしてその方をのぞいた三人の伊賀の郷士のうちのだれかが、
「……あ、大塔衆。——」
と、思わず口走っていた。
むろん、顔を見分けてそうさけんだわけではなく、ただその八人の武士のはなつ妖気がただものではない——少くとも柳生の侍たちとはちがう、ということを本能的に悟ったのである。
「やはり、知っておるか？」
と、まんなかの中年の武士がいった。
「では、いよいよ以てこのまま帰すわけにはゆくまい」
深沈とひとりごとのようにいう。——中条兵庫頭であった。
「なにっ、やるか！」
三人の伊賀郷士は一歩退り、ぱっと抜刀した。

こんな羽目になるつもりはなかったが、ゆきがかり上あとにはひけぬ。——というより、彼らの方でこのゆきがかりを作ったといっていい。——もともと剽悍な連中ではあったが、今夜はまた格別である。お鏡さまのこともあるが、それより彼ら自身の内部、例の股間の鉄筒から発する猛気のなせるわざであった。

「大塔衆——それを知っておる以上は」

とつぶやいて、中条兵庫頭はほかの七人を制した。

「わし一人で相手をして見せよう」

「——えっ？」

又十郎が頓狂な声をあげた。兵庫頭はうなずいた。

「されば、剣法なるものを、この際お手前方のお目にかけるために」

そして、しずかに刀身を抜きはなった。——それは月光に水が走ったかと思われた。

「いまのところ、わしとしてはこの衆に恩怨はない。従って、要らざる殺生は好まぬゆえ、いのちはとらぬ。陰茎を切る」

と、兵庫頭はいう。

ひきしまったからだが、妙にしなやかだとは最初から見ていたが、しかし年のころは五十年輩、べつにとりたてて偉大な体格ではないし、顔は学者のようにまじめくさった容貌の人である。

「右の男の陰茎を左から切る。左の男の陰茎を右から切る。——ござれ」

さしまねくようにその刀身がやや動いた。——と、吸いこまれるかのごとく、右の木ノ目周助、左の宇波帆平が豪刀をふるって躍りかかった。

法も術もない。それだけに鉄石も叩き割るような野性の乱刃であった。それが、軽やかな金属音とともに、左右に大きくはねのけられた。刀のみならず、木ノ目周助は右へ、宇波帆平は左へ。

中条兵庫頭の剣尖が一つ渦を巻いた。と。——

「うふっ」

「ぎゃあ！」

袴のまんなかあたりから、黒い液体がぱっと散ると、二人はつんのめり、地上にまろくなって転がってしまった。二本の刀身のみならず、二本の肉棒が左右の地上にずらっとならんだ。——切り落されたとたんに死後硬直を起したとしか見えないやつが。

「まんなかの男の陰茎は、まっすぐに斬る」

大弓銀平次は大刀をふりかぶったまま、棒立ちになっていた。兵庫頭はスルスルと寄った。それを見つつ、まるで蛇に魅入られた蛙のように銀平次は動かない。

「く、くー」

彼がそんな声をたてたのは、大上段に構えたからだを、ばねのように前へくの字な

りに曲げたあとであった。

「妙なものを斬った」

懐紙で刀身を拭いながら、ニコリともせず兵庫頭はつぶやいた。まるで動かぬ木か草でも切ったように、息も乱れてはいない。みな、ただ唖然としているばかりであった。

「あれが剣法」

門の中で、老女の声がした。石刀自であった。

「ふしぎなわざよな」

「馬に乗せて帰してやれ」

と、兵庫頭は命じた。大塔衆が駈け寄って、なおもがいている三人を、それぞれ乗って来た馬の鞍にひきずりあげ、縛りつけた。

「手はある。手綱くらいはとれるであろう。……服部に帰ったら申せ、争いは好まぬゆえ、柳生舟馬と又十郎、今夜かぎり柳生を退転いたす。いわば夜逃げと思ってくれてよい。ついでにお鏡どのもつれてゆく」

兵庫頭は、この妙な騎馬の方に近寄っていった。

「ほ、われらが？」

舟馬はさすがにめんくらった顔をした。それにはかまわず、兵庫頭は、平手で三頭の馬の尻を叩いていう。

「従って、もはや柳生に押しかけることは無用である。それでもなおかつ主人が留守の柳生に推参するならばそれも勝手。ただあとでそちらに、それ相応の天罰が下るであろうとな」

馬は坂を駈け下りてゆく。三人の負傷者を乗せたまま。

三人の伊賀の郷士は、たんに男根を失った激痛のせいばかりではなく、同時にいままでの猛気はおろか、何もかもからっぽになったような顔を、ガクガクとふって遠ざかっていった。

「わしが柳生を去る？」

それを見送る余裕すらなく、柳生又十郎がいった。

石刀自がうなずいた。

「その通りじゃ。そなたら、京へ行ってあの剣法を学べ」

「京へゆくとして、あと柳生の庄は大丈夫か？」

という問いには、

「むしろいない方が、騒ぎのもとを消すことになる」

と、答える。それに石刀自も、

「例の約定を破った罪はすべて伊賀にある。半阿弥はこれ以上手は出すまいよ。もし手を出せば、及ばずながらこの祖母が采配をふるって追い返すであろうぞ。安心して京へゆきゃい」

と、いう。——舟馬はなお首を傾げる。

「われら両人だけが剣法を修行して何か役に立つのか？」

「むろん、両三年のうちにも柳生一国、あげて大塔方の精鋭となってもらわねばならぬが、いまただちに、柳生の衆を大勢京へひきつれてゆくことは、あらぬ噂のまとともなる。さしあたって、御兄弟のみ修行させ、それから柳生に剣法のたねをまいていただく」

「噂を恐れる、また伊賀側にこのたびのこと知られとうない、としばしば申されるが、伊賀側はすでに知ってしまったようではないか。そもそも伊賀は、どうして大塔衆のことを知ったのか？」

「縦え知ったとしても、向うにはそれを大っぴらには出来ぬわけがある。なんとなれば、あちらもまた」

といいかけて、兵庫頭は口をとじ、大塔衆と眼を見交わしてうなずいた。

「それにまた——お鏡をつれてゆくと申されたな」

と、又十郎も首をかしげていう。

「されば、あの女人を残しておけば、かえって今のように伊賀を呼ぶもととなる」

といってから、兵庫頭はもちまえの秋の霜のような表情になった。

「あれは又十郎どのの花嫁になったお人じゃそうなが、しかし……剣法の道、わしが許しを与えるまでは精進潔斎を護っていただくぞ」

「いっそ、面倒。ここで始末いたしてゆけば」

と、又十郎はひどく残酷なことをいったが、

「何をばかなことを」といわぬばかりの兵庫頭の眼に一蹴されて沈黙した。

——さて、驚いたことは、そのお鏡が、又十郎の上洛をきいて、

「もちろん、わたしも又十郎さまといっしょに京へ参ります」

と、可憐な唇から、あたりまえみたいな言葉を吐いたことだ。

——その夜が明ける前、暁闇の柳生谷を、狐につままれたような柳生の人々の見送る中を、これまたどこか、まだ狐につままれたような柳生兄弟は、中条兵庫頭と七人の大塔衆とともに京へ旅立った。これにお鏡がついている。ただ一つの嫁入り道具、楠木正成から伝来の鏡を大事そうに抱いて。

忍法伊賀を胎とす

「――柳生に、大塔衆なるものはたしかにおるぞっ」
「ふしぎな剣を使うやつがおる」
「斬られた。いや、われらを、き、き、斬りおった！」
蹄の音ももつれさせて帰って来た男たちの発狂したような声であった。夜明けにはまだ少し時があったが、凍るような月光はここ服部衆の門にもふりそそいでいた。むろん、大勢の男女が駈け出して出迎えたが、月光にいくら透して見ても、斬られたという男たちのどこにも傷がない。
が、馬にくくられていた縄を切られて、地上に転がり落ちた三人の郷士はあきらかに死相を浮かべて、
「柳生は、服部に、敵対の意志があるぞ！」
「きゃつらの来襲を待たず、こちらから押しかけろ」
「いや、舟馬と又十郎は今夜のうちに柳生を逃げると申した。逃がしてはならぬ。お鏡さまもつれてゆくというのだ。いまのうちに、きゃつらをとらえて討ち果たせ！」
と、声をしぼった。

「――ど、どうしたのかな、あれは？」
世阿弥がふりむいた。郷士たちが傷も見えないのに息絶え絶えなのを怪しんだのだ。
「……生きて帰ったか」
と、七人の菊水党の中で、だれか舌打ちとともにつぶやいた。それから三人の山伏が、郷士たちの方へ歩き出した。
このとき、それを見送った服部衆の人々がふっと妙な感じに打たれたというのは、その三人の山伏がいずれも或いは頑丈、或いは精悍、或いは悽愴、印象はべつべつながら、なまめかしい、などいう形容には凡そ縁遠いうしろ姿であったのに、なぜか女が歩いてゆくような錯覚にとらえられたことである。
三人の山伏は、三人の郷士の前へひざまずいた。
「われらを見られい」
と、山伏がいった。
わめいていた郷士たちはヒョイと眼をあげて、それっきり視線が離れなくなってしまったようだ。またべつの山伏がいった。
「貴公らの男根は切られておらぬ」
「貴公らの男根は実在する」
それから――反対側からとり囲んでいた人々だけに見えたことだが、三人の山伏は

舌を出した。それがみんな犬か牛みたいにひらひらと長い粘体に見えて、人々はぎょっとした。

すると。——

「……がふっ」

三人の郷士はいっせいにそんな声をたて、それぞれの股間に手をやったかと思うと、ぶるぶるっと身をふるわせ、がばっと前へつっ伏して、それっきり動かなくなってしまった。そのからだの下から、黒い血が地にひろがってゆくのが見えた。

「……どうしたのじゃ、あれは？」

と、こんどは半阿弥が世阿弥にきいた。

三人の山伏は妖々と戻って来た。世阿弥の代りに、その一人が答える。

「この方がよろしゅうござる。三人の衆、男根を或いは失い、或いは截ち割られておると見申した。そのようなからだでは生きておっても、かえって辛うでござろう」

「なに、あれを？　だ、だれが？」

「左様なわざをなした者は大塔衆以外にあろうはずがない。かかる敵ゆえ、われら忍法を以て対抗しなければならぬのでござる」

「いま、おぬしたちの試みたのも忍法か？」

半阿弥は、菊水党の一人がこの三人の郷士を、「とうてい忍法を修行する素質がない。ここで消えてもらった方が、これより忍法をこの伊賀に植えつけるのに、かえって不純物を除くことになる」といったことを思い出した。

「わからぬ。おぬしたちの忍法なるものが」

と、半阿弥はくびをふった。

そもそもきょう、大弓銀平次、木ノ目周助、宇波帆平らが月ヶ瀬で相手の女九人を「姦殺」したときいたが、この三人にそんなわざや力量のあるはずがない。それは出動前にこの菊水党に或る処置を受けたことによるものにちがいないが、そのことも、いまこの三人が絶命したこともよくわからない。

「もとより、この原理については追って御説明申しあげる」

と、山伏の一人がうなずいたとき、これまでのなりゆきを茫然と見ていた服部衆が、ようやく悪夢から醒めたようにどよめきたった。

「おお、柳生に対して備えねば！」

「いや、こっちから押し寄せろ！」

山伏がそれを抑えた。

「待った。いまこの衆、柳生の兄弟が柳生を逃げるとか何とか申されたのをきかれたか。もしそれが事実なら、さしあたって向うにこれ以上の害意はないと見てよいのではござらぬか？」

「それより、拙者ども、二、三人物見に参ろう。――」
「それによって動いても遅くはない。――いかが？　半阿弥老」
ふりむいて意見を求められても、服部半阿弥はこれまた狐につままれたような顔をしている。彼は全然自主性も判断力も失っている。

菊水党のうち馬潟八十次と切畑彦兵衛がいそぎまた柳生へ偵察に出かけた。あとの五人は、世阿弥とともに、半阿弥老、双羽、環をもとの一室に呼んで円座した。……おまけに、どういうつもりか、柳生七兵衛も同席させた。
柳生七兵衛はそれまで別の一室に軟禁されていたのである。
いったいこの伊賀へどういう気持でつれて来られたのか、服部屋敷の一画にあっていかなる心境であったのか。――ひき出された七兵衛は、隻眼の凄艶な面がまえはそのままながら、さすがに混沌たる――おのれ自身の心もわからない表情であった。
「さて、あの三人の衆の男根の件でござるがな」
と、菊水党の一人、阿波座監物がいい出した。
服部郷につれて来られたときちらと七人の奇妙な修験者を見たが、まだ正体を知らず、いま怪しむようにそれを眺めていた柳生七兵衛の片眼がぎらりとひかった。
むろんいまの山伏の言葉が、月ヶ瀬に於ける三人の伊賀の郷士の凄じい交合力を意味することを知ったのである。
「おお、あれは。――」
と、捕虜のくせに、いきなりひざを乗り出したのは、よほどあのことに心打たれたと見える。
「もとより、あの三人にあのような力はござらぬ」
と、監物はいう。
「ない力を、いかにして出させたか。――人間、おのれの持たぬ力を出すのはいかなる場合か。それはまず第一に念力でござる。たとえば人は火事の際、ふつうではとうてい持てぬ重さのものを持って逃げることがある。――」
現代の科学的説明を以てすれば、副腎から分泌されるアドレナリンの作用だとでもいうところであろう。
「あの場合、それはすなわちあの衆の交合欲、それもただの交合欲ではない。おのれの交合力を見せて柳生を気死せしめたい――それによって三人の伊賀の花嫁をとり戻したいという念力から発した交合欲」
みんな、ぽかんとしている。
「第二は、その力があるとおのれ自身信ずることでござる。――もっとも、何もないのに信ずることは出来ぬ。それには人工的なしかけがある。あの場合、拙者ども、甚

だ何であるが、事前にあの衆の男根を舌を以て処置いたし、いざ交合のときにあたって呪文を唱えさせた。呪文を唱えることによって鉄槌のごとき交合力を得ると吹きこんだ。――」

これは一種の催眠術であろう。

「ただし、あの衆はこの自信に他人たるわれらの力を借りられた。――さればこそ、いまその男根を失って戻り、しかもわれらにそれがなお実在するといわれればその気になり、かつまたわれらの舌を見るや、ひとたび止まっていた血を、精汁の代りに噴出した。あの場合、出るものは血のほかにはござらぬからの、かくのごとく他力を借りたものは、かくのごとくに弱い。――真に頼るべきはおのれでござる。おのれだけの力で、念力を発し、自信を作るもの、それは修行のほかにない。すなわちこれ第三の基本」

「……」

「忍法を体得するための原理は、まずこの三つでござる」

「ああ、それは」

と、世阿弥が感にたえたようにさけんだ。

(芸の道とそっくり同じじゃ！)

「おれには何が何だかよくわからんが」

と、柳生七兵衛がまたひざを乗り出した。

「おれにも、あの男たちと同じことをやってくれ。――舌で何とかすると申したな」

「左様これを以て舐めるのでござる」

五人の山伏は、いっせいに舌を出した。

それがあごの下までとどかんばかりな、長い、薄い、ぺらぺらした舌であるのを見て、柳生七兵衛はぎょっとなった。――板曳民部がいった。

「牛や犬の舌は、ものを巻き、吸いつける。われらの舌もそれと同様、粘膜に無数の乳頭がござって、それが吸盤状になっておる。これで舐められては、男も女もひとたまりもない。――やってごらんになるか、七兵衛どの」

七兵衛は辟易した顔になった。

「い、いや、それはまず……のちほどのことにしよう」

「かかる舌を作り出したのもまた、念力、自己信心、修行の三原理による忍法でござる」

「左様なことを、貴公ら、だれから学んだのじゃ？」

「楠木正成公から」

「なに？　正成さまがそんな舌を？」

半阿弥はさけんだ。

「ば、ばかっ――正成さまが、そんな淫らなる舌を以て、七生滅敵の言葉を吐かれたはずがない！」

「いや、舌はともかく、忍びの術をでござる」

こんどは猪丸塔五郎なる山伏がいう。

「赤坂千早に於ける正成さまのたたかいぶりを御想起あれ。城の塀を二重にし、外の塀を釣縄敵もろとも谷底へ切って落す。城塁の真下まで押し寄せた敵に、二丈の柄杓で熱糞汁をそそぐ。大いなる水弾きで油を飛ばして火をつける。藁で作った武者人形を使う。討死したと見せかけて、泣く芸を持った男を使う。ことごとくこれ、兵法というより忍法に通うもの。――」

「ふうむ。……」

「また正成公は河内にあっても、四十八人の密偵を三つに分け、十六人ずついつも京に置かれ、たえず情報を耳に入れられておったと申す」

「ふうむ。……」

「とくに、半阿弥どの、正成さまが赤坂城から落ちられる際、敵に追われて矢を射かけられ、いかなる防ぎをなされたか、御承知でござろう。――」

「おお」

服部半阿弥は眼をとじ「太平記」の一節を朗唱しはじめた。

「……その矢、正成が肘のかかりに応えて、したたかに立ちぬと覚えけるが、素肌なる身に少しも立たずして、筈を返して飛び飜る。――」

矢がうしろから正成の肘関節に音たてて命中したが、そのまま矢は逆になって飛び返っていったというのだ。

「ああ、これ忍法そのものでなくて何でござろうや」

「お、おぬしたちにも左様なわざが出来るのか」

七兵衛が眼をひからせた。山伏たちはくびを横にふった。

「いや、恥ずかしながらわれら未熟にして、正成公にはいまだはるかに及ばず。――さればこれより、この服部衆とともに心血をしぼっていよいよ切磋琢磨いたしたい。――」

「待て」

半阿弥老があわてた。

「その牛の舌の術を娘どもに教えるのか」

山伏たちはうなずいた。

「いかにも。――」

「た、たわけ、そんなわざが何になる。かしこくも、三種の神器をお護りいたすとい

うに。――」

「忍法は剣槍とは異る」

と、腰越蠟念がいった。何者かを蔑むがごとく。――

「剣槍の目的は、ただ相手を殺すことのみにある。忍法は左様ではござらぬ。目的は目的をとげることにござる。或いは敵の秘密を探る。或いは敵の最も大事にしておるものを盗む。もしそれ、敵を殺すことが目的ならば、むろんそれが目的となるが、たとえかたちは似ておっても、その内実は剣のわざなどよりはるかに味の深いもので。――」

「牛の舌がか？」

「いや、牛の舌はともかくとして、色の術を混え得るなど、剣法などでは思いもよらぬ世界。――」

「色の術？」

「されば、それこそわれら七人の最も精根こめて研究いたして参ったもの。牛の舌はその一端でござるが」

「へええっ、おぬしらが色の道を」

牛の舌の効験はたしかに知ったが、改めてこのぶきみな山伏たちの顔貌を見まもらずにはいられない。八葉寺隼人は平然としていう。

「さればこそ、双羽さま、環さまが、最も見込みあられると申したのでござる」

「この娘たちが、色の道を？」

「いかにも神器を奪わんとする痴れ者の心魂をとろかす。これにまさる防備の法がござろうや」

「しかし」

と、半阿弥は或ることを思い出し、頓狂な声をはりあげた。

「おぬしら……この柳生七兵衛……どのにも素質があると申したな？」

「おお、素質、それでござる。双羽、環さまも、たんに女人であるというばかりでなく、その素質ありと見てのことでござるが、この七兵衛どのも、男には珍しく。――」

「――な、なんだと、おれが色の道の？」

何が何だか、まだよくわからないが、柳生七兵衛もめんくらった顔をした。

「その通り。剛一点ばりの例の三人の衆など最も見込みのない、どころかこの道の邪魔となり申す。それにくらべれば七兵衛どのは、たとえば」

八葉寺隼人はうす笑いした。

「惚れた女に近づいて、近づいただけで精汁を放出してしまう。かかる体調心情、もっとも忍法を修行するにふさわしい。――」

「ば、ばかな！　そんなことが、何で」

七兵衛は、明り障子にさす夜明けの光に、真っ赤な顔をした。

そのとき、音もなく馬潟八十次と切畑彦兵衛が入って来た。柳生の偵察から帰って来たのだ。そして、柳生舟馬と又十郎とお鏡が、大塔衆らしい八人の男と京の方へ向って旅立っていったこと、柳生の庄には伊賀に対してべつに戦闘の気配は見られないことを報告した。

「――え、兄と弟が！」

「お鏡が？」

七兵衛と服部姉妹は顔見合わせた。

「左様か」

と、阿波座監物が自若としていった。

「得べくんば、そのままでいてもらいたい。いま騒ぎは起しとうない。――ようござるな、半阿弥どの、柳生の方は捨ておいて」

「何やらわからぬが、柳生の方で何もせねばこちらは手を出す道理がない。むしろ、いままでのなりゆき、こっちに借りが出来たような気がする」

と、半阿弥は気弱げにいった。

「わしは石刀自に対して、心苦しゅう思うておる」

「なに、いまに向うは貸しをとりたてに参るよ。おそらく、やがてその柳生兄弟が」

「どういう意味じゃ、それは？」

「いやなに、ともかくもそれまでにこちらも隠密裡に忍法を荒修行して、それに備えるにしかず。――双羽さま、環さま、七兵衛どの、修行は容易ならぬものとお覚悟あれやっ」

三人はひたすらあっけにとられている。

とくに柳生七兵衛は。

夜明けて、世阿弥だけはその役を果して、これまた京へ旅立った。

見送る山伏の一人がつぶやいた。

「あの仁が京の御所におられるは、べつにこちらが送り込んだわけではないが、結果としては、正成さまが間者を京に置かれたにひとしい。――」

――だれが、どこまで知っていたかはべつとして、敵味方の編制はおぼろげながらほぼそのかたちを整え出したことになる。

すなわち。

大塔衆――中条兵庫頭――柳生一族。

菊水党――世阿弥――服部一族。

柳生流先史時代

「えやーっ」

帛を裂くような声とともに飛んだ木剣、それがあり得べからざるほどの高さから振り下ろされたのは、その剣士が一メートルも跳躍したからであった。

青眼に構えた相手の木剣はあわてて防禦の姿勢に移ったが、わずかに及ばず、そのひたいと打ち込まれた木剣の先端から、微かだが、ぱしっとたしかに音がした。——

「あっ」

悲鳴をあげたのは、打ち込んだ剣士の方だ。襦袢様のきものに襷十文字、袴のももだちをとっているが、小柄で、しなしなとか細い——女だ。彼女は木剣を投げ出し、ひざまずいた。お鏡であった。

「未熟。——おゆるし下されませ、舟馬さま！」

打たれた柳生舟馬の方は、ずんぐりむっくりと立っている。どこを打たれたのか、といった鈍い表情をしていたが、やおら、

「参った」

と、いった。

それから一礼して、のそのそと道場の隅の方へもどって来た。このとき彼のひたいにようやくうす赤く肉が隆起しはじめている。瘤であった。

そこの羽目板の下にならんでいた七つ八つの人影は大塔衆であったが、たがいにうなずき合って、

「……よい素質を持っておるではないか」

「女で喃。……」

「男の方は予想通りじゃが、女の方も、これは思わざる拾いもの」

と、ささやいた。

「——女の方も？」

そばでけげんな声を出したのは、柳生又十郎だ。——どうやらいまの批評はお鏡をほめたらしいが、兄の舟馬を予想通りといい、そしてお鏡もといったように聞えたのがわからない。つまり兄の予想も悪くなかったということだが、それはいま見た醜態と矛盾する。

が、大塔衆はその疑問に答えるより早く、その一人が、

「あ、待たれい」

と、鉢巻をとりかけたお鏡の方に手をあげた。

「いま一番、又十郎どのと。——」

お鏡が、さっき柳生舟馬との立ち合いを命じられたときよりもっと困惑の表情を現わすのを見ると、又十郎はかっとしたように立ちあがった。

「よしっ、やろう」

木剣をつかんで、道場のまんなかへ出る。

しかし又十郎は、お鏡よりも蒼白い顔をしていた。もっとも彼は今に限らずこの道場にひき出されたときはいつも蒼い顔をしている。向うっ気は強いが、もともと腕力沙汰はきらいなのだ。それでもいくらかは馴れて来たが、やはりいまでもここへ来ると——まあ、われわれが歯医者の待合室で待たされているのと同じような気持になるのを禁じ得ない。

京、西の洞院四条にあるこの中条家に来てからほぼ三月。——又十郎はまだこんな憂鬱感から脱却し得ないともいえるし、また、ともかくも木剣をつかんで立ちあがるほど馴らされたともいえる。

花の京へ来たというのに、まだろくに京見物をさせてもらったことがない。明けても暮れても修行である。まず基礎訓練から——蹲踞の姿勢から中段の構え、足の構え、手の構え、前進、後退、面撃ち、手撃ち、胴撃ち、そして突き。

さらにこれらの組合せ、つみ重ね。すなわち手面二段撃ち、手撃ちと突きの二段撃ち、手胴二段撃ちに手面胴の三段撃ち、左右面連続撃ち、切返しに鍔ぜり合いに足払い、まさに剣に法あることを彼らは知った。

教えるのは七人の大塔衆である。

わざわざ柳生へやって来て、三顧の礼か強要か知らないが、ともかくもあれほど熱心に彼らの上洛を求めた中条兵庫頭はまだ親しく手をとって教えない。ときどきやって来て、正面の一段高い座から黙然として見ているだけである。その代り彼は、夜になるとじゅんじゅんとして三種の神器の尊厳を説く。

剣を教えるのは大塔衆であったが、その鍛えぶりはむしろ酷烈であった。彼らも柳生へ来て、兄弟をふし拝んだことなどけろっと忘れたような顔をしていた。

いったい何のために自分たちを呼びに来たのかと思う。

いや、何のために自分たちはあの請いに応じたのかと思う。——思うのは主として又十郎だ。兄の舟馬とお鏡は黙々としてその訓練に耐えている。両人、いかなる心理状態なのか、又十郎には見当もつかない。

暗闇の牛のような兄はともあれ、問題はお鏡だ。彼女は自分とともに京へ来た。その心事も怪しむべきであるが、さらに、いっしょに剣法修行まではじめたとは。

「……ど、どういうつもりだ?」

と、最初きいたことがある。これに対してお鏡は可憐な泣き笑いみたいな表情になって、

「わたしはあなたの妻でございますから」

と、答えた。

この答えもわかったようでわからないが、さてお鏡が果してほんとうに自分の妻であるのかどうか、ということになると、いっそう首をひねりたくなる。月ヶ瀬で殺された柳生の女どもと同じようにし殺してくれると宣言した初夜の夢は破られた上に、京へ来て以来、大塔衆は勝手に修行のための精進を誓わせて、夜はべつべつの寝所へ導くのだ。

それはともかく、まあ軟派といっていい柳生又十郎をこれまでその修行に服させたものは、大塔衆の鞭と、柳生の女を殺されて手出しも出来なかったあの屈辱感をはらしたいという望みと、そしてこのへんな花嫁に——やわか負けてなるものか、という敵愾心であった。

いや、彼の場合、自負といっていい。——女性に対してだけの。

そしていま、又十郎は木剣をとって、おのれの花嫁と相対した。むろん、はじめてのことである。何思ったか、きょうはじめて大塔衆はこんな稽古をいいつけたのである。

大塔衆はいっせいに眼を見ひらいた。

彼らが知っている新弟子柳生又十郎の人間が変ったかと思った。「……あれは、のばしようによっては、妖剣の使い手となる素質がある」と中条兵庫頭はいったけれど、それはまだまだずっと先のことだと思っていたのが、いま突如としてそれが実現したかのように見えたのだ。

これに対して、お鏡は中段の構えをとっているが、構えというより棒立ちだ。いや、まるで猫ににらまれた鼠のようだ。

——危い！

七人の大塔衆が腰を浮かし、その一人輪ノ内彦四郎なる男が、手にしていた木剣をビューッと投げたが、このとき遅し。——

「ええいっ」

又十郎の木剣はながれるがごとくお鏡の胴に走っている。

いや、間に合った。空中を回転していった輪ノ内彦四郎の木剣は、お鏡の背すれすれに又十郎の木剣の先とはっしと十文字に組み合った。

しかも、やはりときすでに遅し、又十郎の木剣はお鏡の胴を払って、彼女は一メートルばかり横へ飛んでどうと崩折れて、動かなくなっていた。

彦四郎が駈けていった。

「気を失っただけじゃ」

抱きあげて、仲間の方をむいて知らせたが、すぐに又十郎を見あげて、

「わしが木剣で勢いを殺さなんだら、この女人血へどを吐いていたろう。又十郎どの、あなたの花嫁ではござらぬか。さても、恐ろしい御仁だ」

と、呆れたように舌打ちした。

「いや、恐ろしいというより、未熟じゃな。先刻、舟馬どのを打って未熟とみずからを叱ったお鏡どのにはるかに劣る」

——木剣の試合である。まかりまちがえば生命にかかわる。この中条兵庫頭に至るまで剣法の稽古なるものが成立しなかったのは、或いはこんなことが最大の原因であったかも知れない。刀を以てする格闘は、出たとこ勝負のほかはないと、人々は思っていたのかも知れない。それを、兵庫頭は工夫したのである。

それは相手のどこを打ち込もうと一髪の一点でピタリと木剣を静止させることであった。

そんなことが出来るか。出来る。大塔衆などを見るに、うなりをたてた木剣は見えない糸で引かれているかのごとく停止する。そんなことをやって、実戦に何らかの効果があるのか。あるだろう。中条兵庫頭が伊賀の郷士の三つの陰茎を斬って落した妙技を見ても。

げんに柳生兄弟も、この稽古をやって——いや、お鏡もそれをやって、ほんとに舟馬を殴ってしまったことを、みずから「未熟」とさけぶ域に達したのだ。そしてまた

いま大塔衆が一見又十郎の勝利を未熟と評したゆえんである。

輪ノ内彦四郎にそういわれても、それにはけろりかんとして、ただ悶絶している稽古姿のお鏡をうすら笑いを浮かべて見下ろしている又十郎の肩を、うしろからとんとんと叩いた者がある。叩いたのは木剣であった。

「おい、おれとやろう」

ふりむいて、又十郎は眼をまろくした。

瘤を出した兄の舟馬であった。

「兄者と？」

「うん」

「兄者はいま試合なされたではないか」

「おまえとはまだだ」

「しかし、兄上を打ちすえたお鏡をかくのごとく破ったわしに、兄上がかかられたとて——物の道理として——」

「それが必ずしもそういう理窟の通りにゆかぬのが剣の理であることが、このごろようやくわしにもわかって来たような気がする。この道は実に深いもので喃」

例によって重々しくいったが、なにその剣理の修行をはじめてからたった三カ月ではないか。それにまた女の細腕でたったいまひたいに瘤を作られた男ではないか。

いや、この長兄の運動神経の鈍さはつとに自他ともに認めるところである。

「よしっ、やろう」

又十郎は木剣をとり直した。

七人の兄弟子はたがいに顔を見合わせたが、一語も発せず——相対峙した兄弟を見る。

が、彼らはまた——眼は見ひらかなかったが、まばたきした。柳生又十郎がもとの通りに戻ってしまった。あの妖気は消えてしまった、ということを見出したのである。

これに対して、舟馬は巌のごとく堂々としている。もっともこの人物は、さっきお鏡に一撃をくう前も堂々たる構えをしていたが、それが。——

「おおりゃっ」

気合だけは腹の底までずんとひびく声を発して、ゆっくりと大上段にふりかぶった。しかも、又十郎の方は声も出ない。こんどはこっちが猫ににらまれた鼠のようだ。

「おおうりゃあっ」

そのまま舟馬は真っ向から振り下ろした。

ぱしっという凄じい音がした。反射的に又十郎はこれを受けるには受けたが、その木剣は二つに折れて、しかも彼はどうんと音たてて仰むけに道場にころがった。

折れた木剣とともに血まで飛んだのではないかと思われるような重量感のある一撃であったが、倒れた又十郎の頭には傷がない。

折られながらも、からくも木剣でふせいだせいと見える。

こんどは網戸天杖という大塔衆が駈け寄って、

「眼をまわしただけじゃ」

といって、さてふしぎそうに柳生舟馬を見あげた。

「どうしたのでござるかな、この又十郎どの、先刻とは別人のようじゃが」

「女だけに強い男でござる」

舟馬は憮然としていった。

「しかし、女に対して——いわんや自分の花嫁に対してあのような強さを発揮するのは、わしは好かぬ。それゆえ、兄としてちょっと」

生きている証拠には、このとき又十郎の美しいひたいにはこれまた瘤が隆起しはじめていた。舟馬は倒れたままの二人の男女のあいだにしゃがんで、まずお鏡の方を呼んだが、まだ気絶から醒めないのを見ると、

「お鏡どの、楠木の鏡が見ておるぞっ」

と、さけんだ。

すると——お鏡はぽっかりと眼をひらき、それからむくと身を起した。

楠木の鏡、それはお鏡が大事げに捧げて京へ持って来たものだ。その由来を兵庫頭

がきいて、しからばあの大忠臣がそなたらの修行を見ていると思えといって、彼らに稽古をつけるときだけ、正面の座にそれを安置した。

お鏡はふしぎそうにまわりを見まわし、その眼がそばに瘤を出して、失神している又十郎にとまると、

「おお、又十郎さまっ」

と、さけんで、いきなりがばとその方へ身を投げた。

このとき、道場の入口に幾つかの人影が立った。

ふりむいて、大塔衆は、そこに師の中条兵庫頭の姿を見たが、それとならんで入って来た人々に眼を釘づけにし、口をあけ、ふいに電撃されたような身動きを見せ、それからいっせいにひれ伏した。

「これは、細川武蔵守さま、今川伊予守さま。――」

柳生舟馬はもとより、いまお鏡にゆさぶられて起きあがったばかりの又十郎も、反射的にそこに平伏していた。

はじめて見参するが、名はもとより知っている。いずれも、幕府の大実力者である。いや、この人々がきょう公用あって中条家に来駕していることも知っていたが、まさかこの道場に回って来るとは、大塔衆も意外であったらしい。

細川武蔵守頼之は管領であり、今川伊予守貞世は九州探題であった。

管領とはまず徳川時代の老中にあたり、足利幕府草創のころよりこの細川、斯波、畠山の三家がこれに任ぜられたが、とくにこの細川頼之は大老といっていい。

初代尊氏、二代義詮と動揺いちじるしかった足利の草創期を磐石の安きにかためたのは、大半この頼之の知謀によるといわれ、将軍義満すら頭があがらぬ師父的存在と見られている賢臣である。

年は六十をちょっと出たころであろうか。ゆったりとふとって、春風が漂い出して来るような大きな人柄に見えた。

それとならぶ今川貞世は、さきごろから上洛しているが、これまた九州探題として鎮西に威をふるった勇将とも思えない、鶴のような気品にみちた人物であった。

法体でもある。

了俊と号し、歌道と故実に詳しい文化人として知られている。

これまた六十半ば。

むろん、これらに数人の侍臣がつづく。

「伊予守さまがの、道場を見たいと仰せ出されての」

と、中条兵庫頭はいった。

きょう中条家に来たのはそれが目的ではないはずだが、長らく九州にあった今川了

俊は、こんど上洛してはじめて剣法とか道場とかの存在をきき、用談の途中、ふとそれを一見したいという希望を申し出たものらしい。

「ほう、これが剣法なるものの道場」

と、了俊はもの珍しげにまわりを見まわしたが、と正面に眼をとめて、

「兵庫、あの鏡は？」

と、きいた。

この将軍この宰相

中条道場の正面に三方を置き、白布をしき、台を立てて飾ってある白銅の鏡。

むろん、当時のものだから白銅を磨いた円形のもので、この時代の特徴として、宋鏡にならって長い柄がついている。裏には菊水の文様が薄肉で彫ってある。

それを見て、今川了俊が、

「あれは？」

ときいたのは、有職家として名高いこの武将の知性にふと触れるものがあったのか。

——いや、こううやうやしく道場に飾ってあっては、だれだって一応の疑問は抱くだろう。

「は。——」

と、答えたまま中条兵庫頭が口ごもったのを見て、柳生舟馬たちははっとしていた。

鏡の素性と眼前に立っている幕府の重臣とを思い合わせたのだ。ひいては、その間に坐っている自分たちの立場に気がついたのだ。

鏡はその昔、伊賀の服部半阿弥が楠木正成からもらったというもの。そして自分たちは南朝につながり、しかも秘密傍系の大塔衆と一体の立場であり、しかも兵庫頭のあやぶむところによれば遠からざる将来、その南朝は北朝と合体するおそれあり、そのときは三種の神器を奪うべく、ただいまのごとくそのための訓練をしているもの。

——

鏡の素性を知られれば、こちらの素性を告げざるを得ず、ひいては自分たちがここに存在している目的も問いつめられるおそれはないか？

——このとき、柳生舟馬と又十郎は、異様な恐怖に襲われた。わきの下に冷たい汗がじわんとにじみ出るほどの。

あとで思うと、なぜそれほど恐怖したのか自分でもわからない。幕府の大官の前でまことに具合の悪い立場にいるにはちがいないが、その大官がいまここでそこまで追及するとも思われないし、だいいちいままでのところ、すべての責任はここにいる中条兵庫頭にある。

その中条兵庫頭は、平然といった。

「それは楠木正成公から伝わった鏡と申すことで」

「ほ、楠木。――」

と今川了俊はさすがに眼をまるくした。

兵庫頭は淡々として、ここにいる三人は大和の柳生から縁あって剣法の修行に来た兄弟で、女は弟の方の嫁、実はその鏡は、女の里の伊賀の服部家から嫁入り道具として持参いたしたもの――と、述べた。

「しかもこの嫁、けなげと申そうか物好きと申そうか、夫のひそみにならってともに剣法の手習いをしたいと申します。されば、と、せっかくの武神正成公より伝われるその菊水の鏡を飾って励みといたしておりまする次第で」

事実の通りを告げたのだが、二人の幕府の大官の方にはべつにさしたる反応はない。それどころか、了俊は、

「それはなるほど宝じゃ喃。……」

と、やや敬意さえこめた眼でもういちどかえりみて、ひとりその方へ近づいて、三方のままとりあげ、ためつすがめつ、うらおもてから鏡を観察しはじめた。お鏡はそれを不安そうに眺めている。

それはともかく。――

曾て足利家にとっては夢魔のごとき存在であった楠木正成ではあるが、その人が死んでからすでに五十有余年。いまもなお南朝はつづいているとはいうものの、楠木といえばその正成の子の正儀は、ここにいる細川武蔵守と曾て組んで南北の和平運動を試みたくらいだから、いま楠木という名をきいても、むしろこの両大官には好ましい印象を与えただけなのかも知れない。――

そこはちゃんと見ぬいているか、兵庫頭は平然としている。

しかし、死せる楠木正成はともかく、現在ここにいる兵庫頭は何を企んでいるか。彼は大塔衆の援助者となって、「神器は断じて北朝に渡さぬ」悲願を抱いている。むろん幕府では秘密の行動であろう。そこに並んでいる大塔衆もただの弟子ということにしているのであろう。が、それにしても――平生からあまり感情を現わさない人物ではあるけれど――いま自若としている態度もさることながら、そもそも将軍の剣法師範であること自体が驚くべきものだ。

「女の身を以て喃。……」

これは、首領細川武蔵守だ。

「剣を習うとは」

「そこが剣法――法でござる。力にあらず、法でござれば、女とて法を知れば、なまじ力のみの男には勝りまする。それになかなか手すじもようござる」

「これが、山国伊賀から来た嫁か。京にも珍しい器量じゃが」

しかし、顔あからめてひかえているお鏡をしげしけとながめていったまなざしは、慈眼ともいえるやさしいものであった。

柳生兄弟ははじめて見るが、この細川武蔵守頼之の名は、柳生にいてもよく耳にしていた。

幕府の宰相、北朝軍の参謀長として。

まだ動揺いちじるしかった義満の幼年時代の足利の天下を、鉄蹄と智謀を以て、いま世に室町時代といわれるまでにかため築いた大武将であるのみならず、公方義満の師父的存在であった。

義満元服のとき、加冠の役を勤めたのもこの人であり、また少年義満の学問の師も、能書博学の僧を斥けて篤実無欲の隠士を求めたり、わざとおべんちゃら専門の六人の坊主を殿中に俳徊させて人々を顰蹙させ、これに類する行為の意欲を家来たちに喪失させたり、またみずからことさら幼君に無礼の叱責を加え、しかもただちにその勘気を蒙ったていに見せて丹波に幽居し、将軍の位の恐るべきことを人々に示したりしたという話をきいたこともあるが、ともあれ肝脳をしぼりつくしていまの将軍の権威を確立した最大の功勲者はこの人であった。公方義満もこの細川武蔵守だけには頭が上らないときいている。

しかし、いま見る悠揚たる温顔の中の慈眼、春風のごとく漂い出す和気に触れていると、これがそのような軍事、政治、教育の達人だとは信じられないようであった。

今川了俊は鏡をもとの位置におき、帰って来た。

細川頼之はこのとき柳生兄弟に眼を移して、

「その方らは、まだその法に至らぬか。……両人、瘤を出しておるな」

と、一笑した。柳生ときいても、べつに何の感慨もないようである。中央からはほとんど盲点にあるような山国黒子の地だからそれも当然というべきか。

「せっかく修行いたせ」

やがて、にこやかに二人の大官は、兵庫頭とともに道場を去った。

柳生又十郎は拍子ぬけがした。溜息をついて兄の方を見ると、舟馬は首をかしげてまだ見送っている。

「兄上」

と、又十郎はささやいた。

「実は、いろいろと問われはせぬかとひやりとしましたが、兄上は？」

「わしもじゃ」

と、舟馬はうなずいた。

「しかし、いま考えてみると、そんな心配もさることながら、べつに、左様、剣法で

な、じいっと恐ろしい敵に眼をつけられたときと同じような怖さがあったよ」

そういわれて見ると、又十郎にも同じような実感があった。どうやらそんな例を持ち出す程度には両人の剣法も達して来ていたらしい。

柳生舟馬がまた重々しく、

「しかも真剣で」

と、つぶやくと、又十郎もいった。

「こっちの気づかぬ背後から」

すると、お鏡が眼を宙にすえていった。

「いいえ、前から」

しかし、三人を同時に襲ったこの異様な感じが何にもとづくものであったか、そのときはついに三人にはわからなかった。

あとできくと、この日細川頼之と今川了俊が中条邸を訪れたのは、なんと産所としての視察のためであったということだ。すなわちこのたび将軍の夫人康子が懐妊したことがあきらかになったのだが、当時の習いとしてその産所を方位のよいところを選んだ。その場所として中条の屋敷が適しているということで、内密のことであるが、細川頼之が故実に詳しい了俊を伴って、それをたしかめに来たものであったという。

それで、かかる幕府の要人との接触は、柳生兄弟にとってそのときの一偶然にとどまるであろうと思っていたら、それからさらに三カ月ばかりたってから、思いがけないことが出来した。

この年の美しい京の秋の一日。

ふいに将軍義満が突然中条邸に臨んで、しかも兵庫頭に、

「楠木の鏡とやらを見せよ」

と、いい出したのだ。

これまたあとで知ったところによると、将軍義満は中条家にある楠木の鏡のことを何かのはずみで今川了俊からきいたらしいから、いつぞやの了俊らの鏡の発見はやはり尾をひいたのだ。

それにしても公方、しかもここのところ名実ともに威風一世を圧している大将軍が、一介の剣法師範の屋敷を訪れるとは。

このときばかりは、ものに動じない中条兵庫頭も驚駭したようだ。まったく前触れのなかったせいもある。実はこの日、公方義満は懐胎している御台所とともに東寺へ安産の祈禱を受けにいって、その帰りに四条西の洞院を通りかかり、ふとここにある中条家の鏡のことを思い出したらしい。

「東寺の僧がの、産所には然るべき鏡を置けと申した。了俊からきいたが、ここにあ

るという菊水の鏡とやらを見せい」

承るなり、兵庫頭は珍しくうわずった声で、

「お鏡っ、お鏡っ、例の鏡、御見に入れい！」

と、呼ばわった。

ややあって、書院に待つ将軍と御台さま及び侍臣団の前へ、お鏡は菊水の鏡を捧げて出た。

「……お」

というように、その方を見やった義満の袖を、御台所がやがてぐいとひっぱった。その前に置かれた鏡よりも、鏡を置く女の姿に義満の眼が吸いつけられているのを見たからだ。

「ほう、これが正成の鏡」

と、やおら義満はその鏡を無造作にとった。

「なかなか雅なものじゃな。一介の土豪正成の所持しておるような品ではないが——後醍醐天皇より拝領したものかも知れぬな」

と、評したのち、いよいよ無造作に、

「兵庫、これをもらってゆくぞよ」

と、いった。

兵庫頭は狼狽した。

「ありゃ、それは中条家の品ならず、その女の持物でござりまするが」

義満はこの鏡のことはきいたが、持主の素性のことはきかなかったか、忘れてしまっているらしい。改めて、求められて、お鏡は困惑した顔になった。

「わたしのものと申すより、それはもう夫のものでござりますれば」

蚊の鳴くような声でいった。

「なに、そちには夫があるのか」

義満は眼をまろくして改めてお鏡を見まもった。

「ふうむ。わしにはどうしてもおまえが処女としか見えぬが喃。……」

異様に好色的な光を放つ切れ長の眼で凝視されて、お鏡はなぜとも知らずからだのふるえをおぼえた。

とにかく、ではその夫を呼べということになって、やがて柳生又十郎が現われた。

又十郎のみならず、舟馬までが。

「どちらが夫じゃ」

又十郎は平伏した。彼はこういう席に出るのが、いまの立場には眼をつぶるとしても、生来苦手だ。で、彼はむりやりに兄の舟馬をも介添として、ひっぱり出したのである。

この日、はじめて柳生兄弟は、天下の大公方に相まみえたことになる。

足利義満、このとし三十三歳。——二人はまるで人間の太陽を見たような気がした。その生まれ、現在の地位もさることながら、まずその外貌そのものが美と健康にひかりかがやいている。燦々たるきれながの眼、赤く濡れた肉欲的な唇、魅力的な細い口髭、色白のたっぷりとした肉体。——青春は過ぎたが、熟れ切って、今を盛りの美男といえる。

それを眩しいほどにかがやかしているのは、その外見よりもむしろ内部からの光であった。すなわち天上天下、あらゆるものに対する自信、いや自信を超えて大天狗、さらに天衣無縫ともいうべき性格の光炎。

「これ、この女を御所につれてゆくが、よいな?」

鏡を持ったまま、義満はいう。御所というのは二条にある将軍邸で、世人呼んで「花の御所」というが、彼自身また平気で御所といった。

一方的に又十郎にいったのは、それだけで、彼はべつのことをしゃべり出した。立ったままである。もっとも彼は、歩きながら先刻から演説していたらしい。

「三種の神器。——あれほど世に奇怪なものはない喃。……」

どうしてそんな演説をはじめたのか、おそらく安産の護りとする鏡からの連想であろうが、それまでのつながりを知らない柳生兄弟には見当もつかなかったが、あとで

お鏡にきいても、将軍は突忽として三種の神器論を演説しはじめたということである。

「かほど天下の歴史を司り、運命決する宝器にして、その実体はいかなるものか、何ぴとといえども見たことがない。——かかる例が唐天竺にあるであろうか」

と、いった。

「わしの北朝にも神器はある。だれしもが、いまはそれが偽器であることを知っておる」

わしの北朝、といった。北朝が足利氏の傀儡政権であることはこれまただれしもが知っているが、それにしても八方破れの表白ではある。——

「しかし、後醍醐天皇がそれを京に残して吉野へ逃れられたあと、だれしもしばらくそれが偽器であることを知らなかったのじゃ。そっくり同じ品を作っておく、などいうことの出来る品でもなければ、そのいとまもない事態であったから、まんまとあざむかれたというにも当たらない。禁裡のだれしもが、ほんものの神器を見たことがないからこその謀事じゃ。おそらくほんものを見せられても、それがほんものかにせものか、ときかれると、天下の何ぴとも確信を持てまい」

赤いつやつやとした下唇を、ぐいとつき出した。

「天下の何ぴともが、いちども見たこともないものをめぐって、日本中、二つに分れ

て修羅の争いを争う。いまの南北のことには止まらぬ。源平の古(いにし)えからその通りじゃ。かかる愚かしき日本人なるものは、わしは四海には珍しい馬鹿と思う」

義満の日本人軽蔑論の是非はともあれ、事実、その通りだ。

この室町のころまで千四百年間、それは神秘縹渺(ひょうびょう)の雲につつまれて来た。天皇以外にこれを目撃するものがあれば眼がつぶれるという信仰的な信念にもとづく畏怖(いふ)の対象であったからである。そして、それ以来さらに千五百年——現代に至るまでも、マイホームに於ける「三種の神器」を云々するくせに、日本人のだれしもが、かんじんかなめの神器の実態をまだ知らない。——まさに義満が喝破(かっぱ)したごとく、奇怪といえばこれ以上の怪事はない。

「さればによってじゃ。わしは、わしの三種の神器を。——」

と、義満がさらに声をはりあげたとき、

「上様」

それまで侍臣団の中に控えていた細川武蔵守が声をかけた。

あの温容の人とは別人のような、にがにがしげな、厳粛な、いや恐ろしいといっていい眼光を将軍に向けていた。

「神器についての御諚(ごじょう)はまずそれまで。——それ以上はあまりに恐れ多し」

義満はキョトンとその方を眺め、父親に叱られただだッ子みたいに首をすくめ、それからやっと正気に戻ったようにいった。

「では、この女と鏡を持ち帰る」

神器論

「……よいのか、おまえ」

と、柳生舟馬(しゅうま)は又十郎にささやいた。

又十郎は蠟燭(ろうそく)みたいに白くなって、硬直している。もともとこういう席は苦手(にがて)だ、というより臆病な若者だが、それにしても舟馬もめったに見たことのない弟の懊悩(おうのう)の表情であった。

「よくない」

と、しゃっくりのようにいった。

すると、これまた蒼(あお)くなってふるえていたお鏡の頬にぱっと血潮の色がさした。これまた京に来て、そんなかがやくような彼女の顔色を舟馬ははじめて見たのだが、それが、

「わたし、舌をかんで死にまする！」

と、小さくさけんだ。

むろん、いま公方さまに命ぜられたことをきかなければならなくなったら、という意味だ。しかも、いつも蚊の鳴くような声でおどおどとものをいうお鏡が、これは稀有というよりはじめてのことといってよかろう。

将軍義満は御台所とともに、もう五、六歩遠ざかっている。が、いまのこんな問答が耳に入らなかったわけはないが、平気で、

「頼之、女と鏡頼んだよ」

と、いった。

「あいや！」

声をかけたのは柳生舟馬である。

「この女人お召しの儀お断り申しあげまする！」

一同はもとより、又十郎でさえもぎょっとしたように舟馬に眼をそそいだ。この大公方に対してこんなはっきりとした拒絶の言葉を返した者はないし、又十郎にしても、よくいえば茫洋たる、悪くいえば煮え切らないこの兄のこんな反応をはじめて見た。

義満は立ちどまり、ふりむいた。

「なぜじゃ？」

「女も、女の夫もいやだと申しますれば」

にべもない、というよりは、むしろ素朴な野の声であった。

「ふむ。……よい面だましいを持っておる」

義満は破顔した。しかし、せっかくの舟馬の気魄だが、べつにそれに気圧された表情ではない。天空海闊、大きな子供みたいな表情だ。

「兵庫、これもおまえの剣法の弟子か。京の男らしゅうないが」

「は。――柳生から来た男で」

「柳生」

義満は、全然思いあたらぬ眼つきであった。すぐにかたわらをかえりみて、いたずらっぽい眼で、

「康子、そなたは鏡は気に入ったようじゃな。そなたの安産の護り神として正成の鏡はまことにふさわしいと思うが……鏡はそなたのため、女はわしの土産。じゃが、女の方はよそうか。かんじんの産にたたると悪い」

御台所は氷を彫ったような美貌をそむけて、

「お好きなように」

と、いった。

藤原氏の支流日野家から来た御台所である。――その数代前の一族には、後醍醐帝のために忠死した有名な日野資朝や日野俊基などがいるのだから、まったくこのころの敵味方は錯雑している。

「では、鏡の方はよかろう喃？」

「あの。……」

と、お鏡は思わず声を出して、救いを求めるように又十郎をふりかえったが、又十郎はこんどは知らぬ顔をしている。

「その鏡はよほどおまえに大切なものかえ？」

と、御台がいった。大事な鏡らしいことは先刻からわかっているが、それにしてもお鏡のせつなげな眼つきに打たれたのだ。

お鏡はむろん、服部家の宝として伝えられ、それにちなんで自分の名もつけられたほどで、菊水の鏡の大事なことは知っていた。そしてそれ以上に、あの桃香野であれほどの場合に、とくに自分にその鏡をくれて、「嫁にいってからおまえの守護神とするがよい」といった姉の双羽の心を思い出したのだ。

悶えるようなお鏡の姿を、御台所はじっと見つめた。彼女は打たれたが、べつに同情したのではなかった。彼女はほかのことを考えていた。

「では、やはりおまえもいっしょに来るがよい」

と、いい出した。

——実は夫の天衣無縫、手当り次第の好色ぶりには手をやきぬいている彼女だが、いま家来たちの前で、いかにも自分のやきもちやきのためにあきらめたような、恩着せがましい夫の口吻に、名門日野家から出た御台所としての誇りがぐいと胸につきあげて来たのだ。

「それほど大事な鏡ならば、割れでもしたらとりかえしがつかぬ。とりあえず、産までおまえに扱わせよう。……わたしのもとで、わたしの侍女として使うにはさしつかえあるまい喃？」

——というのは、夫人がお鏡を保護してくれるという意味か。どこかあいまいなところもあるが、柳生兄弟もお鏡も、それ以上口がきけなくなってしまった。何よりも、いったんのがれたと思っていた黒い手が白い手に代って、やはりやんわりと捕えに来たことの驚きのために。

「参りや、あとで」

そして、御台所は夫と肩をならべて書院を出ていった。あとに侍臣たちが従う。——

康子は、実は計算もしていた。むろん自分の侍女にしても、欲すれば遠慮するような夫ではない。それどころか、義満はこのごろ大変な女性に手を出そうとしている。なんと、時の後円融上皇の御愛妾按察の局に。——

それを思うと、康子の方がうなされそうであった。しかも自分は懐胎している。少くともこれから夫と離れる日がふえてゆくことはまちがいない。そのあいだ、夫の暴走をつなぎとめるために、自分の手もとにこの女を置いて、その縄にしてもよい——

と、彼女は思い立ったのだ。その縄になるような女はめったにないが、先刻から見ていて康子は、彼女なりにこの女なら、と見込んだのである。

そのうしろ姿を追おうとするように、思わずがばと片膝立てかけた柳生又十郎を制したのは、うしろから何者か袴のすそをぴたと押えた力と、前にゆったりと坐っている細川武蔵守頼之の姿であった。

「……当家にある鏡を見たい、と仰せ出されたことさえ思わざることであったが、さてさて、いよいよ意外なことになった」

と、頼之は嘆息した。

「しかし、だだッ子に当座の飴は与えずばなるまい。いや、公方さまだけのお思い立ちならおとめ申すつもりであったが、御台さままでがあのように仰せられては、しばらく鏡とその女人、借りるよりほかはあるまい」

しだいに、ゆったりとあたたかな微笑が頬に浮かぶ。

「わしが悪うはせぬ。この際、御諚のままにしてくれい」

頼之は立ちあがり、やさしく眼でさしまねいた。

「ござれ。……鏡を持って。あ、兵庫、送らぬでよい。その夫をとめておけ、くいつきそうな顔をいたしておる」

まるであやつり人形みたいに、お鏡はふらふらと立ちあがり、三方の鏡を抱きあげた。お鏡は又十郎のそばを通るとき、

「大事のため、参ります。けれど、妻としての道にそむくようなことがあれば、舌をかんでも死にまする」

と、ささやいた。

この娘がこんなことをいうのはよほど心に決するところあってのことに相違ないが、そのくせ、向うでこちらをふりかえっている細川武蔵守の方へ、夢遊病者みたいに吸い寄せられてゆく。——

それをふしぎと思わせない、はじめて気がついだことだが、この将軍の師父には眼に見えない大きな力があった。

しかも、ともに数歩歩いて、お鏡はまた帰って来た。

「けれど……このこと伊賀が耳にしましたら何と申しますか……それだけが心配でございます」

思いつめたようにそういうと、彼女はふたたび武蔵のあとを追うていった。

「追うな」

と、うしろで中条兵庫頭がやっと声を出した。又十郎の袴のすそを押えていたのは彼であった。

「騒ぐと、藪蛇となる。この際、こちらは目立たぬがよい。——大望のため」

と、いい、立ちあがった。

「しばし待て、すぐに戻って来る」

送るな、といわれたが公方を見送らずにはいられなかったのであろう。兵庫頭の姿が消えてから、数分立って、又十郎も出ようとした。

すると、書院のすぐ外には、七人の大塔衆がずらりと並んで、沈鬱な眼で見あげていた。毒気をぬかれて又十郎が立ち戻って来たとき、やっと夢から醒めたように舟馬がいった。

「又十郎、騒いだなあ？」

飛び出すような眼で、まだ出口の方を眺めていた又十郎は、馬鹿みたいにふりむいた。

「わしが騒いだ？」

「それで安心したのじゃ。おまえがお鏡を公方さまにとられそうになってあわてふためいたのを見て」

又十郎はまさにあわてふためいた顔になった。

「そ、そんなはずはない。――」

実際、あのときは自分でもまったく予期しなかった反応が起ったようだ。

「いいのか、ときいたら、よくない、といったではないか」

「鏡だ。鏡を持ってゆかれるのはよくない、といったのだ」

又十郎はいやにむきになって抗弁したが、あの鏡で彼があんなしゃっくりみたいな声を出すはずがない。

「騒いだのは兄上の方ではないか。いや、わしの方が感心した。公方さまのまえであんな声をはりあげるとは。――兄上に、あれほどはっきりものをいう舌があろうとは思わなんだ」

「お鏡もいやだといった。いやという女にむりをさせるのはわしの趣味ではない。――」

又十郎が暗闇の牛と評したこの兄は、実は相当なフェミニストなのであった。それが、ほのぼのとした眼で、つぶやくようにいった。

「それに、お鏡は双羽どのの妹でもあるしの。……しかし、結局、つれてゆかれてしまった喃。又十郎、又十郎、さてどうするか？」

中条兵庫頭が帰って来た。その顔をじいっとにらみつけるようにして、

「おれは、女のことなど心配してはおらぬ」

と、又十郎は肩をそびやかしていったが、しかし、その次に、

「中条先生」

と、呼んだ声はつっかかるようで、甚だ不穏なひびきを持っていた。

「いまわたしを抑えて、藪蛇云々と申されましたな。というのは、われらがゆくゆく神器を北朝から護る任務を持っていることがばれるとまずい、という意味でございましょうが」

「その通り、お鏡ですらそのように思案したらしいの」

「その神器でござりまするが――柳生で先生のお話を承ったときはなるほどと思い、かつは祖母に煽られて憑物がしたように京へ修行に出て参りましたが、いま公方さまの御見解を耳にして、又十郎、何のためにそう逸ったのか、わからなくなりました」

「公方さまの御見解？」

「三種の神器論」

「あれは、恐れながら、わが日本国の歴史に無智な幼児の――いや大驕児の破倫の御暴論」

「いや、わたしには、人間としていかにもあたりまえの御疑問らしく思えまするが――よく考えてみると、拙者にも、三種の神器とはそもそもいかなるものかさっぱりわからないのです。だれ一人見たこともないものをめぐって、狂気のごとく相争う、かかる愚かしき日本人は世にも稀なる馬鹿者どもと断じられた公方さまの仰せを、なるほどと思うのでござる。――いったい、神器とはいかなるものでござる？」

「かしこくも天照大神が皇孫　瓊瓊杵尊に下し賜った、八咫鏡、天叢雲剣、八坂瓊

勾玉。――」

「それは承知いたしておりまするが、それはまたどこから出来いたしたもので？」

「ふうむ」

中条兵庫頭は大学教授みたいな顔をした。

「左様、神鏡は天照大神が例の天の岩戸にかくれさせ給うたとき、石凝姥命という鏡作りが作って献上したもの、神璽――おん勾玉はやはりその岩戸の外の真榊にかけてあった祭具、神剣はかの八岐の大蛇の尾から出て来たものと承っておる。――」

「おお、八岐の大蛇から。――そういえば、そんな話も思い出してござるが――それは常識的に考えて、ちとどうも」

「おそらく、その昔、出雲の国から献上したものということではないか？」

兵庫頭は、この当時としては精一杯の解釈をした。もちまえのきまじめな顔は変らない。

「ま、それはよいとして、それから？」

「その後、第十一代垂仁天皇のころ、鏡と剣のみは模造品を作って、ほんものの方は伊勢五十鈴川のほとりに移され、さらに剣のみは第十二代景行天皇の御代、かの日本武尊が尾張の熱田に移されたときいておる」

「すりゃ、いまの天皇家にある鏡と剣はその模造品の方でござりまするか」

「ま、そう申せばそういうことになるが、これだけ由来あれば、もはや模造の品ともいえぬであろう。それはまったく同じ尊さと申してもよかろう。――まして」

兵庫頭はひざをたたいた。

「例の源平の壇ノ浦で神器はすべて安徳天皇とともに西海に沈んだゆえ、そのうち神剣のみは伊勢よりほんものの剣をとり寄せられたと承っておる」

「おや、神剣は熱田の方にあるのではござらぬのか？」

「はてな」

兵庫頭は知識の虚をつかれた表情になった。

「それは、おそらく伊勢の方でもお作りになっておった模造の神剣であろう。――」

まるで細胞分裂のようだ。いくらでも出来る。

「ははあ、で、これまた西海に沈んだあと二つの神器の方は？」

「これはその後、海底から浮かび上って、めでたく京へお帰りなされたときいておる」

「ははあ、鏡と玉が浮かび上りましたか」

「御箱に納められていたゆえであろう」

「そんな騒ぎの際、だれも改めた者はござりませなんだのか」

「ないらしい。見れば、眼がつぶれる。わしもわしの知っておる記録や文献にも、何もない。おお――ただ一つ思い出したことがある。順徳天皇のお書きあそばされたという禁秘御抄という書に、その伊勢より奉られた神剣は『普通蒔絵也』とあるそうな、天皇ゆえ御覧あそばしたのであろう」

「蒔絵？　まさか天照大神のころ、蒔絵の剣はござりますまい、そりゃ模造品というにも当らぬ、まったく別のものではござりませぬか」

柳生又十郎は懐疑そのもののような表情になった。

「要するにどれがほんもので、真体はどこにあるのか、何が何だか拙者にはわからなくなりました。こりゃいまの北朝にあるというにせものの神器が笑えぬ。それではにせものを渡されてもだれにもわからなかったのもむりはない。――」

「又十郎」

兵庫頭はしずかにいった。

「世の常の宝とは思うなよ」

「は。――」

「その尊さは、そのもの自体にはない。ものを超えたところにある。恐れながら三種の神器は、見ようによっては天皇さまより尊い。天皇さまはときにお誤りになることもあろうが、神器は無過失の聖具じゃ。天皇とは、三種の神器を捧持あそばすお方、と申してもよいほどである」

この哲学の理にではなく、兵庫頭の声調の厳粛さに又十郎は縛られてしまった。

「日本はじまって以来千数百年、曾てこれを公然奪おうとするはおろか、天皇以外に見ようとした者もない。——これを公方さまは馬鹿と申されたが、わしはこれを世にも恐ろしい、しかも厳たる歴史的事実と考える。日本とはそういう国なのじゃ」

「……」

「見よ。それを馬鹿と申される公方さまが——少くとも北朝方が、げんに天下の政事を握りながら、日本じゅうの民の魂はいまだ心熱を以て吉野にむけられておるではないか。そのことを幕府の方でも承知なされておってしかも武力を以てしては奪うこともならず、何とぞしてその南朝を調略を以てとりこめんとして苦心しておられるではないか。南朝、というよりその実は、そこに護持されておる三種の神器を」

兄の方が首をたれて、一語一語味わっているようであったが、ふと居眠りでもしているように見えて、兵庫頭は声をかけた。

「舟馬何を考えておるぞ」

「お鏡が……このたびのこと伊賀できいたらどうするか、といったことの意味を思い出しております」

「おお、お鏡！」

又十郎はふいにまた火のついたような表情になった。たったいま女のことなど心配しておらぬ、といったくせに。——

「先生。……妻は大丈夫でございましょうか？」

伊賀流創世時代

忍びの術のことを支那では間という。つまり間者、スパイのことである。

孫子のいわゆる用間の術を、日本ではじめていかんなく使いこなしたのが楠木正成だが、その証拠は彼の戦術そのものよりも戦略によく現われている。

「天皇御謀叛」ともいうべき例の元弘の変に、天下を相手にして赤坂の孤城に旗をあげたということは実に驚くべきかけで、たんなる勤皇とか兵法眼を超えたものがある。幕府や京の中枢にも無縁、ほかの大名との往来もない、いうまでもなく新聞もなければラジオもない時代——ふつうなら河内一国のことすら完全に掌握しかねる一土豪にしてこの冒険をあえてして、しかもそれに成功したのは、いかに彼がそれ以前から特別の情報網を持っていて、それによって北朝打倒の可能性を見通していたかを思わせる。

湊川へいって死んだのも、彼はそれを承知の上で出陣したのである。その前に彼は足利を敵とすべからず、むしろ足利と同盟して新田を討つべく切々献策して、それが受け入れられなかったから、「わが事終んぬ」と一路死戦に赴いたのだ。そこが嗚呼

忠臣たるゆえんだが、これを見てもわかるように、決して単純な忠臣ではない。その戦略眼の正鵠を射ていること、これまた相当の情報網で天下の動静をつかんではじめて可能なことだ。

この正成が伊賀の服部と血縁がある、ということは一般には近年はじめて知られたことである。

昭和三十六年伊賀上野の豪家上島家から出た文書で、それによると観阿弥清次は服部一族の出だが、その母は「河内国玉櫛庄橘入道正遠」の娘、すなわち楠木正成の妹であるという。すなわち世阿弥は正成の妹の孫ということになる。

さて、五十余年前のその縁をたどって伊賀に現われた楠木の遺臣たる七人の菊水党。これが何を見込んだのか、服部一族に忍法を教えはじめたのだが。——

正成が用間の術にたけていたことは彼らも力説する通りだが、いったいこれが正成とどんな関係があるのだろうか、彼らの忍法なるものが。

「——これより、服部衆とともに心血をしぼっていよいよ切磋琢磨いたしたい」

といったのはよかったが、さてその内容が、

「色の術、それこそわれらの最も精根こめて研究いたして参ったもの。——」

これが、服部衆を当惑させた。

むろん、服部衆にも、なるほどこれが忍びの術か、と改めてうなずけるようなことも、彼らは教えた。

例えば、「六無の修行」ということ。——すなわち、無色、無形、無跡、無声、無息、無臭の六術。

結局一種の変形隠形の術で、右の六法は読んで字のごとしだが、そのための具体的訓練として課したことは、はじめ一同を面白がらせた。

例えば、「無色」のために、黒衣の裏地を枯草色の布とし衣服を作らせ、これを敏速に着かえるとか、「無形」に近づく一法として敵に最小の体積で対するためにふだんから横歩きをすすめるとか、「無跡」のために、草の上、石の上、塀の上を飛び歩かせるとか、「無声」のために、いかなる場合でも声のみならずからだの音もたてぬ訓練とか、「無息」のために、走ってなおかつ平静な息を保つとか、「無臭」のために常からにらとか酒など匂いをはなつものを摂取しないとか。——

しかし、やがて春から夏へ——それを面白がってはいられない段階に達する。

例えば、「無形」にしてもたんに横歩きの程度ならまだいいが、これが足をX字型にして全速力で走らされたり、「無跡」の修行として樹の枝から枝へ飛ばせられたり石垣を這わされたりすると、笑いごとではなくなる。「無息」の鍛練に、水底に石を抱いて沈むことを命ぜられるに至ってはもういのちがけだ。

それでも、ただ——

「南朝の神器を護るため」

と活を入れられると、いかにも——と、ふるい立つ。

が、次のごとき修行は、服部衆をめんくらわせずにはいなかった。とくに双羽、環の姉妹と柳生七兵衛を。

七人衆はまずその主眼をこの三人においているように見えた。

結論からいえば彼らの自負する「色の術」を教え込もうとしたのはこの三人で、あとの服部衆はそのための教材に使われた。

「この修行には念力が要ると申したが、教える方にも念力が要る。いちどにそう大勢を教えるわけにはゆかぬ。この三人の成果を見て手本とせよ」

というのだが。——

まず姉娘の双羽に対する忍法教授だが、これが甚だつかみどころのないものであった。というのは、彼女は何もしないでいいのである。立つなり、坐るなりして、ただじっとしていればいいのである。いや、動いても自由なのである。

ただ、そのまわりには必ず若い伊賀の男たちを数人侍らせた。そして、菊水党のだれかがそばで陰々と、つぶやきつづけているのだ。

「忍法おぼろ月。……まんまるい乳房、闇にも雪のようにひかるであろう。それをつかめば、掌に吸いつくであろう。息づく腹のなめらかさ、くびれた腰のしなやかさ、これを抱きしめ、波打たせる男はだれであろうぞ。……」

むろん双羽はきものを着ている。着ているが、彼女は赤くなった。最初のうちは。

——いや、いくどきかされても。

伊賀の男たちは、まわりからその双羽を凝視し、眼をひからせ、のどを動かせた。

双羽はおっとり、ふんわかとした感じの美女だが、その優雅な女体をこの伴奏入りで見ていると、ふつうのときとは別人のようなまなましさで迫って来る。

次第に彼らは、そのきものを通して、まざまざと彼女の裸身が浮き出して来るような錯覚にとらえられた。

これくらいの伴奏ならまだいい。菊水党はさらに描写する。

それもはじめは、双羽はのけぞらんばかりになり、そのうちからだじゅうがちぢんでしまうような気持になり、さらに汗さえにじみ出して来た。すなわち彼らは、彼女の秘所の魅惑、柔媚さ、かぐわしさまで、まるで見て来たような顔で描写しはじめたのだ。

まるで見て来たような？　双羽はびっくりし、羞恥に全身を染めたことがある。

それは菊水党の一人が、彼女の内腿にたった一つある小さな黒子まで描写にとり入れたことだ。絶対にそんなものを他人に見せたことはないのに。

ふしぎな声であった。陰々と、しかも詩うように、彼らはこのときだれもが同じ声、同じ調子でしゃべった。

五日や七日ではない。これを菊水党は明けても暮れてもくり返したのだ。彼らはこれを忍法伊賀のおぼろ月と称した。春から夏へ。——

ついに伊賀の男たちは、「忍法おぼろ月」という声をきくだけで、双羽を見ればその裸形をありありと眼に描けるようになった。錯覚ではない、たしかに肉眼で。

しかし、これが双羽の忍法といえるかどうか？　いや、忍法おぼろ月とは称するけれど、そもそもこんなことが忍法であるか、どうか？

次に妹娘の環に対する忍法教授だが、これがまた大変なものであった。

いったい菊水党がはじめからこの忍法「弓張月」を心得ていたかどうか疑問だ。

「これより心血をしぼって切磋琢磨したい」といったが、その通りにここへ来てから忽然としてヒントを得たのではないかと思われるふしがある。ここへ来てからというより、月ヶ瀬に於ける柳生七兵衛の醜態の話をきいてから。

あのとき七兵衛は、環の裸身を見ただけで、だらしなくも射精し、へなへなになった。

それについて、「かかる体調心情、もっとも忍法を修行するにふさわしい」と彼らは評した。揶揄したのかと思ったら、どうも本気であったらしい。

あれ以後、彼らは興味津々たる顔を集めて七兵衛にききただした。

「七兵衛どのは女人の裸さえ見ればそんなことになるのでござるかな？」

「——何、ばかをいえ」

七兵衛は勃然とした。

「あんなことになったのは、はじめてだ。臍の緒切ってはじめての大不覚。おれがこの伊賀へ来たのも、まことを申せばあのときの恥をそそがんためだ……」

「恥をそそぐとは？」

「このたびこそは環を仕留めて、そのあと例の首飾りを宙天に振り飛ばすほどの力を見せてくれるわ」

「やってごらんなされ」

「え？」

「あなたは花婿に来たお方ではござらぬか？」

こういう問答をしたのは、まだ七兵衛が伊賀に来た直後で、それから柳生から半死になって帰って来た大弓銀平次らの事件、また柳生の兄と弟が出奔した情報なので、まだ改めて環と花婿花嫁として相対するひまがなかったころであった。

「こんどは大丈夫か、もういちど試して見なされ」

「——よしっ」

さて、菊水党の眼前で、ふたたび裸体を七兵衛に見せるという実験に、いかに活潑な環といえども難色を示したのは当然だが、これをいかにして説いたか、それからまもない某月某日、このことは実行されたのである。もっとも、ともかくも花婿花嫁だから、遅かれ早かれむろんそのうち起るべき出来事にはちがいなかったろうが。——

一糸まとわぬ姿になって、しかしこんどはこの前のような壮烈な挑発とは打って変って、やや恥じらい気味に立つ環の前に、隻眼、決死の形相で向かった柳生七兵衛が、これはしたり、またも肩で息をつきはじめ、腰をくねらせたかと思うと、からだをぶるっとふるわせて。——

「うふふっ」

奇声とともに、ビューッと白い虹を宙にかけたのである。悲鳴をあげて環が飛びのいたほど。話はきいていた菊水党のめんめんもこれには唖然として、

「おまえさまたち、もしかしたらすでに忍法をお心得ではないか?」

「でもまあ、恐ろしい勢いじゃ」

と、思わず驚きの眼をむき出したくらいであった。むろん、そんなことのあろうはずがない。——改めて彼らは環にきいた。

「環どのは、裸さえお見せになれば、男はみんなそんなことになるのでござるかな?」

「——まさか?」

要するにこれは、環対柳生七兵衛のあいだだけに起る怪現象らしい。というより。

——

「ははあ、七兵衛どの、おまえさまは惚れた女人だけにはそういうことになられると見える」

七兵衛は、憮然という形容詞を擬人化したような顔をしていた。

彼らは手を打った。

「いや、これぞわれら待望の忍法者の妊卵!」

すなわち、最初から彼らがこの二人に持ち前の忍法を授けたのではなく、この素質を見て適宜開発をめざしたのではないかというゆえんである。

さてそれから菊水党は二人に修行させはじめたのだが。——

これまた環の方は何もしなくてもいい。ただ裸で立っていればいい。しかし、七兵衛の方は大変なことになった。

裸の環を見せられる。

近づかされる。そして菊水党が重々しくいう。

「忍法弓張月!」

すると彼の男根は、弓張月のごとくそり返る。そして、——

「忍法伊賀の水月!」

声とともに、またも彼はビューッと放出してしまうのだ。こ、こ、こりゃどうしたことだ、と彼自身仰天し、歯がみするのだが、どうしてもそうなってしまう。最初のショックの心理的影響か、条件反射か、それともやっぱり天性の素質か。

「あそこの壁に向けなされ！　筒口っ」

菊水党がさけぶ。

「三尺の高さ！」

あわてて向け変えた方角の壁に、ぱっと白濁した花が咲く。

もとよりいつまでもかくのごとく勇壮なる虹がかかり、花が咲くとはかぎらない。限らないどころか、むろん徐々にその勢いは衰え、はては七兵衛は嘔吐するものもないのに嘔吐しようとする酔っぱらいみたいにのた打ちまわる。

しかしこれはそもいったい何のための修行なのか。

菊水党は七兵衛を鞭撻する。

「環どのに負けてよいか。そのざまではいつまでたっても花嫁と交合出来ぬではござらぬか。おまえさまは何のために伊賀に来られたのか！」

また環にはこう叱咤する。

「これぞ南朝の神器護持につながる聖なる修行でござるぞ！」

この修行のどこが聖？　などと首を傾げることは許さない勁烈にして森厳な声の鞭であった。

このあいだにも、彼らは忍法修行の三原理をくり返した。念力と自己催眠と反覆である。しかし、彼らみずからが声明したように、その教育そのものがすでに三原理の履行であって、七兵衛たちがともかくもそれに服従したのは、そこから発する彼らの妖しき力のせいであったといえるであろう。

かくて、これまた春から夏へ。――

平家時代からつづいていると伝えられる古い服部屋敷の中で、春草生いしげる庭で、初風吹きわたる村の辻で、かじか鳴く服部川の白い河原で、またむせかえるような伊賀の山々の森の中で、双羽、環、七兵衛、及び伊賀衆に対する訓練はつづけられた。

彼らの妖気に一村ことごとくとり憑かれたような春秋であった。

秋。

このころようやくふしぎな成果が現われはじめた。すなわち。――

一般の伊賀衆が例の六無の修行で或る段階に達したのを自覚するようになったのはもちろん、例えば双羽だが、そのころ菊水党の一人阿波座監物と村の道を歩いていて、ふと監物が、

「双羽さま、……忍法おぼろ月、と念力こめて誦してごらんなされ」

と、ささやいた。

いわれてすぐに従うのも、これまた条件反射になっていたが、彼女はその通りにした。するとそのとき、ちょうど道の向うから村にやって来た行商の男が歩いて来たが、こちらを見て、まばたきし、真っ赤になり、ふいに顔を両掌で覆うところがるように逃げ去っていったのである。監物はにたりと笑った。

「あれはおまえさまの裸を見たのでござる」

またそのころ、環は、たまたま屋敷へ托鉢にやって来た数人の行脚僧たちと門のところでゆき合ったが、このときもそばにいた菊水党の一人板曳民部が、

「環さま。……忍法弓張月、と念力こめて誦してごらんなされ」

といった。

彼女は誦した。すると、その雲水たちはぎょっとして立ちすくみ、どぎまぎした表情になり、ふいにいっせいに股間をかかえてへなへなと坐ってしまったのである。

民部はにたりと笑った。

「あれはみなおまえさまを見て精汁をもらしたのでござる」

そしてまた柳生七兵衛も、このころわれながら実に奇怪な武術？「伊賀の水月」を体得するに至っていた。すなわち彼はなんとおのれの精汁を六尺以下の高さなら、思うところにピシャリと飛ばすことが出来るようになったのである。

しかも、べつに裸形の環を見ないでもただ「忍法伊賀の水月！」と心に念ずるだけで。

……京にある世阿弥から、服部半阿弥のもとへ一通の秘状がとどいたのはあたかもそのころであった。

見て、半阿弥は顔色を変えた。

「一大事じゃ、お鏡と菊水の鏡が花の御所に召されたというぞ！」

花の御所

秘状は柳営お抱えの能楽師世阿弥からのものであった。中条家に柳生兄弟とともに住んでいたお鏡が、菊水の鏡もろとも、将軍義満に召しあげられたいきさつを知らせて来たものだ。

「……まっ」

と、環は半阿弥の顔を見た。

「それはどういうことでございますか。公方さまのお心は」

「鏡は御台さまのお産のお護りのためと書いてあるが、お鏡の方は、何のためか書いてない」

「危ないな」
と、菊水党の一人、猪丸塔五郎がつぶやいた。
「何が？」
「色好みでは、名高い、公方でござるから」
「まさか？」
といったが、環は顔色を変えた。
「で、夫の柳生又十郎は何をしておるのでござります。どういうつもりでお鏡をさし出したのか――しかたがないとあきらめたのか、それとも出世と思うてか」
「さ、又十郎の心はわからぬ」
「それを知らせて来て、こちらにどうせよと世阿弥どのはいうのですか」
と、双羽がきいた。
「それも書いてない。ただ右の事実を知らせて来ただけじゃ」
「ああ、お鏡が柳生へいったのが、そもそものまちがいであったのじゃ！　どうして不甲斐ない柳生の男などにとられてしまったのか。――」
唇をかみしめる環のうしろで、不甲斐ない柳生の男の一員たる柳生七兵衛は憮然たる表情をしている。
さて一大事だ、とは一様に思うものの、顔見合わせたまま、一同、どうしていいかわからない。相手が相手だ。それにこちらが伊賀にいるとあっては。――
そのわくわくした惑いの渦に衝撃的な矢を射込んだのは菊水党であった。
「その鏡、とり返さねばなるまい」
阿波座監物であった。
「事もあろうに、足利公方の御台のお産の護りとされては、正成公の霊がお泣きなさるでござろう」
「正成公どころか、われら菊水党、名も同じ菊水の鏡が足利家にあるときいただけで我慢がならぬ」
と、板曳民部がうめくと、馬潟八十次もいう。
「われら、やがて三種の神器――八咫鏡を護らんとするもの、それがいま菊水の鏡を足利家に奪られたとあっては、首途からして縁起が悪い。そもそもわれらが刃向かおうとする足利家に、当家の娘御がおられるのでは何とも気勢があがらぬ」
「で――一刻も早く、その鏡とお鏡どの、とり返そうではござらぬか？」
と、監物が膝をのり出した。
彼らのいうことはいちいちもっともだ。しかしまた服部半阿弥がこれらの理由をきく以前に愕然とした顔が、なおそのままであったことも無理からぬといえる。
「とり返せば、こちらはどうなる」

と、しゃがれた声できいた。

切畑彦兵衛がうす笑いをした。

「こちらがとり返したと、向うに知らせぬのでござる」

「――ほう」

「それが、われらのいわゆる忍法」

八葉寺隼人がうなずいた。

「実はこれまで伊賀衆に忍法を教えて参ったが、相手なしの修行には限度がござる。相手あり、かつ具体的な目標あっての修行にまさるものはござらぬ。さればこの際、花の御所から鏡を奪い返すことは、もっけの倖い、願ってもない機会というべし。――」

「そもそもそれくらいのことが出来ずして、どうして将来、神器を守護つかまつれようか」

と、腰越蠟念がいった。

菊水の鏡をとり返すということは、いま突然阿波座監物がいい出したことだが、まるで打てばひびくように菊水党のめんめんすべてがこう演繹しはじめたのは、もとよりふだんから一心同体のせいもあろうが、またこのことについて――何とぞして予行演習ともいうべき訓練を試みてみたいという下心があったゆえであろうか。

事実、監物は再説した。

「この春以来心血をしぼって来た例の忍法の成果を、ここらでひとつ実際上試してみたいのでござる。実戦でのうては、真の力量もつきませぬし、またその力量のほどもわからぬ」

「けれど。――」

と、双羽がいった。

「わたしたちの修行した忍法が……菊水の鏡をとり戻すのに役に立つでしょうか?」

――まさに、男の眼には裸身に透けて見える双羽の忍法おぼろ月、また男をして放出せしめる環の忍法弓張月が、どういう風にしてそんな目的に叶うのか見当もつかない。

「然り。――神器を護るための忍法でござるぞ!」

と、監物がいった。それから彼女たちの忍法から連想したのでもあろうか、とってつけたようにつぶやいた。

「それに、色好みの公方からお鏡どのを護る用もある」

すると、何よりこの一語が火をつけたように、

「ゆきましょう!」

と、環がさけんだ。

「京へ。――姉上さま!」

「え」

いまいささかの疑問を呈した双羽は、おっとりと、しかし決意をみなぎらせてうなずいたが、ふとその顔をあげて、

「七兵衛どのは？」

と、いった。

――伊賀衆が大挙して上洛しては人目をひき、かんじんの目的を害する。それだけの用なら、われらほかは三人だけでよろしかろう、と菊水党はいった。

双羽と環はうなずいて、伊賀を旅立った。

服部半阿弥はなおにがりを入れられて脳髄がかたまってしまった人間みたいな顔でそれを見送っただけであった。この菊水党が来て以来、この老人は何となく主導権を失っている。ただ。――

「これは服部の宝じゃ。はじめて伊賀を離れるおまえ、これを守護神とせよ」

といって、例の碧玉の勾玉――後醍醐帝より賜わった首飾りを双羽の頸にかけた。

彼女はちょっと頭を下げて、襟の下にかくしながら環をふり返った。

「そなたの護り神でもある」

「わたしの護り神はあそこにあります」

環は指さした。そこにはぼんやりと柳生七兵衛が立っていた。――双羽は、眼を見ひらいた。この妹が七兵衛に対してそんな言葉で形容したのははじめてだ。

「いえ、人ではありません、あの刀です」

七兵衛は金襴の袋につつまれた長いものを持っていた。彼が柳生から持参した金剛丸――その昔柳生の祖が大塔の宮から拝領したという名刀である。――環は昂然といった。

「あれは、あのひとにあずけてはありますけれど、わたしが取った刀です」

七兵衛は苦笑いした。

しかし、妻にこういわれて、ただ苦笑いだけですませているところ――曾ての精悍、妖気すら孕んだ柳生七兵衛の面影いずこにかあるといいたいが――もっとも環を妻と呼べるか、どうか。

環のところへ婿入りしたにはちがいないが、さてそれ以来彼はまだ例の「不覚」から脱却し得ず、それどころか、その「不覚」能力をいよいよ発展させられてあの忍法伊賀の水月を体得させられたのだが、この忍法は妻に対しては甚だ面目ない能力だ。そもそもこの忍法から脱却しなければ妻とすることが出来ないのだ。

では、いったい彼は何のために伊賀にいたのか。

「――月ヶ瀬の恥をすすがんがため」と菊水党にはいったけれど、また彼の意志とし

てはそのつもりかも知れないけれど、現実的にはさっぱり妻には頭のあがらない、劣等感のとりことなった男のような雰囲気が彼にある。

で、いま菊水党から「三人でよろしかろう」と勝手にきめられた通り、彼もその一員として、のこのことこの旅についてゆく。

「いや、まさにこれは守護神」

と、それでも彼は金襴の袋を撫でた。

「たしかにそなたらを護る。——忍法はともかく、刀の方は少々自信があるでな」

その三人に、七人の菊水党をつらねて、彼らは服部郷を出た。

伊賀から京へ出るにはふつう奈良街道を西へ歩いて、途中で折れて醍醐の山を越えてゆくのだが、そのためには柳生の庄へ入らねばならぬ。あれ以来柳生とは、例の月ケ瀬あたりに見えない鉄壁でも張られたように断絶状態にあるので、彼らは甲賀の信楽へ出て、近江回りで京へ向った。

——このとしの秋の末、将軍義満は大変なことをやった。

義満が時の後円融上皇の後愛妾按察の局に手を出していたのはこの春のことだが、ついにこれに成功し、しかもことが発覚して、憤怒された上皇が局を刀背を以て打たれ、局がいずこかへ出奔するや、上皇は持仏堂に入って切腹されようとした事件が起ったのである。

上皇とはいうものの、義満とは年は同じ——そのお子たる後小松天皇はまだ十三歳。実質上の北朝の代表者はこの後円融上皇であった。上皇が狂憤されたのも当然な事件だ。

足利義満。

彼こそは日本史上で皇室にあらずして皇位を欲した第二の男である。一番目は例の弓削道鏡だが、しかし道鏡は皇系の血を受けているといわれるから、まったくの臣下にしてこの大野望を抱いたのはこの義満が最初でかつ最後の人間といっていい。義満が明の永楽帝に送った文書に、おのれを「日本国王」と書いたり、右の後小松天皇のおん母が薨ぜられると、自分の妻の康子を皇太后と呼ばせたりしたのみならず、一子を天皇としみずから上皇の位に坐ろうとしたのは後年のことで、さらに遺言によって自分を「鹿苑院太上法皇」と称させたりしたのは死後のことだが、その気はこのころからあったといっていい。後世の眼から見て、いわゆる稀代の大逆にあたるのみならず、この当時から公卿や僧のあいだに群虫の羽音みたいな批判はあったのだが、いずれの場合も彼は恬然としていた。あくまで明朗闊達で、これを仰ぐ者はまぶしさすらおぼえ、陰気なほんものの天皇上皇より、ほんとにこちらが天性の貴種ではないかと思いこむほどであった。

ほんものの天皇上皇？　彼は京にある上皇天皇をまったく自分の傀儡だと見なしている。思っているのみならず、それを大っぴらに態度に現わす。

ただ——このときの上皇御愛妾との密通発覚だけは、その後の上皇のお悶えぶりをきいて、事件の性質が性質だけに、さすがの天衣無縫児も少なからず参った。相手が上皇でなくても、あまりあとあじのいい事件ではない。

とくに彼は管領細川頼之の面を冒しての諫言には一言もなかった。

「京におわすわれらが上皇をおろそかにあそばすことこそ、天下にわれら足利家をおろそかにすると同様ではござりませぬか」

彼自身われらの上皇といった。いかにも幕府の大参謀長らしい言い分で、要するに北朝の旗をみずから汚す愚行をいさめたのである。頼之のすすめに従い、やむなく義満は仙洞御所へいって上皇に陳謝した。そのあげく、これまたただッ子のようになれた上皇から、「あくまで局を探し出して参れ」という御諚を受け、それを確約させられて室町の屋敷へひきあげて来た。

室町第。

十年ばかり前、義満がここ北小路室町に五年の歳月をかけて造営したもので、南北二町、東西一町、七千二百坪に及ぶ大邸宅である。中門、寝殿、常御所、小御所、対屋、透渡殿、釣殿、泉殿、禅室、観音堂など、その作り、配置、「眼を驚かさずということなし」といった王朝風の豪壮なもので、しかもこれをとりまく庭園には、鴨川から水をひいて広大な池を作り、近衛家から強引にとり寄せた有名な糸桜、銀杏を中心に、藤、つつじ、山吹、椿、萩、なでしこなど四季の花々が不断に咲きみだれ、世に「花の御所」とうたわれたのも当然な華やかさであった。

ここへ帰って来た義満はさすがに仏頂面であった。何かをこわして、もとの通りにして返せといわれた餓鬼大将の顔といっていい。

上皇に刀背で打たれて逐電し、それを探し出して来いといわれた按察の局のゆくえが、彼にもわからないからだ。探し出してさし出したところでろくなことにならないのは明白だから、考えるのも憂鬱な話だが、ともかくも上皇とのっぴきならない約束をしてしまったのだから、ともかくもこの御命令は果さなければならない。

ところが、彼にもそのゆくえがわからない。本来なら、自分のところへ逃げて来るはずだが——少なくとも自分の心当りのところへ身を潜めるはずだが、あらゆる公卿の家に探りを入れてみてもまったく消息のないのは、よほど局は上皇のお怒りを恐怖したものと見える。周囲にあたりちらすこと数刻、義満はふと思いついて、妻の部屋へ出かけていった。

「康子」

御台の康子は、敷物の上にはらばって、侍女に腰をもませていた。

「そなた、局のゆくえを知らぬか？」

実は彼も、思いがけないことを思いついたものだが――たんなる下民の女ではない、ともかくも上皇の御愛妾であった女性が、天下を憚伏させている自分の眼のとどかぬところへ身をかくす、そんなことの出来るのはこの妻のほかにはない――と、突然閃くようにひざをたたいたものだ。

それはこの康子の以前からの嫉妬ぶりと、それを表面みごとにかくす、一筋縄ではゆかない性格に想到したからであった。いまにして思うと、按察の局との一件の発覚も、この妻の手が動いていたのではないかと疑えるふしもある。――

「按察の局？　とは、また何者ですか？」

こんどの騒ぎはすでに知っていないはずはないのに、それはおろかその根源まで頭から知らぬ顔でそらとぼけようとする。

――弱り切っていた義満は、自分の失態も忘れて、かっと満面に朱をそそぎ、

「おまえという女は」

と、歯をむき出して、そのおのれの顔をちらっと自分で見て、いよいよ顔をひきゆがめた。――床の間に飾ってある白銅の鏡にそれはうつっていたのである。

彼は、妻の腰をもんでいた侍女を見た。

いつぞや中条家から呼んだ娘であった。――そのとき自分が一目見て気を引かれた理由を、いま彼は了解した。たんに可憐で美しいばかりではない。その娘が按察の局の若いころに、実によく似ていたのだ。

「ふむ」

と、彼の昂ぶった心は、たちまち雷鳥の羽根みたいに変った。

「知らずばよい。――この女、按察の局に似ておる。――まさかほんものには使えまいが、一応しのぎにはなるだろう。ひとまず仙洞に送ってつかわそう。――」

と、前にしゃがみこみ、お鏡のあごに手をかけて、きらきらよくひかる眼でつらつらと眺め入り、赤い唇でにやっと笑った。

「いや、その前に、ともかくわしのところへ参れ」

わななく手をつかんだ。

豆を焚く詩

「あの、お許しなされて下さりませ」

あっけにとられて、それまで公方と御台の短いが険悪なやりとりを聞いていたお鏡は、突然思いがけず公方の鉾先が自分にむけられて来たので仰天した。

「よいではないか。……ふむ、これは面白い」

つかんだお鏡の手を離さずに義満は笑った。

「わしが按察の局のからだを知ったのはこの春、しかももとより上皇のお手のついたもの。……そのとき、ああ、それ以前の処女のころの局を知りたかった、としみじみ痛感したが、いかに世に不可能を知らぬわしでもこれは不可能だ。と思うておったが、おまえを味わえば、その不可能の味を味わうと同じ道理ではないか」

妙な発見をしたものだ。それにしても、まるでだだッ子みたいによく気の変る人物である。

「そしてわしが手をつけたものを上皇に返す。それであいこじゃ」

そして、御台の前というのに傍若無人にお鏡をひきずり寄せて、唇を吸おうとした。

——お鏡はくらくらっとした。

恐怖と怒りと恥ずかしさと。——しかしこのとき彼女の脳髄を火のようにつらぬいたのは、「妻としての道にそむくようなことがあれば、舌をかんでも死にまする」と又十郎にいい残して来た自分自身の言葉であった。

「……うっ」

ふいに義満がからだを海老みたいに折りまげた。

何をどうしたのか、お鏡自身にもわからなかったが、彼女のつかまれていない手の方は鞭のようにしなって、義満の脾腹を打っていたのである。

義満の顔が赤くなったり、青くなったりした。息も出来ないらしい。——お鏡は飛びのいていたが、ふいに恐怖にとらえられた。自分は公方さまに、何をしたのだろう?

「あの、どうかなされまして?」

間のぬけた、しかし彼女としてはどうしようもない問いを投げて、おろおろと近づこうとしたお鏡に、義満はようやく、くわっと怒りの息を歯のあいだから吐き、

「こやつ!」

ふたたび飛びかかって来た。が——お鏡のからだは飛燕のごとくすれちがっている。またどうしたのか、お鏡にもわからない。まったくの反射行為だ。ただし、これは中条家の道場で叩き込まれた修行が、無意識的に発揮されたものでもあった。

ずでんどう、と地ひびきたてて、仰のけに将軍義満はひっくり返っている。

——途中まで、むしろ冷やかに眺めていた御台は、さすがにがばと身を起していた。お鏡を見た眼は恐怖に見ひらかれていた。と見るや、金切声でさけんだ。

「だれぞ、来や。——来てたも——曲者じゃ!」

曲者はひどい、などと抗議を申し込む余裕はお鏡にない。遠くから、どどっと跫音が起った。もうだめだ、とお鏡は絶望のために足も崩折れる思いがした。

事実、死ぬときが来たのかも知れない、と思い込んだほどである。そのとき、その

跫音の中で、だれかさけぶ声がした。

「なに、柳生又十郎?」

「柳生なるものが押しかけて来たと?」

そんな声がした。だれかの報告に応じた声であったらしい。

その声が、崩折れかけていたお鏡の足をしゃんとわれに返らせた。え、又十郎さまが? どこへ? それが事実であるかどうかを疑ういとまもなく、彼女はまるで夜明けの光を見た鳥みたいに、夢中でその部屋から駈け出していった。

回廊を数十人の侍が押っ取り刀で走って来る。

「な、何事でござる?」

口々にさけぶのに、

「上様が、大変でございます。早く。——」

と、お鏡はさけんで、うしろを指さした。

まさかその大変をひき起した張本人がそのお鏡だとは思うによしなく、侍たちはまろぶようにその指の方向へ駈けていった。

お鏡はすれちがって走った。またどちらへいったらどの建物にゆくのか見当もつきかねる宏大な花の御所であったが、どこか遠くでたしかに又十郎のかん高い声が聞える。

「お鏡っ、お鏡はどこにいる? お鏡は無事か。——」

自分を呼ぶのに、はじめてきく性質の又十郎の声であった。

お鏡はその方へ、必死で走った。どこをどう走ったか、彼女はともかくも人声のする或る唐破風の門へたどりついた。

そこで足利家の侍たちにとり囲まれて、柳生兄弟が立っているのを見た。眼を吊りあげてさけんでいる又十郎を、うしろから抱きとめているのは兄の舟馬である。

「又十郎さまっ」

その胸へ駈け込んでいったお鏡を、柳生又十郎はぱっとかがやく眼で迎えて、

「おお、お鏡、無事であったか。——」

と、兄の両腕ふりほどき、自分の両腕さしのばして迎えようとしたが、すぐにそれをだらんと落して、

「ふふん、おまえを案じて来たわけではないそ。ちょっと知りたいことがあって来たのだ」

と、別人みたいにひどくよそよそしい顔をして、そっぽをむいた。

「何です?」

「中条家に投げ文をしたものがあるのだ」

といって、ふところからまるめた紙をとり出して、ひらいて、ふいにあっと眼をむ

いた。

「や、や――紙は白紙じゃ。た、たしか、花の御所に鏡危うし、と書いてあった文字がない！　兄上こりゃどうしたことでござる」

舟馬ものぞいて、首をかしげたが、

「ふしぎじゃな。ともかくも、お鏡に別状がないのは倖せであった」

もちまえの、煮え切らぬ調子でいう。

「では、引き取るか。もしおまえ気にかかるなら、この際お鏡もいただいて」

「待て」

と、足利家の侍たちがどよめいた。

「恐れ多くも公方さまのおわす御所に推参し、わけもわからぬことを狂犬のごとくわめきたて、これほど騒がせおって――そのままには帰さぬぞ！」

そのどよめきを、次の瞬間はたと消したのは、そのとき御所の奥の方から流れて来た二度目の叫喚であった。

その叫喚は将軍義満をめぐる侍たちがあげたものである。彼らはちょうど御台のお部屋と玄関との中間あたりの回廊の上にいた。

――最初、侍たちがその部屋へ駈けつけたとき、義満はやっと腰をなでながら起きあがったところで、「いかがなされましたか？」という問いに、「いや何でもないわ」と、苦笑いした。が、ちらっと御台の方を横目で見て、御台がうす笑いを浮かべているのを見ると、「ううぬ、いまの侍女、けしからぬやつだ。あのお鏡をひっとらえろ」と、勃然と顔を染めてさけび出した。そのとき、門の方角からの騒ぎをきいて、

「あれは何だ」ときいた。

「は、門に柳生兄弟と称するものが推参し、少し気がかりなことがあるゆえ、ここに奉公しております妻へ会わせてくれと申しておるそうで。――」

「ふうむ？　それだけか」

「それが妙に気をたてておりまして、門番などを打擲したりしたそうで、とり押えにかかっておるらしゅうございまする」

「……よし、わしも見てやろう」

義満は、腰をさすりさすりその部屋を出ていった。武士たちがあわててあと追う。

とはいえ、義満はそんなことで、べつにみずから門まで出てゆくつもりはなかった。改めてお鏡を追う気もなかった。そこを出たのは、いまの醜態を妻に見られたのが間が悪く、その照れかくしに過ぎない。が、ともかくもふらふらと侍たちといっしょに急ぎ足で歩いて、とある回廊までやって来たとき――いま出て来たばかりの御台の部屋で、時ならぬ大音響をきいたのである。ばりばりっ――と、板の裂けるような。

「あれは何じゃ」

ぎょっとして立ちすくみ、さて彼らは一大叫喚とともに、またまろぶようにそちらに引返していったのであった。

足利家御台康子は失神した。

いちどは侍女お鏡の思いがけぬ抵抗ぶりに恐慌を来したものの、そのときの夫の醜態に思い出し笑いをしてそのうしろ姿を見送ったほど気の強い彼女がである。——何しろ、突如として頭上の格天井の板が裂け、無数の黒装束の影が舞い落ちて来るのを見てはである。

無数の？　実は、五人であった。舞い落ちて来たのではなく、ひとかたまりになって、ころがり落ちて来たのであった。

が、そのほとんどが、たたみに落ちたときは、とんと両足立てるか、少くとも片ひざついて、ぶざまに尻もちをついたのはたった一人であった。

「ば、ばかっ」

と、黒装束たちは、尻もちをついた男を、われを忘れたように罵った。

「いや、申しわけない。力の配分を誤った」

尻もちをついた男は、やっと立ちあがって、頭巾の頭を下げた。頭巾のあいだからのぞいた眼は、片眼であった。

「ともかくも、鏡を。——」

と、一人があごをしゃくり、片眼の男は何やら自分の失敗をとりつくろおうとするように、床の間の方へスルスルと寄ってそこにあった白銅の鏡をとりあげたが、

「これが公方の御台か。ふん」

と、気を失っている康子を見下ろした。むろん、いまの大音響とともに、向うで叫喚があがり、回廊を馳せ戻って来る跫音がする。

「お鏡の代りに、この御台でもさらってゆくか」

と、仲間をふり返る。四人の仲間は狼狽していた。

「何を、気楽なこと。——早く、逃げるのだ。それっ」

と、さけぶと、四人の黒装束は部屋の四周に走り寄った。

と、見るやその九十度の壁面に四肢をつっぱり、まるで上から糸で引きあげられるように、いっせいに天井にたどりついた。格天井の格子に四肢がかかると、こんどは蜘蛛みたいに水平に這って、先刻裂けた穴からふたたび天井裏へ姿を消してしまった。

「——七兵衛どの早く！」

と、上からあわてた声でいう。下にとり残された黒装束も狼狽したようすであったが、

「まだ、おれにはそんな器用なまねは出来ないよ」と、答えた。

「しかたがないなあ。……では、下を逃げなされ、早く。――」

と、上ではせきたてる。

「ともかくも、雷鳥抜羽の術を。――」

「お！」

下の男は忙がしく片手を全身に這いまわらせた。するとその黒衣がいたるところ破れ紙みたいにひるがえって、みるみる枯草色の装束に変ってゆく。それでも異形の姿だが、ひるま、黒衣よりはものにまぎれる色だろう。黒衣の裏地がその色になっているので、それを抜かずに、走りながらでも裏返す。――すなわち伊賀で教えられた雷鳥抜羽の術。

いうまでもなくこれは菊水党と――一人とり残された柳生七兵衛であった。

――伊賀に伝えられる菊水の鏡をとり返せ。

――それがこれまで修行した忍法の実地研修の手はじめとなる。

こういう目的で京へ乗り込んで来た菊水党と、それにつれられた双羽、環、柳生七兵衛。そのうち双羽と環はどうしたか、そのゆくえはともかく、菊水党のうちの四人が、七兵衛だけをつれて花の御所へ忍び込んだ。

御所へ忍び込むのも、天井を這うのも、むろんその実地研修の第一歩である。無色、無形、無跡、無声、無息、無臭のいわゆる「六無の修行」はここに発揮される。

そして、たどりついた御台の部屋で、はからずも将軍義満がお鏡に狼藉なふるまいに及ぼうとするのを見たのは――彼らには、果せるかな、という気がしたけれど――まったくの偶然事であった。七兵衛ははやり立った。粗笨を自認する彼の頭にも、お鏡は「妻」環の妹であり、弟又十郎の嫁であるという観念はある。怒って、気をもむ七兵衛を、

「――しばらく」

と、菊水党は抑えた。

「やがて、門前に柳生兄弟がおしかけて来るはずゆえ」

という。どうやら、柳生兄弟がおしかけて来るように、ほかの菊水党に中条家へ投げ文させたらしい。その騒ぎにまぎれて、というより、それはあとになって奪うべきものを奪った際、嫌疑をそちらへむけるためということで、七兵衛は釈然としないところもあるが、

――これが忍びの一法。いやさそれこそ楠木流忍法の真髄。

といわれると、ともかくもこの際、胸をさすって黙認するよりほかはない。

で、それを待っているうちに、お鏡は公方さまに一撃を与えた。門の方に柳生兄弟が推参して騒ぐ物音が聞えはじめたのはそのときである。お鏡が逃げ、義満が追って

出ていった——と見て、

「予想通りというべきか、ちと手はずが狂ったというべきか、——ともかく鏡を——では」

と、四人の菊水党は梁からひらひらと天井裏へ飛び下りた。板を適当に切り抜くべく、一人が匕首を抜きはなったとき——七兵衛もまた天井裏へ飛び下りて、そのとたん——例の大音響である。

かくて彼らはひとかたまりになって下へころがり落ちたわけだが。——

——さて、いま、一人とり残された柳生七兵衛は、鏡を抱いたまま狼狽して縁側へ飛び出して、さすがに駈けて来る跫音とは反対の方角へ逃げ出した。それが何とか角を回ったあと、引返して来た義満たちが回廊の端へ現われたのは不幸中の倖いであった。逃げ出したものの、むろん七兵衛はどこをどう逃げたらどこへ逃げられるのか五里霧中だ。

「……あっ」

また一つ回廊の角を回ったところで、彼はだれかにぶつかった。

はね飛ばされて、悲鳴をあげたのは相手の方であった。——二メートルばかり向うに尻もちをついたその男は、恐怖の眼でこちらを見て、ふいに、

「し、し——柳生七兵衛どの?」

と、押し殺されたような声をあげた。片眼に気づいたらしい。

七兵衛もそれが誰であるかを認めた。

「や。——世阿弥どの」

——まだよくわからないふしもあるが、いまは七兵衛もこの足利公方お抱えの猿楽師が伊賀服部の一族であることは知っている。

「——しいっ」

と、世阿弥は片手で口を押え、片手をふった。それから、何もきかず——きく余裕もない風情で、立ちあがって、

「こちらへ、こちらへ」

と、庭へ飛び下りた。

築山、泉水、樹立ちをめぐりながら、世阿弥は短くそれまでのいきさつをきいた。

そして、ちょっとした思い入れがあって、

「いよいよ、はじまりましたなあ?」

と、つぶやいた。

いよいよ——とは、どういうわけか。考えてみると、そもそも菊水党を伊賀へ導いたのもこの男、そしてまた彼らをこんど京へ呼び寄せるきっかけを作ったのもこの男だから、何か期するところがあったのかも知れないが、どこかへんによそよそしい感

じのするつぶやきでもあった。

結局、世阿弥は花の御所の裏門の一つから七兵衛を外へ逃してくれたのだが、このころはもうおちつきをとり戻していて——この男、つくづくとふしぎな人物であるな——と、七兵衛が思ったのは、世阿弥のいままでの行動よりも、彼がこのとき錆のある節回しで、うすく笑いながら口ずさんだ詩であった。

「豆を煮るに豆がらを焚く。
豆は釜中にあって泣く。
もとこれ同根の生、相煎るなんぞ甚だ急なる。……」

忍剣第一勝負

「菊水の鏡が御所から消えたそうな」

と、中条兵庫頭はいった。

その夕、兵庫頭は御所に呼び出された。そして夜に入って帰邸するなり、柳生兄弟とお鏡を書院に呼んだのである。

「おぬしたちが御所の門で騒いでおるあいだにだ」

無表情な兵庫頭だが、機嫌のあまりよくないことはわかる。——実は彼はその昼間不在で、柳生兄弟が室町御所に押しかけたのを知らず、あとできいて、「——何たることを」と苦い顔をしたものであった。果せるかな、兵庫自身の召喚である。

「——えっ、鏡が？」

と、柳生兄弟は狐につままれたような顔をした。

「そりゃ、まことでござるか？」

「まこと、どころではない。公方さまは、おまえらの仕業だと御逆鱗遊ばしておる」

「——ま、まさか？」

又十郎が仰天すれば、舟馬もめんくらった表情になって、

「げんにいま、われらが御門で騒いでおるあいだに消えたと仰せられたではありませぬか？」

「それが計略だとの御説じゃ。つまり、門の騒ぎで人を集めておいて、その隙に奥で鏡を奪ったに相違ないと」

「すると、だれが？」

「それが——中条家に縁ある何者かではないか、そうでなければ同日同刻、もののひびきに応ずるがごとく表と奥であのような騒ぎを起すはずがない——と仰せある。すなわちこのわしも一味ではないかと疑われておるのじゃ」

これで兵庫頭が苦り切るのもむりはない。

「むろん、わしはそのようなおぼえのないことを陳弁した。何の必要あってこの兵庫頭がそのようなたわけたまねをせねばならぬのでござりまするか、と申しあげた。で、ようやく将軍家にもどうやら御納得いただけたが——その代り、別の御下知を頂戴した」

「お鏡をさし出せ、ということでござりますか」

と、舟馬がきく。御所の騒ぎ——いまから思うと、それが菊水の鏡が紛失したことによるものであったが——それにまぎれて、ともかくもお鏡の手をひいて中条家へ逃げ帰ったものの、このままですむはずがない、てっきりもういちどお鏡をさし出せという命令が来るに相違ないと苦慮していたのである。

「ちがう。——いや、そのこともふと仰せ出されたが、ま、女はそのままにしておいてよい。その代り——との御下知じゃ。消えた鏡、探し出して持って参れと」

「へえ」

「鏡はもとより足利家のものでないことは承知じゃが、ところもあろうに御所に忍び入り、あまつさえ御台を失神させてものを奪うとは、何ともいいようなき大それたやつ——たとえそれが何者であろうと、その鏡をとり返して来たら、柳生兄弟の無礼を許し、かつは中条家の潔白の証しにもなるであろうと申される」

舟馬と又十郎は顔見合わせた。又十郎がくびをひねる。

「それ、いったい何者でござろう?」

「御台さまが御喪神あそばしたと仰せられましたな」

と、舟馬がきいた。

「その曲者を御覧なされなかったのでござろうか」

「それが、天井から無数の黒装束が舞い落ちて来たのを御覧なされたとたん、気を失われたと申す。——」

「なに、無数の黒装束が天井から?」

「おまえらのところに投げ文したやつも同じ一味であろう。すなわち、将軍家がこちらにお疑いをお向け遊ばすように、これは相当根の深いたくらみじゃぞ」

「しかし、何の縁もない者が、あのような鏡を盗って何にするのか?」

「もしやしたら。——」

と、風の吐息のような声でお鏡がいい出した。彼女は先刻から宙に眼をすえて、いっしんに何やら考えている表情であった。

「伊賀が」

「なに、伊賀——服部というのか!」

「天井から黒装束何とかいうのかわかりませんけれど——あの鏡を御所に置くことをいやがる者が、服部の人々のほかにあろうとは思われません」

率然として柳生兄弟は、鏡とお鏡が御所に召されるとき、このこと伊賀が耳にしましたら何と申しますかといったのを思い出した。

「実は、わしもそれを考えた」

と、兵庫頭がいった。

「服部というより、服部についておるもののけどものことを」

「もののけ？」

「いや、それにしても、わざわざ京に来てあの鏡を奪うとはやはり服部の意志を受けておるには相違ない、ひょっとしたら、服部家の者もいっしょに京へ来ているかも知れぬ」

お鏡の顔色は梨の花のように変っていた。

「しかし」

と、舟馬がくびをひねった。

「それにしても、どうしてわれわれまで罠にかけようとしたのか？」

「いわずとも知れたこと、柳生と伊賀は千年の宿敵ではないか！」

と、又十郎がさけび出した。美しい顔が勃然として紅潮している。

「先生、そこまで御推量なら、なぜ将軍家にそれを申されませぬか。すぐに軍兵を出して服部をしめあげさせればよいではござらぬか」

「服部が盗ったという証拠がない。その疑いをこちらに転嫁せんがためのあの投げ文じゃ」

と、兵庫頭がいった。

「それに又十郎、服部を表に出してよいのか？　そこの嫁女の里であるぞ」

「あ。――」

又十郎は面を叩かれたような表情になったが、すぐにその自分の途惑いが癪にさわったかのごとく、

「こいつなど、どうなろうと拙者の知ったことではない。いわんや、服部をや」

と、にくにくしげに息を吐いた。――そのくせ、「花の御所に鏡危し」という投げ文を、てっきりお鏡のことと思って、なお首をかしげている兄の舟馬の尻を叩いて、まっしぐらに御所へ馳せつけて来たのは彼の方なのである。

「それに、まだそやつら、伊賀へ帰ってはいまい。――これまでのやりようから見て、京に残ってこちらの運命いかにとしばらく見張っておるのではないか」

「ううぬ、けしからぬやつら、よし、ひっとらえてその面皮ひきはいでくれる」

又十郎はうめいて、お鏡をにらみつけた。

「そもそもあの鏡、わしが実力で伊賀から取ったものじゃ。やわか、むざむざ伊賀に

返してなるものか！」

「わしは公方さまにそのことは何も申さず、ただ暫時のお待ちを願った」

と、兵庫頭はいった。

「仰せのごとく鏡は必ず探し出して御覧に入れる。それはこの兵庫の首をかけてお誓いいたしますとな。——ところで、その役、その方らに委せたい。というのは、鏡のこともさることながら——この春以来、おまえらに修行させた剣法、そろそろ実地に試みる時が到来したのではないか、と判断したからじゃ」

「あ、剣法。——」

又十郎はふいにと胸をつかれた顔つきをした。

「道場の修行には限度がある。それに、そもそもおまえらに剣の修行を強要したのは、いうまでもなく、南朝にある神器、もし北朝に移らんとするときはこれを奪わんがため——この大使命のもとに日夜研鑽して来た剣法、いまその菊水の鏡を奪う程度のこと成らずして、どうして本来の物の役に立とう。やって見い」

——神のみぞ知る。期せずして中条兵庫頭は、服部姉妹に対する菊水党と同じようなことをいう。

「相わかってござる」

舟馬はゆっくりと一礼した。この男はものに動ずるということがないようだ。

「しかし、そのもののけどもはどこにおりますので？」

「そこまでは推量出来ぬ。捜すのだ。大塔衆にもこの旨聞かせて手伝わせよう。……いま申すように、その伊賀から来たやつら、おそらくまだ京にいる。こちらのなりゆきを見張っておる。——すでにこちらを巻込もうとしたのが挑戦だ。われらがきゃつらを捜しておると見れば、いよいよ伊賀には帰れまい。——」

兵庫頭はお鏡を見やった。

「そなたも力を協せろ」

「——は？」

「第一、そなたがその伊賀の匂いのするやつらを見つけるのに一番役に立つこと。第二、そなたが捜索の陣頭に立つことで、きゃつらに自分たちが捜されていると知らせ、うかと伊賀へ引揚げることは危いと思わせること。第三、そなた自身の修行になること。——やる気があるか？」

「——もし、又十郎さまがよいと申されるなら」

「勝手にしろ。おれの関知せぬことだ」

と、又十郎はあごを横につき出したが、お鏡が不安そうに、

「けれど、服部からもだれかがついて来ているというのがまことなら、それはだれか知ら？」

とつぶやくのをきくと、急に眼をひからせて向きなおり、
「そうだ、おまえも探しにゆけ。そやつを見つけ出し、おまえの手で始末せい」
と、例のにくまれ口をきいた。
ふとい眉をしかめて、舟馬がいう。
「おまえは何もせぬつもりか」
「だれが何もせぬといったか。きゃつら、ひっとらえてその面皮をはいでくれるといま申したばかりではないか。いかにも師のお言葉のごとく、半歳汗血をしぼった剣法の成果を験すはこのときにあり。――」
と、いいかけたが、急にまた心もとない表情になって、
「兄上、しかし自信がおありか？」
と、小声できいた。
「あるわけではないが。……」
例によって煮え切らぬ返事をして、舟馬は泰然としている。
「大丈夫じゃ。いまいったように大塔衆のめんめんに指導させる」
はじめて中条兵庫頭が笑顔に戻ってうなずいたとき、ふいに庭の方で大声が聞えた。
「――だれじゃ、そこにおるのは？」
大塔衆の一人、輪ノ内彦四郎の声であった。兵庫頭は別人のように敏速に立って、先に明り障子をあけて縁に出た。

――あとになってきくと、その日大塔衆は御所に於ける柳生兄弟の事件をきいて駈けつけ、なおそのあとで御所にまた何やら騒ぎが起ったらしいのを知って、何が起ったのかと探りを入れて、やっとこのとき帰って来たものらしい。
つまり、菊水の鏡が紛失したということだが、そのことの報告に兵庫頭のところへゆこうとして、勝手知った庭伝いの通路を、ふいにそこの庭へ入り込んで、ふと蒼い月光の中にじっと立って書院の方をうかがっている、黒いずんぐりむっくりした影を見つけ出したのだ。
とにかく兵庫頭たちが見たときは、庭のまんなかに立つその影を、ぐるっと半円をえがいて取巻いている七人の大塔衆の姿であった。
「これは失敗の例」
と、あきらかに黒い頭巾黒装束のその男はいった。背低く、まるまるとふとった影であった。
「話を聴こうと、月のさす方へ回ったのが悪かった。蔭のない場所を選んだのは無色の修行に反する」
何だか講義でもしているようだ。だれに、何のためにしゃべっているのか、ささや

くような声で、いっている言葉の意味もわからなかったが、柳生兄弟にはなぜか、道場に於ける大塔衆の剣法講義そっくりの調子に聞えた。

「助からんかも知れんが。――」

きらっと月光に薄く光る細い眼を縁側の方へむけて、

「出来るだけ、やって見ようと思う」

「何だ、うぬは？」

大塔衆の中から、ひょろりと背の高い一人が進み出た。山国軍兵衛という男であった。

「いよいよ以て奇態なやつ。――名乗れ！」

「軍兵衛、うかと寄るな、そやつただものではないぞ」

と、兵庫頭が声をかけた。

何かを感じとって兵庫頭はそう注意したのだろうが、これで山国軍兵衛を不用意に近寄らせなかったと同時に、相手にも一息の余裕を与えたことになり、それが結果としてよかったか悪かったかはいささか疑問である。しかし、兵庫頭は、柳生兄弟の方もかえり見た。

「よく見ておれよ」

が、兵庫頭とて、次の刹那、黒い影のやったことまで予想していたかどうか、その

男はいよいよ奇態なことをした。ぽん、といった感じで坐ると、一本だけさした刀を鞘ごめに抜いて傍に置き、首と胴を前に折り曲げたのだ。そこから奇妙な音がながれ出した。

いま本人もいったように、月光はその庭の方からさしていた。だからそちら側から入って来た大塔衆にはあざやかに見えたのだが――どこをどうしたのか、その怪しの男は、たしかにおのれの男根をつかみ出したのである。そして、何たることかそれを自分でなめはじめたのだ。

舌も異常に長く、男根も大きいにちがいなかったが、犬じゃあるまいし、そんなことの出来る人間は世にあるものではない、と呆れたのは一瞬である。七人すべてがその瞬間からおのれのものも何やら濡れた粘膜に――しかも、妙にざらざらして吸着力のある粘膜に巻きつかれたような感覚にとらえられたのである。

「……あ」

と、又十郎がさけんだ。

怪しの影が移動しはじめたのだ。それは完全な球体人間であった。事実、足ではなく、そのまま肉塊は鞠みたいに転がって逃げた。それを見つつ、七人の大塔衆が立ちすくんでいたのは――縁の方から見ると、ただこの怪奇なる逃走に胆を奪われたとしか見えなかった。

「逃げる！」

又十郎のさけびに、まず山国軍兵衛がわれに返ったようだ。

「ま、待てっ」

彼はぶるっと身ぶるいし長剣を一閃させると、地を蹴って曲者に躍りかかった。

球体人間は前後左右、転がって逃げた。ただ、このあいだ、いつのまにかいちど置いていた刀を鞘ごめにつかんでいたが、それがこの回転の邪魔に全然ならないらしいことこそ不可思議のわざであった。

かかる形態と運動を示す敵はむろんはじめてらしく、山国軍兵衛の刀は、柳生兄弟もはじめて見るようなぶざまな軌跡をえがいて空を走った。ほかの六人も、あっけにとられた風で、この奇怪な決闘を眺めている。

「危い」

兵庫頭が舌打ちしたとき、逃げていた球体がいきなり逆に、軍兵衛めがけて転がった。

はっとして振り下ろした軍兵衛の長刀が、またも空を切る。その刀の内側へ転がり込んでいた球体の鞘から突如冷光が噴くと、なんとそれはほとんど真下から——軍兵衛の股の間から上半身へ斬りあげていたのである。

京の五条の橋の下

敵のからだに針を残して逃げる怪水母みたいに、曲者は刀をそのままにして、山国軍兵衛の傍をかすめてうしろへ逃げた。

股間と臍の中間あたりに目刺しのごとくその刀を腹背にさし渡したまま、山国軍兵衛は立っている。この致命的な傷を受けながら、彼は倒れなかった。——彼は刀を杖にして立っているようだ。

「……？」

立つべからざるものが立っているというこの怪現象は、曲者に疑念を起させたようだ。折り曲げて、胸にメリ込んだような首だから、その顔は見えるはずもないが、たしかに彼の全身にはそんな表情が現われた。

彼は転がりながら戻って来て、山国軍兵衛の前へ向った。そして——亀が甲羅から首を出すみたいに、その首がチョイとあがった。とたん。——山国軍兵衛はどうと仰むけに倒れた。足もとから小さな土けぶりをあげながら。

土けぶりとともに血けむりもあがったのがわかったのはその刹那であった。

「ぎゃあ！」

恐ろしい声とともに、曲者はのけぞつた。その伸びた頸を、軍兵衛の刀のきっさきがつらぬいているのが見えた。同時に、まるまっていたそのからだから四肢がニョキニョキと生え、それが大地をつかんでのた打ちまわった。しかも、彼はうめいた。

「――これも、失敗の例！」

痙攣のたびに、倒れている山国軍兵衛の右足もピョンピョンと動く。その足と曲者の頸が刀でつながっているのだ。

はじめて、夢から醒めたように大塔衆は殺到しようとして――ふいに、いっせいにたたらを踏んだ。そのとき彼らの顔を白いきらめきが稲妻のごとく掠め過ぎたからだ。

「おおっ、あそこにもおる！」

「四つ、五つ、六つ！」

彼らは月の夜空を指さして騒いだ。柳生舟馬と又十郎も庭へ飛び下り、背後の空をふり仰いで、そこに六羽の夜がらすのような影を見た。地上から発見されたのを知って、しかもその影は悠々として動かない。――と見えたが、たちまちその端から一羽ずつ、ふっと次々に消えてゆく。

「梯子、梯子！」

「梯子はどこにある？」

大塔衆は右往左往した。

「もう遅い」

と、兵庫頭が声をかけた。

「それよりあの樟の木。――」

彼は母屋とは反対側の――塀を越えた向うの夜空に亭々と聳える樟の大木に眼をあげていた。

「あそこにもおる」

「えっ」

「いや、おった。三つばかりの影が。しかし、いまみながこちらの屋根に眼を吸われておるあいだに、綱をつたってすべり下り――もはや逃げ去ったであろう。そっちを逃がすために、屋根の連中はわざと鏡で眼を吸い寄せたのじゃ」

「鏡。――」

「いま、きらっと白い光が掠めたであろう。あれは屋根から鏡で月光をはね返した光じゃ。おそらく御所から盗みとった菊水の鏡ではないか」

「やっ？　では、そやつらは。――」

兵庫頭はシトシトと庭へ下りて来た。そして、もう動かない二つのからだを見下ろして、

「ことときれたな」

と、つぶやいた。

「舟馬、又十郎、来て、軍兵衛の足を見い」

「――は？」

二人は寄って来て、はじめて山国軍兵衛の刀身が彼自身の右足の甲をつらぬいているのを見出した。

「さすがは大塔衆。ここまではわしは教えなんだが――いまおまえらも、軍兵衛が敵にこのように斬られながら、しばらく倒れなんだのを見たであろう。軍兵衛はおのれの足の甲を大地に釘づけにして立っておったのじゃ」

うしろ姿ながら軍兵衛が刀を杖にしているのは見えたが、そこまでは気がつかなかった。

「そして、曲者がふたたび寄って来たとき、倒れながらこれを足ごめに抜きあげ、そのきっさきで敵をつき刺した。――この根性を学べ」

又十郎は吐きそうな顔色をしていた。兵庫頭は平生の講義調でつづける。

「ところで、この曲者の方じゃが――こやつ、まるくなったな。いや、大変なやつじゃ。おのれの陰茎をくわえて、まるくなりおった」

「兵庫頭さま」

と、牛袋兵斎がおのれの股間に手をあてた。

「奇怪なことがござる。こやつ、そのまえに舌でその陰茎をなめ申した。それをこの月光に見たとたん、拙者ども、こちらの陰茎にもただならぬ感触をおぼえましたが」

「左様か。――」

兵庫頭はくびをかしげた。

「やはり、呪術を使うな」

「呪術。――」

「おのれの思念、願望などを敵に感染させて、ほしいままに幻覚幻想の世界におとす。また護符や丑の刻参りの人形のごとく物を介して力を得たり呪いを伝えたりする。――その呪術にはちがいないが、やはり常人ならぬ念力を持っておるやつと見えるな。ものつけというゆえんじゃ」

兵庫頭の声には珍らしく感嘆のひびきがあった。又十郎がふるえる声できいた。

「これが、伊賀についたもののけ。――」

「さればよ、しかも、こやつそれを教えようとした」

「だれに？」

「おそらく伊賀からつれて来た弟子。――どうやら、女に」

「女？」

「先刻、あの樟の木からこちらを見ておって、その後のがれた影のうち、たしかに二

人は女であった。――」

「伊賀から来た二人の女。――」

縁側でお鏡の胸をつかれたような声がした。

「敵に回して不足はない。――」

と、兵庫頭はいった。

「あの敵を求めて修行せよといったが、何もわざわざ求めることはない。敵の方からこちらに挑んで来ておる」

「なんのために、きゃつら、こう執拗にこちらにちょっかいをかけて来るのでござろう?」

と、舟馬はまたくびをかしげた。

「それは、柳生と伊賀とはもともと敵だから」

と、又十郎がいいかけるのを抑えて、

「ひょっとしたら、きゃつらもまたこちらを相手に修行しようとしておるのではないか? わしがおまえたちにいったのと同じ心で」

と、兵庫頭はいった。

「いまのこの男の最後のしぐさを見ると、そう思える。――」

「なんのために伊賀はそんな修行をはじめたのでござる?」

「それじゃ」

兵庫頭はうなずいた。

「いささか、思いあたることがある。そもそもわが大塔衆の目的は、南朝より北朝へ神器が移らんとするならばさはさせじとこれを奪うことにある。ひょっとしたら、きゃつら、そのような場合、神器を護らんとするためではないか。――」

「ははあ。……」

と、いったが、柳生舟馬の首はかたむいたままだった。

「して見れば、われらが奪おうとしなければ、向うも何もすることがないはずでござるな」

「しかし、わしの見るところによると、南朝より北朝へ神器の移る日は遠からず来る」

「が、いま何も起らぬのに、われらを敵に回すとは」

「だからそのようなことの起る起らぬに関せず、敵はこちらを相手に修行するつもりではないかとわしは見ておる」

又十郎が癇癪を起したようにさけんだ。

「兄上、何をぐずぐずといっておられる。敵がすでにこちらを敵扱いしておるのに、その敵の心事をとやかく疑って見てもはじまらぬではござらぬか!」

又十郎のいう通りだ。

「わしは頭が悪いので、まだ何やらのみこめぬところがあるが、そうだな、そういうことになるな」

舟馬の首はようやくもと通りに戻った。

しかし、このとき柳生舟馬のみずから認める鈍重な頭に明滅した懐疑は、実は微妙なくいちがいの的を射ていたのである。「事あれば」神器を奪おうとする柳生・大塔衆。「そのとき」は神器を護ろうとする伊賀・菊水党。それはいいとして、いま何も神器に事は起らず、そのときは来ないのに、未然にしてなぜこの両グループがたたかわねばならないのかと。

しかし、この漠たる懐疑も、

「柳生伊賀は元来の宿敵、それがたたかうのに何の不思議？」

また、

「すでにその敵は挑戦して来ているではないか」

という又十郎の論理に切り割られ「そういうことになるか。――」という舟馬のつぶやきとともに、両者相たたかうべき運命の車に乗ってしまった。――ただ。

「その伊賀から来た二人の女とは、もしやしたら姉の双羽、環ではないかしら？」

というお鏡の両腕をもみねじるようなつぶやきにつづいて、

「ひょっとすると、柳生七兵衛も上洛しておるかも知れぬぞ。……いや、先刻樟の木から逃げた影の一つ、あれはどうやら七兵衛ではなかったか？」

と、兵庫頭が事もなげにいったとき、さすがに舟馬と又十郎ははっとして顔見合わせた。

中条兵庫頭はふと口ずさんだ。

「豆を煮るに豆がらを焚く
豆は釜中にあって泣く
もとこれ同根の生、相煎るなんぞ甚だ恙なる。……」

――まさか、兵庫頭は、世阿弥が柳生七兵衛にこれと同じ詩を詠ってきかせたことまでは知るまい。いわんや、舟馬や又十郎にとっては、なんのために兵庫頭がこんな詩を口ずさんだのか、このときは理解を超えていた。

「とはいえ、わしは足利家の禄を食む者。――このことに、公然と手は出さぬ方がよかろう」

と、兵庫頭はいい、厳然とした顔色に戻って、そこに佇む六人の大塔衆に命じた。

「おまえら、ようこの柳生衆の修行を後楯してやれい」

「後楯ではござらぬ。修行でもござらぬ」

山国軍兵衛の屍骸から刀を抜きとっていた枕坂獄門が陰々といった。

「もはや、われら自身の敵でござる」

――そのころ、京の鴨川には、四条五条の橋しかかかっていなかった。

長らく鎌倉にあった幕府が足利尊氏になって京に戻ってからもう五十年くらいになるが、その後も南北の争いは絶えず、京の町のたたずまいは、むしろ平安のころより劣っているのではないかと思われる。

それでもこのころようやく名実ともに覇王の相をあきらかにしはじめた将軍義満の治政下、急速にそのにぎわいをとり戻しはじめて、この二つの橋もいずれも数年前に改めて架けられたものだ。それまで洛東と洛中は、時によって簡素というよりはいかにも危うげな木橋がかけられてはまた大水に押し流され、馬借、車借のたぐいは、浅瀬をえらんで渡るよりほかはないありさまであった。

で、数年前に出来たその一つ、五条の橋。長さ二百八十メートル、幅八メートルという当時としては稀有な宏壮なものだ。

河原にもかかるこの橋の下に、それを利用して舞台、桟敷まで作って、田楽の興行があった。晩秋の日がかたむいて、それが打ちあげられて、愉しげに四散してゆく京侍、町人、職人、それに被衣や市女笠をかぶった女の姿も少なくない。

その人々の流れをかきわけて、橋の下の方へ、急ぎ足で柳生又十郎が歩いていった。

「お鏡、こんなところにおったのか」

ふいに袖をつかまえられて、それまで、流れる人々に眼をやっていた市女笠の女はびっくりしたようにふり返った。

「伊賀者の捜索はよいが、おまえはなぜ一人離れて歩こうとする。危ないではないか。――」

と、いいかけて、

「いや、おまえの危いのは、おれの知ったことではないが、おまえまで奪い返されてはこちらの面目にかかわる」

と、例によってにくにくしげにいった。

「それともうぬは、伊賀と通じてわれらに一泡吹かせようと考えておるのではないか」

「いえ、滅相な」

お鏡はあわてて市女笠をふって、

「ただ敵の中に姉たちがいるなら、どうしてあんなことをするのか、とその心がききとうて」

と、いった。

ほんとうにそれだけだ。――そしてその疑問もあるがまた、朋輩を一人討たれて何

やら殺気をすらおびている大塔衆に、もし姉の双羽や環が見つかったならと、それを案じて、それより先に姉たちを見つけようとして、彼女はともすればみなとは別行動をとろうとしていたのであった。

「ほんとうに御心配をおかけして申しわけありません」

「心配などしてはおらん。いま申したように、監視だ」

「又十郎さま」

お鏡はうっとりした眼をした。

「わたしが危ないと思うて――御所まで乗り込んでおいでなされた又十郎さまのお心、お鏡は忘れてはおりませぬ」

「ば、ばかっ、おれの案じたのは、鏡だ。菊水の鏡の方だ！」

又十郎はわめいた。

「それよりも、その御所に鏡の護役として住みながら、まんまと奪われおって――お鏡」

「すみません」

又十郎は歯をむき出した。

「おまえ、妻としておれに抱かれたかろうが。……しかし、その鏡、とり返すまでは絶対におれは抱いてやらんからそう思え。抱いてもらいたければ、おまえがとり返せ」

――すでに人々は散りはて、田楽者たちも去ったらしく、橋の下界隈は、遠い水音をのぞいては静寂に戻った。つるべ落しの秋の日は、橋脚の蔭ではもうすでに紫の闇と変っている。

その橋脚の上。――高い橋桁の下で。

「ほんとににくらしい。――うぬぼれの強い男」

と、ひそやかに女の声が聞えた。

「吹けば倒れそうなほどなよなよした男のくせに、まあ、あんなにいばりくさって」

「でも、どうしてあの柳生の人たちを敵にしなければならないのか、わたしにはわからない。――」

と、つぶやいたのは双羽の声だ。

「鏡はとり返した。あれでもう目的はとげたじゃないの？　そうは思わない？　環。――」

「わたしもそう思っていたけれど、あれを見るとお鏡の方もとり返さずにはいられない気持になって来たわ」

すぐちかくの橋桁の下で――むろんまだ完全な闇とはいえないのに、まったく姿は見えず、しかもしゃがれた声がいった。

「いや、われらの朋輩、腰越蠟念を討ち果たしたやつ。もはや敵でござる」

「それ、忍法の修行、修行。——修行した忍法を、あの柳生又十郎に試みて見なされ。——」

やっとこの声が聞えたらしく、下でぎょっとしたように又十郎とお鏡が頭上をふり仰ぐのが見えた。

「見つかった。やれ！」

菊水党の叱咤に、なおためらっていた双羽と環は、つき飛ばされたように地上に飛び下りた。クルクルと回転しつつ、河原に落ちたときは跫音も軽やかに、とんと両足で立っている。——あきらかに、これまでの修行の効果でなくて何だろう。

柳生又十郎とお鏡は、ぽかんと口をあけたまま、声もなかった。

忍剣第二勝負

「あ、姉上さま！」

と、お鏡がやっとさけんだ。

五条の橋の下から舞い下りたものの、双羽と環も、とっさにいうべき言葉がない。何をいっていいかわからない。それどころか。——

「逢いたかった！」

涙をぽろぽろこぼし、お鏡が駈け寄って来るのに、

「お鏡」

と、二人の姉も涙ぐんだ声をあげてこれを抱き込もうとした。——

「何をしていなさる？」

「とんだ愁嘆場だ。ばかばかしい！」

橋桁の下から声がかかった。双羽がふり仰いだ。

「何をすればいいのです？」

「いまいった通り修行した術を試すのでござる」

「お鏡に？」

「——ふむ、いや、妹御の方はよろしい。まずそこの若僧に」

「試して、どうするのです？」

「左様、ひっとらえて柳生のやつら、中条道場で何をたくらんでおるか、その口からきき出してやろう。いや、それよりきゃつらにとり憑いておる大塔衆とやらについてききたいことがある。なに、そんなことなら、われらにも出来るが、われらがやっては意味がない。——」

といって、暗い橋桁の下で顔見合せたようだ。

「それにしても、何やらひどく間のびのした果し合いじゃな、民部」

「うむ、――ぐずぐずしておるなら、われらが手を下すぞ！」
柳生又十郎は蒼い顔で、橋を見あげて、
「二人、おるの」
と、つぶやいた。
気ははやるが、うすきみわるいのだ。いやそれどころか、兄に対するときなどはばかに威勢がいいが、いわゆる蔭弁慶で男相手の腕力沙汰には理を超えて本能的に足のすくむ又十郎であった。
「姉上さま。菊水の鏡を持ってゆかれたのはあなたたちですか」
お鏡がいった。
「もしそうだったら、返して下さい！」
「いやだといったら、どうするえ？」
と環がくびをかしげた。
「ああ、やっぱりそうだった！　その鏡を公方さまのところへお返ししないと、柳生舟馬さまや又十郎どのがぶじにはすまないのです。鏡をとった疑いが、こちらにかかっているのです。――」
「それなら、いやじゃ」
と、環がいった。

「あれはもともと服部衆のもの、御所に献上するつもりはない。――」
「けれど、わたしに下さったものではありませんか？」
「だから、それを公方さまにさしあげるのが気にいらぬのじゃ。きょうきいた。公方さまは、恐ろしや、上皇さまの御愛妾と御密通なされたとやら、そのような不忠不潔、大破倫の公方さまのところへ、いわれある菊水の鏡をおくなど、きくだけでもけがらわしさに身の毛がよだつ。それならば渡せぬ。それに、せっかくの花嫁とひきでものをおめおめとそんな御所にさし出す婿も婿」
環はだんだん昂揚して来た。
「それより、お鏡、やはり伊賀へ帰りゃ」
「なんなら、又十郎どのもごいっしょに」
と双羽がいうと、
「ば、ばかなっ」
又十郎が、この場合にもあっけにとられるほど大声を張りあげた。
「不倶戴天の服部におれがゆけるか。この大たわけっ」
「その服部の娘を、おまえは嫁にしているではないかえ？」
と、いったのは環だ。又十郎はお鏡を横目で見て、「けっ」というような声をたてた。
「おれはこいつを女房扱いにはしておらぬ。奴隷として使っておるのだ！」

「姉上！」
と、環がさけんだ。
「この男、やはり敵です。敵にしなければなりませぬ。——わたしが、こらしめてやりましょう」
「お待ち」
双羽がすすみ出た。
「わたしが」
「やるかっ」
又十郎は抜刀した。
一瞬、お鏡は眼を見張った。又十郎が空いばりはするものの、その実臆病なたちであることは、もう彼女も見ぬいているのだ。——が、又十郎の眼のひかりを見て、お鏡はまたはっとした。そうだ。このひとは、女に対しては、少なくとも情だけは強いのだ。ふつうの男のように、女に対する遠慮、ためらいというものがちっともない。
「待って！　こんな果し合いはいや！」
すがりつこうとしたお鏡を、又十郎はどうと蹴たおした。
「——ま、なんという男！」

双羽はさけんだ。
やさしい性質の双羽だが、はじめてこの又十郎という若者に怒りをおぼえたらしい。当然である。漂いはじめた夕闇に、しかも橋の下の蔭に立ったその顔が、さっと蒼味をおびて浮かびあがった。
「縄を」
と、彼女はいったきり、しかも懐剣に手をかけるようすもなく、じいっと動かなくなった。
双羽はそれまで自分の忍法を柳生又十郎に試すのにためらいをおぼえていた。環を制して「わたしが」と代ったのは功を競ってのことではなく、環の忍法弓張月による又十郎の醜態を見たくなかった——お鏡にも見せたくなかったからに過ぎない。しかし、その妹のお鏡にかくも邪険な言葉を投げる柳生又十郎にはじめて怒りをおぼえ、胸中に、
「——忍法おぼろ月！」
と、さけんだ。
その昔、允恭天皇の御代、衣通姫という絶世の美女があって、その肉体の美しさ、衣服を通して人の眼を奪ったということだが、その伝説を現実に、おのれの裸身を男に——ふしぎに男の眼だけに浮きあがらせる双羽の忍法おぼろ月。

男の眼だけに見えるらしいことを、いまは双羽もふしぎとは思わない。ふしぎといえば、その忍法そのものが彼女自身にもふしぎである。正確にいえば、ふしぎであった。はじめ菊水党は、きものを着たままの彼女を服部の男たちの中に置いて、くりかえしくりかえしてその裸形の美しさを描写した。そのうちに男たちは「忍法おぼろ月」という双羽の声をきいただけでその裸身をまざまざと見るようになった。しかしこれは忍法とは称するものの、まだ人間の条件反射という原理に叶っている。

が、さらに飛躍して——何の条件もないよその男にも、また彼女自身が言葉として何も発しなくとも、ただ念じただけでその裸身が見えるとなると、これまさしく忍法といえる。その秘密は双羽自身の自己催眠——菊水党の用語によれば自己信心——によるものであろう。つまりはじめは双羽も暗示にかけられたのだが、これを反覆しているうちに、彼女自身一種の念力を放射しはじめ、それがまったくの他人に作用を及ぼし出したものと見える。

「……お！」

又十郎はうめいた。眼がかっとむき出された。見えたらしい。——

それはただ、美しい女体が見えるばかりではない。見えたとたん、その肌をながれる白い脂は見た男の網膜に貼りつき、そのふくいくたる薫りは鼻粘膜にねばりついてしまう。それほどの現実以上のなまなましさなのだ。少くとも数瞬は見た者を忘我の

麻痺状態におとす。——そのはずなのだが。

「やあ！」

又十郎はさけんで、ツツと出た。その声にも動作にも、忘我の麻痺は見られない！

実は彼も怒っていた。その怒りは、不倶戴天の伊賀の女に挑戦されたということよりも——指摘されたらいよいよ猛り立つであろうが、相手がお鏡に伊賀へ帰れといったことに発した。あまり自信もないのに、彼を抜刀させた力はその怒りのせいであった。

そしていま、この相手の裸身を見て——柳生又十郎はたしかに忘我の境におちいった。しかしそれは麻痺状態を呼ばずに彼の心身を発揚状態に投げ込んだ。ふしぎな力が体内に満ちた。

彼は橋下のぶきみな男たちの存在すら忘れた。

「きえーっ」

むしろ歓喜にちかい声をあげて、又十郎は、刀身をふりかぶり、跳躍しようとした。

「危ない！」

たまぎるようなさけびとともに、その刀身に黒い縄がくるくると巻きついた。先刻双羽が「縄を——」と命じた環の縄であった。彼女はこのごろ菊水党から投げ縄を学んでいた。縄は彼女自身の黒髪を編んだものであった。

常人の刀では切れぬはずのその縄が、ぱっと糸のごとく又十郎の刃に斬られている。

しかし、そのすきに双羽は逃れた。背を見せるいとまもなく、うしろざまに二メートルも飛んで逃げて、鴨川の流れに足をとられて水けぶりをあげて倒れた。

又十郎はそれを追って地を蹴った。

「又十郎どのっ」

裂帛のお鏡の声がした。忘我の境にある又十郎の足をも、一瞬釘づけにしたさけびであった。

同時に、その鼻さきを鳥が羽ばたいたような風がかすめて、足もとにグサとつき立ったものがある。一本の矢であった。

「あっ」

横っ飛びに飛ぶと、その足もとにまたべつの矢が天空から降って来て、これまた河原につき刺さった。相ついで、橋桁の下で、ビイイインという美しい恐ろしい音がした。

「なかなかやるではないか、彦兵衛」

「うむ、少々見そこなっておったよ」

暗い空で、しゃがれた声がした。

「きくと見るとは大ちがい、いや見たところも大ちがい。あのへなへな若衆をここまで仕込んだとは――中条兵庫頭、大したものだな」

「いや、大塔衆の仕込みだろう。これはいよいよ以てきゃつらのことを詳しくきかねばならぬ」

「だいいち、ここまで知られた以上は、ぶじに帰すわけにはゆかぬ」

「それに、こやつ、ほんとに女を斬る気でおったぞ。恐ろしいやつだ」

「又十郎っ」

橋の裏の菊水党は吼えた。

「うぬはもはや逃げられぬ。わしたちの姿が見えるか」

「この矢が見えるか」

きっとして見上げている又十郎の眼も、橋の下の暗さに馴れて――というより水の夕明りの照返しで、その橋桁の下にうごめく二つの影を見出すことが出来た。

両人、二メートルばかり離れて、柱に両足巻きつけているらしいが、顔まではわからない。ただ二人が矢をつがえて、その鏃をじっと自分に向けているのはたしかに見えた。

矢をつがえているのに、弓はないらしい。弓のかたちは見えぬ。左腕を彎曲させてななめ前へつき出し、そのこぶしと歯のあいだに弦を張って、その弦に矢をつがえて

いる。——

「見えるか、この千早の破魔矢が」

「こう見えて、七、八間内なら人間を胸から背までつらぬく」

笑いをふくんだ声でそういった。

こんな奇怪な弓術を、むろん又十郎は見たことがない。おそらく世の中のだれも見たものはあるまい。

弓のない弓術。

さきにも書いたが、なぜこのころ中条兵庫頭が剣法なるものを創案したか。それは大合戦というものがなく、奇襲、暗殺、ゲリラ戦の横行する泰平ともいうべき奇妙なこの南北朝時代に、危険はあるのに常時弓や槍など携帯して歩けないからだが、いま見ればこれは矢と弦だけの武器である。これならば、矢は数本腰にたばさんでおればよく、弦はふところにしまっておけばよい。

とはいえ、人が大きな弓を持つのはそれだけの理由があるからで、だいいち弓ならふつう十五、六間——三十数メートルの有効射程距離を持つ。その半ばをこれで飛ばせるとは大したものだが、その豪語がいつわりでない証拠は、いま河原につき刺さった凄じい速度を見てもわかる。ただし、これにはこれなりの容易ならぬ技術を要するだろう。だいいち鏃を固定し、狙いをつけるべき左手が、文字通り弓手としては使われているのだから。

——というようなことを、又十郎が思念としてめぐらしたわけではない。こんな千早の破魔矢の講義などきく以前に、その二人の男の介入を意識したとたん——さあっと彼の全身から血とともに例のふしぎな力が霧のごとく消えてしまった。

「刀を捨てろ」

空の声はいった。

おのれのいかんともすべからざる恐怖にとらえられ、ぽろっと又十郎の手から刀が離れかけたとき——逆に地上から銀蛇のような光が走って、

「うっ」

橋の下からうめき声がして、一人もんどり打って河原に落ちて来た。

「又十郎さま、逃げて！」

さけんだのはお鏡だ。

いま突如として懐剣を投げあげたのは彼女であった。

又十郎だけに注意を奪われていて、まったく虚をつかれただけに、どこに中ったか、落ちたのは傷よりも驚きのためであったということは、その男が落ちると同時に片ひざついて、猛鳥のごとくふりむいた動作でもわかった。

「や、やりおったな！」

その矢はピタリとお鏡に向けられた。

「ま、待て！」

さけんだのは双羽だ。鴨川の水から起きあがった彼女は、なお泳ぐようにこちらに駈け寄りながら、

「お鏡は殺さないで！　その男はわたしにまかせて！」

と、またさけんだ。

彼女にしてみれば、なぜ先刻自分の忍法おぼろ月が通じなかったのかわからない。そんなはずはない。——

水にぬれたしどけない姿のまま、双羽は必死の念力をこめて、

——忍法おぼろ月——

と、胸に誦した。

とたんに、又十郎が躍りあがった。手の弦を離れてお鏡めがけて飛んだ矢を一刀のもとに斬り落し、狼狽しつつ二本目の矢を腰から抜こうとするその菊水党を真っ向から斬り下げた。

のみならず。——

その頭上から電光のごとく落ちて来た第二の矢をもみごとに切り離し、さらに、

「しゃあっ、こやつ！」

狂ったような絶叫とともに、斬られた朋輩の上に飛び下りて来たもう一人の菊水党をも、まるで瓜の曲斬りみたいに二つに胴斬りにしてしまった。

うめき声すらたてさせない凄じさであったが、あと鴨川のほとりに佇んだ四人も、息をひいたきり声がない。——なかんずく、いちばんびっくりしたのはお鏡だ。こんな恐ろしい剣法を、いつ又十郎は体得したのか？

——ま、又十郎さまっ。

呼ぼうとするのだが、のども舌もひきつってしまう。

「お、女の裸が見えた。……」

うなされたように柳生又十郎がいった。

彼の顔がいちばん白痴じみていた。

「すると、頭が茫として、ふしぎな力が湧いた。……」

彼自身にすら、そのわけがわからない。

ただ、お鏡だけが漠といまの又十郎の妖剣の秘密を知った。女だけには強い男、柳生又十郎は、裸の女を幻覚に見ると、男に対してもめちゃくちゃに強くなるのではないか？

京の五条の橋の上

柳生又十郎は夢から醒めたように眼をあげて、服部姉妹を眺めた。

「鏡を返してもらおうか」

と、いった。

双羽も環も、いまの殺戮ぶりにおしひしがれたというより、又十郎の全身にたちこめる妖気に、まるで金縛りになったように立ちすくんでいる。

お鏡もわれに返った。

「姉上さま、お願いです。やはり、鏡を返して下さい」

「ここにはない」

と、双羽がいった。

「では、どこに？」

と、お鏡がきくのに、双羽は黙りこんだ。おそらく彼女たちの隠れ家に置いてあるのだろうが、さすがにそれは口外出来なかったにちがいない。

「どこにある？」

又十郎がいった。

「それをいわねば、斬るぞ」

「斬られてもいえぬ」

環がきっとなって身を立て直した。

「そのような高慢な口をきかれては、それだけでもいえぬ。それどころか、お鏡をとり戻すという心に変りはない。知れば知るほど恐ろしい男、捨ておけば、お鏡もそのうち殺されよう。——お鏡、来や！」

「ゆくつもりか」

又十郎は寄って来た。

「いま、斬るといったではないか」

「き、斬るなら、わたしを斬って！」

お鏡は環の前に立ちふさがった。双羽も環も帯の懐剣に手をかけている——三人姉妹を見まわして、柳生又十郎は眼をぱちくりさせて、

「やっぱり……伊賀はみんな柳生の敵か。お鏡もおれの敵か？」

と、いった。

「ち、ちがいます。けれど、この場合は」

お鏡は夢中の態で、足もとの木ぎれを拾いあげた。

「姉上さま、早く逃げて下さい！」

「おや、おまえ、おれを相手にやる気か。そんなものを拾いあげて」

お鏡はびっくりしたように自分の手にしたものを眺めた。鴨川の流れが打ち寄せたらしい一メートルばかりの棒切れであった。

柳生又十郎はげらげら笑った。

「いつぞやの道場の試合を忘れたか。……お師匠さまからな、わしの剣法修行がものになるまでは潔斎を誓わせられて、夫婦とはいうものの、おまえとは、その、いまだに何じゃが、どうやら又十郎、いま突如として開眼して、晴れてお師匠さまに御報告出来そうだ。だいたいが女には強いおれだから、おまえには気の毒なことになるが、しかしこの際だ、改めて開眼したところをからだに知らせてやる」

いうなり、刀身を鞘に収めた。おや、と思っていると、その刀を鞘ごめに抜きあげて、ぴたっと構えた。

「あっ。……お、お鏡」

双羽は悲鳴をあげた。いまの柳生又十郎の妖剣を思い出したのだ。

「逃げて……」

お鏡はもういちど切ない声をあげると、これまた又十郎にむけて棒きれをかまえた。そういわれても、逃げられるものではない。懐剣に手をかけたものの、あまりにも思いがけない事態に息をのんで眼を見張っている双羽の前で、柳生又十郎とお鏡はじっと相対した。

——と、環が決然として動いた。お鏡のななめうしろに立ったのである。

「二人か。——よしっ」

むしろ蒼白い殺気に両眼を燃えあがらせ、躍りかかろうとした又十郎が、急にうっとうめいて棒立ちになった。その顔が、水明りにもひどい狼狽にひきゆがんだ。

——忍法弓張月！

その刹那、環は必死の念力こめて心にさけんだのであった。

「あふ！」

又十郎はそんな声をもらした。同時に彼は射精していたのだ。とは、知らず。

「えやーっ」

跳躍一番、流れるようにお鏡が飛んだのは、相手の構えが袋の裂けるように破綻を来たしたのを見たとたんの、中条流直伝の反射的動作であった。

まるでくの棒みたいに脳天を打たれ、柳生又十郎は刀を放り出し、うしろへのけぞっていって——ざぶーんと、仰むけに水の中へ倒れた。

「あっ、又十郎さま！」

お鏡も棒を放り出した。そして、狂気のように馳せ寄って、水に下半身ひたるのもかまわず首を抱きあげた。お鏡がそうしてやらなかったら、又十郎は溺死したかも知

れない。

「お鏡、放っておおき！」

環がそういったとき、ふりかえった妹の顔を見て、二人の姉はぎょっとした。それは怒りと哀願に燃える水の花のようであった。

「いって下さい。——今宵は」

と、お鏡はいった。

双羽と環は顔見合わせた。

「……環、ゆきましょう」

と、双羽がいった。それに気丈な環が従ったのは、むろんいまのお鏡の顔に打たれたからだ。

それぞれの思いにふけるがごとく黙々として数歩いってから——ふいに双羽だけ、はたはたと戻って来た。

「お鏡、菊水の鏡はやっぱりそなたに返してあげよう」

と、ささやいた。

「三日月の夜、そう、亥の刻、もういちどこの五条の橋へおいで。こんどは橋の上へ」

お鏡はそれよりも、又十郎の反応のないのに心を奪われているようであった。彼は白く薄目をあけたまま、気絶していた。生きている証拠には、そのひたいにみるみる

瘤がふくれあがって来た。

三日月の夜。五条の橋の上でまた決闘が行なわれた。その夜、お鏡はそっと中条家を忍び出た。又十郎はそれを知らない。——彼は双羽のささやきをきかなかった。悲しげなお鏡の呼び声に、気がついたら河原の上に寝させられていて、お鏡がとりすがっていたのだ。

「又十郎さま、相すみませぬ。……」

そのときは、もう服部姉妹は消えていた。あやまるお鏡に、しかし又十郎がキョトンとして、いつものような叱罵を加えなかったのは、意外にもお鏡の剣法に文字通り一撃をくらってショックを受けたためか、瘤のためか——或いは下半身に甚だしい虚脱を感じていたためか——そのいずれでもあろう。

——ともあれ、知らない又十郎に改めて知らせる必要はない。先夜の姉たちへの又十郎の敵愾心ぶりを思い出し、お鏡がひとりで鏡を受け取りにゆくことにしたのは当然である。ただ、柳生兄弟の眼を盗んで中条家から夜の京へ出てゆくお鏡の姿を見とがめて、

「はて？」

と、くびをひねった者がある。大塔衆のうちの枕坂獄門という男であった。そもそ

も彼らは、先夜瘤を作った柳生又十郎とお鏡が帰って来て、それについて何らはかばかしい説明をしないのを怪しんでいた。彼は音もなくそれを追い出した。

一方、双羽と環の方は。

「板曳民部と切畑彦兵衛が、柳生又十郎に討たれた。――」

二人から報告を受けた菊水党と柳生七兵衛はもとよりびっくりした。とくに七兵衛の方は仰天ともいうべき顔になった。

「民部が？　彦兵衛が？　やわかそこらの侍、しかもたった一人の男に討たれるはずがない！」

というのが菊水党のうめきで、

「それが又十郎だったと？　あの柔弱者が菊水党を二人も討ったと？　けっ」

というのが七兵衛のさけびであった。

「まあ、聞こう、どうして？」

この色めき立った問いに、双羽と環はこもごも答えた。柳生又十郎が板曳民部と切畑彦兵衛の千早の破魔矢をいかにものともせずに破ったか、事実そのままに語っても信じてはくれなかったろうが、さらに、

「それで、あなたさまの方は？」

そのあと、ただ黙って相手を見送ったのか、という菊水党の質問に、まさか又十郎

を討てば討てるチャンスもあったのに討たなかったとはいえず、

「え、え、あまりに恐ろしゅうて」

と、答えるしかなかったが、敏感な菊水党は何やら不審なものを感じたらしい。じいっと妙な眼を二人に集めていたが、やおら、

「ともあれ、民部と彦兵衛は討たれた。それが事実であることだけはたしかじゃ」

と、阿波座監物がいった。

「すでに腰越蠟念と合わせて犠牲者三人。――これはもう修行というようなものではないな」

「よしっ、かく相成っては、もはやわれらだけでもその柳生又十郎とやらを」

と、馬潟八十次が凄絶な顔色になってうめき出すと、

「ちょっと、わしがやって見たい」

と、七兵衛がいった。

「あの弟がそのようなことをしてのけたとは信じがたいが、もしまことであればいよいよ以て相手をしてみたい」

「中条道場の――大塔衆の仕込みのゆえと見るほかはない」

「それなればこそ。――剣ならばわしにもいささか自信がある」

「お待ちなされ。まさか中条道場に斬り込むわけにもゆくまい。さきに討たれた腰越

蠟念の二の舞いを踏んではならぬ」

ようやく冷静さをとり戻したらしいのは八葉寺隼人だ。

「しばらくようすを見よう、向うがどの程度にこちらを知っておるかよくわからぬし、その心事も測りがたい。あちらの出方を見て、それに応じて策を立てよう」

そして、またいった。

「七兵衛どの、こちらの指示を待つことなく、勝手に動かれてはなりませぬぞ。中条道場にあばれ込むなどと。――」

「まさか、そんな真似もせぬが、しかし、な、何を又十郎ごとき。――」

――柳生七兵衛がばかに意気込んだのは、無念残念というより、まったく弟のしわざについての疑念だけであった。ただ好奇心だけからであった。

そもそも彼が、菊水党と行を共にしているのが――自分でもよくその意味がわからない。はじめは月ヶ瀬の花婿花嫁試合に敗れたからという口実で伊賀に来た。その実、彼は環に惚れていたのだ。それはべつに自分でも否定しようとは思わないが、そのうち環と相対すると、例の忍法修行のせいもあって、いかに頑張っても早漏現象を起すようになり、そこで意地となり、さらに――このごろでは、意地もついに及ばすというコンプレックスにとりつかれ、環を見ると、この凄絶な風貌を持つ男が、主人に睨みつけられた犬みたいな頼りなげな眼つきを伏せてしまうほどだ。

それを承知で、

「七兵衛どの、肩をもんで」とか、

「そこ掻いて、七兵衛どの」

とか、環は平気でこき使う。面白がっているような、からかっているような――どこか残酷なひかりがその眼に仄見えるが、七兵衛はどうすることも出来ない。それを意識すると、かえって奴隷的な反応を示さずにはいられないようになり、はては環に対してマゾヒスチックな快感をすらおぼえるようになった。――

その環が、

「七兵衛どの、今夜亥の刻、五条の橋へいって下され」

と、命じたのは三日目の夕のことだ。

彼らは京の蹴上げの下、今熊野の裏の阿弥衆の部落に住んでいた。これも世阿弥の紹介である。阿弥衆というのは一遍上人にはじまる時宗から発した踊念仏を源流とする大道芸人の集団であった。

それはともかく、双羽がお鏡に菊水の鏡を三日目に返すといったのは、虫が知らせて念のために余裕をとったのだが、果せるかな、というより、気にかけた以上に、菊水党は何やら姉妹に疑念をおぼえたらしく、あれ以来、そのうちのだれかが二人を眺めている。

その隙を見て、環が七兵衛に依頼したのだ。彼女としては、お鏡への愛情はともかく鏡を返すことは必ずしも賛成ではなかったが、菊水党の疑いぶりを見て、かえって彼らに対する反撥をおぼえたらしい。

「菊水の鏡を返しに——お鏡がそこへ受取りに来るはずです——」

「——へ？」

「理由をいっているひまがありません。ほら、猪丸が来たではありませんか。みなにかくれて、そっとね、お願い。——」

で、柳生七兵衛はその夜、菊水の鏡を小わきにかかえ、ふらりと五条の橋へ出かけた。

秋というより、もう冬に近い三日月の夜であった。冴え切ってかんと冷たい音をたてそうな月が、五条の橋にかかっている。

亥の刻といえば、いまの夜の十時ごろ。もう橋のあたりに人影はない。

そこでお鏡と七兵衛は逢った。——七兵衛の方が先に来ていた。

「お鏡どのか」

呼ばれて、お鏡はぎょっとして立ちすくんだ。

「環から頼まれて、鏡は持って来たが。——又十郎は来なんだのか」

「七兵衛さま。——」

やっとお鏡も、待っていたのが夫の兄であったことに気がついた。おそるおそる近よりながら、

「もしっ。……姉はどうして来なかったのですか。どこにいるのですか？」

「それよりも、わしの方から先にききたいことがある」

と、七兵衛はいったが、お鏡が数歩離れてぴたりと立ちどまり、背後をふりかえったのを見て、

「何を警戒しておる。……わしが環の使いだということの証明に、まずはじめに鏡を渡しておこう」

と、白布につつんだ小脇の鏡をさし出した。お鏡はそれを受取った。そのとき、橋の向うから——お鏡の背後から、タタタタ、と軽い音をたてて馳せ寄って来た者がある。

「菊水党、待て」

と、さけんで、暗い月明りをすかし、

「や、これは柳生七兵衛——」

こちらの名も顔ももう知っていた。いうまでもなく大塔衆の枕坂獄門だ。

どっちもやや失望の眼を見交わしていたが、たちまち双方の眼がぎらぎらとひかり出し、

「やるかっ」

まずさけんだのは柳生七兵衛の方であった。環以外には勇猛無比の七兵衛で、高らかな鞘鳴りとともに抜刀したが——その光流をほとばしらせたのは、枕坂獄門の方が早かった。

「いま斬れば斬れた」

と、獄門はいった。ぴたっとかまえた刃の向うで、三日月のせいばかりでなく、どこやら獄門首に似た土気色の顔がにやっと笑った。

「しかし、少し遊んでやろう。お鏡どの、中条流極意をよう見ておられよ。これからまずこの男の残った一方の眼、片方の耳、次に反対の耳と、一つずつ斬っていって見せる。そのあいだに、こっちのききたいことを口を割らせる。——」

忍剣第三勝負

「ま、待って！」

お鏡は橋の上を駈け寄ろうとした。

「な、なぜそんなことをするのですか。七兵衛さまは、鏡を持って来て下さったのではありませんか」

「こっちの鏡でござる。返してあたりまえ」

と、枕坂獄門は答える。

「それより、こちらの山国軍兵衛を討ったやつ」

「軍兵衛どのを斬ったのは七兵衛さまではない。それはそなたも見ていたはず——」

「殺したのは菊水党——柳生七兵衛はその一味でござる」

こういいながら、枕坂獄門は左手を刀の柄から離して、お鏡の近づくのをおしとどめるような手つきをする。何とも人をくった動作だが、

「……」

ひくいうめき声をあげただけで、七兵衛は斬り込めない。相手の剣尖が、まだ距離はあるのに、彼の隻眼につき刺さるような感じがする。

寒月といっていい月の下に、七兵衛の背にじわんと汗がにじみ出して来た。剣には自信のある彼が——去年京に遊びに来たとき、わざわざ中条道場を訪ねたほどの彼が——この土気色をした、鼻ばかりばかに大きい男に、こんな子供扱いをされて、金縛りになったようだ。

実は彼の我流の刀法などとはまったく次元のちがう剣の体得者だということを、彼は知らなかったのだ。——いや、いま、はじめて思い知らされたのであった。そのことを、この枕坂獄門からも手に手をとって剣を教えられたことのあるお鏡は知ってい

た。彼女はさけんだ。

「七兵衛さまは、わたしの姉の夫です」

「何をいまさら——こやつ、敵じゃ。鏡の件といい、先夜中条家へ忍び込んで来たやつのことといい、何ともいぶかしい。いぶかしいどころか、こちらに対して凶気がある。こやつらの目的、いったい何かきき出さねばならぬ」

獄門の眼が白くひかった。左手が柄に戻った。

「そのためには、まず眼をつぶして——それ、ゆくぞっ」

青眼の刀をかろくはねあげるようにして斬り込んだのだが、まるで宙天からふり下ろしたような速度であった。

「あっ」

七兵衛は飛びのいた。

獄門の刀は彼の顔面をかすめて、さっと腹を撫でた。帯が切れた。いや、腹の肉そのものにも剃刀をあてたような傷がついたかも知れない。

飛びのいた七兵衛のあとに、袴がズルズルと裂け落ちた。——

「うふ！」

きゅっと唇をつりあげて、獄門は笑った。

「女に見せられた姿ではないな」

七兵衛はまさに帯取り裸といった姿になっている。実に下帯さえも切れ落ちたのである。——が、彼にはそれをかえりみる余裕はない。間髪を入れず、二度目の剣が襲いかかっている。

「こんどはどうじゃ！」

「……うおっ」

苦鳴にちかい声を発して、七兵衛は受けた。——からくも受けた。おそらく、それでもこれは七兵衛なればこそであったろう。

「ようやった。——と、ほめてやりたいが」

と、相手の眼が笑った。

「こちらがおまえの眼だけを斬るつもりであったればこそだ」

笑った眼が、獣じみた残忍さにめらっと燃えたようだ。その視線を、お鏡の方へ動かした。

「お鏡どの——よう見ておられよ——これから、この刃を離して、離したとたんにもういちど斬る。こんどはあちらも防げぬはずだ」

相手の刀身がふいに麻幹みたいに軽くなるのを七兵衛は感じた。ト、ト、ト、とよろめきを出そうとするのを必死に抑えて、おのれの刃を相手のそれにくいこませる。相撲でいえば、頭をつけた、というところだ。——と、こんどは獄門は舌打ちすると、

たちまちその刀身が千貫の鉄棒みたいに重くなった。引かば押せ、押さば押せ、七兵衛は歯ぎしりして相手の刀の重圧に耐えた。

「……やるな！」

枕坂獄門には、七兵衛の善戦が意外であったらしい。その土気色の顔が、月光にどす黒く変った。ひるまなら朱色に染まって見えたであろう。

知らず知らず、二本の刀身は寒月に向って、一本のように突っ立っている。

死物狂いの鍔ぜり合いに、すぐそばの欄干のところまでお鏡が走って来て、何かさけんでいるのが聞えたが、何をさけんでいるのかわからず、その声も鼓膜に遠くなった。気力つき果て、まさに失神直前の七兵衛の眼に。——

その眼のはしに、何か見えた。それが何であるかもこれまた知らず、そのとき七兵衛は股間に異様な感覚をおぼえた。この場合、

——しまった！

と、彼は狼狽していた。何たることだ、彼はこのときおのれの股間のものもまた刃のごとく立ち、しかもそこから溢れかかるものを感じたのであった。

——ばか！

彼はこの途方もない異端児に激怒をおぼえた。おれはいま死にかかっているというのに、何だ。——が、そのとたん、

「うわっ」

白いものが、下からビューッと噴きあがって来て、決闘の両者、同時にさけんでいた。七兵衛のみならず枕坂獄門も。

これは驚いたろう、突如として灼熱した液体があごにしぶき、顔面をぬらしたのだから。しかも、その予期のあった七兵衛よりも、当然、獄門の驚きの方が甚だしかった。そもそも鼻だけはばかに大きい鼻を持っている男であったから、もろにその穴に入ったかも知れない。

鼻づらを下から叩かれたようにのけぞって飛びのく相手めがけて、柳生七兵衛はつんのめっている。首を前に折り、両手をなめ前方にのばして——その刀身のさきに、西瓜みたいに両断された枕坂獄門の首があった。この刀は、むろん例の金剛丸ではない。それは金欄の袋に入れて、ちゃんと隠れ家においてある。

……なお、数分間、七兵衛は放心状態であった。やがて、刀をだらんと下げ、気にかかるものの方へ眼をやった。——いま、必死の鍔ぜり合いのとき、眼のはしに入ったものへ。

そこにお鏡が立っていた。一糸まとわぬ姿で、これも放心状態で。

柳生七兵衛はたった一つの眼を大きくひらいた。

「……ど、どうしたのじゃ？　その姿は？」

と、きいた。

お鏡はわれに返り、羞恥のあまりなよなよとうずくまってしまった。

きかれても、お鏡にはよく説明が出来ない。——彼女は、突如くりひろげられた柳生七兵衛と枕坂獄門の決闘に進退きわまった。七兵衛は「夫」の兄である。獄門は自分に剣を教えてくれた大塔衆の一人である。

いずれに味方するわけにもゆかず、さればとて傍観するわけにもゆかず——惑乱の極、彼女の頭をかすめたのは、先日又十郎が二人の菊水党を斃したとき、

「女の裸が見えた。……すると、ふしぎな力が湧いた。……」

云々と口走ったことであった。まだよくはわからないけれど、又十郎は裸の女を見ると別人みたいに強くなるらしい。

それを、兄の七兵衛にも適用する気になったのだ。

惑乱していればこそ出た決断であり、行動であった。この論理はむちゃだ。あれは又十郎独特の現象で、他人には通用しない。——というのが本来のはずなのだが、それが通用した。いうまでもなくこれまた七兵衛独特の例の忍法「伊賀の水月」がはからずも発現したのだ。

いずれも独特の現象で、その由来するところは全然べつの筋なのだが、結果に於ては同一、でもないが、とにかく七兵衛が勝った。そんなことは知るよしもなく、やっぱり兄弟だ、とお鏡は思い、また——男というものは、女の裸を見るとみんな強くなるものなのか知らという新発見ないし新疑惑にとらえられた。

その姿はどうしたのだ、と七兵衛はきいただけで、まだその疑問は解けないが、いま自分に起きた現象が何であったかはもう知っている。しかし、環の忍法とは無関係にほかの女性の裸身を見ただけでこんなことになったのははじめてであった。

——この娘が、環の妹なので伊賀の水月が「連動」したのか？

——それとも、裸の女を見さえすれば、おれはこうなるのか。そんなことになったとすると、これはことだぞ。

いささか恐怖をおぼえつつ、なお茫然と眼をやっている七兵衛に、

「あっちむいて、七兵衛さま！」

と、お鏡がいった。

七兵衛はやっと気づいて、あわてて反対側をむいた。自分の醜態にはじめて意識が戻ったのである。帯も袴も切り落されて、まる裸より惨憺たる姿だ。腹の皮膚も一直線に斬られ、髪の毛ほどの傷だが、しかし血はタラタラと流れおちている。改めていまの敵の恐ろしさを思い出したが——しかし、敵にこう斬られなかったら、おのれの水月も無効であった、と思う。これはあらかじめ袴に何か細工をしなければならぬな。

「いや、いろいろと勉強になった」
と、彼がつぶやいたとき、
「ああ、わたしはどういって帰ったらいいのかしら？」
と、お鏡が身をもんだ。
「帰る？」
七兵衛はまたふりむいた。お鏡はいそいで、もう着物をつけて、帯をしめている。両腕に鏡を抱いて、しかし恐ろしげに枕坂獄門の拓榴（ざくろ）みたいな顔をのぞきこんで、そして欄干（らんかん）にもたれかかった。
「鏡はいただいたけれど――このひとを死なせてしまって」
「帰らなくてもよいではないか」
七兵衛はいそいで袴をつけながらいった。切れた帯を結んでぐるぐるまきつける。
「そうだ、帰る必要はない。お鏡どの、おれといっしょにゆこう」
「敵のところへ？」
「敵？　だれが敵？　こっちにはそなたの二人の姉がおるではないか。伊賀と柳生の悪縁はともあれ、おれでさえ、いま服部家の方にいる。そなたがそっちにいる道理がわからぬ」
「七兵衛さま、どうしてあなたはそちらにいらっしゃるのです？」

「――さ、それがどうしてこういうことになったのか、どうして京までのこのこついて来て、菊水党のあごのままに使われておるのか、考えてみるとよくわからん。考えれば考えるほどわからん」
ふと、片眼をひからせて、さけんだ。
「いや、わからぬではない。こっちはな、お鏡どの――そなただから打明けるが、いま南朝にある三種の神器、これを狙うやつがあるそうな。それを護るための修行をしておる。おれが服部方についておるのはそのため――詳しくは、姉からきけ。さあゆこう」
「七兵衛さま、わたしたちも神器を護る修行のために京に来たのです」
「なに？」
七兵衛は眼をむいた。
「それなら、目的は、同じではないか。――」
それから、笑い出した。
「何かを奪（と）るのに相争うというならわかるが、護るのに相争うとはきいたことがない。はじめから、おぬしら――兄や弟を敵にするということが、何やらけったいな感じがしていたが――それで天の理のつじつまが合う。いよいよ以て争うことはない。――さ、来やれ」

「七兵衛さまこそ、中条家へおいでになって下さいまし！」
「あ！」
七兵衛は虚をつかれた表情になった。
「そ、それはだめだ。味方と一応相談してみなくては。――」
「やはり、敵味方ですか」
「い、いや、環とだ。しかし、あれは、味方か喃？　それより、そなたの来た方が簡単ではないか」
「わたしも。――」
お鏡はいった。
「相談しなければならない人があります。でも場所だけは教えて下さい！　姉たちのいるところを」
「今熊野の裏、阿弥衆の村。――」

――柳生七兵衛は肩いからせ颯爽と大股に蹴上げの下の阿弥衆部落に帰って来た。片手に布でくるんだ西瓜みたいなものをぶら下げて。
むろん規則的にではないが、まんなかにちょっとした広場があり、それを中心に放射状に路地がいくつか出て、その両側を小さな家が埋めている、といった形態の部落だ。掘立小屋といっていいその住居は、むろん貧しいせいであるが、また、ここに暮す人々が永住の意志なく、本来漂泊を生活の基本とする大道芸人たちだからであった。ひるまなら、これで不似合なばかりにきらびやかな衣裳が軒にかかっていたり、笛や鼓や鉦の音も聞えるはずである。それでも、あちこちで赤ん坊の泣く声がする。この夜ふけに、何やら物を煮る匂いもする。それから夫婦者の痴語はむろん聞える。
その中を柳生七兵衛は通っていって――路地のどんづまりの、これはふつうの小屋の三軒分くらいはありそうな、それでも荒普請にはちがいないが、柱などは一人前の太さのものを使った家に入ろうとして、ふと立ちどまった。
「七兵衛どのか」
暗闇からぼやっと立ちあがって来た者がある。菊水党の一人、猪丸塔五郎であった。
「待っておった」
「何だ？」
「ま、お入りなさい」
七兵衛が家に入ると、塔五郎ものそりとあとにつづいた。入って、七兵衛ははっとした。
向うに双羽、環がうなだれて坐り、そのまわりを、阿波座監物、馬潟八十次、八葉寺隼人がとりかこむようにして坐っている。

みんな、こちらを見た。監物がいった。
「どこへいっておいでなされた」
「五条の橋よ」
「ひょっとしたら、中条道場にでも？　とはじめあわてたが、それならばこの二人がこうまで平静でいられるわけはないと思い――さておまえさまのゆくさきをきいたのじゃが、どういうわけか、どうしても申されぬ」
あごを、二人の娘の方にしゃくった。無礼なそぶりだが、不穏なことも不穏で――何やらぞっとするような雰囲気であった。
「何をしに？」
「見ろ」
七兵衛は布を解いて、中のものをごろり投げ出した。二つに斬り割られた土左衛門みたいな首であった。
「大塔衆だ」
「や？」
「おれがやったのだ」
七兵衛は得意満面でそうくり返した。
「おぬしら実地修行実地修行というが、なるほどいい修行になったよ。おれも大いに悟るところがあった」

八葉寺隼人がその首からあまり昂奮しない眼をあげて、
「菊水の鏡は？」
と、きいた。
「ここにあった菊水の鏡がない。だれが何のために持っていったか、御姉妹は何も申されぬが、おまえさまのほかにはない。鏡を、どうなされた？」
七兵衛は恬然（てんぜん）とそらうそぶいた。
「あちらに返してやったわさ」
だんだん腹をたてて来た顔だ。
「あれを御所からとったのはおれだ。おれだが、少々あと味が悪かった。だから返してやったのよ」
四人の菊水党はじっと七兵衛を見つめていた。
それから、おたがいに顔見合わせた。――うすきみの悪い凶念が、眼に見えぬ炎となってゆらっと立ちのぼったようであった。

忍奴

「われらに無断で、なぜ左様なことをなされた」
柳生七兵衛から五条の橋のいきさつを一応きいたのち、阿波座監物がしずかにいった。
「なぜ、おぬしたちにことわる必要があるのか」
七兵衛は猛然といった。
「菊水の鏡はもともと服部家のものを柳生へ嫁にいった娘にやったものだ。それを公方からとり返してもと通りに戻してやったのが、何が悪い。おぬしたちとは関係ない。いや、そもそも、それがおぬしたちの望みではなかったのか」
「あちらに対して、まだそのような甘い考えをお持ちなのがこまる」
「甘い？　大塔衆一匹かくのごとく首にして持ち帰って来たではないか」
「いや、柳生と。——お鏡どのは、もはや柳生方の女人でござれば。いま承われば、お鏡どのははっきりとそのお心のようではないか」
「おれも柳生の男だ！」
七兵衛は吼えた。猪丸塔五郎がじろっとにらんだ。

「では、柳生方へお帰りなされ」
「う。……」
「だいたい、あなたがこちらにおられるのが妙だ」
「おまえの指図は受けぬ」
「それよりあなたは柳生方に帰られ、お鏡どのをこちらにひきとれば事態が明快になるものを。——もっとも、中条の方へ帰られれば、大塔衆を殺したあなたの首も危ないが」
「阿波座、猪丸」
と、七兵衛がいった。
「事態明快ではないのはおぬしらの方だ。そもそもおぬしらが伊賀へ来たのも、われらを京へつれて来たのも、どうにも腑に落ちかねるところがある。——」
「どこが腑に落ちぬと申される。われらが伊賀へいったのは、南朝の神器を奪わんとする者があるとき、これを護る同志をつのらんがため。われらが京へ来たのはその術を実地に修行するため。——」
「と、きいたときはその気になったが、しかし」
と、七兵衛は首をかしげた。
菊水党の目的は一応理が通っており、かつそのための行動中にすでに菊水党に三人

もの犠牲者を出しているところを見ても、彼らが決して冗談や遊びでやっているのではないことはわかる。それどころか、彼らの真剣であることは伊賀在住のころからひしひしと感得され、そのひたむきなところは、彼らの技術とともにだんだん七兵衛の心をも打っていたのだが、それにもかかわらず——彼らはともかく、自分たちの立場についてのあいまいさは払拭し得ないものがある。

七兵衛は知らないが、彼もまた「敵」側の兄舟馬と同様の懐疑にとらえられているのであった。

「しかし、それにしても」

彼はふたたび腹をたてて来た。

「いちいちおぬしらに縛られ、われらのしたことを、ことわりなしにやったと高飛車にきめつけられては間尺に合わない」

懐疑は懐疑として、七兵衛のいまいいたいのはそれであった。先刻ちらっと見た——双羽と環をひきすえて、菊水党のめんめんが訊問しているような光景が、彼の頭をかっと燃えたたせている。

「おれはもう御免だ。おぬしらとは別れて、服部の姉妹といっしょに伊賀に帰りたい」

「そうはならぬ」

八葉寺隼人がいった。いよいよ高飛車にきめつける調子だ。

「もっとも、そろそろ伊賀へ帰るのは賛成だが、われらも帰る」

「なんだと?」

「そもそも京へ来た目的は、実地修行もさることながら、京の敵——幕府の動き、中条家に巣くう大塔衆の真意などを探ることにもあった。その目的はほぼ達した。だいたい、わかって来たようじゃ。いま、七兵衛どのは事態明快ならずと申されたが、それが明決になる日は近いでござろう。その日にそなえて、伊賀へ帰り、改めて、やらねばならぬことがある」

「な、何を?」

「むろん、服部郷をあげて、神器防衛の忍法軍たらしめること。実地修行の成果はたしかにあったと思われるし、とくに御姉妹が陣頭に立たれれば、服部の郷士たち、ふるって訓練に参加するにちがいない。もともと、そういうつもりでわれら伊賀へ推参したのでござれば。——ただし」

隼人のいいかけたことを、馬潟八十次がひきとった。

「伊賀へ帰る前に、ここでやっておかねばならぬことがあるようじゃ」

「なんだ」

「このたびのごとく、われらに無断で敵と交渉されては大事を誤まるもととなる。大事のためには、このことに関するかぎりわれらに絶対服従していただかねば相成らぬ」

馬潟八十次は、阿波座監物にあごをしゃくった。
「阿波座、この際、釘を刺しておいた方がよいな」
「うむ。――」
監物はうなずいた。
「では、やるか」
本能的に危険を感じて、柳生七兵衛は左に置いた大刀をとった。
「うぬらに絶対服従など、おれはいやだといったらどうするかっ」

今夜かかることになろうとは予想もしていなかったが、この連中とつながり合っていると、やがてとり返しのつかない悲劇が――自分のみならず、環たちにも起こりそうな予感は以前から抱いている。この際、こちらの主体性を保持しておくためにも、彼らに対してこちらこそ釘を刺しておく必要がある、と七兵衛がこう決心したのには、先刻恐るべき大塔衆の一人をみごとに仕留めて来たという自信と昂揚がたしかにあった。
「一つ、やって見るか、環――おれが合図したら、忍法弓張月を唱えろ」
大塔衆を斃した手法の再現をこころみるつもりであった。むろん、監物を殺す意志はない。峰打ちで痛撃を与えるつもりだ。

が――阿波座監物は動かなかった。
「立て、抜け」
すでに立った七兵衛はさけんだ。ズタズタになって、からくも押えている袴の腰のあたりに左手をかけている。監物と抜き合わせ、鍔ぜり合いになったとたんにその袴をずり落すつもりだ。
「監物！」
阿波座監物はしかし、環のななめ前に坐ったまま、眼をとじていた。
「動かねば、据物斬りにするぞ」
事実、七兵衛は、監物をそのままに峰打ちを加えようとした。どうせ、あとの三人も傍観はしていまいし。――
「待って！」
環の方が立ちあがろうとした。とたんに彼女はまた動かなくなった。環のみならず、双羽まで。
「あう！」
七兵衛が、奇声を発した。
彼は刀からも帯からも両手を離し、股間を押え、肘をつき、まるくなった。しかもなお快美とも苦痛ともつかぬうめきをあげつつ転がりまわる。それを見つつ、双羽と

環は眼を張り裂けるようにひらいたまま、そこに金縛りになったままであった。

いったい何が起ったのか。

双羽と環はそこに坐っている監物の裸形を見たのだ。ちゃんと着物を着ているのに、一瞬にそれが透けて、ごつごつと骨張った裸を見た。——が、彼女たちの眼を吸いつけたのはそのすべてではない。股間から、二人の方へ、にゅーっとかまくびをもたげている蛇のような肉棒であった。あっと息をひいた刹那、視界はまわりから暗くなった。そして、そのものだけが浮かびあがった。その肉色のかまくびのさきに、一滴、しずくのようなものがひかり出した。と見えた瞬間、それは人間の眼——一つ眼になった。しかも、阿波座監物は眼をとじているのに、監物の眼に見えて来たのである。

念誦するだけで、相手の眼には裸体を見せる忍法おぼろ月。

実はそれを——もっと直接的な忍法弓張月を、七兵衛は環に期待したのだが、それより前に監物はみずから二人の女に使った。忍法の教師であるからこれはあり得ることとして、さらに恐るべきかたちで。彼の男根の先端にやどった液体は何であったか、それさえ二人にはまざまざと見え、さらに彼自身の眼に見えて来たが、おそらくそれは催眠術に於ける光球の役目を果したのであろう、二人は文字通り蛇に魅入られた蛙のように動けなくなってしまった。

さらに、阿波座監物は相ついで第二の忍法を発動した。こんどは彼女らの「おぼろ月」をである。

みずから念力こめて心に誦するとき発現するおぼろ月、これを第三者たる監物が誦して発現させたのは——彼もまたその後忍法力を深めたものであろう。或いはそれも、すでに下地のあるこの服部姉妹を素材とすればこそ可能であったことかも知れない。

ともあれ、七兵衛はそれを見た。——おのれの期する以前に。

「あう。……あうっ」

怪声を発して彼はのた打ちまわる。

みずから欲しないのにこの忍法「伊賀の水月」を強いられてのた打ちまわらせられたのは伊賀に於ける修行時代からだが、しかしあのころはそれでも教える方に手心があった。

しかし、この夜にその手心がない。

七兵衛の眼には——彼もまた眼をとじているのに、いちど見たものは、二輪の花弁の残像となって、その網膜に灼きつけられた。花弁——それは、美しい海底のいそぎんちゃくのごとく濡れて息づいていた。

もはや何がほとばしるのか、触れもしないのに吸う吸血鬼に襲われたかのごとくもがき苦しむ七兵衛を、うす笑いしてあとの三人の菊水党は眺めている。今、のみならず、双羽と環も、これは彼の姿も眼に入らないかのように、阿波座監物の「おぼろ月」

に眼を吸われている。

「弟子はついに師に及ばす。――」

眼をとじたまま、監物はいった。

「かくも未熟にして、われらに抵抗しようなどと思い上るは笑止千万――ということが、おわかりになればよろし」

しかし、柳生七兵衛は片眼を白くむいて失神していた。

「待て、まだ眼をあけるな、監物」

と、八葉寺隼人がいった。

「これより伊賀に立ち戻り、服部郷を改めて手なずけるには、その三人――七兵衛はともあれ、姉妹の方は一応立てておいた方が賢明じゃと思うておったが、しかし今なおわれらにかくれて敵方の者と交渉するような心が残っておってはまことに不安。この際、その二人の女人も、われらに絶対服従の縄で縛っておいた方が安全ではないかと思うがどうじゃ」

「どの忍法でござる」

「うむ、忍法など手間暇かける必要はない。男が女を縛る法はただ一つ、それ以外にない」

隼人は、両側の猿丸塔五郎、馬潟八十次を見まわして、にやっと笑った。陰鬱悽愴

の雰囲気はあるが、一方ではふしぎに真摯厳粛の気をこれまで保持していた菊水党の人間にしては、珍らしく濫りがましい笑顔であった。

「四人で、この二人を犯してはいかが？」

「いや、それは」

と、監物がくびをふりかけた。

「われら懸命の聖なる目的が汚れよう」

「そのいのちをかけた聖なる目的のためにじゃ」

と、隼人はいった。

「神器防衛のためには、どうあっても服部郷士軍の力を借りねばならぬ。そのためにはどうあってもその姉妹をわれらの意志のもとにつないでおかねばならぬ。――そのためには――」

彼は笑いを消して、双羽と環の方を見た。聞いているのか、いないのか、二人は眼をいっぱい見ひらいたまま、なお動かない。完全に催眠術にかけられた状態にあるのだ。

「それに、いま監物の蛇眼の術中にあるあいだに犯せば――犯されたという記憶なくして、しかも犯されたと同じ服従性が女に生じる」

「お、それはその通りじゃが」

「どうじゃ？」

もういちど見まわされて、両側の菊水党も、姉妹の姿を見つめて舌なめずりし、そして阿波座監物も依然眼をとじたまま——うなずいた。

「では」

ぬうと立ちあがり、姉妹の方へ歩み出した八葉寺隼人の顔は、厳粛さと肉欲の混合した、奇怪な恐るべきものであった。こんな表情をするものは人間にはない。それはその気を起した場合の動物の顔であった。

夜の都大路を三人の男女が走っていた。柳生舟馬、又十郎、お鏡であった。

菊水の鏡を抱いて中条家に戻ったお鏡から、その鏡を手に入れたいきさつを聞き、さらに、——姉や七兵衛さまは今熊野社の裏、阿弥衆の村にいる。

という報告を受けて、舟馬と又十郎はしばらく顔を見合せていたが、

「ゆこう」

決然とさきに立ちあがったのは、ふだん落着いている舟馬の方であった。

「七兵衛が鏡を持って来たのは、どうやら服部の姉から命じられたらしいが、どうも気にかかる。いそぎ、見に参ろう」

「例の菊水党もいっしょにおるのでござろうか」

又十郎はやや狼狽の表情になった。舟馬がせきたてるようにしていう。

「だからこそ気にかかるというのじゃ」

「大塔衆を呼び集めた方がよくはないか、兄上」

「ばか。——七兵衛は大塔衆の枕坂獄門をも斬ったのだぞ。大塔衆を駈け向わせれば、七兵衛のいのちがない」

「しかし、おれも菊水党を斬った。二人までも」

「だからおまえがいってくれれば大丈夫だ」

「斬り込むのか」

「いや、何とぞして七兵衛や服部姉妹をひそかに呼び出して、まず話をききたい。——」

珍らしく舟馬は焦燥の態をあらわにしていた。彼の頭に浮かんでいるのが双羽姉らしいとお鏡は直感したが、彼女とて思いは同じだ。

「ゆきましょう。わたしがここへ帰って来たのも、お二人をお呼びするためです」

と、お鏡はいった。

「又十郎さま、姉上たちをあの化物から救い出して下さいまし！」

「けっ」

「あなたのお手並で！」

そういわれると、又十郎も尻込みは出来ない。いちど生じた剣の自信はその後無惨に消滅したが、お鏡にすがりつかれてまた、

――「いや、おれはやはり強い男かも知れないぞ」

と思い返し、舟馬につづいて、押っ取り刀で中条家を飛び出した。かくて、三人は深夜の大路を東へひた走る。――

五条の橋を渡って、鴨川沿いに南へ駈ける。そのとき、舟馬がふとふりむいて、

「しまった」

と、つぶやいた。

いま渡った五条の橋を夜鴉のように躍って来る五つの影が三日月を背に見えた。

「大塔衆が追って来た」

中条家を出るとき、見つかったものに相違ない。又十郎もその影が何者であるかをすぐに知った。

「よいではないか、兄上、待ち受けて、いっしょにゆこう」

「いや、いま全面的にぶつかっては、何もかもとり返しのつかないぶちこわしになる」

そういいながらも、舟馬は歩みをゆるめ、腕組みした。

「ちょっと思案させてくれい」

大命逃るべからず

五人の大塔衆が追いついて来たとき、それまでやや足をゆるめていた柳生舟馬と又十郎は、また猛然と走り出そうとしたところであった。

「待たれい」

と、大塔衆の一人牛袋兵斎がさけんだ。

「どこへゆかれる」

「おお、おぬしらか」

舟馬はふりむいて、息はずませて、

「菊水党の隠れ家がわかったのだ！」

「なに」

大塔衆は顔見合わせた。

彼らも連日菊水党の所在は探している。がここ数日、それと行を共にしている柳生兄弟、とりわけお鏡のようすにいぶかしいところがあり、とくに今夜、同志の枕坂獄門がなんの連絡もなく姿を消してしまって、くびをかしげているところへ、先刻、あわてて三人が中条家を駈け出していったので、さてはとばかり追って来たものであった。

実は先日来の又十郎やお鏡の挙動――また先刻たしかにお鏡を混えて中条家を出ていったようなのに、いま見ると柳生兄弟しかいないので、それらのことについてきき

たいことがあったのだが、この舟馬の言葉はそんな曰く因縁をすべて彼らの頭から消し飛ばしてしまった。

「き、きゃつらがどこに？」

「今熊野神社裏の阿弥衆の村なそうな」

「おお、阿弥衆の村に――な、なぜそのようなこと、われらに告げず、勝手にゆかれようとするか」

「こっちが知ったということを向うも知った。それゆえ、向うが行方をくらますのを怖れて、急いだのじゃ。そのため、おぬしらに告げるいとまなく。――」

輪ノ内彦四郎がいった。

「どういうなりゆきでそれがわかったのでござる？」

「お鏡とこの又十郎と――枕坂獄門が、五条の橋の上で、偶然、あちらの菊水党とゆき合い、敵の二人を斬ったが、こちらの獄門もまた討たれた。――」

「えっ、獄門が。――」

舟馬の説明は二つの決闘をひとまとめにし、かつ恐ろしく省略しているが、ともあれこの事実は大塔衆を驚かせた。しばらく、彼らはあえぐばかりでそれ以上の問いを忘れたほどである。

「人の目につかれてはならぬゆえ、屍骸は鴨川に流したということじゃが、いま渡った五条の橋にはまだ血の痕が残っておるはず」

息せき切ってそういいながら、舟馬は走りつづける。

「あとの敵はとり逃がしたが、しかしそのときゃつらが阿弥衆の村におることを知った。――」

「ま、まだきかねばならぬことがあるが」

蜀剽鬼がこれまたあえぎながらいったが、これは疾走のためではなく、驚きのためであろう。

「それはともかく、御兄弟、ただ二人だけでそこに駈け向って、果して自信がおありか」

「ある。――この又十郎でさえ、菊水党を二人斬ったというのじゃから」

「ほ、又十郎どのが？」

「御教授のおかげじゃ。ましてや、このわしに出来ぬことがあろうか」

舟馬は声を張っていった。

「おぬしらに丹誠こめて伝授願った中条流剣法、是非とも実地に験したい。――おぬしらに連絡もせず、押っ取り刀で駈け出したわけは、そのつもりもあってのことだ。わかってくれ！」

五人の大塔衆は顔見合わせた。

ややあって、網戸天杖がうめいた。

「よろしかろう、おやりなされい！」

「おおっ……今熊野の樟の木が見えて来た！」

ゆくての夜空をふり仰いで、笄玄之丞がさけんだ。

その昔、後白河法皇が平清盛に命じて造営せしめられたという今熊野神社には、そのとき熊野から移して来たという樟の大木がある。樹高二十メートルに近い。すでに彼らは敵菊水党の素性も探っている。樟の木——楠。菊水党がその木の影のさすところに住んでいたということを、いままで気がつかなかったのがふしぎなようであった。

十数分後、彼らは真夜中の阿弥衆の部落に乗り込んでいた。

はじめ、部落のまんなかの人けのない広場に立ち、そこから放射線状に出る路地の一つの奥のやや大きな小屋の方へ、すぐに二人が駈け出したのは、むろんめざすところがそこだと知っていたからではない。その小屋から流れ出す一種異様の妖気を本能的に二人が感じとったからだ。

少し離れて、五人の大塔衆がひたひたと追ってゆく。

表の戸は細目にひらいていた。

そこからのぞきこんで。——

「……やっ？」

舟馬と又十郎は部落じゅうにひびきわたるような声をあげた。

……まだ菊水党の阿波座監物の男根を以てする催眠術にかかって無抵抗状態になっている双羽と環を、近づいた八葉寺隼人と猪丸塔五郎がしずかに横たえる。それから、襟や裾をかきひらいて、じいっとその姿に眺め入る。

忍法おぼろ月を介し、この二人の女人の裸身は肉眼でじかに見るより精細に知っているはずなのだが、そうはいってもやはり肉眼で見るのはまた格別と見える。しかも——診察室を出た産婦人科医と同じで——これまで彼らの弟子、或いは彼らの目的の協力者と見ていた二人の女を、いまや犯そうとする意志を以て注視したとき、その眼の悦楽を可能なかぎり愉しみつくそうとするかに見える。

そして隼人と塔五郎は、やっと二人に毛だらけの獣じみた腕を、改めてさしのばした。——舟馬と又十郎が見たのは、そのあわやという光景であった。

「……も、も、双羽！」

舟馬がさけんだ。この男とは思われない、ひっ裂けるような絶叫であった。

さすがに愕然として、四人の菊水党は顔をふりむける。——同時に、双羽、環も悪夢から醒めたように、まばたき一つして眼を大きくひらいたが、菊水党はこれにとり合うゆとりはない。が、さればとてそれほどあわてた風もなく、

「……ほ？」

「どうして知ったものか？」

と、顔見合わせてうなずいただけである。

「よし」

馬潟八十次が立ちあがるのに、

「待て、気をつけろ。大塔衆がおるやも知れぬぞ」

と、阿波座監物が注意した。

このとき、外からのぞいていた柳生兄弟に怪事が起った。というのは菊水党のだれも、何もしないのに、二人は突如異様なうめき声を発し、どどど、と、うしろへのけぞっていったからである。

――さて、柳生七兵衛と服部姉妹の危難を見て、はじめてわれを忘れた風で躍り込んで来ようとしたのは柳生舟馬の方で、あやうくこれを引きとめたのは弟の又十郎であった。ふだん、こういう場合に於ける二人の反応とは逆だ。

又十郎はふとい兄の腰にしがみつき、

「……！」

何やら必死に耳もとにささやいた。と同時に、二人、もつれ合って、四、五メートルも路地をのけぞっていったのである。四人の菊水党はあっけにとられた顔で、戸口

まで追っていって、外を見た。柳生兄弟はそこの地上に転がって、何やら奇怪なうめきをあげて、まるくなってもがいていた。

「……いかん！」

「案の定じゃ！」

その向うから、さけび交す声がした。そして、夜鴉みたいに五つの影が馳せ寄って来た。

いうまでもなく、これは大塔衆であった。まだ事態ははっきりしないが、ともかくも柳生兄弟に、本人たちが望むように実地修行をさせるがよいとうしろからようすを偵察していたのだが、果せるかな、両人が、ちょっとのぞいただけでまるで見えないつむじ風に吹き飛ばされたように転がり出て来たので、さてこそ、と色めきたち、われを忘れて馳せ寄って来たものであった。

「おおっ、大塔衆じゃ！」

と、兄弟を追って出た菊水党はさけんだ。

四人――阿波座監物、馬潟八十次、八葉寺隼人、猪丸塔五郎がひとかたまりになって、しかしさすがにそれ以上、とみには前へ出ようとはしない。

これに対して、柳生兄弟を躍り越えて、半円をえがいた五人の大塔衆――牛袋兵斎、輪ノ内彦四郎、網戸天杖、笄玄之丞、蜀剽鬼も刀の柄に手をかけたまま、そこに釘づ

けになってしまった。

前者は楠木の流れをくむ忍者群。

後者は大塔の宮の心をつぐ剣士群。

本来なら同じ志を抱く友軍であるはずだが、それぞれの祖から五十有余年を経て、南北それぞれの内部にも紛乱した敵味方があるように、これまたいかなる次第でか、不倶戴天の仇敵として、ここに全軍相対峙してしまった。

かかることになった古い由来は知らず、両者が京へ来てからでも、大塔衆は山国軍兵衛、枕坂獄門の二人を討たれ、菊水党は腰越蠟念、板曳民部、切畑彦兵衛の三人を失っている。

どうやらお互いに探りつつ、偵察しつつ、両者が全力をあげてぶつかり合うのを怖れていたふしもあるが、ここではからずもめんと向い合うようになってしまっては、もうあとには引けない。それどころか、それぞれ討たれた味方のことを思い出したとたん、頭に血も逆流したらしく——いや、沈みかかった三日月を背に、どちらも顔面蒼白になって、おたがいににらみ合った。が、やがて、じりっじりっと菊水党がすすみ出し、その妖気に打たれたかのごとく大塔衆が後退しはじめ——ついに辻の広場に出た。

「やれっ」

たたきつけるように牛袋兵斎がさけぶと同時に、大塔衆はいっせいに刀を抜きつらねた。

「おう！」

これに対して刀を抜いた菊水党は、猪丸塔五郎ただ一人だ。そして彼らは横にスルスルと展開した。

それからここで何が起ったか。かたむいた三日月に雲がかかり、四界はみるみる朦朧たる暗霧につつまれたようになったが、たとえ月があっても、柳生兄弟はもとより——この騒ぎにいっせいに小屋小屋から飛び出した阿弥衆の男女も、何が何やら弁別しかねたに相違ない。

闇の中ではあったが、刃のひらめくのは見えた。ただし、刀身のかみ合う音は聞えなかった。矢音も聞えず、ただ人々がきいたのは、この争闘の中に、「ううふっ」という——死のさけびではなく、快美の極みとしか聞えない異様なうなり声だけであった。

数分か——十数分か。

「兵斎おるか。——」

ちがう路地の一つのかなたから、ひくい、しかしこの争闘をつらぬくような声が流れて来た。

「おるなら、退け。……あとの大塔衆も引き揚げい！」

その声をだれのものときいたか、やがて闇中の黒旋風がはたとしずまり、その方へ数人の跫音（あしおと）が転がるように駈けていった。

「――中条先生！」

と、牛袋兵斎はそこに立つ影を見てさけんだ。

また三日月が出て、苦り切った中条兵庫頭の顔がちらと見えたが、兵庫頭はそのままスタスタと早足に阿弥衆の部落を出てゆく。

「思わざることに相成り申した！」

さしもの兵斎も肩で息をしている。頭から墨をかぶったようなのは血であろうか。

「いま、衝突すべきときではないに――おまえたちらしうもない」

ふきげんな兵庫頭の声がした。いかにして今夜のことを知ったのか、彼があとを追って制止に来たことは疑いない。

「だれが討たれた」

「――や、剽鬼と彦四郎がおらぬ！」

笄玄之丞がさけび、とって返そうとした。走りながら、兵庫頭がいった。

「よせ、もう遅い」

「それに……柳生兄弟の姿も見えませぬ」

「ほんのいま、彼らはあちらの路地を駈け去っていった。お鏡も――それから、どうやら服部姉妹、それに柳生七兵衛も一団となって」

「――えっ？」

「どうやら、われらが柳生を味方にしたてようとしたもくろみは鑑定（めがね）ちがいであったかも知れぬ」

兵庫頭の声には悔いの響きがあった。

「伊賀と仇敵関係にあるのもこちらには好都合と思ったが、例の祝言以来、柳生と伊賀、敵愾心（てきがいしん）を失ってしまったらしい。弟の七兵衛は向う側におるし、舟馬もまた服部の双羽とやらにみれんを断ちかねておる。――あれほど鍛えたにもかかわらず。――」

「すりゃ、きゃつら、みな手に手をとって――いったいどこへ？」

「柳生へではないか」

兵庫頭の声はしかしここで秋霜のひびきをおびた。

「柳生を味方にしようと努めて来たのは誤まりであったかも知れぬが、しかしいまに至ってこれを手離すのは、さらに誤まりを生むもととなる。秘事の一端を知られておるし、また菊水党の方が伊賀を離さぬ以上、万一、柳生兄弟をふくめてあちら側の人間となったら一大事じゃ。追え、捕えろ」

「――は？　そしてそのあとは？」
「もういちど京へつれ戻すのだ。刀にかけても。――そして、わしが改めて、われらの大命のいかに重大なるかをまことをこめて説いてつかわす」
「それで、きき ませなんだら？」
中条兵庫頭は陰鬱な、が、身ぶるいするような声でいった。
「成敗するよりほかはあるまい喃……」
――同じころ、もとの小屋に帰った菊水党は、そこに坐っている人間に大きく眼を見ひらいていた。
彼らが大塔衆の引揚げるのを見送ったのは敵を呼ぶ声と同時に、小屋の中からもだれやらこちらを呼ぶ声があって、しかもそれに聞きおぼえがあったからだ。
小屋のまんなかに坐っているのは、世阿弥であった。
「虫が知らせてやって来た」
と、世阿弥はいった。
「馬潟はどうした」
馬潟八十次はいない、ということにはじめて気がついたが、それよりも――世阿弥がここに来た、ということよりも、服部姉妹と柳生七兵衛の姿が消えている、ということが三人の菊水党の心を奪った。

「例の伊賀のおんな衆を御存知ではないか？」
と、阿波座監物はしゃがれ声できいた。
「逃げたのではないか」
「逃げた？　どこへ？」
「伊賀であろう」
唖然とした菊水党に、世阿弥は森厳な声でいった。
「逃がしてはならぬ。われらの秘事を知られておるし、また万一、あれらを柳生兄弟にひきつけられたら一大事じゃ。わしの見るところ、柳生にひきつけられる怖れは充分ある。追って、捕えよう。――いやわしが改めてわれらの大命のいかに重大なるかをまことを以って説いて、どうあっても従わせなければならぬ」

逢うは別れの

山科を越えて宇治に出、奈良街道に入る。
醍醐の山々の枯れ林、宇治川の冷たいさざなみ、いずれも蕭条たる洛南初冬の風物だが、六人にはまるで春のようであった。
六人とは――いうまでもなく、柳生三兄弟と服部三姉妹。

彼ら六人がぜんぶこう一つになったのは、月ヶ瀬の桃香野以来のことだ。いや、まさに手に手をとってという光景は、生まれてはじめてといっていい。

柳生舟馬は双羽と。

柳生七兵衛は環と。

柳生又十郎はお鏡と。

あとの二組はこれまでもいっしょに暮していたわけだが、しかし手に手をとって走るなどということは、まだやったことがない。もとよりあとに大塔衆ないし菊水党が追って来るだろうという予想があればこそだ。

阿弥衆の村で、大塔衆と菊水党をぶつけ合ったのはむろん柳生舟馬の兵法であった。舟馬と又十郎が、わざと菊水党の妖しの術にしてやられたように見せかけたのは、うしろの大塔衆を誘い出す狂言に過ぎない。

兵法図にあたって、両群が死物狂いに闇中の格闘をやっているあいだに、それまで舟馬又十郎と離れてかくれていたお鏡が小屋に入りこみ、二人の姉と七兵衛をつれ出したのであった。

菊水党阿波座監物の忍法にかかり、見えない網にとらえられ、見えない蜘蛛に精血を吸いとられるようにのたうちまわり、あわや人間のぬけがらと化そうとしていた柳生七兵衛は、最初兄の舟馬に背負われていたほどだが、ここまで来るあいだにさすがに体力を回復したものの、まだ顔色が蒼い。

「け、けしからぬやつだ」

と、彼はまだ怒っている。

「われらを、きゃつらの奴隷にしようとはかるとは。――」

菊水党のことだ。

「きゃつらの目的、一応もっともと思い、京まで同行して来たが、兄にきけば――おれが気を失っているあいだに、双羽どのと環を犯そうとしたというではないか。おれが環と夫婦であることはむろんきゃつら百も承知のはず――にもかかわらず、左様な大それた破倫をなそうとして恥じぬとは――何が神器護持の大儀」

「奴隷――といえば、おれたちも大塔衆の奴隷、いわば剣奴ともいうべき立場であった」

と、又十郎も勃然としていう。

「こちらに至っては、いつぞや兄上も申されたように、目的もよくわからん」

「その神器を護るということじゃがの」

と、舟馬がいった。

「はじめ、その目的をきいたときは感奮したが、護るといってもとくにわれわれが引き出されて護るべき事態は何もない。それで、まるで雲をつかむような心持でいたの

だが——たとえ、そのような事態が生じたとしても、さていまつらつら考えるに、三種の神器とは、われらがこうまでして護るべきものかの？」

「だから、おれが、三種の神器とはそもそも何だといったのでござる」

と、又十郎がいった。

依然、手に手をとって走りながらだ。木津川に沿うて南へ下り、さらに川に従って東へ駈ける。

「われらの護るべきものは——」

と、舟馬はふりかえり、あえぐ双羽を見ると、

「や、双羽どの、負ぶってやろうか」

と、手を出した。

「いえ、大丈夫です」

「遠慮はいらぬぞ。わしはそなたの——」

と、いいかけて、このずんぐりむっくりした男は、彼らしくもなく赤い顔をした。花婿、といいかけて、そうではないことに気がついたのだ。

しかし、桃香野で例のまぐわい勝負をやりかけて突如ひき裂かれることになったものの、彼の心情としては双羽の花婿のつもりでいる。この逃避行の途中、いちばん恍惚たる表情をしていたのは、これまで双羽と離されていた彼であったかも知れない。

前夜、阿弥衆の村で双羽を犯そうとする菊水党を見て、又十郎よりも逆上して飛び込もうとしたのは、軍師たる彼の方で、

「……兄上、あなたが今度の兵法の編み出し手ではありませぬか？」

と、あわてて又十郎が耳にささやいてひきとめたほどである。

そして、双羽もまた、あえぎつつ、うっとりとしていた。お鏡がそれ以上にうれしげなのは当然として、おかしいことに、それまで七兵衛をあごで使っていた環までが、いかにもかよわげになよなよと手をひかれていたのは、姉と妹につりこまれたものに相違ない。

そしてまた、あごで使われていた七兵衛も、いつもはけんつくを食わせていた又十郎も、必死の顔でそれぞれ環とお鏡の手をひいている。

途中、勧修寺や醍醐寺や平等院などの寺々、また元弘の変で名高い旧跡などを、心をとめて見るいとまはない。いわんや、喋々喃々と語り合うゆとりもない。追跡のおそれを感ずればこそだが、しかしそのおそれのために、自然と三組、手をとり合って逃れて来たのだから、危機感はかえって三組の愛のためにその媒剤となったといえる。

「ともあれ、きゃつら、魔物じゃ」

と、舟馬がつぶやいた。

「いままでのことを思い出すと、魔に憑かれてふらふらと、さまよっていたような気

がする。何としても、きゃつらから離脱せねばならぬ」
「お、そういえば」
と、七兵衛は思い出したようにいった。
「菊水党のめんめんは、服部郷をあげて忍法軍たらしめるべき日が到来したとか申した。――」
「なに？　してみると、大塔衆もわれらを核として柳生谷を彼らの剣奴たらしめるつもりであろうな。きっと、柳生に来るぞ。――」
「そして菊水党は服部郷に来る」
そのとき、又十郎がさけんだ。
「兄上、笠置でござるぞ」
木津川の谷のかなたに、けわしい岩々をあらわにして聳える山影は、いうまでもなくその昔、後醍醐天皇がのがれられた行在所として名高いが、また山城国の南端にもあたる。ここから川を渡って南へ下れば柳生だ。そうさけんで、又十郎は、
――どうする？
と、いいたげに、服部姉妹の方を見た。彼女たちもいっしょに柳生にゆくつもりか、という眼色であった。
「いや、柳生は通らず、今山までいって、そこから月ヶ瀬へ参ろう」

と、舟馬がいった。今山は木津川沿いにもう少し東へいった村だ。
「ほ、月ヶ瀬へいって何をする？」
「この前のつづきをやる」
「へっ？」
「どうやら、魔物たちはわれわれを陣頭に立て、きゃつらの妖しげな目的のために柳生と服部のすべてをあげて戦わせるつもりらしい。そんな役割はごめんだ。これは断じて防がねばならぬ。そのためには、われらがここでまず合体せねばならぬ。――」
「おお」
「で、月ヶ瀬の桃香野でわれら三組がもういちど祝言をあげるのじゃ」
いいながら舟馬は、顔の赤みを濃くしたり薄くしたりして、三人の姉妹の方をかえりみたが、三人は恍惚として、その眼さえきらきらとかがやき出したようであった。
春とはちがう初冬の月ヶ瀬。
白紅の雲かとも見えた幾万株かの梅林はいま葉も落ちつくして静まりかえり、その一画桃香野もただ枯野だ。
そこに六人は、三人ずつ相対して坐った。
「鏡はある」

と、舟馬はお鏡のそばに置いてある菊水の鏡を見ていった。

「首飾りもある」

こんどは環の頸の方に眼をやって、

「しかし、こんどはそんなものは使うまい」

といった。この春の——鏡を花嫁のあえぎで曇らせるとか、交合後に首飾りを持ちあげるとかいった抱腹絶倒すべき勝負のことをさしているのだ。

「夫婦となる男と女のいずれが強いか、などいうばかげた勝負はするに及ばぬ。夫は男として、花嫁は女として、ただあるがままの男と女として愛し合えばよい。——この前とは逆に、まず長兄と長女たるわしと双羽どのが手本を見せる。よいか、双羽どの！」

彼は立ちあがり、羽織をぬぎ、袴をとり、それを枯草の上にしいた。双頬をくれないの霞でつつんで、双羽はそのかりのしとねの上に身を横たえた。

舟馬の気迫に圧倒されたのか、それとも舟馬のいうように伊賀と柳生協同防衛のための自分たちの合体という論理を、彼女も切実に感じたのか。——はじめての交合に、双羽は実に素直であった。時いたってひらく花のように。

環とお鏡は、それまで彼女たちをつつんでいた羞恥の靄の中から、驚きの眼を見ひらいた。

姉の双羽の、それからの反応ぶりにである。むろん、恥じらい、しかもあくまで素直でありながら、どこか本来のぼうとけぶったような感じを失わず——見ていて、妹二人にも、ああ美しい、とわが姉ながら天女の姿のように恍惚としていたが、そのうちに双羽は次第にあえぎ、声すら発し、そして嵐にゆらぐ蔦のように狂乱の相すら見せはじめたからであった。

それは舟馬の勇壮活潑な動作に、肉体的に不可抗な反応を示しはじめたものとも見えたが、しかしやはり精神的に相手の歓喜に巻きつつまれてしまったからに相違ない。

七兵衛も又十郎も瞠若たるものがあった。暗闇の牛、とさえ評したこの兄を、二人はこのときほど偉大だと思ったことはない。いや動作はやはり鈍重なところがあるが、それだけに臼と杵のごとく重厚で力強く、いかにも威風堂々の感があった。数分後、彼はぬうと身を起し、

「七兵衛、おまえの番じゃ」

と、いった。

ぐったりとなって横たわったままの双羽を、放心したように散大した眼で眺めていた七兵衛は、われに返ると、

「あ、いや、おれは……」

と、狼狽した眼で環を見やった。

「おお、おまえたちはもはや夫婦であったな。しかし、これは二人同士の祝言というだけではない。柳生と伊賀合体の儀式だ。儀式だと思って、とくにここで行え」

七兵衛は隻眼をとじた。

「それが、兄貴、おれはまだなのだ」

「えっ。――」

「この前、ここで環に負けたろう。あれ以来、どうしてもおれはだめなのだ」

「環どのがこわいのか」

「べつにこわくはない。それどころか、婿となって勇んで伊賀へいったくらいなのじゃが、いかんせん――それに環は、あれから妙な術を体得しての。欲すれば、男にたちどころに精水を放出せしめるという。――」

「たわけっ」

と、舟馬は大喝した。

「夫婦のあいだに術などは存在せぬ」

「いや、何も存在せぬあのときから、おれは負けたのだ」

「負けるの勝つのと――そのような邪念は捨てよ！　そもそも、きけばおまえは大塔衆の枕坂獄門をみごと仕留めたというではないか。おまえはどう思っているか知らないが、あれは実に大した使い手であったぞ。それを斬ったおまえだ。自信を持て！」

勝負の邪念を捨てよといったくせに、勝負のことを持ち出す。いささか矛盾しているが、兄のいわんとするところは、七兵衛にもよくわかった。いや、その気迫に打たれた。

「いままでいっしょに暮しておって、何をしておったのじゃ。兄が見ていてつかわす。やれ！」

「心得たりっ」

七兵衛は決死の形相ですすみ出た。

環は双羽に代って、すでに枯野に身を横たえている。しかも、この前は、うす笑いして七兵衛を見あげていたのだが、きょうはまじめな――というより、心配げな表情をして、

「た、環」

「はい。――」

こんな可憐な声がこの女の唇からもれるのを、いままで七兵衛はきいたことがない。

「忍法弓張月無用であるぞ！」

返事するよう、彼女は袖で顔を覆った。七兵衛は、恐怖の戦慄か武者ぶるいか、骨まで鳴らしながら、その上に馬乗りになった。と、見るや。

「あうっ！」

と、うめいて、のけぞった。
「いかんか。まただめか、七兵衛。――」
舟馬がのびあがって、さけぶ。大変な騒ぎだ。
「いや、だ、大丈夫でござる！」
七兵衛は身体を立て直した。
「みごと仕留めることは仕留めておる。御覧なされ、兄上！」
そして、そのまま環の上半身を抱きあげ、頬ずりし、狂ったように呵々大笑した。
「ついにやったぞ、環、名実ともに、おれはおまえの花婿であるぞ！」
抱きしめられ、ゆさぶられて、環は別人のようにまるで波の中の藻の花のようにゆれているばかりであった。
七兵衛がいった。
「これ、ついでにその首飾りをおれにかけて見ろ。――」
「何を急にいばり出しておるのだ。まるで鴉の行水みたいなくせに」
と、又十郎が立ちあがった。
しかし平生の嘲笑的な口吻とちがって、みずからはやり立つのを禁じ得ぬ態であった。
「おれもまた、大塔衆らの禁制によって、不犯の誓約を立てさせられた。しかしもはや大塔衆とは縁が切れた。――こ、来いっ、お鏡！」
「ま、待て、又十郎」
舟馬が注意した。
「おまえは女にだけは強すぎる。武士たるものは、もう少しものの哀れを知れ。女人に対しては、わしのように、やさしく、柔らかく。――」
「あまり、やさしくも柔らかでもござらなんだぞ」
又十郎はしかし、環に代って枯野に横たわったお鏡を見下ろして、
「いやお鏡――ほんとうは、おれはおまえが好きであった」
と、いった。お鏡に対してはじめて投げた、やさしい柔らかい声であった。ちょっと作り声の気味もあるが、しかしその表情は大まじめであった。
「し、知っておりました又十郎どの」
「なに？」
「それでも、お鏡はうれしうございます。……」
声が蚊の鳴くようにかすかになって、お鏡はがくりと首を横にして眼をとじた。
「あ、これ、もう――また失神しては話にならぬではないか」
又十郎は飛びかかった。
これは、時間も猛烈さも舟馬の倍はあった。舟馬はあきれ返り、かつ又十郎の女に

対する残忍さがまた出たのではないかと、途中で制止しかけたほどである。しかしお鏡――は涙を流していたが、その涙はあきらかに苦痛のためではなかった。

いま、桃香野に枯木はない。枯野もない。六人の網膜には紅白の雲がたなびきわたり、肌は満天満地春雨にぬれつくしたようであった。

「おお。――」

と、舟馬が蕩然とつぶやいた。その口からは、涎さえしたたった。

「三々九度の盃せなんだ代り、このかための儀式、三々九度くり返そうではないか。――」

そのとき、双羽とお鏡が東の方をふり返り、

「あっ。……」

と、さけんだ。

葉のない梅林の中から幾つかの影がこちらに歩いて来る。――見て、柳生兄弟もいままでの熱いからだに、さっと冷風が吹いたような感じがした。

南北

近づいて来たのは五人の男であった。

そのうち三人は山伏姿だ。――それを、阿波座監物、八葉寺隼人、猪丸塔五郎――と、その名まで舟馬や又十郎が知っているわけではないが、あきらかに菊水党だとは直感した。

しかし、京の蹴上げで大塔衆とかけ合わせ、ふり捨てて来たはずの菊水党が、もうここへ現われて、しかもこちらが月ヶ瀬にいることまで、ちゃんと承知のごとくやって来るとは。

舟馬と又十郎はもとより、あと四人の眼にも、一瞬驚きとともに殺気のようなものが燃え立ったが、彼らすべての足を釘づけにしたのは、菊水党と同行しているもう二人の人物であった。

世阿弥と服部半阿弥。

後者はいうまでもなく、三姉妹の祖父である。……それが菊水党と同行しているところを見ると、どうやら菊水党は、こちらよりさらに先回りして、服部郷へいって来たらしい。

「お祖父さまっ」

と、やっとお鏡が声をあげた。

が、春、夏、秋を経てしばらくぶりに逢うなつかしい祖父なのに、なお彼女たちの足をひきとめるものが半阿弥にあった。

思いは同じであろうに、この祖父は笑顔も見せず、むしろ沈痛厳粛な眼色を見せて、シトシトとこちらに歩いて来る。シトシト——というより、ガクガクとして、もとから弱りかげんであった足が、いっそうだめになったようだ。

十メートルばかり離れているのに、彼らは立ちどまった。

「双羽、——環それからお鏡、来う」

と、服部半阿弥は呼んで、さし招いた。

そのうしろに、世阿弥、菊水党が佇んでいるゆえのみならず、半阿弥のしゃがれ声のひびきにただならぬものを感じ、彼女たちはいよいよひるんだが、一息おいて彼女たちをばたばたと駈け出させたのも、やはり祖父のその語韻のせいであった。

三人の姉妹は駈け寄った。

「お久しぶりでございます。お祖父さま！」

「これから伊賀へ帰ろうとしていたところです」

「でも、どうしてここへ？」

口々に問いかけるのに、半阿弥は答えず、ちらっと柳生兄弟の方に眼をやって、

「まず、来い。——」

と、背を返した。

それにつれて世阿弥、菊水党も、もと来た道を歩き出す。まったく柳生三兄弟を無

視したような動作だが、

しかし菊水党が全力あげて警戒していることは背に感じられた。

三姉妹も、彼らのあとについてゆかざるを得ない。——しかし彼女たちは、うしろ髪をひかれるようにふりむいた。

「お祖父さま」

環が呼ぶ。

「七兵衛どのは服部のお人ですが」

七兵衛も、あとの舟馬と又十郎も、あっけにとられたような、不安にたえ切れぬような表情で、遠くこちらを見送っていた。

「そして、わたしは」

「おまえたちだけに話したいことがある」

半阿弥はいった。葉は落ちつくしていても、梅林の中の道をいくどか回ると、柳生三兄弟の姿は見えなくなった。

「このまま、服部郷へ帰るのですか」

たまりかねたように、双羽がきいた。

「それなら柳生の人のことについて、お祖父さまにきいていただきたいことがあるのですが」

「柳生のことは捨ておけ」
半阿弥はいった。
彼女たちが、何かさけび出そうとしたとき、
「ここらでよかろう」
と、世阿弥が口を出した。冷たい日ざしの中に氷のようなしぶきをあげる五月川のほとり、と或る平たい岩のそばであった。
「半阿弥老、わたしから一応話しておこう」
その岩の上に、世阿弥は、老人と三姉妹をいざなった。道の方には三人の菊水党が立って、あきらかに近づく者を警戒している。

――まるで頬にふれたたわわな花を一陣の風に持ってゆかれたようだといおうか。一口たべた甘美な果物をふいにもぎとられたようだといおうか。茫然として見送った柳生三兄弟は、茫然と顔を見合わせた。
「どうしたのじゃ、あれは？」
と、又十郎がいう。
「それに、いまの男たちの中の、十徳に頭巾の男は何者じゃ？」
舟馬もきく。彼はまだ世阿弥のことをよく知らないのだ。――七兵衛が答えた。

「あれは公方お抱えの能楽師世阿弥という男。――」
「なに、公方お抱えの？」
「伊賀の出生、もとは服部一族じゃという」
「しからば菊水党とやらは――足利家ひいては北朝方と結びついているのか」
「それが、そうではないのじゃ、そのことについては、いま話しておるひまがない。それよりも――」
「おお、お鏡までが菊水党にさらわれた。あれを救わねば！」
又十郎はわれに返り、躍りあがった。自動的に他動的に、彼とお鏡のあいだを隔てていた壁はほんのいま溶け去った。名実ともに、お鏡は彼の妻なのであった。
そしてまたこの思いは、舟馬と双羽、七兵衛と環も同様だ。消えていった彼女たちのあとを追おうとして、ふいに彼らはぎょっと足を地にくいこませた。
風みたいな――しかし、世にこれほど彼らの耳をとらえるものはない声が流れて来たのだ。
「おおおい――舟馬、七兵衛、又十郎――」
「――やっ、お祖母さまではないか！」
舟馬がさけんだ。三人ともふり返った。
いかにも祖母の、柳生庄にいるはずの石刀自の声だ。それはうしろの梅林の方から

流れて来る。三人は混乱した眼を見交したが、たちまちその方へ駈け出していった。

葉のない梅林の細道の向うから、五つの人影がやって来た。

「おおい、舟馬よう、七兵衛よう、又十郎よう」

杖をつき、二つに折れんばかりのその小さな影をたしかに祖母と見つつ、柳生兄弟はその場にまた立ちすくんだ。祖母をとり囲んで歩いて来るあと四つの影がだれかということを知って。

中条兵庫頭。

それに三人の大塔衆――牛袋兵斎、網戸天杖（あみどてんじょう）、笄（こうがい）玄之丞。

先刻菊水党の出現に胆をつぶしたが、してみればあの大塔衆もまた、どうやら先回りして柳生へゆき、祖母を擁してここへやって来たらしい。

しかし、いったい何のために？

祖母がへなへなと地上にへたりこむのが見えた。柳生兄弟はころがるようにその方へ走り出した。

「お祖母さま、どうしてここへ？」

「おう、舟、七、又」

石刀自は息を切らせながら、しかしただならぬかがやきを持つ眼をあげていった。

「柳生衆に大命が下ったわやい」

「えっ、大命？」

「さい喃（のう）。……大塔の宮のお曾孫姫さまから。それで、呼びに来た」

「わしが申そう」

しずかに中条兵庫頭がすすみ出た。

「あ、先生。――」

と、いったきり、それ以上の挨拶は柳生兄弟の口から出ない。

じっとこちらを見まもっている三人の大塔衆が、果して京に於ける舟馬たちの夷（い）を以て夷を制する兵法をどこまで知っているかわからないが、何にしても舟馬と又十郎は、あのときから心でこの剣法の師をもふり捨てて来たつもりであったからだ。

「詳しくは柳生に帰ってから申すが」

「あいや、おれは」

と、七兵衛がいいかけた。伊賀に婿入りしている自分の立場を思い出したのである。

「七兵衛、おまえもいやい」

石刀自はへたりこんだまま、厳然といった。

「ほかのことではない。世にこれほどの大事はない。三種の神器のありどころについての大事じゃ。柳生の血をうけた男として、おまえも改めて耳をほじって、是非承わらねばならぬ」

それは権謀のつもりでおる。すなわち、五十余年欲してやまなかった真正の神器を手に入れるための。――」

「――や？」

「かくては、聖なる神器は北朝に移る。足利家の作った偽朝、傀儡の天皇に移る。万事休す。――」

すでにきいているであろうに、うしろの三人の大塔衆の眼は、怒りのために六匹の蛍がひかり出したようであった。

「日本史上、神器最大の危機じゃ。すなわち合法的簒奪という。――かくては、五十有余年前の大塔の宮をはじめ南朝の御忠臣たちの死力をしぼったいくたの義戦は水の泡」

めったにふるえることのない兵庫頭の声がふるえた。

「いまこそはっきりいう。吉野より神器を奪いたてまつれ」

「――あ！」

「いまは、神器を奪うことこそ、神器を護ることじゃ」

立ちすくんでいる柳生兄弟をにらみすえている中条兵庫頭と大塔衆の眼に、三人は打たれた。実はその眼の光こそ殺気そのものであったが、そのことに気がつくまえに、三人の前にはずしんと感動の火花がたばしり流れていたのである。

いままで予想もしていなかったふしぎな感動であった。それは事態が明確になったせいか。兵庫頭の気迫に圧倒されたゆえか。それとも彼らが日本の武士であったためか。――

突然、兵庫頭は大地に坐って、両手をついた。

「柳生、わしどもを助けてくれい！　いや、日本国のために――われら、奪った神器を牢の姫宮に献じ、いつの日か偽朝倒るる日まで、ひそかに奉じ、護持しようぞ！」

その正体もわからぬ、と神器を嘲ったのは、だれの口であったか。――舟馬はもとより、七兵衛、又十郎までが顔色も蒼ざめて、しだいにわななきはじめ、三人、同時にがくとひざをつき、いっせいにさけび出していた。

「かしこまってござる。その大儀、われら柳生の名にかけて！」

――しかし、さけんだあとで、七兵衛だけが頭をかかえた。

「ま、待てよ、しかしおれは服部の――」

「いいや、おまえは柳生の子じゃ、元弘回天の緒を作った柳生永珍どのの裔じゃ」

と、石刀自がいった。その眼から涙が流れおちていた。

「もはや、わき目をふることは許さぬ。ひたすらまっしぐら、余念なく、おまえは柳生の血をうけた男として、柳生の天命に従わねばならぬ。そのためにわたしはここに来たのじゃぞえ」

「三種の神器。――」

三人は驚かない。

舟馬又十郎と、七兵衛とは立場はちがうが、いままでその物体にとり憑かれて、ひきずり回されて、あきあきした。しかもまだ何のためにひきずり回されているのかよくわからず、そのことに気がついて、首をひねって、さて「造反」を試みたところだから、あきあきどころか、げんなりした顔をした。

「いや、これまでわしの話も漠然としたところがあった。それゆえそなたどもも風に向ってこぶしを振るような思いがしたことであろう。ゆるせ、ゆるせ、しかし、わしの話が漠としていたのもむりはない。それはいままで、現実に三種の神器について何の変化も起らなかったからじゃ」

兵庫頭のからだに粛然たるものが流れたようだ。

「いまや、それが起った。かかることもあらんかと予想し、いや必ずや起ると予感しておった事態が生じた」

「……何がでござる?」

「つまり南北朝合体のこと」

「や? いつ?」

「さ、それが――すでに起ったといってもいつわりになる。正確には、そのことが起ると決定したと申した方がよかろうか。つまりこれより約一年後、吉野におわす南朝さまは、神器を奉じて、北朝のおわす京へ御還幸に相成る」

「――へえっ?」

「すなわち天下南北に分れてより五十有余年、それが明年秋を以て一つになるわけじゃ。これはわしもほんの先日、幕府の中にて内々きいたことじゃが、充分信ずべき――いや、万に一つもまちがいのない事実じゃ」

ひょっとしたら、先夜中条兵庫頭が京の阿弥衆の村へいったのも、この重大情報を伝えるために大塔衆を探したあげくのことではあるまいか。

何にしてもそれが事実だとすると、表面泰平に似て、しかも大地の底で鳴動をつづけているような感のあった天下は、これで完全なる静謐をとり戻すことになる。従って、あらゆる争いも消滅する。――

舟馬が嘆声をもらした。

「それは、めでたい。――」

「めでたくはない」

鉄槌で打つがごとく兵庫頭がいった。

「それこそわしの怖れておったことではないか。表面、合体に似て、事実は南朝の屈伏じゃ。北朝への吸収じゃ。というのはわしの邪推ではない。幕府の要人がすでに、

「しかし、服部の女たちは」
石刀自はちらっと兵庫頭の方を見て、かぶりをふっていた。
「服部はどうやら、その件についてもこちらの敵に回る運を、みずからえらんだらしいぞえ」
大地に坐ったまま、柳生三兄弟は石のように硬直した。

「――事ははっきりし申した」
と、世阿弥はいった。
「ほんの先日、幕府のさる筋から――信ずべき筋からきいたことじゃ。明年秋、南朝さまはいよいよ北朝さまと御合体に相成る。日本の空に、天日はふたたび一つとなるのじゃ」
「ああ！」
と、双羽がさけんだ。彼女ばかりではない。環もお鏡の顔色もかがやいた。
そのことのめでたさもさることながら、「合体」とは何という美しい言葉であろうか。
「そのことに、八幡、まちがいはないが、公事としてはまだ秘密――なんとなれば、いままでかような企てはいくどかあったことじゃが、噂が立つと、必ず横からじゃまが入る、五十有余年の入りくんだいきさつ、そのようなめでたいことも、必ずしもよろこばぬ向きがいろいろとあるのでござる。なかんずく。――」
憂いの翳を眉にふるわせて、
「最も危険なのは、御合体のことを猜疑し、また怖れて、事前に南朝さまから三種の神器を奪おうとはかる一派」
「え。――」
「いや、一派ではない。――もとより神器を失った南朝さまは、もはや南朝さまではない。かくて御合体を無意味なものとせんがためにそれを望む向きもあるが、さらに恐ろしいのは、真に天朝のおんため、日本のためと狂言して、御合体以前に南朝から神器を奪い、いずこかへ隠さんとする向き――わしの想像するだけでもさまざまのむれがあるが、さし当って最も危険で、確実に存在する一団は、それ、例の大塔衆」
三人の女は、吐胸をつかれたように動かなくなった。
「なんとしても、きゃつらのその暴挙はふせがねばならぬ。しかも、右の御合体の事実はおそらく大塔衆も探知したでござろう。さすればきゃつらがきょう明日にも大それた神器奪取の挙に移るは必定。――」
世阿弥は岩の上に両手をついた。
「服部のおんな衆、どうぞこの神器護衛のお役に加わって下され、世阿弥より改めて

お願いいたす。日本国のために！」

くノ一、神器を護れ

五月川の水のしぶきを浴びながら、三人の娘の頬も紅潮していた。

自分たちの修行は神器を護るため——とは以前からきいてはいたが、どこかまだ漠たるところがあった。げんに神器をおびやかす者があるとも思えないのに、なぜこのような恥ずかしい修行を？　と懐疑するところがあった。

しかるにいま、ようやくそれは現実の問題として彼女たちの前に現われたのである。と、同時に、いまだ彼女たちの見たこともない神器が、決して幻ではなく、神秘な、燦爛たる光芒につつまれて浮かび上って来たのだ。視覚ではなく、魂に。

——ふしぎなことに、双羽と環のみならず、これまで——いま世阿弥が、神器を狙う代表的凶党としてあげた大塔衆と行を共にしていたお鏡までが血の昂揚をおぼえた。ただ——一息おいて、双羽がいった。

「世阿弥どの」

「おう」

「では、その——大塔衆たちのこと、南朝さまにお知らせしてあげればよいではありませんか。また、何なら足利家の方へでも」

「足利家？　滅相もない。わしは足利家のためにこう奔走しておるのではない。ひとえに南朝さまのためだ。そのことが足利家にわかれば、わしの首が飛ぶとは前にもいった。いや、わしの首などどうでもよいが、御合体のこと、まだ世に秘しておかねば、すべてがぶちこわしになるとはいま申したではないか」

「あ。——」

「南朝さまのために神器を護る。菊水党はこの日に備えて生きて来た。ただ南朝を裏切った楠木の一族の汚名をそそがんがために」

改めて、この世阿弥もまた楠木の血を伝える人間であることを思い出させる悲壮な声であった。

「いや、吉野朝廷一般にはともあれ、いつぞや申したように天皇さまだけはひそかにこの衆の悲忠の志はお伝えして、万一の際の神器護持のお許しはいただいておるのじゃ。そのときはついに到来した。それを、伊賀でもどうぞ助けて下されい！」

「それなら！」

と、お鏡がさけび出した。

「又十郎どののお力もお借りしましょう」

彼女は、やっと自分の立場にわれに返ったのであった。——しかし、お鏡のみなら

ず、双羽、環もまたふいにゆすぶられたような表情をした。
「おう、そうじゃ、舟馬さまもお力になって下さるはず」
「七兵衛どのはもともと伊賀へ婿に来たお人」
三人、声をそろえていった。
「柳生は伊賀の敵ではありませぬ。――」
「いいや、柳生は伊賀の敵じゃ」
と、うしろで声が聞えた。
いままで道の方を警戒していた三人の菊水党がこちらに戻りながら声をかけたのだ。
「おそらく、柳生の方には、また大塔衆がとり憑いておるはず。――」
「えっ？」
「その証拠に、三人、追って来ぬではないか？」
その通りだ。たったいま、こちらにつれて来られた自分たちを、どうして柳生三兄弟は、少くとも様子を見に来ないのか。
もとの桃香野につくねんと待っているような三人ではないはずだ。――では、あちらにも何か起ったのか。
三人の娘は、しかし桃香野の方をふりかえり、いっせいに立ち上ろうとした。その前に、服部半阿弥が立ちふさがった。首を横にふる。

「柳生は、あきらめてくれい。……」
しぼり出すようにいった。そして、次にこの棺桶になかば入りかかったような――しばらく見ないあいだに、またひとしおめっきりと老いた半阿弥は、ズルズルと地べたに坐ってしまった。
「ただ、南朝さまのためだけに、いのちを捨ててくれい。……」
そういうと、老人は自分の孫娘にむかって、枯木みたいな両腕をついたのである。
三人の娘の紅潮した頬から血の気がひき、三人の娘は声もなくそれを見下ろして立ちすくんでいた。

三種の神器。――
現代ただいまの時点に於て、その尊厳性を魂の底から感覚する人が、日本人中にどれほどあるであろうか。とくに若い人には、公平に見て、マイホームの「いわゆる三種の神器」ほどの感動を与えるとは思わない。
実はその感動こそ、この物語の原動力となるはずであったのだが、書いている作者自身それを喚起するのに困惑をおぼえているほどなのだ。
まことに歌の文句ではないが「人の心はすぐ変る」という現象を改めて痛感せざるを得ない。

従ってこれは感情によってではなく、歴史的事実によって改めて共鳴を求めるほかはないのだが。——

敗戦直前の昭和二十年七月三十一日の「木戸日記」にいう。

「お召しにより午後一時二十分、御前に伺候す。大要左のごときお話ありたり。

伊勢と熱田の神器は、結局自分の身辺にお移ししてお護りするのが一番よいと思う。しかしこれをいつお移しするかは、人心に与える影響をも考え、よほど慎重を要すると思う。自分の考えではたびたびお移しするのも如何かと思うゆえ、信州の方へお移しすることの心組で考えてはどうかと思う。この辺、宮内大臣ともとくと相談し、政府とも交渉して決定してもらいたい。万一の場合には自分がお護りして運命をともにするほかはないと思う。

謹しんで拝承」

いかに天皇のお心を、このころ国家の運命とともに神器の安否がとらえていたかがわかる。また。——

東京裁判に出廷した元満州国皇帝溥儀（ふぎ）は、胸一杯の憎悪をたたきつけるがごとくこういった。

「日本人は満州を奴隷化せんとした。私の訪日に際し、天皇は私に三種の神器、剣と鏡と玉とを見せ、そのうち剣と鏡を私に与えた。帰ったとき、家族はみな泣いた。これは私一代の恥辱であった」

これはいくらかは溥儀の悪意ないしはかんちがいによる偽証の部分もあるが、そのような悪意あるいはかんちがいを起させた事実もあることはほんとうで、つまり三種の神器が、現実に近代史をも動かした——少くとも「生きていた」例証である。

わずか、二、三十年前のことだ。

ましてや、それ以前の長い日本の歴史の中で、これがいかなる地位をしめていたか、いうまでもない。とくに南北朝時代に於ては、これこそすべての要（かなめ）であった。

由良哲次氏の「南北朝編年史論」にいう。——

「皇統を保持するということと、神器を継受するということが天皇に神聖性を与えた。天皇は神器の捧持者と見られ、ときには神器が主要であって、これを保持する人格は、たんにこれの従属者のごとくにも見られた。安徳天皇が平家に擁護されて西国にあったとき、源氏や京都方の焦慮（しょうりょ）に於ては、身体としての安徳天皇はいかにもあれ、ただ神器の安泰帰還を祈ったのであった。

南北朝の紛乱のすべてを通して、神器によって正邪を定めようとする意識は、今日われわれの考える以上に根底的であった」

天照大神以来、れんめんとして百二十四代の天皇とともに伝えられている三種の神器。いまそれは国民の意識に、明らかな意識としてはない。では、それは死んだのか。

死んではいない。眠っているだけだ、と作者は思う。それは時いたれば、必ずまた醒めるときが来るだろう。休火山のごとく。——それが燃えあがるとき、民衆の幸福となるか不幸となるかは知らず。

それはともかく。——

伊賀よ、神器を護れ。

その声はたしかに服部の三姉妹を雷電のごとくに打った。点火した。ただ世阿弥や祖父の悲願のゆえのみでなく、彼女ら自身、内部から燃えあがらせるものがあった。ひょっとしたら、その感動は、どこか懐疑的な男性側の柳生三兄弟よりももっと純粋なところがあったかも知れない。

彼女たちは夢遊状態で服部郷に帰った。

そして、その冬から年を越えて春までそこにいた。世阿弥は京へ帰ったが、菊水党はやはり服部郷に滞在して、改めて服部郷士たちの忍法の訓練にとりかかった。

ただし、もとより姉妹たちに教えたような忍法ではなく、ふつうの基礎訓練だ。そしてなぜそういうことをやるかという理由は、むろん何もいわない。ただ、

「半阿弥老の下知によるものであり、三姉妹も同意のことだ」

と、伝えただけである。

それで充分であったが、だれからともなく「柳生とたたかうためだ」という噂がなが

がれて、服部郷士たちはふるい立った。去年の春の騒動以来、半阿弥に強く抑えられて彼らは隠忍していたが、柳生にいって殺された三人の郷士の記憶、いやそれぞれ以前千年の宿敵という執念はなお彼らをとらえていたのだ。

その光景を三姉妹は黙って見ていた。夢遊の瞳で。——しかも、どこやら昂揚した瞳で。

二度か、三度、姉妹は菊水党にきいた。

「まだ、お護りにゆかなくてもよいのですか、吉野へ」

「まだまだ」

と、彼らはくびをふった。

「まだ、あちらが動かぬ」

「あちら？」

「柳生にいる大塔衆が」

菊水党はそれとなく、柳生の動静を監視しているらしい。——柳生の三兄弟が、とは彼らも口にしなかった。口にするのを、はばからせるものが、服部三姉妹にあったのだ。

とはいえ、柳生ときいただけで、何らかの反応を示しそうなものなのに、彼女たちは顔を見合せもしなかった。いちど彼らも淫心をもよおしたこともある美貌は一日ご

とに妖艶の靄をけぶらしはじめ、見すえられると、胆ふとい菊水党もふと眼をそらさずにはいられないほどであった。伊賀に帰ってから、三姉妹はどこか変ったと思う。にもかかわらず、彼女らが妙に無反応なので、阿波座監物たちにはかえってぶきみな感じがした。

同じころ、柳生の庄でも、中条兵庫頭こそ京へ帰ったが、三人の大塔衆が居残って、郷士たちに改めて剣法の訓練をつづけている。

「石刀自の下知によるものであり、柳生御兄弟も同意のことだ」

とだけいい、柳生侍たちがこれを伊賀との対決のためだと考えたことも、服部郷と同様である。

舟馬たちは夢遊状態でこの光景を眺めていた。ただ服部姉妹とちがうところは、彼らの表情にどこか憂鬱げな翳りが、一日に一度は冬の雲のごとく渡って過ぎたことだ。彼らは眼前のことより、何かほかの思いにとらえられているようであった。

いちど、七兵衛が、ひとりぶらりとどこかへ出かけようとしたことがある。

「どこへ?」

と、牛袋兵斎がすぐに見とがめた。七兵衛は返事しなかった。

「伊賀へでござるか」

「いって悪いか」

と、七兵衛は隻眼をひからせた。兵斎はいった。

「空しく死ににゆかれるおつもりか」

「なに?」

「向うは、柳生はすべて敵と見ておるのでござるぞ」

「いや、環ばかりは」

「あちらは、一人残らずこちらを敵と見ておる。そのように、菊水党が吹き込んでおる。――」

「何を、菊水党ごとき――おれは五条の橋で一人斬った」

と、そらうそぶきかけて、七兵衛は次にあわわと意味不明瞭な声をたてた。五条の橋で斬ったのは、大塔衆の一人だ。

石刀自の、柳生の子に戻れという命令には服従したけれど、七兵衛の場合、敵が味方となり、味方が敵となったのだから、兄や弟よりも頭が混乱する。

「枕坂獄門をか」

と、つぶやいて七兵衛をにらんだ兵斎の眼にも恐ろしい敵意がある。それを必死に抑制しているらしく、声までしゃがれて、

「ともあれ、ここを動かれてはならぬ」

と、圧服的にいった。

「いつまでじゃ」

「左様、まず春のころまで」

「なぜ？　なぜそれまでに神器を取って来てはならぬ？」

「まだ柳生衆の剣法がその域に達し申さねば」

七兵衛は勃然と怒った顔をした。

「何を要らざる手間暇を。――神器奪取はおれたちだけでよい。いや、おれ一人でよい！　あまり、うじうじしておると、おれ一人、吉野へいって神器を奪って来るぞ！」

たんなる豪語ではなく、七兵衛自身これまであれを思い、これを思い、煩悶のあまりの癇癪であった。待機に耐えかねて、成ろうが成るまいが、ここらですっぱりその一事を解決したいという衝動につきあげられたのだ。

同じ日ではなく、もう春近い――山国柳生にも氷が張らなくなった早春の一日であったが、この柳生郷士軍の訓練という問題が、これは舟馬によって持ち出された。

「いろいろ思案したがの、左様なことは、神器奪取という目的に関するかぎり、無用だと思う」

と、舟馬は大塔衆にいったのである。

「われら三人だけ――おぬしらを加えれば六人、それでよいではないか」

「へ――？」

大塔衆はきょとんとした。すぐに網戸天杖が肩をそびやかしていう。

「吉野行宮とは申せ、かりにも御所でござるぞ。北朝軍を一歩も寄せじと護りをかためておる南朝でござるぞ。そこに六人乗り込んで、それが成るものならば、われらはじめより七人で踏み切ったでござろう。それが不可能と見たればこそ、わざわざ柳生衆の助けを借りるために、これまでいろいろと手順を踏んで参ったのだ」

「だからよ、事と次第で家来どもの助けを求めよう」

と、舟馬は落着いていった。

「しかし、よく考えてみるに、このことはあくまで秘密にしたいのであろうが。そのためには、人数少なければ少ないほどよい。万一のことがあれば、柳生の庄そのものが足利家に蹂躙される危険性もある。それより、成るか成らぬか、ひとまずわれらだけで吉野へ推参して見た方がよいのではないか」

舟馬の胸の中は、要するに柳生すべてを犠牲にするに忍びない、ということであった。

「三人だけでな。――」

牛袋兵斎が二人の仲間と顔見合わせて考えこんだのは、最初からの計画は計画としてこのことをあくまで秘密に運びたい、ということには同感であったからだ。

「むろん、われわれも参るが。――」
と、網戸天杖がいった。
「やれるかのう？」
「やって見よう」
と、舟馬はいった。
「いや、わしたちで必ず目的を達する自信はある」
「それならば、出立も身軽となるが。――」
なお三人の大塔衆は連日ひそひそと談合し、そのうち笄玄之丞が、
「ちょっと京へいって参る」
と姿を消したのは、中条兵庫頭へ相談にいったものであろうか。
玄之丞は帰って来た。そして、その夜。
「では、明朝ひとまず物見のためにも吉野へ出立いたそう。お覚悟はよいか？」
と、伝えた。
「柳生から出たぞっ」
菊水党の一人猪丸塔五郎が駈け戻って来たのは、その翌朝のことだ。
「柳生三兄弟と大塔衆三人が。――奈良の方へ向って立ったが、八幡、吉野へ向うと見た」

「では、かねての手筈の通り」
と、阿波座監物が服部三姉妹をかえりみた。
「仰せのごとく、ひとまずわれら六人だけで」
といったのは、これまたそれ以前から双羽が、神器奪取をふせぐのはわたしたちだけではいけまいか、服部郷のすべてを動員するのは、その目的のためにも服部のためにもかえって危険ではあるまいか、といい出していたからであった。
「きっと、護って見せます。わたしたちだけで」
決然と双羽はうなずき、二人の妹をうながして、身支度のために別室に去った。
が――着物を旅装に換えながら、三人の娘はふとそれぞれのからだの一部に眼をとめて、しばし手の動きをとめてしまった。からだの一部――腹部に。
三人の娘ではない。――母だ。
天なり命なり、彼女たちがそれぞれのからだに異常をおぼえたのは、伊賀に帰ってまもなくのことで、いまはもはや三月を越えているだろう。まだほかのだれにも気づかれてはいないけれど、彼女たちはそれぞれの胎内に新しい柳生の子が育ちつつあるのを、日毎に感覚していたのであった。

大塔衆笄玄之丞

——思えば、ふしぎな敵味方だ。もっとも、今さらのことではないが。

神器を狙うものは、大塔の宮につながる大塔衆。その目的は、遠からず京の傀儡政権に降ることは必定と見られる南朝から、事前にその象徴を奪わんがため。

神器を護る者は、楠木正成の後裔たる一族菊水党。その目的は、むろん右の凶徒あるを知ってこれを防衛するためだ。

すなわち、いずれも日本のためだという確信から発した行動だが、この争いは、たしかに「豆を煮るに豆がらを焚く」にひとしい。もとこれ同根の生。

ただし。——

柳生七兵衛は、菊水党の黒幕たる世阿弥がこの「七歩の詩」を口ずさむのをきき、柳生舟馬と又十郎も、大塔衆の黒幕たる中条兵庫頭が期せずして同じ詩をつぶやくのをきいたはずだが、この時点に於てはそのことを——歴史的な皮肉に思い至らなかった。

それより、ふしぎな敵味方、と柳生三兄弟に思わせたのは、その敵が彼らと契りを交わした女たちということであった。

彼らとしては、もはや運命に逆らうつもりはない。自分たちに下された大命にはふるって参ずる覚悟をかためている。さればこそ、むしろ大塔衆を督促して一日も早く吉野へ潜入することを望んだほどだ。

しかし。——

それでもなおかつ、背後をふり返らずにはいられなかった。とくに、柳生から奈良へ入ったころ、背後にひとり残って偵察していた網戸天杖が、「追って来るぞ、菊水党と服部三姉妹が」と報告してからはである。

伊賀は、柳生をすべて敵と見ておるのでござるぞ、そのように菊水党が吹きこんでおる——とは、すでに大塔衆の喝破したことであり、その後、三姉妹から何の音信もないので、まさか？　と思う心が、さては、という心に変っていたものの、自分たちが旅立つとともに、菊水党と三姉妹が同行して追って来たときいては、果然、と動揺せざるを得ない。

「……ちと、不安じゃな」

兄弟の顔色を見つつ、牛袋兵斎がつぶやく。

「ただ、物見のつもりで出て来たが——柳生衆、せめて、二、三十人でもつれて来た方がよかったかも知れぬ」

「いまなら、まだ間に合うぞ。とって返して、呼んで来ようか」

と、笄玄之丞がいう。ただし、どこか、からかうような調子だ。

舟馬が、あわてていった。

「そんな必要はない。われらだけで、大丈夫じゃ」

柳生の庄すべてをあげてこのたびの争いに巻きこんではならぬ——というのが、彼の不動の方針であった。

「ふふっ」

三人の大塔衆は顔見合わせて笑った。舟馬の壮語もさることながら、三兄弟の動揺に釘を刺すというこちらの目的が図にあたった会心の笑いであった。

「……さて、ここで一つ、きゃつらをまごつかせてやろうか」

牛袋兵斎がそういい出したのは、奈良の町の雑踏を通りぬける路上であった。

若草山がやや青ばむころで、まだ桜には日があるが、それでも早春の風に誘われて、奈良の町には無数の人々が浮かれ出ている。

ここは南北両陣営の交流の地にあたる。そのため本来なら両派激突の争地になるはずだが——何しろ、五十有余年の対峙だ。さすがに倦んで、かえって一つの非武装地帯になっているといっていい。もっとも、柳生兄弟の知っている数年前でも、ときに往来で喧嘩沙汰を見ないわけでもなく、どうやらそのもとは、やはり南北の争いの飛沫であることが多いようであったが。——

さて、柳生からこの奈良まで約八キロ。ここまではほぼ一すじの街道だが。——これより吉野へ向うには、まほろばの大和国原、道はいくすじかある。

兵斎はいい出した。

「二つに分れよう。……笄は、左様、七兵衛どのと斑鳩の里を通ってゆけ。わしと天杖は、舟馬どの又十郎どのと、東側の街道をいって、途中でまた分れて見よう。ゆるりとゆけ。逢うは、南葛城の御所としようか。先についた方が待つことにする」

ただ意味もない行動をする牛袋兵斎ではない。追う者をまごつかせるためとはいったが、ひょっとしたら誘い寄せて、相手側の反応を見、それによって或る種の行動に出る意図からの分離であったかも知れない。——

……さて、こうして柳生七兵衛は、笄玄之丞と同行して、西側の街道を吉野へむけて南下することになったわけだが。

いちじは敵同士であった仲だ。

環以外には勇猛無類の七兵衛だが、さすがに大塔衆はうすきみがわるい。味方であった菊水党のめんめんもぶきみ千万であったが、これはこれで、ぞっとするような剣士たちだ。なまじ七兵衛が剣に興味を持つ男だけに、ひとしおその感がふかい。

なぜなら、彼らの剣法なるものが、ただの剣法ではないことを、柳生の庄でいやと

いうほど見せられたからだ。以前からその教えを受けていたはずの兄舟馬や弟又十郎も眼を見張っていたところを見ると、二人もそれまで大塔衆の真骨頂をまだよく知らなかったものと見える。

おそらく、自分たちに対する示威ではあるまいか、とも思われるのだが、それにしても——と、見ていて舌を巻かざるを得なかった。よくまあ、その一人、枕坂獄門を自分が斬ったもの、とかえり見て七兵衛は信じられないほどであった。

例えば、この笄玄之丞ごとき。——

その名の笄に似て、痩せてひょろりと背が高い。その上に、鴉みたいに口がとがって、ばかに耳の大きな首がのっている。これが、ふつうの刀の一倍半はある長剣をふるう、しかも、背の方へ。

「見ていなされや。——」

と、柳生の屋形の庭で、うす笑いして見せたものだ。

そのとき彼は、庭に向うむきに立っていた。そこへ、縁側の網戸天杖が——一ト月ばかり前に生まれた猫の仔を、三匹つかんで放り投げた。

「ぎゃあ！」

声はただ一つであった。

投げられた仔猫はばらばらであったのに。銀蛇が一瞬妖しい光芒をえがいて、三匹を六つの肉塊に変えていた。その光芒が、笄玄之丞の長剣であったことがわかったのは、そのあとのことだ。

彼は向うむきになって、仁王立ちのままであった。うしろをふりかえることもしなかった。それなのに、まるで背に眼あるがごとく三匹の猫を斬ったのだ。

「耳で見るのでござるよ」

と、玄之丞はいった。その耳が、犬みたいに動くのが見えた。——のみならず、あまりの早業でよくわからなかったが、その肩や腕の関節も常人とはちがう回転を示すことはあきらかであった。

「立ち合うておって、いきなり背を見せれば、敵は得たりや、と勇み足で飛びかかって来るでござろう。そのときが敵の終りでござるて」

むろん、前面に対しても、背面と同様の剣技だ。——おそらく自分たち三兄弟が、その前後から立ち向っても危いのではなかろうか、とさえ七兵衛は思った。

その笄玄之丞が、長い二本の足をしなしなとたわめて歩きながらいう。

「二人となると、かかって来るやも知れぬて。……まず、見ていなされや」

七兵衛はふりかえった。斑鳩の里——ここらあたりまで来ると、奈良の雑踏とはもう縁がない。ちらほらと僧や百姓の姿は見えるが、それらしい影はない。

野末からも見えていた法隆寺の五重の塔はもう眼前であった。

「出来たら、二人、三人でも斬っておきたい」
と、玄之丞はまたいった。
「そういうつもりで、ここまで来たが、敵もさるもの——こちらがひき返せば、逃げ水のごとく消えてつかまらぬ。吉野に入れば、吉野はきゃつらの味方——と、思うておるに相違ござらぬ」
「吉野のすべてを敵として、果して神器が奪えるか」
「そのためには、一工夫も二工夫も要るでござろうなあ」
と、玄之丞はつぶやいたが、さして案じている気配でもなかった。
「笄」
と、七兵衛は立ちどまった。
「ちょっと立ち寄ってゆこう」
「どこへ」
「この法隆寺に」
「——ほ？」
「ここの和尚と旧知なのじゃ。般若湯に、茶漬けでも頂戴してゆこう」
「まだ、夕飯には早いが」
笄玄之丞は、美しい五重の塔の水煙にかかった夕日をふり仰いで、くびをかしげた。

「いや、どうせどこかの百姓屋で一飯を乞うほどならば、いっそ知り合ったところがよい。それに、ここの和尚はなつかしい。ここまで来て、挨拶してゆかねば義理がたたぬ」
「左様かな」
べつに追手が必ず来る、いつ来る、という保証もないので、笄玄之丞は承知した。
やがて二人は、中門を潜って寺を訪れた。
七兵衛の和尚云々というのはでたらめではなかった。父の孫次郎家宗のころから、この寺の和尚とは風月相知の仲だったのだ。で、久闊を叙し、庫裡で般若湯など恵まれているあいだに——七兵衛は事に託して、ヒョイとそこを出た。
寺の一部を見にゆくような顔で、その実、疾風のごとく寺そのものを走り出る。
——環はどこへ？
その捜索のためだ。ただし、大塔衆から離脱して、ふたたび伊賀に身を投ずるつもりはない。また、環が自分たちを追ってこの近くまで来ているという確証あってのことでもない。
ただ、先刻からの笄玄之丞の意図をきくに至って、いてもたってもいられなくなったのであった。あの笄玄之丞だけは避けるように、少くともあの男の剣法だけは知っておくように、せめて三姉妹のだれかか、菊水党の一人でもそこらに見かけたならば、

そのことを注意してやろうと思い立っての行動であった。むろん、玄之丞に怪しまれてはならぬので、遠くにはゆかれない。

どこでゆきちがったか。

むろん目当てあってのことではないから当然のことだが、七兵衛がもと来た北西の方角の道を駈けていったのと同じ時刻——正確には数分か十数分あとに、法隆寺の南の野の道を、竹杖をつき、市女笠をかぶった二人の女が歩いていた。

まだあかあかとした夕日の下に、

「追って来ぬのう?」

と、不安げに笠をめぐらしたのは、環だ。

「え」

答えたのは、お鏡である。

時間と場所からいえば、どこかで七兵衛とぶつかってもよいはずなのだが、法隆寺をめぐる道だって、東西南北、四方にあるわけだから、おそらくべつの道をすれちがったものに相違ない。

環が、追って来ないかといったのは、大塔衆ではなかった。味方の菊水党の八葉寺隼人なのであった。

奈良を出てから、敵が二つに分れた、と知って、こちらも二つに分れた。双羽、阿波座監物、猪丸塔五郎と、こちらの組にである。そしてこちらの追う対象の中に柳生七兵衛がいると知って、ふいに環が眼を燃やして、ひそかにお鏡にささやいたのだ。七兵衛どのに逢うて話をせねばならぬと。

あのひとが、ほんとうにわたしたちの敵になるおつもりであろうか。

それをききたいのだと環はいったが、しかしお鏡は、自分も又十郎に逢って告げたい或ることを胸に抱いていることから、姉の本心をも見ぬいた。——腹におまえさまのややがある、姉はそれを知らせたいのだ。

で、菊水党から一応ふり切ったのは、菊水党とはいうものの同行者が八葉寺隼人一人だけであったればこそだ。隼人が一軒の百姓家に水をのみに入っているあいだに断わりなく駈け出したのだが、二度とは出来ない離脱であったろう。

「……けれど、七兵衛どのは、ほんの数町先を歩いていたのに?」

環がそういって、夕日にかすむ野末をすかし見たとき——ふいに、お鏡がぱっと飛びずさった。

「お姉さまっ」

と、たまぎるような絶叫をあげながら。

環はふりむいた。

路傍に地蔵堂があった。そこの格子になった扉が、ぎぎっとひらいて、中からくぐるような腰つきで、ひょろりとして背の高い男が現われた。おそらく、そこから出て来る以前に、格子をすかしてお鏡が見たものに違いない。——それは大塔衆の笄玄之丞であった。

「柳生七兵衛に逢いに来たか」

長い足で路上にゆらりと下りて来ながら、お鏡にきく。ちょうど二人の女のまんなかの位置にである。

「七兵衛は、やはり伊賀と、縁を断ち切れぬのか。いつからしめし合わせておる?」

これは誤解だ。しかしこの誤解あればこそ笄玄之丞は、法隆寺の庫裡からふっと七兵衛の姿が消えたのに、さてはとキナ臭い鼻をうごめかし、すぐにそのあとを追ってここに来たともいえる。

「そして、お鏡どの。……おまえさまは、伊賀か柳生か、どっちじゃ?」

きく対象は、お鏡だ。去年まで彼と行を共にし、それどころか手をとって剣法を教えた仲だから当然だが——しかし、そういう縁があったとは思われない残忍な光が、その細く吊りあがった眼にあった。縁あればこそ、何を小癪なという炎の湧きたつのを禁じ得なかったのかもしれない。

「申されい!」

耳が、ぴくっと動く。——お鏡は戦慄した。戦慄したのは、笄玄之丞の背面剣法を知っていたからではない。半年以上も京の中条道場で修行させられて、彼女はまだ玄之丞のそういうわざを見せられたことがない。彼女がふるえたのは、それを知らなくても恐るべき剣の達人とは承知しているゆえであり、かつ彼が本気であることを感覚して、その迫力に圧倒されたからであった。

しかも、お鏡は竹杖に手をかけた。

——少くとも、彼を自分の方に牽制するために。

「大塔衆、こちらを向きゃ!」

向うで、環がさけんだ。——その姉に向かせてはならぬ。

が、環はこれまた竹杖に手をかけて、

「わたしが相手じゃ!」

さけぶ声は、たたかわざるにすでに苦痛に満ちていた。なぜ?

一目見れば、男をしてたちまち放出せしめる環の忍法弓張月。——しかし、それを文字通り「かえりみぬ」敵を如何せん。

「ほほう、仕込み杖か」

笄玄之丞は笑った。依然としてお鏡の方に向ったままだ。

「久しぶりに、おまえさまの刀使いを見せてもらうか喃。どれどれ、いかほど上達な

されたな？」

また、大きな耳が二つ、ぴくっと動いた。戦慄すべきは、お鏡の知らぬ彼の背中斬りであった。笄玄之丞は、ともあれうしろに忍び寄った環を斬る気でいる。お鏡を圧倒したのは、その殺気なのであった。

その手が、ゆっくりと長剣の柄にかかった。一閃すれば、背に眼あるがごとき必殺の魔剣。

菊水党八葉寺隼人

――玄之丞はついに刀を抜いた。

ただし、彼らしくもなく、そろっと、ゆるやかに。

しかし、これはいかに彼が二人の女をなめ切っていたかという証拠であった。事実、この動作のあいだ。鵜の毛でついたほどの隙もなく、身の毛もよだつ殺気はその全身をつつんでいる。――それを、お鏡は読んだ。

「寄らないで！　姉上！」

彼女はさけんだ。姉が、玄之丞のうしろに近づけば最後、ということを本能的に看破したのだ。そうさけぶのが精一杯で、お鏡自身も金縛りになったように、そこに棒

立ちになったままであった。

「やはり、服部方じゃな」

玄之丞は冷笑した。

「では――甚だ気に染まぬが、斬る」

さすがに、ぶるっと身ぶるいし、お鏡は仕込杖を抜刀する構えを見せた。玄之丞は吼えた。

「敵を斬るのではない。裏切者の成敗じゃと思って、あきらめなされ。そなたはわれら大塔衆の同志柳生又十郎どのの妻じゃからな」

お鏡のからだがまた硬直した。とたん。――一線の光流がその頭上から垂直に彼女を断ち割っている。ぱっと鮮血が散った。

「……あっ」

絶叫したのは、環であった。網膜とともに、脳髄まで真っ赤になったような気がし、夢中で玄之丞の背に斬りつけようとして、彼女は立ちすくんだ。

お鏡が倒れないのを発見したからだ。

斬り裂かれたのは、お鏡の帯と着物だけであった。鮮血と見えたのは、下着の色であった。――とはいえ、前面、無惨なまる裸となって、彼女は喪心したようにふらりとそこに立っている。――ただ、胸に鏡をぶら下げて。

「ほ」

笄玄之丞はのぞきこんだ。

「例の、菊水の鏡か」

大塔衆だから、京でもいくたびか見ている。お鏡の守護神たるその鏡を。——彼女はそれに紐をつけて、ふところの内におさめて歩いていたのだ。

「では、次にもう一つ凄い曲斬りを見せるとするか」

と、玄之丞はいった。彼がいまお鏡を帯とりはだかの姿にしたのは、むろん斬りそこなってのことではない。猫が鼠をいたぶるようないたずら心からだ。いわゆる一寸きざみ五分だめしを愉しんでいるのだ。それは同時に、背後から手も足も出ない環を嘲弄していることでもある。

「よいかな、次にはその美しい顔から股にかけて剃刀をあてたほどの傷をつけるが、ふしぎなことにその胸の鏡はそのままにしておいて見せる。——」

と、いった。

そんなことが出来るだろうか。まるで盾を切らずにそのうしろの人間を傷つけるというにひとしい。本人が凄い曲斬りと称するくらいだから、いかにしてかやってのける自信のあることはあきらかだ。

「環とやら。——よっく、見ていなされや！」

そろそろとその長剣が、ふたたびあがってゆくのを見つつ、かつそのあけっぱなしの背を見つつ、環はまるで呪縛されたようであった。ただ、胸の中で、

——忍法弓張月！

と、祈るのみだ。

「こんどはほんとうの血が飛ぶぞ。そうれ！」

笄玄之丞は笑い声とともに長剣を振り下ろした。

ふいに、その声と剣が途中で乱れた。

「うふっ」

奇怪なうめきとともに、彼の長いからだがくの字なりになった。

なぜ、突如として玄之丞がそんな風になったのかはわからない。——ただ、このとき、環を呪縛していた妖しき剣気がばらばらにちぎれ飛んだことだけを彼女は知った。

「えやあ！」

みずからの意志というより、吸い込まれるように環は仕込杖を抜いて、地を蹴っていた。

その無我夢中の行動は、斬るというより、その刀身を相手の折れ曲がった背に串刺しにさせてしまった。

環の髪をかすめて、蒼白い風が吹いた。うしろなぐりの玄之丞の背面剣であった。

が、それはたんなる反射的な一閃であって、そのまま玄之丞はどうと前につっ伏して、長い手足をぶるぶるっとふるわせたまま、それっきり動かなくなっている。

その背に、環の手から離れた仕込杖の刀身がピーンと宙天に立っているのを、彼女はもとより、お鏡も茫然と見下ろし、やおら放心したような顔を見合わせた。

「……？」

「……？」

どうして、こんなことがあり得たか、判断がつかない。ただ、夕映えに浮かぶ法隆寺の五重の塔を背景に、怪奇な蜘蛛みたいな男の屍骸と、大地を染めてゆく流血は、はじめて二人の女を恐怖させた。

「ゆ、ゆこう、お鏡」

「は、はいっ」

刀を屍骸の背から抜きとると、その血をふくいとまもあらず、環は、なんとか身づくろいしたお鏡とばたばたとそこから逃げ出した。

しかし、いくら考えても、二人には、いまの事態のよって来るゆえんがわからなかったろう。——環に背をむけたままの笄玄之丞が、環の姿をたしかに目撃したことを。どうして？

前面のお鏡の胸の菊水の鏡によって。

その一瞬に、環の忍法弓張月は発動したのだ。そして玄之丞は突如射精し、そのとたんに彼の殺気も構えも四分五裂してしまったのだ。

二人の姿が、南の村落へかくれてしまってから数分後、北の方から柳生七兵衛が駈けて来た。そして、路上に「同志」笄玄之丞のみごとに仕留められた屍骸を発見して、これまた立ちすくんだ。

「……？」

——さてまた奈良盆地の東側の街道を南下することになった大塔衆二人と柳生舟馬、又十郎の一行だが。

しばらくして、自分たちを追う敵もまた二つに分れたことを知った。網戸天杖が絶えず後方へ物見に往復した結果である。

「こっちは菊水党の阿波座監物、猪丸塔五郎と双羽らしい」

そうときいて、又十郎がはた目にわかるくらい、そわそわと落着かなくなった。

「では、お鏡は向う側か」

平野の西方——村や樹立ちのかなたへのびあがるようにする。

牛袋兵斎と網戸天杖は顔見合わせた。又十郎とお鏡が夫婦であることは知っているが、それは名目上のことであって、この若者がお鏡に対してむしろ冷酷な能度をとっ

ていたことは京でよく観察している。

その後、彼は兄の舟馬とともに、服部姉妹をつれて逃げ出したが、おそらくそれは舟馬の示唆によるものであって、この若者自身のおのれの「妻」に対する冷たさは天性のものらしいが、それに又十郎は伊賀に対して最もはげしい敵愾心を持っていて、そのことも原因しているらしい。

それが、どうしたのか、

「お鏡、あやつは。――」

と、つぶやいて、路上に立ちどまり、動かなくなったりする。ついに、

「奥方のことがお気がかりか」

と、兵斎がきいた。奥方という言葉にもからかいのひびきを持たせたのだが、又十郎にはとんと通ぜず、

「やはり、気にかかる」

と、ほとんど泣き顔になった。この末弟は、むろんいちばん年少だが、もともとだだッ子みたいなところがある。――兵斎は叱咤した。

「たとえ、いちどは夫婦の縁を結ばれたとて、いまは敵でござるぞ！　そのことは柳生の庄でおばばさまよりも、とくと申し渡されたことではござらぬか！」

「いや、お鏡にかぎってそんなはずはない」

「ふ？」

「あれはわしに絶対服従の女だ」

そのことは、兵斎にもわからないことではない。しかし又十郎の悩んでいることが、その自信がゆらいで来たことからではなく、どうやら彼自身お鏡に大いにみれんがあることから発しているらしいのがふしぎ千万である。やはり、夫婦じゃな、とも思い、それにしても、この又十郎が――と、首をかしげざるを得ない。

「やはり、いちど逢うて、あれの心をきく必要がある。わしをあちらに回してくれ」

と、ついに又十郎はそういい出した。

「まさか、お鏡どの可愛さに、あちらを見張っておる味方の笄玄之丞を敵にはなされまいな？」

「ばかなことを！」

「もっとも、失礼だが、あなたの手に負える玄之丞ではないが」

「おれの心配しておるのは菊水党のやつらだ」

「と、仰せられると？」

「お鏡の組には、菊水党の八葉寺隼人なるやつがついておるといった。その隼人がだ。さんぬる秋、京の阿弥衆の村で――何たる外道か、お鏡の姉のもすそなどかきひらいて、あわや犯そうとしておる光景をおれは見たのだ」

又十郎は、思い出して、歯がみさえした。

「うぬ、きゃつ、八葉寺隼人、おれの手に成敗してくれたい……」

それは、むろん牛袋兵斎たちにとっては、願ったり叶ったりの心境だ。

とはいえ、べつに、それでは西路の方に回れとはいえず、またそばで黙々と歩いている兄の舟馬も何も意見をのべないようであったが、そのうち又十郎の姿が、ふっと消えてしまった。ちょうど、網戸天杖が後方の偵察に出かけているあいだのことだ。

舟馬にきくと、

「いったかな」

と、例によって動じない顔をしている。

「あれの心境、是非もない」

まもなく戻って来た天杖に、又十郎が一人、こちらのグループを離れて西側のコースに向ったらしいといってやったが、

「よいではござらぬか」

ちょっと考えて、天杖もまたいう。

「ああ、騒ぎたてられては、かなわぬ。――」

兵斎は、舟馬に聞えないようにささやいた。

「しかし、あの軽率な若武者、こちらが見てやっておらぬと、あちらの八葉寺にやられるぞ。むろん、笄がおるわけだから、大丈夫とは思うが」

「柳生兄弟のうち、一人くらい討たれてもよいのではないか」

網戸天杖は深怨に燃える眼を空に投げた。

「われら大塔衆のうち、すでに四人もいのちを捨てた。――」

いずくんぞ知らん、この前後にもう一人、同志の笄玄之丞もまたそのいのちを魔天に飛ばしていようとは。

「柳生兄弟のうち、一人でも菊水党のために討たれたと知れば、柳生谷ことごとくわれらの命令に従うことになるのは火を見るよりも明らかじゃ。神器を奪う目的のためには、むしろその方が望ましいことかも知れぬて」

西路をゆく菊水党の八葉寺隼人は、妙なことを考えついた。

彼の開発した忍法「女陰変」を、ここらで柳生七兵衛に試して見ようか、という発心をしたのだ。

菊水党はすでに、他の男を舌で処置して永遠硬直の状態におく忍法を体得している。また服部兄弟をして、姉に忍法おぼろ月、妹に忍法弓張月を体得させている。――そしてまた彼八葉寺隼人は、おのれの性器を女陰に変える――そのように敵に見せる忍法を開発したと信じるに至った。

女の愛液を塗ることによって。

そしてまた女人に変成したいという念力を燃やすことによって。

およそ男に淫心あるとき、隼人がこの忍法をかけると、彼の股間は女陰と化する。

――仏教にいう「変成男子」の逆がその肉体に現出するわけだが、彼自身の観察によると、そんなはっきりした大怪異は起らない。ただ――その陰茎と陰嚢はほぼ常態の半分の体積には化する。

しかるに――相手の男には、それが完全なる女陰、しかも常態のほぼ二倍の大きさのものに見えるらしいのだ。

――もともとこの現象は胎生学的に意味のないことではない。何となれば、胎生期に於ては男女の性別はいまだ明瞭ならず、途中で同じものが陰茎と陰核に、陰嚢と大陰唇に分化して来るものであるからだ。

とはいえ、だからといって、「変成女人」と化する――化して見える八葉寺隼人の忍法の妖しさはいうまでもない。

彼自身は、あごの青い、毛だらけの四肢を持つ、精悍無比の男なのに、いったん相手の眼がそれを受動的に透視したとたん、酔っぱらったように立ちすくんでしまう。どういう心理状態になるのか、その忍法をかけた隼人にも不明なところもあるが。

「化物。……」

と、恐怖の眼でつぶやいたやつがある。通常の二倍はあるから、それは当然だろう。

ところが、ただ恐怖ばかりかというと、相手は美酒に泥酔したような眼つきになる。あとできくと、

「左様、海坊主のように大きな、しかも滅法美しい女の顔があって、その口の中へ頭ごとのみこまれたような気がします」

と、いう。――これは、京にいるころから遊女や白拍子の町へいって、その嫖客を相手に実験してみた結果だ。

それをこんど彼が柳生七兵衛に試す気になったのは――むろん彼と同行している環の言動に七兵衛を恋うているような匂いがあり、

「……はて、この女は七兵衛を軽蔑しているはずだが？」

と、その変化にくびをかしげ、はじめて彼は七兵衛に対して嫉妬の念を起したのだ。第三者の男が、夫に嫉妬するというのも図々しいが。

ともあれその七兵衛は、斑鳩の里を、すぐ彼らの前方を歩いてゆく。それといっしょの大塔衆笄玄之丞が難敵であることは一見してわかるが、それはさておき、七兵衛たちと相対することは眼前に迫っている。で――そのとき自分の「女陰変」を以て七兵衛をもういちど捕え、それを人質にして笄玄之丞を仕留める、という兵法を彼は思っていたのであった。

八葉寺隼人が、一軒の百姓屋に入ったのは、水を所望するためではなく、その前夜奈良の宿に泊ったときにそこの木辻の傾城町で手に入れた女の愛液を以て、おのれの肉体を処置するためであった。

そして、彼はまた街道に出た。

待っているはずの環とお鏡はいなかった。

「はて？」

ぐるっと見まわしたとき、八葉寺隼人は、北の方から息せき切って走って来る柳生又十郎の姿を見たのである。

大吉野

柳生又十郎は、はたと立ちどまった。むろん、八葉寺隼人の山伏姿を、彼の方も認めたのだ。

さっと、その全身が殺気にそそけ立つのが見えた。——が、彼は、その眼を隼人のまわりにウロウロとさまよわせた。

「お鏡を探しておるのか」

と、隼人の方から声をかけた。

「お、どこにおる」

又十郎はのびあがった。

「たしか、環どのと、うぬと三人いっしょであったろうが」

「それをきいて、何とする？　お鏡はうぬの敵のはずだぞ」

八葉寺隼人は、そろそろと近づいた。

お鏡、お鏡と呼び捨てにするのが、又十郎の胸を煮えくり返らせた。しかも、彼のからだは動かない。相手の眼光に縛られてしまったのだ。その眼には、たしかに常人ではない妖気がある。しかし、それがなくても——ただ殺気を以て近づく男に対して、柳生又十郎は本質的な気おくれを禁じ得ないのであった。

「それとも女房が恋しいか」

うす笑いしつつ、隼人はなお歩み寄る。

お鏡という娘は、去年の暮から伊賀に戻って来ただけに、隼人の眼にもいちばん新鮮だ。それを、このにやけた女のような若僧が女房にしていたとは——と、こんどは又十郎の方に、彼は、神器護持の聖なる忍者にはあるまじき妬心を抱いた。

いや、それ以前に八葉寺隼人は、この柳生又十郎をここで討ち果たすつもりでいる。忍法「女陰変」は、柳生七兵衛に使うべく準備したものであったが、これは飛んで火に入る夏の虫だ。

見たところ、そんなものを適用しなくても、一撃のもとに始末出来そうだが、しかし——信じられないことだが、この青二才が京で曾て仲間の板曳民部と切畑彦兵衛を斃したという。それが事実だとすると——そしてそれは事実だが——こやつ、こう見えて、何か特別のわざを持っているのか？

妬心を復讐の炎が燃やした。

「女房が恋しくば——見せてやろう」

八葉寺隼人は立ちどまった。三メートルの距離である。彼は刀も抜かない。——それを見つつ、又十郎はなお立ちすくんでいた。ただ、足が動く。ただし、細かく、細かく——ぶるぶると。

おれは曾てもののみごとに二人の菊水党をやっつけた。それで男の敵に対するいわれなき恐怖心から脱却し、剣技に開眼したはずなのに——いまこの事態に立ち至って見ると、そう心にさけびつつも、まるで蛇に魅入られた蛙のようになることを、みずから防げない又十郎であった。

——忍法おぼろ月！

——忍法女陰変！

口は笑い、眼はひかって、八葉寺隼人は念力こめて誦した。

柳生又十郎の眼が大きく見ひらかれた。明らかに、何かを見たのだ。はじめて彼がぱっと刀の柄に手をかけたのは、その驚きのためであったろうか。

しかし、それっきりだ。又十郎の眼は酒の酔いのようなかがやきをおびた。彼は何を見た？　いうまでもない。忍法女陰変によって変形し、しかも常態の倍はある隼人の股間のものを、忍法おぼろ月で透視させられたのだ。そのとたん、相手はこの大女陰にのみこまれる。——少くとも、相手の全感覚は。

「どうじゃ？　これでも女房が恋しいか？」

隼人はあざ笑って、にゅっと顔をつき出した。

「きえーっ」

突如、又十郎はさけんだ。隼人の眼には、相手がのけぞり返って、悲鳴をあげたように見えた。

又十郎はたしかにのけぞり返った。が、同時にその腰から電光のごとくほとばしった一刀が、隼人の頭上にはためき、はっとして身をひこうとした隼人の脳天を叩き割るように斬り下げていた。

「くわっ」

痛覚よりも驚愕の怪声を発して、そのまま大地へ鮮血とともにひしゃげてしまった八葉寺隼人から、柳生又十郎は飛びのいている。片手に高々と刀身をかざしたまま。

「てっ、てっ、てっ」

又十郎は絶叫していた。自分でも意味がわからないが、これは勝利のおたけびであった。

恐怖のあまりの反撃ではない。女陰を見たとたん、彼は全身を燃えあがらせる勇気の炎につつまれたのだ。女に対しては、ばかに強い男――その柳生又十郎のへんな天性を知らなかったことこそ、忍者八葉寺隼人の蟻の一穴。

しかし又十郎は、みるみる潮のように自分の闘志がひいてゆくのを感覚している。敵は唐竹割りになっているから、もう大丈夫だが――しかし、いま二倍はおろか、この敵の全身までがあれに化したかと見えた怪現象は何だったろう？　こやつの妖術にはちがいないが、いったい何のためにそんな妖術を使ったのであろう？

懐紙をとり出して汗をぬぐい、さらに刀をぬぐいながら、又十郎はいまの菊水党の男の妖術よりも、そんな妖術を使った心事が奈辺にあるかを疑った。

それから、

――お鏡はどこへ？

と、斑鳩の街道をふらふらとまた走り出した。

ばらばらに分れた大塔衆と柳生兄弟が、南葛城の御所にふたたび集まったのは、数日ののちであった。

場所はかねて約束しておいた通り、村のまんなかを流れる葛城川のほとりだ。

もはや吉野にちかく、せせらぎの水はいよいよ冷たいが、しかしどこか夕の風に春の匂いがある。が、そこに集まった大塔衆牛袋兵斎、網戸天杖と柳生三兄弟の顔色には、早春山村の景を愉しむゆとりもなかった。

「死んだといわれるか、笄が」

と、天杖がうめく。

四十ばかりの、剣士というより軍学者めいた沈毅な風貌を持つ男だが、北方の大和平野の空に漂う夕雲をふりかえった眼には、さすがに惨たる色がある。

笄玄之丞が殺されたという報告をしたのは、むろん柳生七兵衛であった。彼はあのあと、服部姉妹を見失い、その代り弟の又十郎を拾って、いっしょに茫然たる顔つきで御所までたどりついたのであった。

天杖がいう。

「笄ほどの者が、まさか服部の二人の女にむざと討たれるはずがない。わしの偵察したところによると、菊水党の八葉寺隼人がそっちに向ったから、必定、きゃつのしわざじゃな」

「ともあれ、二人になって、しもうた。……」

と、牛袋兵斎がつぶやく。これは白髪白髭の老人で、大塔衆いちばんの長者らしい

一つの風格を持っている。

「七人おったものがなあ。――」

さすがに柳生三兄弟も、寂として声がない。――

まことに、信じられないことだが、京で、また大和で、菊水党とやり合ううちに、なんと七人のうち五人までが地上から姿を消してしまった。おたがいに眼を見交わした牛袋兵斎と網戸天杖さえ、改めてそれが信じられないようにまわりを見まわした。

「まずは、物見に吉野に来たつもりであったが、いうまでもなく、そうはならぬ事態となったことは明白じゃ」

ぶるっとかすかに身をふるわせて天杖がいう。――

「しかし、兵斎老、二人でやれるか？」

「そのために、ここに柳生の三兄弟が御助勢におられるが」

「それだけで？」

牛袋兵斎はしばし沈黙し、やがていった。

「まさか、神器を奪うのに、いま即刻、柳生谷の衆ことごとくを呼んで来て、吉野に斬り込んでもその効はあるまい」

そして、三兄弟をふりかえった。

「あなたさま方を、お信じ申しあげる」

「は、――」

三人は顔色を改めた。

実のところは、彼らは「味方」の笄玄之丞が討たれたのも、「敵」の服部姉妹のためにほっとしていたふしもないではなかったのだが、いまここに、悲愁につつまれて立った大塔衆二人の生き残りを見ては、やはり心を打たれざるを得ない。彼らは冗談でやっているのではないのだ。彼らは恐ろしい犠牲を払っているのだ。

「天杖、頼みがある」

ふいに牛袋兵斎は、何やら思いついたようにからだをしゃんとさせ、網戸天杖の耳に髭をあててささやいた。天杖が驚いた顔をした。

「そ、そんなことをしてよいか」

「後図のため、その方がよい」

「おお、では――紀州を回ってゆくとしよう。しかし、わしが帰って来るまで、こちらは大丈夫かな？」

「こちらは急がず、ゆるゆるとやる。案ずるな」

そんな問答を交わしたのち、網戸天杖はちらっと三兄弟の方を見やったが、そのままそこを駈け去った。重厚な風貌に似合わぬみごとな駿足であった。

「柳生の御兄弟」

牛袋兵斎は水のほとりにひざをついた。

「これからのなりゆき次第では、われら両人のいのちもまた魔天に捧げなければならぬかも知れぬ。それは、はじめより覚悟のまえじゃ。ただ神器を、裏切り朝廷から奪うことが出来さえしたならば。――」

驚いたことに、涙ありとも見えぬこの老剣士の眼に、たしかに光るものがあった。

「そのためには、お頼りいたすはあなたさま方ばかり。――最初のうちは、かほどお頼み申すことになろうとは思うておらなんだが――いまとなっては」

がばがばと、老いたる蟇のごとくいざり寄った。

「柳生御兄弟も、神器のためにいのちを捧げて下されい！」

重畳たる大山塊と密林と峡谷と渓流とが、わだかまり、波うち、からみ合う大吉野――。

この地には、すでに神武朝のころから、天武、持統両朝にかけて、いたるところに離宮が置かれ、しかもそれはたんなる遊幸ではなく、日本の山岳の神々から神霊を受けられるためであったといわれる。奈良平安のころ、ここが山岳宗教の一大霊場であったことはだれもが知っていることだ。ここが、後醍醐以来、いわゆる南朝が雌伏し、かつゲリラ戦を行う一大根拠地となったことは、その地勢から見て当然といえる。爾

来五十有余年、天下を制したはずの足利の大軍を以てしても、ついにこれを覆滅することが出来なかったのも、半ばはこの大自然の要害のためであった。

そして、あとの半ばは、神武朝以来のこの地の人々の心の守護のためであった。日本じゅうすべての人民が抱く一種の信仰が、ここ吉野の人々に凝集し、それはもはや体質化して特別の天皇民族なるものになったとさえいえる。

「おおおいっ。……」

山が呼ぶ。雲が呼ぶ。

「御前。――」

森が呼ぶ。水が呼ぶ。――そうとしか思えない。

「申す。――」

すると、ただ早春の風の中に重々しいそよぎをあげていた杉や檜の大密林の中から、たしかに鎧ずれのひびきが――しかも決して二十人や三十人にはとどまらない音が起って、黒い疾風のごとく吹きすぎていったようであった。いや、粗野ではあるが、それだけに剽悍な、けものの皮で手製した具足のむれがちらっちらっと隠顕している。

南朝の山陣であった。

ここを護るのは、ただ南朝方の武士ばかりではない。農夫も猟師も、さらには、熊、鹿、いのしし、むささび、鳥から蝮に至るまでも、およそ外部から凶念あって潜入し

ようとする者は、虫一匹たりとも通さないという頑強な闘志を持っているかのように思われる。

いま、たしか、「御前」「申す。――」というさけびが呼応したようだが、これは合言葉でもあろうか。

その一角で、菊水党と服部三姉妹はとめられた。賀名生の里である。

哨戒線にひっかかったのだ。しかも、この賀名生こそ南朝行宮のあるところときいていたのだが、その実ここははるかな前線であった。

それがはるかな前線であることがわかったのは、そこから目的地まで歩いた距離が、はっきりとはわからないが数里もあったような気がしたからで、はっきりわからなかったのは、五人とも、頭からすっぽりと黒い頭巾のようなものをかぶせられたからであった。

「悪いが、見知らぬ顔の者が入ったと知られては、要らざる騒ぎが起るでの」

哨兵に呼ばれてやって来た一人の武者がそういったのである。

哨兵につかまったとき、阿波座監物が何やら手形のごときものを渡したところを見ると、どうやら事前に何かの連絡はしてあったのだろう。

が、その武士はきびしい顔でいった。

「見知らぬ顔ならまだしも、楠木の流れを汲む一党と知る者があっては、ただではすまぬゆえ」

そして、頭巾をかぶせられ、手をひかれて歩き出したのだ。

楠木の流れを汲む一党――いかにも菊水党は、楠木正成の一子の遺臣であった。ただし、南朝に弓引いた楠木正儀の。

だから、こういう処置をとられるのも納得出来ないではないが、しかしこれが一党といえるであろうか。

生き残った菊水党は阿波座監物、猪丸塔五郎のただ二人。これは彼らにも意外であったらしく、別街道から来た環とお鏡が、同行した八葉寺隼人が行方不明になったことを告げると、さすがに衝動を受けたようであったが、それにもかかわらず、なお意気屈せずに吉野に向い、そしてこのような待遇を受けても、なおその中に身を投ぜんとする。

何のため？

この南朝にある神器をあくまで護るため。思えば、かれら菊水党の悲忠もまた壮というべきか。

「これで。――」

と、環がささやいた。

「わたしたちが来てお護りする必要があるのでしょうか？」

案内している武士に聞えない声であった。そういう発声法をおぼえたのも、やはりいままでの忍法修行の結果である。

そして、頭巾で頭を覆われているのに、もはや彼らはみな手をとられてもいなかった。まるで、眼あるがごとく森の中の小径を歩き、渓流を渡る。はじめ武士たちは驚嘆の眼でこれを見ていたようであったが、やがて、

「ううむ、なるほど。――」

「みずから神器守護を志願しただけのものはある」

と、うなずいて、それ以後はただ先に立って歩くだけであった。

さて、環がそんな問いを投げかけたのは、いうまでもなく、眼は見えなくとも、南朝を護る隠し砦が蜘蛛の巣のごとく張りめぐらされていることを、全身を以て感覚したからだ。

「神器を狙う者は、あの大塔衆だけではない。――」

と、阿波座監物がいった。

「もし南朝さまが北朝へ神器をおゆずりなさることが明らかとなったときは、この隠し砦の武者たちのどれほどの人数が敵に回るか。はかり知られぬものがある」

そしてまた、猪丸塔五郎もいった。

「少くとも、あの大塔衆に対しては、われら以外に防ぐ者はあるまい。――」

天界魔界

ここは吉野のどこであろうか。

公式にはいま行宮は賀名生にあることになっているけれど――過去にはもっと北方のいわゆる吉野山に置かれたこともあり、また西方河内の住吉や金剛山にあったこともあり、またさらに山岳重畳たる東方の、伊勢との国境に近い入之波とか三の公などという奥に潜まれたという噂のながれた時代もある。

もとより北朝軍の追及を避けての移動だが、これは甚だ効果的であって、足利方にとっては変幻、吉野の逃げ水を追うような絶望感を抱かせた。

そして、ここは少くとも賀名生ではない。――そこはすでに越えて来たからだ。

いくどか鎧ずれのひびきとともに哨兵に誰何され、またぎぎっというきしみにつれて木戸や門をくぐり――二人の菊水党と服部三姉妹が、やっと、

「ここに控えておれ」

と、命じられ、黒い頭巾をとられたのは、緑の穹窿の中であった。

実際、そのように見えたのだが、むろんそれは四方と頭上をつつむ森の中の一画であった。あとで考えると、まだ若葉が萌え出すにも日のある季節であったから、そん

なはずはないのだが、事実彼らにはそう見えた。しかも葉がしげっていたかどうか、それもよく記憶にないほどなのである。それどころか、夜と昼の別さえさだかではない。夜であるはずはないが、とにかく灯がともっていたように思う。いや、たしかに前面の縁側の左右に、一本ずつの燭台が。

それだけだ。飾りとなっているのは。——その前面に、なかば樹々にかくされて見えたのは、黒木のままの建物で、その奥の御簾だけであった。

縁側には一人の公卿らしい老人が坐っていた。

「御前である」

うしろで、連行して来た武士がいった。すでに地に伏している声であった。

菊水党と三姉妹も、雷に打たれたように這いつくばった。あの御簾の奥にいますのが九十九代——後亀山天皇であることにまちがいはなかった。

「菊水のものよな」

声をかけたのは、縁側の老公卿である。

「吉田宗房じゃ」

神代のころから代々朝廷に仕えた家柄で、この人物が南朝の右大臣であり、かつ大黒柱であるということは世に聞えている。長い、無表情な、能面のような顔をしていた。

「なんじらの忠志、上聞に達したぞよ」

「へへっ」

「正儀の汚名そそぐは、ひとえになんじらの働きにあるぞよ」

阿波座監物と猪丸塔五郎はひたいを大地にすりつけた。それでも足りずに身もだえした。

「死すとも、南朝のおんため、神器を護れ」

「へへっ」

「お言葉を賜わる」

さて、そのあと、御簾の奥から御声が聞えて来たはずなのだが、いかなる御声であったのか、これもあとで記憶がない。ただそのとき、暗い天空から、ピーンカラカラ……と、何の鳥か、この世のものとも思われぬ音色のふって来たのをおぼえているばかりだ。

「苦しゅうない、菊水のものども、近う寄れ」

と、宗房はいった。ただならぬ顔色である。

五人は、ふるえながら這い寄った。——曾てこの菊水党の黒幕たる世阿弥が、「菊水党のことは南朝さまのお耳に達してある」といったが、おそらくその仲介者はこの右大臣吉田宗房であったのではあるまいか。その昔、その祖吉田定房は、後醍醐帝に

仕え、北朝に偽の神器を渡して天皇をぶじに脱出させたという離れわざをやったことがあるが、その裔である。

「……さて、神器のことじゃがな。これぞ南朝の大秘事である。なんじらを信じて申すが、もし外にもらそうものなら、黒癩白癩の冥罰、天より下ろうぞ」

背後にいる護衛兵らにも聞えないような低いささやきであったが、同時に、名状しがたい恐ろしい声であった。

「神器は、ここの内侍所にある――と、何ぴとも思うておるが、ここにはない」

「――え？」

「南朝のうちにも、いつそれを抱いて北朝へ走る者が出ないともかぎらぬからじゃ。それゆえ、まことの神器はほかにある。三カ所に分けて」

宗房はいった。

「御剣は、北の吉野山に」

「……」

「神璽は、東の吉野川の奥、川上なる村に」

「……」

「神鏡は南の十津川の奥、大塔村に」

「……」

「その詳しき所在はのちほど知らす。ただいまは、それを承わっただけでひとまず退りおれ」

「へへっ」

おそらく合図か何かしたのであろう。武者たちが立ちあがり、歩いて来て、「立て」と、まるで罪人のようにひき立てた。

ふたたび五人は頭巾をかぶせられ、そこをつれ出された。五人は――とくに三人の女は、わななきつづけていた。いうまでもなく、一天万乗の――しかも、これこそ天に二日なし、まことの帝に咫尺したてまつったという感動のためである。

ああ、もはや死するも何かあらん！

雲を踏むような思いは、決して頭巾で外界が見えないためではなかった。――しかし、やがてその耳にせせらぎの音が聞えた。

「……もしっ」

ふいに双羽が弱々しくいった。

「申しわけありませぬ。……吐きとうございます」

「なに？」

頭巾の中で、阿波座監物が驚いた声を出した。

「これほどの光栄を身に受けて、なんと吐気をもよおすとは。――」

「む、胸が一杯で」
と、環も切なげにいった。
「やむを得ぬ。頭巾をとってやれ。もうよかろう」
武者がいって、二人の頭巾をとった。林の中の、なかば草にかくれた冷たい流れが足もとにあった。二人がそこにひざまずくと、お鏡も何か訴えて、これまた頭巾をとってもらい、二人の姉と同様の姿勢になった。
しかし、三人の女は、吐くものが何もないようであった。
ただ、その声だけきいて、
「はてな？」
と、監物が首をかしげた。それから、
「恐れ入るが、ちょっと気にかかることが出来つかまつった。われらもこの頭巾、とってようござるか？」
と、ただならぬ声を出した。
頭巾をとられると、彼は三人の女のうしろにまわった。
「こちらをむけ」
ふりむいた三つの蒼白な顔を、深沈たる眼が凝視して彼は何やら口の中で声なくつぶやいた。突然、彼はさけんだ。

「や……そなたら……懐胎いたしおるな？」
飛び出すような眼であった。
「しかも、はや少くとも三月か四月――お不覚にしていままで知らなんだ！」
それでも、もともとなよやかな女たちで、しかもきものを着ているから、衛兵たちは彼女たちの姿に何の異常も認めることは出来なかった。が、阿波座監物は忍法おぼろ月を介して、まざまざとその妊娠月数まで透視したのだ。
彼はこの場所にはあるまじき声を発した。
「あろうことか、三人までも――いったい、だれの子じゃ！」
おとなしい双羽が、彼女とも思えないきっぱりとした、むしろ凄絶な声でいった。
「それはこのたびの御奉公とは何の関係もありませぬ。わたしたちは、いのちをかけて神器をお護りいたすだけでございます。たとえ、相手が何者であろうと！」

南風競わず――という言葉は、いま世にあるが、しかし自然の春風は修羅の俗界の上をわれ関せずと無心に吹いて、吉野の山々をみるみる青く染めてゆく。
いままで、どこで何をしていたか。
大和と紀伊の国境にちかい紀ノ川のほとりに、柳生三兄弟と大塔衆の牛袋兵斎は立っていた。

これまで、しかし活動していたのは兵斎だけといっていい。柳生三兄弟は動きようがなかった。吉野の護りのかたいことは、近づいてみて、肌でひしひしと思い知らされた。そして兵斎は、敵にわれらのことを探知されては万事休す、よいという日まで妄動をつつしむようにとかたく言いわたしたのだ。

「敵に知られれば万事休す、といって、菊水党は知っているではないか」

という疑問に対しては、

「いや、菊水党そのものが、南朝にあって公然その存在を誇示出来ぬ立場にある。また、きゃつらがわれらを防がねば、きゃつらの手柄にはならぬのでござる」

と、兵斎は答えた。

柳生三兄弟としても、神剣を奪う、その目的はようやくおのれらの心に確認しては来たが、しかしそれを防ぐ敵が伊賀三姉妹であるということは、何としてもその足を地につなぎとめるのをいかんともしがたいことであった。

さて、その春の夕暮。

「きょうごろ、網戸天杖が帰って来るはず。――」

と、彼はいって、この国境まで兄弟をつれて出てきたのであった。

いかにも天杖は半月ほど前、兵斎と密語ののち、どこへやら駈け去った。三兄弟は、彼がどこへいったのか、何のためにいったのかは知らない。

――と、西に沈みかかる太陽が、紀ノ川を一瞬、ぎらっと赤く燃やした。まるで炎のような街道の果てに、ふっと大小二つの影が現われた。

「帰って来た」

と、兵斎が眼をかがやかせてさけんだ。

なるほど、一人は網戸天杖だ。そして、それとならんで歩いて来るのは、小柄な――しかし、あきらかに女人であった。どうやら市女笠に、このごろではいささか珍しい虫の垂衣をつけているらしい。

「……はて？」

さすがに三兄弟が、まばたきもせず見ていると、二人は近づいて来た。それが、まるで流れるような、むしろ空中を漂うような早さだ。

「幸姫さまでござる」

と、兵斎がいって、ひざをついた。河原の上である。

相手は街道から河原に下りて来て、三メートルばかりの距離で立ちどまった。夕風がしずかに、笠のふちにぐるっと垂らした朱鷺色の薄衣をうごかしている。顔は見えない。しかし、それにしてもひどく小柄なようである。

「大塔の宮のおん曾孫姫であらせられまするぞ」

と、網戸天杖がいった。

その名には、記憶がある。いやそれどころか、曾て中条兵庫頭がいった。もし南朝が北朝に屈するようなことがあればとて、神器を北朝へ渡すことは相成らぬ、それは熊野におわす牢の姫宮のおん意志であると。——すなわち、このたびの大塔衆の悲願の根源こそこの牢の姫宮だ！

あっ、とは心中に思ったが、なお茫然としている三兄弟の眼に、そのとき虫の垂衣がはらりとひるがえった。朱鷺色に夕映えがうつって、それは火の花が咲いたようであった。が、それよりも、その中からちらりとのぞいた顔を見たとたん——がばと三人はひざをついていた。

見えたのは、十五、六の少女の顔である。それが。——

美しいなどいう形容では追いつかない。まさに人間世界のものではない。珠を刻んで、霞でぼかして、しかも月光がさしたようだ。一瞬の一瞥であったにもかかわらず、まるで眼でもくらんだように三人がひざをついたのも反射的であった。

「これが道中申しあげた柳生の者どもにござりまする」

と、天杖がいった。

虫の垂衣はまたとじて、かすかにうなずいただけである。——牛袋兵斎は、河原にひれ伏したままいった。

「諸般の情勢より見まするに、いよいよ南朝より神器を頂戴せねばならぬときが近づいたようでござりまする。されば、このたびわれらこの地まで出て参りましたなれど、吉野の護り、また神器の護りをうかがいますれば、実に容易ならぬことと改めて感じ入るばかりでござる。これまでですら、われら大塔衆すでに五人を失い、残るは拙者と天杖の二人のみ。……」

「……」

「これは、正直、予期の外でござった。しからば、あえてこの先を予期するに、われら両人の生命もまたはかりがたし。とはいえ、いのちを魔天に捧げようとも、神器は必ず奪って御覧に入れ申す。姫宮さまにいまおいでを願いましたるは、ほかでもない、それを手ずからお渡しいたさんがため」

「……」

「これ、柳生の衆、よいかや、その足、その手を失おうと、奪った神器は必ずこの姫宮さまにお渡しするのじゃぞ」

三人はがくがくとうなずいた。しかし牢姫さまはただしずかに垂衣を夕風に吹かせているばかりだ。その沈黙ぶりは異様なものがあった。

兵斎はまたいった。

「ところでふしぎなことがござりまする。ふと頭に浮かんだ疑いで、確証あることではござらぬが、神器は果していまの行宮に存在するや否やと」

柳生兄弟は啞然として兵斎の方をふりむいた。

「と申しまするは、いま行宮に入っておる菊水党の挙動を見てのことでござりまするが、きゃつらのようす、なにゆえか意外に落着き払い――」

「――あ、何か仰せられたいのでござりまするな」

網戸天杖が、ふいに兵斎をさえぎって、垂衣の方へ顔を近づけた。

薄衣のあいだから、白蠟の細工物のような手が出て、街道の方を指さした。

いままで旅人の影も見えなかったその道に、一人の老人が東から西へとぼとぼと歩いているのが見えた。腰に鉢をさげ、鉦を持ち、どうやら鉢たたきと呼ばれる乞食らしい。

「あれを呼んで来て――や、死人剣の占いを！」

天杖は愕然とした声をあげ、しばし夢幻のような垂衣を眺めていたが、たちまちその鉢たたきの方へ駈けていった。

すぐに彼はその乞食の老爺をつれて来た。腕をわしづかみにされた乞食は、おびえ切った表情で、しかしわけがわからず、キョトキョトとこちらの一群を見まわしている。

「これで、死人剣の占いを？」

天杖はいった。

市女笠がゆるやかにうなずいた。

次の瞬間――これまたわけがわからず、茫乎としていた柳生三兄弟が、いっせいにあっとさけんだ行為を天杖はあえてしたのである。すなわち、抜く手も見せず、彼はこの罪なき老人の脳天から斬り下げていたのだ。

死人剣の姫宮

「では、牢の御剣を」

と、網戸天杖がふりむいた。

すると――虫の垂衣のためによく見えなかったが、牢の姫宮がかすかに身動きしたかと思うと、垂衣のあいだから、一本の短い刀をつかんだ白い小さな手が現われた。

短い刀――しかし、短刀ではない。鍔はないが、柄から三十センチばかりで折れたままの刀だ。

「その昔、大塔の宮が鎌倉の土牢で」

と牛袋兵斎がおごそかにいった。

「逆臣淵辺伊賀に弑せられたまいしとき、宮が嚙み折られた凶刃があれじゃ」

その「太平記」の中の話は、柳生兄弟も知っている。大塔の宮が嚙み折られ、その

尖端が口の中に残ったということだが、それにしては残ったその刀が短か過ぎるなどとは、だれも考えない。三人とも、粛然とした。

しかし、いまやそれは「牢の御剣」なる名に変って、さて、それをどうしようというのであろう？

天杖はうやうやしくそれを受けとり、老人の屍骸のところへ戻った。そして舟馬たちが、ふたたびあっと顔をそむけるようなことをした。

彼は、唐竹割りにした屍骸の傷のあいだにもういちどそれを刺しこみ、こねくり返したのである。

すぐにそれをひき抜いた。むろん、刀は血にぬれひかっている。天杖はこれを牢姫の足もとに置いた。足もとというより、両足のあいだに。

このとき牢姫さまは、両足をややひらいて立っていた。

そして、虫の垂衣のため、おぼろおぼろとしてよく見えないが、どうやらわずかにきものをたくしあげたようだ。

はじめて、牢姫が何か祈るがごとき声を発したような気がした。しかし、柳生兄弟たちには何をつぶやいたのか、よく聞えなかった。

しかし、垂衣につつまれた小さな姿を、その一瞬、名状すべからざる妖気が彩ったのは彼らにも感じられた。このとき日は西の山脈に沈み、地は蒼茫と暗く、空のみ赤

いのに、この小さな女人だけ炎につつまれたように見えたのである。

——と、その足もとに何やらはじいた。赤いものが。

ぽとっ……ぽとっ……ぽとっ。

時間をおいて、ただ三滴。

「恐れながら、姫宮の御月水」

と、兵斎がささやいた。

三兄弟はもはや顔見合わせるゆとりすらない。——血は落ちた。「牢の御剣」の上に。すでに死びとの血に塗られた刀身に。

落ちるときはたしかに鮮血であったのに、それが刀身にはじくや、実に奇怪な現象が起った。そこに鮮麗な緑の斑点が生じたのだ。

「あれを以て占われる」

兵斎がいって、その方に歩み寄った。網戸天杖も近づいた。

牢姫は、市女笠をかたむけて、じっと見下ろしているようであった。柳生三兄弟は呪縛されたように、一歩も身動き出来ない。うすきみ悪さと、そしてその一画をつつむ厳粛さのために。——しかし、その距離を置いても、牢の御剣の上に緑の斑点がひとりでに蜘蛛みたいに這い、奇妙な図形を作ってゆくのが見えた。

緑の蜘蛛は静止した。

「三種の神器は行宮にない」

と、姫宮はいった。

何たる声であったろう。ひくい、けだるげな、かすれた声だ。にもかかわらず、男の耳に内部から粘りつくような——ほとんど淫らなひびきといっていい。その言葉の意味よりも、三兄弟はその声の魅惑だけで脳髄がしびれたような気がした。

「あ……やはり」

さけんだのは、牛袋兵斎だ。

「では、では、どこに？」

「死人剣の占いは、いちどに一つのことしか占えぬ」

と、牢姫はいって、かすかに笠を天杖の方へ動かした。

「けがらわしや、下民の血、早う洗ってたも」

刀のことだ、と気がついたのは、網戸天杖がその刀をひっつかんで紀ノ川の方へ駈けていったからだ。

「おお」

牛袋兵斎は虚をつかれたような表情をしたが、すぐにうなずいた。

「いや、しかし牢姫さまにおいでを願う気になったのは、やはり魔天におわす大塔の宮のみこころでござろう。このこと承わらねば、われら、かんじんのものがない行宮

を狙い、まんまと敵の罠に落ちるところでござった」

天杖が戻って来た。きれいに血を洗い流した牢の御剣をふいて、うやうやしく牢姫に捧げる。姫宮はそれを垂衣の中にしまいこんだ。

「さて、しかし、それがどこにあるか、死人剣の占いにおききするには、また一ト月待たねばならぬ」

と、兵斎はつぶやいた。

このときはその意味が三兄弟にはよくわからなかったが、あとになって、この奇怪な占いは、牢姫さまのいちどのおん月のものの際ただ一つのことしか占うことが出来ないということを知った。なぜそうなのか、あの三滴の血に、ただいちどの月水の精のようなものが籠っているのか、そのあたりよくわからない。

わからないといえば、しかしはじめからこの占法そのものがよくわからない。——何にしても、その占いをするために、罪なき人間の殺戮を、いとも無造作に命じるとは！　しかも、人を殺してその血を塗った刃に、おのれの経血をしたたらせて占うとは！　さらに、それを占う人が、いまちらと見たところでは、わずか年十五、六、その月のもののはじまってから、それほどの日を経ないであろう少女とは！

少女、しかし、あのかすれた声の何というなまめかしさ、いや淫らさであろう。この声を持ち、かかる占いをする人が、なんときくも尊き大塔の宮のおん曾孫姫という

のだ。

「では、それまで待ちつつ、敵の動静を見張るとしよう」

と、兵斎はいって、柳生兄弟を見下ろした。

「姫宮の仰せには従われる喃？」

「――はっ」

三人は、文字通り夢中で河原にひたいをすりつけていた。

うすきみ悪さも感じない。またこのお方の高貴さにひれ伏したわけでもない。それは彼らの理性を越えた行為であった。彼らはこの姫宮を一目見たときから魂を奪われてしまったのだ。

牢姫は虫の垂衣の中でつぶやいた。

「そもそも、南朝が北朝に降られるということも、もとは姫の死人剣の占いから判明したことなのじゃ」

兵斎はそういって、しばし黙りこみ、またつけ加えた。

「その上、牢姫さまには天稟の御剣士であらせられる。――おそらく中条兵庫頭どのも手においかねるほどの」

――吉野山へゆく必要はないのか？

――川上へは？

――また、大塔村へは？

双羽、環、お鏡はいくどか不安げに、またいらだったように菊水党にこうきいたが、そのたびに阿波座監物と猪丸塔五郎は抑えた。

待て待て、われらの存在を敵は知っておるのでござる。しかも、どうやらいまのわれらの動きをじっと見張っておるような気がいたす。へたに動けば、かえって「痛い腹」を探られる。それより、何くわぬ顔でからっぽの内侍所を護って、敵の鼻をあかすこと、それこそ楠木流の兵法。

いわれてみれば、その通りかも知れない。

彼らは一応右大臣吉田宗房の知り合いの山伏、またその所縁の娘たちとして、吉田家に奉公に来たものとしてつくろっていた。ただし、監物と塔五郎は、ほとんどそこにいたことがない。敵を探るという仕事もあるが、また南朝のおひざもとで大きな顔の出来ない楠木正儀の一党というはばかりがあるからだ。ただ、この行宮にいて、思わざる珍事にも出逢った。思わざる――いや、正確にいえば、大塔衆以外にも神器を狙う者があるということは、以前にきいていたことだが。

すなわち、一ト月ほどのあいだにも、二組も、闇夜、内侍所に忍び寄って来た曲者を捕えたのである。

それぞれ数人ずつの集団であったが、一つは警備の侍たち、一つはたまたまいた監物たちが捕えた。警備の侍たちにも捕えられる程度の、つまりそれほど強敵ではない曲者であったが、その頭巾をとってみて、

「や……うぬらは？」

と、吉田宗房が驚きの声をあげたところを見ると、それは宗房もよく知っている——すなわちげんに南朝方に仕える何者かであったらしい。

「南朝も内に入ってみれば、いろいろの派閥、また思惑がある。いわば呉越同舟よ」

と、監物は嘆じた。

「かくてこそ、われらの来た甲斐があるわけじゃ」

と、塔五郎もいった。——曲者たちはどこかへ曳かれていって、あとはどうなったか知らない。

「これでは、大塔衆も容易に近づけまい」

と、塔五郎が鼻をうごめかしたとき、監物はくびをふった。

「いや、きゃつらがこの内侍所へ近づいて来ないことこそ恐るべし」

「そういえば、その通りじゃが」

「それに。——」

首かたむけて、阿波座監物がこういったのは、ここへ来て一ト月ちかくたってからのことであったろうか。

「敵には、新手が加わったようだぞ」

「えっ、何者が？」

「女じゃが」

「女。——」

「しかも、背丈から見て、十五、六の小娘」

「はて？　そんなものは京の中条邸にも見かけなんだぞ。それが敵か」

「実は、そのあたり、よくわからぬ。——」

監物はあいまいな顔をした。

「その少女が、いつもきゃつらといっしょにいるわけではない。二、三度ちらと見て、これは仲間じゃと思うたが、また幻のように消えてしまった。正体もわからぬ。まさに幻のごとし。——」

「何をいっておるか。監物らしゅうもない大袈裟な。たとえそれが何者であろうと、たかが十五、六の小娘とやら、何を恐れることがある？」

「そう思うが、一瞥して、人間ならぬ幻のような姿と見えるだけに、かえって何やら気にかかる」

表情と同じく、その報告も雲をつかむようにあいまいだ。さしもの菊水党にもその

素性をつかみかねる相手であるらしい。

柳生の男たちの中に女ときいて、双羽たちは顔見合わせたが、これまた思い当るものはなく、従ってそれ以上何の意見も出しようがなかった。

そして。——

「ついに、敵は知ったぞ」

監物が顔色をやや変えて駈けつけて来たのは、それからさらに半月ばかりたってからのことであった。息をしずめて、

「いや、知ったらしい。——」

「何を知ったのじゃ」

「敵は吉野川沿いに、東へ向った」

「とは？」

「ゆくてには、吉野山がある。また、さらに奥深くゆけば川上村がある」

「やっ。……それで敵のすべてがか？」

「いや、柳生又十郎と網戸天杖の二人だけじゃが」

「おお、そりゃ捨ておけぬ。いずれへゆくか、ともかくも追おう」

「待て、みなが出払ってこっちがからっぽになったあと、あとの連中に南の大塔村へ抜けられてはこまる。こちらも人数配分の必要がある」

「わたしがゆこう」

しずかに、決然とお鏡がいい出した。

「わたしも」

環がいう。双羽もうなずく。

阿波座監物はちらっと二人を見たが、まだ何やら思案の顔であった。

「何のために、この際、きゃつらが吉野川沿いに東へ向ったか、何ともくさいが、しかしそれはそれとして不審な点がある。御剣が吉野にあるとは、敵にわかるはずがないからじゃ」

「だから追おうといったのではないか」

猪丸塔五郎はいらだった。いまにも、駈け出しそうな形相だ。監物がうなずいた。

「よし、ともかくもお鏡どのとおぬしがいってくれ」

「心得たり」

監物は改めてお鏡を見やった。

「ついにその時が来たようじゃな」

「……」

「お鏡どの」

「……」

「ひょっとしたら、おまえさまは、柳生又十郎と夫婦で忍剣の果たし合いをせねばならぬかも知れぬぞ」

お鏡は息をとめ、眼をとじた。

「ほかの環どのか、双羽どのにいってもらった方がよいのではないか」

「いいえ、わたしがゆく」

お鏡は眼をあげ、さけぶようにいった。可憐な顔だちに似ぬ悽愴な眼の色だ。それは、出立した敵が柳生又十郎ときいた刹那から彼女の胸に燃え立った覚悟であった。

「わ、わたしでなければ。……このわたしでなければ、あのひとの相手に立つ者はないのです」

「その腹のややの父親は、又十郎ではないか？」

ふいに猪丸塔五郎がいった。じいっとお鏡の腹部に吸いつけられた眼は、あきらかに残忍のひかりをたたえている。——常人の眼にはまだよくわからない。しかし、いうまでもなくもう彼らは知っている。

お鏡は身もだえした。

「そんなことは、何の関係もありません！」

「そうじゃろう、あのきくもかしこき天意を承わった上は。——大義親を滅すとはまさにこのこと」

塔五郎はうす笑いした。

「後代にまで伝うべき伊賀者の忠節、天朝の御見に入れるはこのときにあり。——その証しのために、かえっておまえさまがゆかれる方がよいかも知れぬ」

そして、丁と刀の柄をたたいた。

「よし、きゃつらが吉野山にゆくか否かは知らず、これを機に、おまえさまといっしょに、誓って逆賊柳生又十郎を討ち果たそう」

お鏡よりも、双羽と環の方がふるえあがった。お鏡はふるえてはいなかったが、髪はそそけ立ち、顔色は蒼白であった。まわりが爛漫たる春色の山気だけに、その蒼白さがいっそう浮きあがって見えた。彼女はすでに胎動をおぼえはじめているのであった。

春爛漫。——修羅の人の心は知らず、吉野にはいまやうるわしき春は来て、凝然と立つお鏡の姿には、はや二片三片の花びらが吹きめぐっているのであった。

菊水党猪丸塔五郎

「お鏡どの」

「え。——」

「敵は柳生又十郎じゃ」
「わかっています」
「情報によれば、もう一人、網戸天杖なるやつがついておる。これはわしが引受ける。何なら、又十郎もわしが引受けてよいが、しかし、ともに綸言を承わった上は、お鏡どのが又十郎を討ち果たされることが望ましい。それでこそ忠の道が立とうというもの」
雨の中を歩きながら、猪丸塔五郎がいう。
「しかし、お鏡どのに又十郎が討てるかな?」
雨はけぶるような春雨であったが、さすがに濡れっぱなしでゆく行人はない。塔五郎は平気で歩く。やむを得ず、お鏡もそれについて歩く。
やむを得ず?——いや、これは悲劇の待つ吉野山への道であった。賀名生からいったん五条へ下って、東へ、吉野川沿いに歩きつづける。前途に悲劇の待つのを知りつつ。——それどころか、その悲劇をみずから起すために。
その思いと、また猪丸塔五郎のつぶやきのために、お鏡もまた雨を意識しない。だいいち、先へいった柳生又十郎と網戸天杖から御剣を護るためには一刻の猶予も許されないのだ。
「きゃつ、奇態なやつだ。考えると、天杖よりもふしぎな若者だ。なんときゃつが、

板曳民部、切畑彦兵衛……それにどうやら八葉寺隼人まで討ち果たしたらしいふしがある。われら七人の菊水党のうち、なんと三人までがあの青二才に討たれるとは！　いちばん弱そうなあの若僧にしてやられるとは！　いくら考えても、そこの道理がわからぬ。おまえさまにはおわかりかな」
「わかりません」
お鏡はいった。彼女らしくもなくいらだった眼の色であった。何より、ねちねちと執念ぶかく、いつまでも同じことを繰返している塔五郎の声がたまらない。
「けれど、わたしが討ちます。もし又十郎どのがどうあっても御剣を奪おうとするならば。……わたしなら」
「夫婦相撃の幕あがる、か」
と、塔五郎はいった。さすがにお鏡は息もつまった表情になった。——塔五郎はなお残酷な言葉をつけ加える。
「その腹の子の父を討たれるか」
お鏡の顔は紙のようであった。
しかし猪丸塔五郎の語韻には、ふだんの嘲笑の感じはない。先刻からのつぶやきも、お鏡に話しかけるというより、おのれの胸にいいきかせているような——むしろ厳粛なひびきがある。

「目的のためには万全を期せねばならぬ。柳生又十郎を討つには……どうであろう？おまえさまの腹に又十郎の子があるということを、きゃつに知らせたら？」

「そんな必要はありません！」

お鏡は悲鳴のようにさけんだ。

「おそらく又十郎はひるむであろう。そこを討つのでござる」

塔五郎は、彼女のあえぎなどとんと鼓膜にひびかぬ顔つきでいった。恐ろしい思いつきであり、恐ろしい調子であった。

「わたしは、そんなことはいわない。口が裂けても。――」

「大義の前には私心を許されない」

「私心ではありません。そんな必要がないのです」

猪丸塔五郎は黙ってお鏡をふり返った。

小男だ。お鏡よりほんの少し高いばかりの背丈だが、いまは亡い菊水党をもふくめて、精悍さという点では中で一番と思われる。名は猪丸だが面貌は狼に似て、精悍というより凶暴悽惨の気が漂っている。

彼はその鋭い眼を、お鏡から背後に移した。山蔭に竹藪がけぶっていた。

「あそこへゆかれい」

と、彼は金剛杖をあげて指さした。お鏡はめんくらった。

「何をするのじゃ」

「まず、あそこへ」

そして彼はその方へ歩き出した。

お鏡はけげんな表情でそのあとに従った。彼女にそうさせる気魄のようなものが塔五郎にあった。

塔五郎はしかし雨の藪をつきぬけてゆく。

そこに小さな沼が鉛色にひかっていた。沼というより、水たまりだ。塔五郎はその中に入った。水は足くびあたりまでしかなかった。それを彼は法螺貝で汲み出しては外に捨てた。次にまわりの泥を金剛杖でかき寄せては流しこむ。

この作業が四半刻もつづいたろうか。先を急ぐはずの旅なのに、いったい彼は何を始めたのであろう？　茫然とお鏡がそれを見まもっていたのは、憑かれたような猪丸塔五郎の動作にあっけにとられたのと、それに――彼女の心の底を、やはり吉野へゆくのをためらう苦しみが刻んでいるゆえであったろう。

塔五郎は沼の表面を金剛杖を水平にしてならした。それはぺったりと、絖でも張ったようになった。

「お鏡どの。……恐れ入るが裸になって下されい」

と、彼はいった。お鏡はわれに返り、ぎょっとした。

「何をなさる」

「案じられるな、拙者に私心はない」

――曾てこの男は、京で娘たちを犯そうとしたという。決してゆだんの出来る男ではないが、しかしこういったときの塔五郎の眼には、ほんものの修験者のような森厳なひかりだけがあった。

「神器護持のための忍法でござる」

「忍法。――」

「御協力を願いたい。この沼の上にうつ伏せになって、半分身を沈めていただきたいのだ。ほんの、三つか五つ数えるだけでよい。――」

「？」

「前途に必死の大事を抱え、まさかこれしきのことまでいやとは申されまいな？」

まさにその通りだ。お鏡にとって抵抗出来ない塔五郎の言葉であり、かつ迫力であった。数分ののち彼女は、うなされたような顔で衣服をぬぎ去っていた。

「ふうむ、六月か」

くいいるような眼を腹部に注がれて、お鏡の蒼ざめた肌はぽうと赤く染まった。

「そこまで出来るか？　出来ぬか？」

塔五郎はわけのわからない言葉をつぶやいたが、すぐに、

「では、ござれ」

と、彼はさきにまた沼の中へ入っていった。ただし、こんどは沼のふちを遠回りに。

「入って、そこの金剛杖のところから、ゆるりと伏されい」

向うから、両腕をさしのばした。――お鏡の入った沼の葭の前に、金剛杖が横たえてあった。それは沈みもせず、泥の上に浮かんでいた。

いったいこれが何を意味するのかは知らず一刻も早くこの作業をすませたく、お鏡はゆらりと前へ倒れかかった。その手を塔五郎の腕が受けとめ、そのまましずかに泥の上にうつ伏せに横たえた。銀の霧たちまよう春の沼に、雲が映ったような白いまぼろし。

「一つ……二つ……三つ……」

わずかに浮かんだ耳に塔五郎の声がひびく。

「四つ……いま引き起して進ぜるが、膝をつかれな。拙者におまかしなされ、五つ！」

同時に彼女のからだはまたゆらりと持ちあげられ、微妙な弾撥とともにもとの位置に彼女は立っていた。その前に人型がくっきり残っているのに、ふしぎに彼女の顔やからだは油をぬったように見えるだけであった。

「かたじけない。……しばらくあちらで休んでおられい。雨に打たれておれば、すぐ

に泥はきれいに落ちるでござろう。……いや、拙者が合図するまでこちらは見られぬように」

といって、猪丸塔五郎はまた沼のふちをこちらに戻って来た。

それから自分も山伏の衣服をぬぎ出した。彼は何をするつもりか。好奇心よりもうすきみ悪さ、それよりも名状しがたい恐怖にとらえられて、お鏡が見たのはそこまでで、言われた通り反対側をむいてふらりと立っていた。

まことに彼女は見なくてよかったろう。

猪丸塔五郎は裸になってまた沼に入り、金剛杖のラインに——お鏡がいま立っていた位置に直立した。泥に残る女人の人型をじいっと見下ろしているうち、その男根が小男なのに常人の倍はあるそれがみるみる聳立して来たかと思うと、ビューッと白濁したものが噴出した。

そこから放出されるその色調の液体とは精液以外に考えられないが、しかし奇怪なことはそれが線条ではなく、噴霧器にかけたような白い霧となって、前面の沼の人型いちめんに噴きつけられたのである。

この噴射が終るや否や、彼はくるっと反対側に向き直り、頭を上下に強くふった。塔五郎は山伏らしく、髪を総髪にして、肩まで垂らしている。その髪がぱっとうしろからはねあがって、顔の方へかぶさった。

もし、このときその背後から彼を見ていた者があったとしたら、その人間は恐怖のさけびをしぼり出していたであろう。髪をふりあげた彼の後頭部からうなじにかけては、まったく毛がなかったからである。しかも、決して禿げているのではない。——頭皮のみならず、そこにはぶよぶよした肉があって、しかもそのあたりに傷痕のような、皺のようなものがくびれこんでいて——おお、どうやらそれは人間の眼鼻口のようではないか！

そのまま塔五郎は仰むけに倒れた。——まるで胸に見えない糸をつけているかのごとく、ゆっくりと、泥しぶきもあげず。

沼の底にくいこんだ足の指が鉤にでもなっているのか、実に驚くべき体術であった。

そして彼は、お鏡の残した泥の鋳型の上に、仰むけに寝そべったのだ。お鏡の場合とちがい、何の支えもないのに、彼はからだを半ば浸したまま、それ以上沈まなかった。

「一つ……二つ……三つ……」

先刻とは一変して、あきらかに必死の念力こめた声に、禁制も忘れてお鏡はふりむいた。

「四つ……五つ……六つ……七つ……忍法半陰陽！」

同時に塔五郎はにゅーっとまた立って来た。泥の中に直立したまま、彼は顔にかぶ

さった髪を両手でかきわけた。にやっと笑った塔五郎の顔が現われた。

それから彼は、またくるりと反転した。つまり、お鏡の方に、背中を見せたわけである。

「……あっ」

たまぎるようなさけびを彼女はあげていた。

そこには裸身の自分が立っていた。——そんなはずはない。自分はこちらの葭の陰にいる。が、そちらの沼の中に立っているのもやっぱり自分なのだ。

見るがいい、その眼、鼻、口、彼女そっくりの顔が出現し、そればかりか、むっちりと盛りあがった二つの乳房、またなまめかしくふくらんだ腹部まで、寸分変らぬもう一人のお鏡が。——先刻までの、雨に洗われる以前の彼女と同様、その肌はうすい油を塗ったようだが、それでも本来の猪丸塔五郎よりは白い。

「これは、はじめてお目にかけました喃」

可憐な唇がうごいて、お鏡の声でいって、それからにいっと笑った。なんと、白い米粒のような歯までである！

古代ローマに、ヤヌスと呼ばれる神がある。前と後に二つの顔を持った双面神である。それがここに出現した。

忍法半陰陽——と、たしかに塔五郎はいったようだ。ふつう半陰陽とは男性とも女性ともつかない中間の奇型の性器のことをいうのだが、表が男性で裏が女性というこの個体もまさしくこれまた半陰陽の名にそむかない。

それにしても。——

伊賀にとりついた菊水党が忍法なるものを教えこもうとし、彼ら自身ししとして研鑽していたことはお鏡も知っている。いや、京にいるころはいっとき敵としてその片鱗をも見た。が、よくもまあこのような途方もない術を体得したとは！　猪丸塔五郎が先刻、「そこまで出来るか、出来ぬか？」とつぶやいたのは、ふくらんだ腹の複写のことでもあったろうか。またそのあと泥の上に噴きつけた乳色の液体は、彼の筋肉をとろとろに造形し易いものに変質させる効用を持っていたのであろうか。それはお鏡は知らないが、何にしてもただただ驚倒のほかはない。

彼はお鏡の顔と姿のまま、岸へ上って来た。何たること、それは背面歩きのはずなのだが、ふつうの歩行とまったく同様であった。

恬然として衣服をつけた。ぱっと頭をふると、髪が躍って、もとの通りになった。そこに立っているのは、これまたもと通りの猪丸塔五郎であった。けれど。——

あの背中には自分がいる！

吐気をおぼえるような気持でそこに金縛りになっていたお鏡は、突然べつなもう一つの恐怖にとらえられた。彼女はさけんだ。

「と、塔五郎どの……そんな姿を作って、これから何をしようというのじゃ」
「それは敵次第」
と、塔五郎はおちつきはらっていった。
「また、味方次第。……では、参るぞっ」

走れば疾風のような猪丸塔五郎の足であった。女の足、しかも身籠っている女の足などに斟酌はない。

吉野川の右岸、また左岸に飛び移りつつ東へ走る。

それをまたお鏡が必死に追ってゆくのは、もはやおのれの聖なる使命のゆえではない。塔五郎を一人で先にやることの恐怖のためだ。——それにしても、彼女がともかくも彼に遅れなかったのは、京以来のきびしい剣法修行のおかげであったろう。

……奈良朝以前は、吉野山といえば吉野の山々ということで、特定の山ではなかったが、役の行者がその一峰金峰山の山上ヶ岳をひらいて修験の道場としてから、ふつう吉野山といえばこの一帯をさすことになった。

その山上ヶ岳の麓ちかい一角に、奈良大仏殿につぐといわれる壮大きわまる蔵王堂が建てられ、これに入る三門の一つ、仁王門に春の黄昏が落ちかかっていた。

そのまわりの地上に、いまを盛りの桜が雲のようにめぐっている。

「来たぞっ」

天空で声がした。——いやその仁王門の屋根の上だが、そこからのぞいた二つの顔も卵ほどに見える高さだから、だれも気がつかない。いや、そんなところに上るやつがあろうとは想像のしようもない。

しかし、これは猪丸塔五郎とお鏡であった。

いつ追いぬいたのか。——ただ塔五郎のあとについて走っただけだからお鏡も知らないが、しかし北からこの仁王門めざして上って来る二つの影は、たしかに柳生又十郎と網戸天杖であった。

「きゃつら……やっぱり御剣を狙って来たな」

塔五郎はつぶやいた。

「頭を沈められい。……こちらを見あげておる」

二人は門の屋根の反対の勾配へ身を伏せた。

「いや、ただ門の大きさに驚いておるだけじゃ。……よし、おやりなされ。使いようはかねて伊賀で伝授したはず」

どこからか塔五郎はスルスルと二本の矢をとり出して、その一本をお鏡に渡した。

「千早の破魔弓」

伊賀で伝授される以前から、彼女は京の五条の橋の下でこれを見ている。あのとき

も又十郎を狙った菊水党の魔弓、いや腕と口とに弦を張った弓なしの矢、これで十数メートルはふつうの弓と同様の速度で飛ばすことが出来る。

「右が柳生又十郎、いざっ」

空のうす闇の中にも、お鏡の顔は真っ蒼であった。

大塔衆網戸天杖

——びゅるんっ。

お鏡の破魔弓の弦が鳴った。矢は地上めがけて射出された。

わずか十数メートルの距離である。弦音と矢の飛来は同時のうなりで、しかも地上は薄闇であった。何びとも見えなかった。

しかるに。——

その矢を射られた影はのどもと一メートルにして白刃をひらめかし、みごとにこれを切り捨てたのだ。

「しまった！」

第二の矢を、左の影に向って弦を切ろうとしていた猪丸塔五郎が舌打ちした。

「あれは、又十郎ではない。網戸天杖じゃ！」

「手——手もとが狂ったのですっ」

お鏡がさけんだ。彼女の破魔弓は、塔五郎に命じられた右の影を射ずに左の影を射たのである。大塔衆網戸天杖ならば、弦音をきいてから一瞬に矢を切り捨てることもあり得る。

猪丸塔五郎はぎらと疑惑の眼でお鏡の横顔を見た。しかし、さすがの彼もそれ以上お鏡を追及するいとまがなかった。

「又十郎どの、隠れられい、あの桜の蔭へ！」

地上でそんな声が聞えるや否や、右の影がその方へ三、四メートルも転がったのは、おそらくつき飛ばされたのだろう。つき飛ばした影は、そのまま白刃をひっさげて、流れるように仁王門の方へ駈けて来た。

さらに、門の内側に入り、見あげて吼えた。

「おう、菊水党か。……やっ、お鏡どのもおるな？」

黄昏ではあったが、こちら側の勾配にいる二人はまる見えだ。

「して見ると……死人剣の占い通り……神剣はこの吉野山の如意輪堂か！」

網戸天杖のこの奇怪なうめき——死人剣の占い云々の意味を考える余裕は、塔五郎になかった。

「きゃつ、頼み申すぞ！」

塔五郎は矢の束をお鏡におしつけ、天杖にあごをしゃくると——上半身ぱっと肌ぬぎになり、その矢の一本ひっつかみ、かつ金剛杖を抱いて、高い仁王門の屋根からまっ逆落しに落ちていった。——むろん、彼はその甍の下に、実に跫音もたてず、猫のように立っている。

「……ほ」

網戸天杖は笠の下から眼をまろくした。中条道場の高弟たる彼も、この体術の異常性には息をのんだらしい。

そのまま数歩すざり、猪丸塔五郎は門の真下に立っていた。夕暮の上、その位置なので、影は朦朧としているが、上半身裸になり、両腕をふりかざしているのは見える。左腕には一本の矢、右腕には金剛杖を。剣を以てしては、飛来する矢さえ切り落す網戸天杖が、「う?」と口の中でうめいたきり立ちすくんだ。

相手が何をしようとしているかわかってうめいたのではない。どうやら矢を投げ、金剛杖を振り下ろす構えではあるらしい。が、矢は逆手に握っているのに鏃は上部についているし、金剛杖の尖端には鉤様の金具がついているようだ。そして、そんなことより、剣法者網戸天杖だけに感得出来る、しかもえたいの知れない恐ろしさが相手の姿勢にあった。二つの足首から先は、正確に真横に向けられていた。

強いていえば。——

猪丸塔五郎がほんとうにこちらを向いているのか、という奇怪な疑いを起させるようなものが。——あきらかに彼の狼みたいな顔はこちらを向いているのに。

が、いつまでもそこに棒立ちになっている網戸天杖ではない。

「……よし!」

つつ、と彼は足を踏み出した。塔五郎がさけんだ。

「破魔弓っ」

とたんに天杖の頭上から、びゅるんっとまた矢が飛来し、ばしっと彼はそれも切り捨てた。もとより仁王門の上から射るお鏡の矢であった。

「頼む、又十郎どのっ」

さすがの天杖も、こっちも応援を求める声をあげた。

門の向うから柳生又十郎が馳せ寄って来るのを見たからだが、いったんつき飛ばした又十郎がまた駈けて来たのに助勢を呼びかけるほどの危機をおぼえた。矢を切った瞬間、塔五郎が踊りかかって来る気配を感じたからだ。

猪丸塔五郎の動きかけた気配はとまった。が、背後から駈け寄って来る又十郎の跫音は聞えているはずなのに、彼はふりかえりもせず、依然として同じ姿勢であった。

真一文字にその背に殺到しようとした柳生又十郎の足もとまった。そして彼はおか

しなさけびをあげたのだ。

「……お鏡！」

おかしな——というのは、彼が屋根の上を見ず、猪丸塔五郎の背中を見てそんなさけびをあげたことであった。

又十郎は屋根の上にお鏡がいることさえ気がつかない。たったいま網戸天杖につき飛ばされて転がったものの、天杖の「……お鏡どのもおるな」という声をきくや否や、夢中ではね起きて、まっしぐらに駈けつけて来たのだ。

いちど立ちすくみ、又十郎は纏綿たる声をあげた。

「お鏡、夫のおれに刃向うか？」

——あとになって見れば、実に相手の衣裳は奇態なものであったと思う。お鏡は上半身裸体となり、下半身は山伏の衣服をつけていたのだから。

が、薄闇の中にひかるように浮かんでいるのは、まさにお鏡の顔であり、かつ真っ白な二つの乳房であった。ただそれはまぎれもなく可憐なお鏡の顔でありながら、それは彼がいままで見たことがないほど凄艶なものであった。

「又十郎どの」

と、お鏡はいった。

両腕に矢と金剛杖をふりかざしたまま。——彼女がこんな奇怪な構えをとることがあるだろうか。しかし又十郎からすれば、その矢と棒はいまにも彼の方へ飛んで来るかに見えた。

「わたしの腹が見えますか？」

「なに？」

「ここにはあなたのお子がいるのです。そのわたしを、斬ることが出来ますか？」

「——又十郎」

天杖が向うで吼えた。又十郎と呼び捨てにするほど、彼も惑乱していた。彼には又十郎が何を見ているのかわからない。しかし猪丸塔五郎がその背中で、お鏡の声で何やらしゃべっているのは聞える。

「な、何をしておる？」

「お鏡でござる。——」

「なんだと？」

「ここにおるのはお鏡でござるが」

「ば、ばかな！」

天杖は近づいて来ようとした。ばかな、とわめきはしたものの、彼も先刻から相手の奇妙な感じには気がついている。いや、お鏡の声がその人間のうしろ側から聞える。

——いぶかしさにたえず、その接近は彼らしくもなく不用意であった。

「のう……又十郎どの、この腹をよう見てたもれ」

やさしい女の声に天杖も釣られ、三メートルばかり近づいた。とたん——うなりをたてて金剛杖が振り下ろされた。

不用意とはいっても、刹那の防禦の出来ぬ天杖ではない。——が、それでもこの場合、金剛杖の襲撃をふせぐことが出来なかった。なぜなら、その杖の尖端から金具だけがビューッと飛んで、天杖の右の下膊のまんなかあたりを打撃したからだ。さしもの天杖も目測を誤まったのもむべなるかな。

「あうっ」

鮮血とともに、天杖の刀を握った腕は大地に落ちた。

金具は、飛んだのではなかった。三十センチばかりの皮紐に結びつけられていた。皮紐は金剛杖の内部に仕込まれてあったのだ。そしてのびた金具はまるで手斧のごとく天杖の腕を切断し、はねあがると、切られた右腕をつかんだ天杖の左腕を、同じ位置でこれまた切断した。

妖しくも恐るべき武器。——猪丸塔五郎の独創にかかる「金剛の振斧」という。

「一息には殺さぬ。……御剣がここの如意輪堂にあるとなぜ知ったか、達磨にしてきいてやろう」

金剛の振斧はまた振りあげられた。手斧の刃のごとき鉄金具はふたたびその尖端に

密着していた。

「あなたもです——又十郎どの」

これはお鏡の声で、又十郎にいった。

又十郎にも、向うの網戸天杖に異変が起ったのはわかった。血の色も見えた。しかし彼がどうされたのか、わからなかった。天杖は立ったままであったし、お鏡の矢は依然としてこちらにふりかざされていたし、それよりも——又十郎は、彼女の腹部に眼を吸いつけられていたからだ。ムッチリとふくらんだ腹に。

——あそこにおれの子がおると？

「神剣護持のためには、これぞ親を滅す。お覚悟なされませ！」

金剛杖はふたたびお鏡の手にふりあげられていた。

背面に対しても、ほぼ前方の敵同様の動作でたたかい得る関節を作りあげた忍者猪丸塔五郎であった。

又十郎が馳せ寄ってからこのときまで、わずかに、二、三分。

「斬りかかれ、又十郎どのっ」

両腕から血の滝を落しつつ、天杖は絶叫した。この重傷を受けながら、彼はなお立っている。痛苦よりも無念さに身もだえして、

「そやつ——お鏡ではない。菊水党の猪丸塔五郎じゃっ」

「――ば、ばかなっ」

こんどは、又十郎がさけんだ。

そのとき、すぐ頭上で帛を裂くような声がながれた。

「又十郎どのっ」

まごうかたなきお鏡の声であった。柳生又十郎は文字通り仰天した。仁王門の屋根は二重になっている。

その下の小屋根に、彼はお鏡の姿をちらと見たのだ。

いちど大屋根で天杖に矢は投げつけたものの、そのあと彼女は――とうてい塔五郎のごとく、いっきに地上に飛び下りることなど出来ず――まろぶように、何とかそこまで伝い下りていたのであった。

もっとよく見るために飛びずさった――というより、のけぞり返った又十郎の鼻先をかすめて、ぶんと、鉄金具がうなり過ぎた。思いがけない又十郎の動作のために、こんどは塔五郎の方が目測を誤まって、ト、ト、と前によろめき出た。

「そうか！」

又十郎は絶叫した。

はじめて彼は、眼前のお鏡が菊水党の化けたものであることを知った。本来ならとうてい信じがたいことだが、すでに彼は斑鳩の里で、女どころか大女陰に変じた菊水

党をげんにその眼で見、かつそれを斃している。

「わかったか」

猪丸塔五郎は立ち直り、くるっと反転しようとして、

「――や？　あれは？」

と、そのままのび上がるような姿勢になった。

「あれは何者だ？」

塔五郎は、天杖の方を見ていた。腕なしの網戸天杖はようやくがくりと両ひざをついている。塔五郎が見ているのは、その頭上を越えた彼方であった。

境内の桜の下に――もうほとんど闇といっていい空間に、じっと立っている小さな女の影を彼の眼は見たのであった。小さい――しかし、一人前に市女笠をかぶり、虫の垂衣を垂れている。たんなる参詣の少女ではない。その影は自若としてこちらの死闘を見やっているらしい。

「やあ、あれが監物のいった妖しの小娘か！」

さけぶと彼は、ビューッと左手の矢をその方へ投げつけた。

それはまるで破魔弓で放たれたかのごとく飛んでいった。――が、その影がちょっと身動きすると、はらりと動いた垂衣にふり払われ、まるで麻幹みたいに落ちてしまった。

それを見て愕然としつつ、反面の「塔五郎のお鏡」は、又十郎めがけて金剛杖の振斧をふり下ろしている。逆の方向に矢を投げるのとほとんど同時で、こんなわざは彼をのぞいて天下に一人もあるまいが、それよりもこれは柳生又十郎の突撃に狼狽したからでもあった。

猪丸塔五郎はこの期に及んで、又十郎を見そこなった。この美少年ともいうべき青年が――味方の三人を斃した男とは知りつつも――こんな猛烈な突撃をして来ようとは思いの外であった。なぜなら、反面のお鏡は又十郎に対して必殺の構えをしていたからだ。相手の跳躍はほとんど無鉄砲ですらあった。

――女！

その姿に対しては、恐ろしく強気な又十郎であった。

金剛杖は又十郎の肩を打った。振り出された振斧は、彼の背にくいこんだ。――が、又十郎はこちらに跳躍して来たのだ。杖も斧もその力は半減し、それがともかくも又十郎を打撃すると同時に、その刀身は「塔五郎のお鏡」の乳房のあいだをまっすぐに刺して、「塔五郎そのもの」の胸のまんなかへつき出していた。

「お鏡」

前と後の二つの口から、血泡を噴きながら塔五郎はさけんだ。

「みことのりを忘れるな！」

文字通り血を吐くさけびをあげて、猪丸塔五郎はどうと崩折れた。刀は又十郎の手を離れ、そのからだを目刺しのごとくつらぬいたままであった。

「お鏡、お鏡」

手から離れた刀はおろか、いま斃した菊水党のことすら眼中にないかのごとく柳生又十郎はふたたび仁王門の外側へ走り出た。

「おれの子を……身籠ったというのはほんとうか」

仰むいてさけんだ。

「み、見せてくれ、腹を。――」

これに対してお鏡がどうしたか――門の内側からは見えない。ただ又十郎がそっくり返るような姿勢になり、仁王門の小屋根を飛び出すような眼で見つめている姿が見えた。

「又十郎どの」

やっと網戸天杖が呼んだ。

「血を、とめて下され」

流血のためひざをつきつつ、しかもそれをとめるべき腕が双方ないので、さしもの天杖もついに助けを呼んだと見える。又十郎はわれに返り、さすがにあわてた。もう

いちど仁王門の上を見てうなずき、やっとこちらに駈けて来た。
「おう、天杖、大丈夫か」
「きものを裂いて、傷口を縛って下され」
又十郎がそうしているあいだ、天杖は背後をふり返っていた。
「……はて、いまそこの化物がこちらを見て何やら口走ったが……牢姫さまがおいでなされたのではないか？」
「えっ」
又十郎はとびあがったが、境内はもう薄墨にひたされたようであった。
それから網戸天杖は実に驚くべきことを又十郎に依頼したのである。天杖自身の大刀を鍔もと三寸で折り、残った刀身をきっさきから刺しこむことを。——なんとおのれの切断された右腕の傷口に。

如意輪堂悲歌

「な、何をする、天杖」
「神剣を奪いたてまつらねばならぬ」
網戸天杖は、にゅーっと立ちあがった。その右腕の袖からは、手首ならぬ刀身が垂れ下がり、血はそれをつたわっている。左腕はもとより、一応切断面の上部を縛ったとはいえ、これまた相当な速度で血の滴を落としつづけている。
「如意輪寺へ参ろう」
といって、褐色に隈どられた眼をぎらと仁王門の方へ投げて、
「きゃつ……女は？」
と、いった。
呼び捨てにされても、柳生又十郎は腹をたてる余裕もない。あわてて、またその方へゆこうとすると、天杖はとめた。
「もはや逃げたでござろう」
「どこへ？」
「先に、如意輪寺へ」
流血のため藍色の顔が憤怒にねじれた。
「あの女、わしに矢を射かけおった。京で、手に手をとって教えたこのわしに。——斬る。いや師匠として成敗してくれる」
この時点に於ける又十郎の胸はただ戦慄そのものに満ち、お鏡のために何の遁辞をも設けてやることが出来なかった。が、網戸天杖がその悽惨な姿で歩き出すと、その足を一歩でも止めたいという焦燥にかられて、

「それにしても、いまの菊水党、奇態なやつだ。お鏡そっくりに化けおって――しかも――」

と、猪丸塔五郎のところへ近づいた。刀をひき抜こうとして、

「や！　こやつ、裏表が別の人間だ！」

と、脳天から出るような声をあげた。先刻から変には思っていたのだが、いままざまざとこの奇怪な屍体を見ると、そんな声をあげずにはいられない。

網戸天杖はいまさら驚いた気配は見せない。というよりも、それよりさらに心せくものがあるらしく、

「では、参るぞ。――」

第三者から見ると、そんな重傷を受けている男とは思われぬ早さで、歩き出した。

――うろたえながら、又十郎は刀を拾ってそれを追う。やってはならぬ。天杖をふたたびお鏡に向わせてはならぬ――と、胸に早鐘を打って、すぐに、いや、神剣は奪いたてまつらねばならぬ、とおのれの使命に返ってはっとする。縦え、お鏡をこの刀で斬ろうとも！

猪丸塔五郎の血にぬれた刃をひっさげて、吉野山を上ってゆく柳生又十郎の頬は、次第に天杖よりも蒼くなっていった。

蔵王堂から――左に吉野水分神社。

やがて右に竹林院。

それらの寺や神社の高い甍や塔影を夜空に浮かばせているのは、ただ春の満月ばかりではない。地を埋める山桜のせいもある。いわゆる下の千本を越え、中の千本のまっただ中だ。

満目縹渺として、この世の眺めとは見えず、むしろ昼間見るよりも幻妖の絶景ではないかと思われるほどだが、さすがに夜の桜を見に来る人影はない。

ここは曾て大塔の宮が北条とたたかわれた根拠地であり、のちにまた建武の中興破れて後醍醐天皇が足利の手をのがれてひそまれ、ついに万斛の恨みをのんで崩御されたところであった。爾来、南朝はさらに南方の賀名生の奥へ入ったため、ここにも足利方の武士の徘徊する姿が見られないでもないが、それでもなお少数ながら僧兵もあり、そんな素性の侍など長くいたたまれないような雰囲気がある。

胸つくような急な獅子尾坂の山道を、あえぎあえぎ又十郎は上っていった。前をながれるように上ってゆく網戸天杖の影は、もはや幽界を翔ける亡霊としか見えなかった。

「……」

山道が平坦になり、如意輪寺が見えて来たとき、これまであえぎもあげなかった天

杖が、ふとのどの奥で、くぐもった声をもらして立ちどまった。

寂寞たる夜気を通して、低い声がながれて来た。

「……このたび師直にかかり合い、身命を尽くし合戦つかまつって、彼が頭を正行が手にかけて取り候か、正行が首を彼に取られ候か、その二つの中に戦いの雌雄を決すべきにて候えば、今生にていまいちど君の竜顔を拝したてまつらんがために、参内つかまつって候。——」

楠木正行が四条畷に決死の出陣をするときの「太平記」の一節だ。

声は、女であった。——いうまでもなく、お鏡の声だ。ひとに聞かせるためのものではない。あたかもここの山霊に祈るような声であった。そうだ、この如意輪寺のすぐ裏の山には、後醍醐帝の塔尾の御陵がある。

「——涙を鎧の袖にかけて、義心その気色にあらわれければ、伝奏いまだ奏せざるさきに、まず直衣の袖をぞ濡らされける。主上すなわち南殿の御簾を高く巻かせて、諸卒照臨ありて正行を近く召し。——」

時の天皇は南朝御先代の後村上天皇であった。天皇はこの吉野山におわしたのだ。

「又十郎どの」

天杖がささやいた。

「寺の軒下に十人ばかりの僧兵がおる。——御剣を護るための僧兵であろう」

又十郎は、声も出ない。恐怖のためではない。お鏡の声に耳を奪われているのだ。ほんの先刻、仁王門の小屋根の上でみずから衣服をひらいて腹を見せた彼女は、あれ以来頭が変になったのか。

「……大敵いま勢を尽くして向うなれば、今度の合戦天下の安否となるべし。朕なんじを以て股肱とす。つつしんで命を全うすべし。——」

「片腹いたや、如意輪寺本堂の前に立ちふさがって、あれは死を決しておる。あれは大忠の証しのため又十郎どのに討たせるつもりであったが、さきほどからのなりゆき、やはり心もとない。それにかく相成った上は、わしの手で成敗せねば腹が癒えぬ。おまえさまは、あの僧兵たちにかかって下され。お鏡は、わしがやる」

ツ、ツ、ツ、と網戸天杖は歩き出した。片腕の袖から、きらと刀身を下げたまま。

「ふむ、わしが教えた中条流剣法、このわしの腕なしの剣にどう立ち合うか。——」

彼はおのれの右腕の切断面に刺した刀でお鏡を討つつもりらしい。

そんなことが出来るか？——卒然として又十郎は、いつぞや京の中条屋敷で、球体の菊水党に股間から斬りあげられた大塔衆山国軍兵衛が、刀をおのれの足の甲に刺し、足ごめに抜きあげて敵を刺したあの凄じい決闘を思い出した。同じ大塔衆だ。腕に刺した剣をふるうなどいうこともあり得ないことではない。——

いや、それどころか。——見るがいい、遠ざかる網戸天杖のうしろ姿にはまるで完

全な腕に刀身をひっさげていると同じ自信と剣気が尾をひいている。——

「……今度の軍に一足もひかず、一処にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先帝の御廟に参って、今度の軍難儀ならば、討死つかまつるべき暇を申し、如意輪堂の壁板におのおの名字を過去帳に書きつらねて……」

お鏡の姿が見えて来た。

僧兵に向え、とかいわれたが、それを忘れて又十郎が天杖のあとを追ったためであり、また如意輪堂の軒の下から月光の中へ、お鏡が歩み出て来たためでもあった。——彼女もまた白刃をひっさげていた。強敵網戸天杖を迎えて、お鏡はなお低く誦す。

「返らじとかねて思えば梓弓、亡き数にいる名をぞとどむる」

「よい覚悟じゃ」

天杖は笑った。

「見る通り、そなたの刀は長く、わしの刀は短い。同時にかかれば、わしの刀は届かぬはず。——」

月光に二条の白流が電光のごとき弧を描いて交叉した。

「あっ。……」

だれがさけんだかわからない。一人の声ではなかった。——それが、一つの声だけ長く尾をひいた。

網戸天杖であった。その背後から刀でつらぬいているのは柳生又十郎であった。どうしたのか、とどかぬはずの天杖の刀が、お鏡のからだからぱっと黒いものをはね散らしたのを見たとたん、彼は夢中でおのれの刀で天杖の背を刺し通していたのだ。

「——裏切ったな、なんじ、まことを天朝を忘れ——」

吼える苦鳴に恐怖して、又十郎が刀をひきぬくと、網戸天杖はそれに引かれてどうと地に倒れ、四肢をぶるぶるっと痙攣させて動かなくなった。夢中で刺したのだが、みごとに心臓を背からつらぬいたらしく、さしも不死身の剣士もこれで絶命したらしい。

又十郎は放心したように立っていた。

お鏡も放心したように立っている。——切り裂かれたのは彼女の帯ときものだけであった。天杖の刀が短かかったせいか。いや、長いお鏡の刀など、存在しないかのように空を切らせた天杖の刀術だ。おそらく曾て手をとって教えたこの女弟子を嘲るため、まず試みた文字通りの悪戯であったろう。

胸から腹、腹から足にかけてまる裸となったお鏡を、春の満月が照らした。その胸には菊水の鏡がかけられていた。——われに返ったのは、彼女の方が先であった。

「おいで下さりまするな」

と、お鏡はさけんだ。

月光の中へ、薙刀などをふりかざしてどよめきつつ現われた僧兵たちにいった言葉

であった。——それ以前から彼女は、わたしの首尾を見届けるまでは決して手出しをしないようにと依頼しておいたのだ。

「騒げば、如意輪堂の秘密が公けになりまする」

僧兵たちは、声をのんで立ちどまった。神器の一つ、神剣が、この如意輪寺にあるとは——実に大胆無双の隠し場所だが——そこにいる僧兵たちだけが知っていて、これまでひそかに護っていたものらしい。なるほどこのことが明らかとなればそれこそ天下の一大事だ。

お鏡はいった。

「この曲者は、わたしがいま討ち果たしまする」

お鏡は、たったいま又十郎が彼の同志たる網戸天杖を刺し殺して彼女を救ったという事実を見ていないかのようであった。

そうなのだ。彼女はあらゆる思念に眼をつぶろうとしている。そのために、みずからに呪文を唱えて催眠術にかけようとしている。姉たちとちがい、とりたてて忍法を伝授されるいとまもなかったが、言葉のみは菊水党からしばしばきいた自己催眠。「太平記」正行出陣の章を誦したのはそのための法であったのだ。

おお、ここはその正行が、あなたものしと八万騎の敵へ駈けむかった死出の如意輪堂、そのみずからへの弔歌を書き残した壁の前であった。

いったん、だらりと下がった刀は、おののきつつ、また上げられようとしている。が、又十郎は、自分を見ていないかのようなお鏡の眼に涙がキラキラ盛りあがって来たのを見た。

「お鏡」

彼はわれを忘れて叫んだ。

「何とかならぬか？」

又十郎がはじめて投げたといっていい、やさしい、胸をえぐるような声であった。彼の眼は移動して、お鏡の腹に注がれた。

——ここにはあなたのお子がいるのです。そのわたしを斬ることが出来ますか？

先刻の仁王門での声が耳に甦った。あれは、お鏡に化けた双面獣猪丸塔五郎のせりふであった。が、お鏡そっくりのその声は、やはり又十郎の鼓膜に鳴るのだ。——おれの子がいる？　この柳生又十郎の子が、女房お鏡のあの腹の中にいる！

チカッと鏡が月光をはねた。

反射的に刃をあげた又十郎は、このとき恐ろしいものを見た、お鏡の胸の鏡の中に、虫の垂衣を垂らした市女笠の影を。いや、その中からのぞいた夢幻のごとき白い顔を。

牢の姫宮だ！　べつに同行するとはいわなかったが、姫はやはりこの吉野山へ来ておわしたのか。月ありとはいえ、夜気を通し、あれはどこに立って映ってくる影か。

——そんな思考力は又十郎にはない。ただ、その小さな顔が、彼の眼から脳髄いっぱいにひろがった。

この世のものならぬ神聖美と邪悪美の結晶したような十五歳の牢の姫宮。——それは、わずか一ト月ばかりのあいだに、「女に強い」又十郎をもふくめて、柳生兄弟にとって、理も非も超え、大義よりも大塔衆よりも、もっと根源的な感性の女王として君臨しているのであった。

「ぎょ、御剣、頂戴つかまつる！」

戦慄して、又十郎は絶叫した。もとよりお鏡にいった言葉ではない。牢の姫宮に告げた声だ。

同時に、彼の刀とお鏡の刀はながれ寄っている。しかるに——お鏡だけが知ったことだが——ほとんど相討ちとしか思われなかった双方の一撃のうち、柳生又十郎の刀はお鏡の肩さき一髪で、ぴたっと静止した。これは、中条道場での例の木剣試合の稽古をした者にしてはじめて可能なわざであった。

「……やはり、いかん」

又十郎はちょっと首をかしげて、お鏡を見て舌を出した。

女のような顔をしているが、お鏡に対してはばかに高飛車な彼が、まるで一瞬に彼女の弟と化したかのような——いたずらをして、姉に見つかって舌を出したような表情であった。

しかも、その肩から袈裟がけにお鏡の刀は食いこんでいる。——

「おれの方は斬れん」

「あっ……又十郎どの」

悪夢からさめたようにお鏡は刀をひき、まろび寄る。

その寸前に、柳生又十郎は血しぶきを春の白い月へ噴いて大地に崩折れた。

「又十郎どの……わたしは……ああ、わたしは！」

血まみれになってしがみつくお鏡の腕の中で、柳生又十郎はなまめかしいとも見える笑いを浮かべ、小声でいった。

「わしが負けた。やはりおまえが強いよ。……強いおまえによう似た子を生んでくれ。……これは、ないしょだぞ」

がくりと垂れたその首に花が舞う。三ひらか、四ひらか。——それはお鏡の眼に冥府から燃えあがる白炎のように見え、火花のごとく灼熱のものに感じられた。

数刻ののち。

吉野山から下り、西へ向けて立った十人の僧兵があった。まんなかに螺鈿の長い箱を捧持したお鏡の輿をとりかこんで。

吉野山すでに安泰ならず、と知って、鳩首協議の末、賀名生の行宮へ神剣を奉還にゆく如意輪寺の僧兵たちであった。お鏡はしかしなお折れんばかりにうなだれて、高熱でもあるかのように身をふるわせている。

やがて、山を下り、蔵王堂の仁王門から出てゆく彼らが、花の雲にかくれていったあと、その門の下で、ふしぎそうに市女笠をかたむけて、じいっと見送っている小さな影があった。

……やがてまた一ト月ちかく。

五条にちかい吉野川のほとりに打ち倒れている巡礼姿の老婆があった。むろんそれはもう屍体であったが、その血を刀身になすりつけているのは大塔衆牛袋兵斎だ。なかば折れたその刀を、虫の垂衣を垂らして立った影の股間に置く。

何やらが刀の血をはじいた。

凝然として、柳生舟馬と七兵衛はそれを見ている。——死人剣の占いを。

「八坂瓊勾玉は吉野川の奥、川上に」

と、牢の姫宮はけだるげにいった。

大塔兵斎・菊水監物

「川上？」

吉野から熊野にかけての地理には極めて詳しい牛袋兵斎だが、あまりにありふれたこの地名に、ちょっと心当りがなかったようだ。

首をかしげて市女笠の方を見やったが、虫の垂衣はそれっきりひそと垂れたままだ。

——ややあって、

「参るぞ、そこへ」

と、柳生兄弟の方をかえりみたのは、牢姫さまという人に、こんな場合これ以上きいても無駄だということをよく知っているからしい。——しかし、柳生兄弟をじろと見た眼には決然というより凄然ともいうべきひかりがあった。

死人剣の占い以外は、ほとんど唖かと思われるほどの牢姫さまだが、しかし吉野山から帰った姫の口から、味方の網戸天杖はもとより、あろうことか弟の又十郎まで敵に討たれ、神剣は女に護られて、賀名生の行宮に戻ったことはきいた。

では、その賀名生に戻った神剣を！

と、この一ト月狙いつづけたことはもとよりだが、それ以来柳生兄弟の眼にもはっきりわかるほど行宮周辺の警戒がきびしくなって、きょうまでついにそれを奪いに入る機を得なかった。いや、勇猛なる七兵衛は足ずりせんばかりに逸ったのだが、あえて兵斎はそれをとめたのだ。

「……死に絶えては何にもならぬ」

と、彼はいった。

たんに慎重を期していう語韻ではなかった。陰々と魂の底からしぼり出されて来るような執念の声であった。

まことにその通り——だれが予想したろう。神器の一つに手も触れないうち、七人の大塔衆はたった一人になってしまったのだ。牛袋兵斎ただ一人。

「実に、思った以上のやつら……菊水党、伊賀の女めら」

彼はうめいた。

「かく相成った上は、きゃつらをみな殺しにせねばならぬ。ただ同志のめんめんの恨みをはらすためばかりではない。神器を奪うためにじゃ。それはわかっておったが、いまにしてきゃつらを掃蕩することが何よりの先決条件と思い至った」

思いは同じ——といっていい柳生兄弟だ。彼らも弟の又十郎が討たれたと知って、神気が茫となるほどの衝撃をおぼえた。

とくに七兵衛のごときは、いっとき敵がだれであるかを忘れ——いや、だれであるかと承知しても、血が脳中に湧きたぎるほどの怒りにとらえられた。牢姫の報告によると、又十郎を斃したのはどうやらお鏡らしいが、そのお鏡に対し八つ裂きにしてやりたいような殺気をおぼえた。が——賀名生の行宮の奥深く逃げ込んだ彼女らは、それ以来、匂いも嗅がせなかった。

さて、いま。

「参るぞ」

と、牛袋兵斎にいわれ、

「いうにゃ及ぶ」

と、二人は決然とうなずいたが、しかしすぐにまた、

「いや、やはり七兵衛どのとわしとだけ参ろう」

と、兵斎はいった。

「舟馬どのはこちらに残って下されい」

「なぜ？」

「まだ神鏡のありかがわからぬ。少くとも賀名生には神剣がござる。それに備えて」

「——二人だけで大丈夫か？」

牛袋兵斎に向って、ぬけぬけとこんなことをいうのは、柳生舟馬だけだろう。まるで自分の方が兵斎よりも大丈夫なような口のきき方だが、この一見自若たる男の実力だけはどうもよくわからない。

兵斎はニコリともしなかった。

「われらが死んだら、あとを頼み申すぞ、舟馬どの」

深沈としていう。

「柳生谷をあげて、必ず三種の神器を！」

——もし兄弟のうち、二人までを失ったら、はじめて柳生の郷士たちを動員しよう、と舟馬は約束したのであった。

牛袋兵斎がそこまでいうのは、しかしむしろ哀切だ。彼は大塔衆の首領株の男であった。

しかし、自信を失って歎願するといった調子ではない。それよりおのれの悲願を思いつめて、それ以外に余念なし、といった感じである。とくにこの一ト月あまりは。

頭は禿げて、海坊主みたいな印象だ。頭頂がややとがりかげんで、顔は人一倍大きいのに、からだはひょろりと細長く、しかも五十年輩の年齢に比して、妙にくねくねとしなやかであった。この体形と身のこなしから薙ぎ出される剣は、師の中条兵庫頭に対して三本に一本は必ずとる。

この兵斎が、この一ト月あまり、一刀をぬいて拳を禿げたひたいにあて、刀は垂直に立てて、夜もすがら日もすがら、ぶつぶつと何やらつぶやいていた。

「……この鏡のごとくに分明なるをもて天下に照覧し給え。八坂瓊のひらかれるがごとくたくみなるわざをもて天下をしらしめせ。神剣をひっさげては順わざるものをたいらげ給え」

南朝の曾ての大柱石北畠親房の「神皇正統記」の一節であった。

「……三種の神器、世に伝うること、日月星の天にあるに同じ。鏡は日の体なり。玉は月の精なり。剣は星の気なり。……」

この聖なる神器を、血を以て奪おうというのだから、常識的には奇怪だが、大塔衆にとっては奇怪ではない。それを真の皇統に伝うべき聖器と信ずればこそ、偽の北朝に屈せんとする南朝にゆだねてはおけないのだ。

この見解はすでに柳生兄弟にも徹していて、それは奇怪に思わないが、奇怪なのはこれを呪文のごとくつぶやく兵斎の印象であった。刀をぬけば名状しがたい鬼気を発するのは以前から承知しているが、ここ一ト月ばかり、彼のそんな姿は、刀と体がひとつになって見え、さらにその刀を捧げたまま、すーっと蒼天へ昇ってゆくように思われた。海坊主みたいな顔は表情のみか、眼鼻口も消滅したような感じで、からだと同じのっぺらぼうになったような気がする。

蒼天。——吉野川の空はすでに初夏のひかりをみなぎらせている。

「いざ」

兵斎と柳生七兵衛は旅立った。見送るのは兄の舟馬一人である。

「はて、牢姫さまはどこへ？」

ふと七兵衛は気がついていった。背にもう一本、大塔の宮から伝えられた「金剛丸」

の名剣を背負っている。
「知らぬ」
「やはり、われらと同行なさるおつもりであろうか」
「さて」
「吉野川の奥の川上――とだけ承わって、それで神璽がどんな具合に秘してあるのかわかっておるのか」
「ゆけば、わかるでござろう」
牛袋兵斎は依然として、ものに愚かれたような表情であったが、ふと七兵衛の方をかえりみて、
「われらがゆけば、必ず菊水党のやつが誘い出される。それによって、かえって仔細が判明すると存ずる」
といい、さらに、
「菊水党のみならずおそらくは伊賀の女人も。――」
と、いった。
「だれが来ると思われるな」
闘志の炎を燃やしていた柳生七兵衛の隻眼が、ふいに動揺した。

「大塔衆牛袋兵斎が東へ向いましたぞ！」
森の中を跫音もなく駈けて来た阿波座監物がさけんだ。
「――え？」
内侍所にちかい番小屋で、双羽と環は立ちあがった。
「どこへ？」
「おそらく吉野山ではござるまい。こんどは、川上でござろう。――いかにして探知したかはまだわからぬが、そこに神璽があることを、きゃつらが嗅ぎつけたに万まちがいはない」
「きゃつら。――」
「兵斎と柳生七兵衛」
そして、監物はあわただしくいった。
「急ぎ身支度をなされい。きゃつらを追わねばならぬ、いや先回りして神器を防がねばならぬ」
「おお」
先に動いたのは、ふだんおっとりしている双羽の方であった。と、監物が気がついたようにいった。
「いや、一人でよい」

「なぜ？」

「ここには神剣がござる。また十津川の奥には神鏡がござる。――敵のうち、柳生舟馬が居残っておるのはそのために相違ない。――」

真っ白な総髪に兜巾をつけながら、監物はいう。

「舟馬、七兵衛の徒輩ならば、その精汁のあらんかぎり、血まで空にしてくれるが、あの牛袋兵斎のみは恐るべし。――従って、それについておる者が、たとえ七兵衛でも厄介なものになる。そこで一人だけ、念のためについていって戴こう」

「ですから、わたしが」

「いや。――七兵衛には環どのの方がお強い。環どのにいって戴こう」

気丈な環であったが、このとき顔は蒼白になり、唇もわななないて、とっさに返事も出ない風であった。

「われら菊水党を六人まで失わせたきゃつら、いよいよここでその恨みのほどを思い知らせてくれる。むろん、神器を護るためじゃ」

「……」

「覚悟はなされておるであろうな、環どの」

「――は、はいっ」

「よいかな、その声のひびきや。――さりながら、こちらの留守も大事、双羽どのはもとより、お鏡どのにもいいかげんに起きてもらわねばならぬ」

監物はにがにがしげに見下ろした。

お鏡は臥していた。まるでいまにも薄闇に消え入りそうなほどやつれている。――一ト月前、吉野山から帰って以来、彼女は半病人になって横たわったままであった。からだだけでなく、精神も異常になって、昼はよく涙があると思われるほど泣きつづけているし、夜は「……又十郎どの！」と、魂をかきむしるようなさけびをしばしばあげる。

阿波座監物は、しかしすぐに悽愴な眼を環にもどして、あごをしゃくった。

「では、出立の用意をなされ！」

環は動いた。――が、その動作が、以前の彼女のように活潑ではない。

たんに心に苦悩があるばかりではない。いや、その苦悩も実は身体から発しているのだが、環は――環のみならず、双羽もお鏡もその腹はむっちりとふくらんでいた。懐胎した肉体の線は、この一ト月ばかりのあいだに急に目立って来ていた。

しかも、そのせいで、彼女たちの美しさはいっそ哀しげですらあった。

吉野山を過ぎて、さらに吉野川を東へ辿ると、国栖という村がある。

このあたりから、川もそれに沿う道も二つに分れ、まっすぐにゆくと伊勢に通じる

が、南へ入ると、その奥が川上だ。

山岳は重畳と迫り、初夏の光に、杉、檜の大森林、それに羊歯の大群が息苦しいまでに密生している。道は細くなり、はてはところどころ消失し、ときには川を岩伝いに飛んで渡らなければならない場所さえ、いくどかあった。

「あれは、何のしるし?」

はじめは気にする余裕もなかったのだが、あまりあちこちに見えるので、この難行軍の中に環がきいたのだ。それは杉の木の皮がいたるところ不自然に剝かれている眺めであった。

「あれ、熊の食ったあとでござるよ」

と、阿波座監物は答えた。

「雪どけのころ、食い物がないので、皮のあいだの汁を熊が吸う。——ついでに申すが、われらでも、同じ杉の汁だけで、まず半月は生きる自信がござる」

「え、熊の食うものを。——」

そういえば、密林の空を、むささびが翔け渡る。雉が飛ぶ。そして足もとには、もう蝮が出て、うねうねと逃げてゆくのによくぶつかる。

——こんな人界を絶したところに八坂瓊勾玉が?

なるほどこれでは足利の方でも想像の圏外であろうが、よくまあ南朝もこんな山奥

に神璽を隠す気になったものだ。いったい、どういう縁で? と監物までが途中でしばしばくびをかしげたほどであった。その理由は、たんに人の眼から隔絶した場所のみならず、人そのものにあった。人界を絶したといっても、この奥に住む人々がたしかに存在し、これが天朝民族ともいうべき種族であったのだ。

この物語の時代からさらに五十年ばかりののち。

やはり神器争奪の死闘が京から吉野にかけてくりひろげられたことを史実は伝える。すなわち嘉吉三年秋、楠木一族の末裔が南朝系の一親王を奉じて、突如京の内裏を襲い、三種の神器を奪って比叡山にたて籠った。討手を受けて宮は自害され、鏡と剣はとり返されたが、一族の残党は神璽のみを抱いて吉野へ逃れ、またべつの一親王を奉じて「自天王さま」と称し、この奥吉野の川上に秘朝を作ったが、長禄元年冬、赤松氏の叛乱によってこの自天王が討たれ給うに至って消えた。しかし、それまで六十余年に亘ってこのあたりに第二の南朝が厳存していたことは事実なのである。

この物語の結末に於ける南北朝の合体が必ずしも万人に釈然たるものではなかったという例で、また神器がいかに当時の人々に絶対のものであったかを示す史実だが、それはともかく五十年後に於てさえ、なお南朝の裔が頼ってのがれたこの川上の地。

それはこの物語のような来歴があったからでもあるが、しかしこの時代にもすでに以前からの由緒があった。

「このあたり――入の波と呼ぶと右大臣さまから承わったが」

紙に書かれた地図を案じて、監物がいう。――国栖からもう六、七里も入ったであろうか。

「や……あれは？」

監物は顔をあげた。

一方の峻しい山の中から、三人の男が出て来た。木を背負っているその姿はあきらかに樵夫だ。男たちもこちらを見た。眼は獣の眼であった。

「御前。――」

監物は呼ばわった。

三人の男は顔を見合せ、それから、

「申す。――」

と、答えた。入の波で村人に逢うたら、まずそう呼んで見よと右大臣吉田宗房から教えられた通りだが、これは賀名生あたりでも使われている南朝独特の合言葉であった。

監物は樵夫の方へ近づいた。

「入の波の衆か」

「おいよ」

一人が、牛のように答えた、合言葉は通じたが、まだ警戒本能は解けていない顔つきだ。

「賀名生の右大臣さまからの使いだが――このあたり、二人の侍が入って来なんだか」

「知らね。そんなものが入って来れば、すぐにわかるはずだが」

「それではまだだ。――しかし、一両日中にもやって来るぞ。きゃつら、ここにあるおん勾玉を狙って」

「な、なんじゃと？」

彼らはあきらかに愕然とした。

それから、阿波座監物との間に、素破といった問答が交わされはじめた。さしもの監物にもところどころよくわかりかねるような濃い方言であったが、やがて向うは納得したと見えて、一人が向うの森の中へ駈け込んでゆき、たちまちそのあたりから奇怪な笛の音があがった。

「獣の角笛じゃな」

阿波座監物が環にささやいた。

「このあたり、壮年の男だけでも百人以上住んでおるというが、みな役の行者の子孫だと信じておる。まことの天朝は南朝さま以外にないと信じておる。――あの男たちの身のこなしを見ても、われらが三年の汗血をしぼった域には充分達しておる。こり

や、南朝が神璽をここに委ねられたも当然、知らせる用以外に、わしらの来ることはなかったかも知れぬわい」

勾玉かくし平

阿波座監物の知識はまだ浅かった。

それはこの一帯に住む村人自身が、奈良朝における修験者の祖役の行者の末孫だと信じていることの受売りであったが、事実は村人のいい伝えよりももっと悠久であった。すなわち国栖からさらに吉野川上流のあたりに住むのは、大和民族が日本に渡来する以前から先住していた種族なのであった。

古事記にいう。――神武天皇御東征の際、すなわちその山に入りたまえば、「尾ある人に遇いたまいき。この人、巖を押し分けて出で来りき。こは吉野の国栖の祖」と、ある。

応神天皇がここへ行幸された際は、甘酒を献じ、口鼓を打ちつつ歌を唄って迎え、平安時代に入ってからも、朝廷に節会あるときは、必ずはるばる京に出て、豊楽殿の門外で歌笛を奏し、舞いを舞って奉仕したという。

しかし、平安の世は永遠に去って、そのような素朴で優雅な習いが絶えて久しい。

――彼らはただ故山に籠って、数百年のあいだに先住民族としての生活に戻ってしまった。――と、見えた。

彼ら自身も忘れてしまった「有尾人」時代の話は、監物も環も知りようがない。剽悍無比、けものにちかい山岳族としての生活を見て、

――どうして、まあ、南朝さまとこの村が結ばれたのであろう？

と、径しむばかりだ。

ただ、たんにけもののような山人ではない証拠はいくつかあった。それは彼らの生活のもととなっているみごとな紙漉きの技術と、ろくろを回して臼や木の椀などを作る腕と、そしてときに鼻唄にうたう歌が、

「橿の生に
横臼をつくり
横臼に醸める大御酒
甘らに、きこしもちおせ、まろがち」

さっぱり意味はわからないながらに、なんとなくなつかしい雅やかさを伝えていたからだ。彼ら自身ももはや歌の意味を解しないらしいが、それはそれとして平生の言語の訛りはひどい。それにあまりしゃべることを好まない人々らしく、彼らと南朝が、いつ、いかなる風につながりをとり戻して、神璽をあずかるようになったかは、つい

によくわからなかったが、彼らが天皇家に対し、素朴にして原始的な忠誠心を抱いていることだけはたしかであった。

神璽は部落のさらに奥にあたる吉野川――三ノ公川というあたり――の或る岩窟に祀ってあった。

阿波座監物の警報を受けて以来、彼らは眼を皿のようにして見張った。もっとも、山中のこの村に他国者が入って来て見つからぬはずはないが。

数日ののち。――監物がくびをひねっていったことがあった。

「世阿弥どのがここへ来た形跡がある。――」

岩窟の前の青草に坐ったまま、頭の中はただ七兵衛のことのみに占められていた環も、これにははっとした。

「えっ、いつ?」

「どうやら二、三年前らしいが」

何のことだ、といいたいが、それにしてもこれは意外な事実であった。八坂瓊勾玉がこの川上村にあるなどいうことは、ついぞ彼が話したことはないからだ。

「どうしてそんなことがわかったのじゃ?」

「村の或る小屋の前に、何やら書いた紙が張ってござった。いや、きれっぱしで穴をふさいだだけのものらしかったが、その文句は――普天の下、卒土の内に、王威をいかで軽んぜん――とあり、ことさら珍しいものでもないが、そのみごとな筆におぼえがある。で、きいてみると、たしかに世阿弥どのが、やはり宗房卿の紹介でここを訪れておるらしい。――」

「何をしに?」

「それが、神璽のことなど一語も触れず、ただこの村人の唄をきき、舞いを見て立ち去ったというが」

世阿弥はここに神璽の秘されていることは知らなかったのであろうか。それとは無関係に、ただこんな深い山中に入って来るであろうか。若し知っていたとするなら、なぜそのことを自分たちに洩らさなかったのであろうか。――神器を護れ、とあれほど願った張本人たる世阿弥が。

「そういえば、あの御仁は、河内でも大和でも、どこでも土民の唄や踊りを見聞しては何やら帳面に書きとどめるくせはあったが、それにしても、この川上のことを黙っておるのはいぶかしい」

監物は眼を宙にすえた。

「……いま思い当たったことではないが、あの世阿弥どのは、何やらわれらにも隠しておることがある。まえまえから、そんな気がしてならぬ。……」

彼はうなずいた。

「よし、大塔衆牛袋兵斎と柳生七兵衛を始末したら、いちど京へ帰って、改めて世阿弥どのに疑念をただしてやろう。大恩あるおひとではあるが、たとえ忍法の荒行を使っても」

しかし、阿波座監物はそれをきくことが出来なかった。——

——牛袋兵斎と柳生七兵衛がこの村に入ったことがあきらかになったのは、その夜からのことであった。

その夜、川上村入の波の国栖衆が三人殺されているのが発見された。森の中で、彼らはいずれも、紙を作る楮を切ったり皮を剝いたりする独特の鋭利な山刀を握っていたのに、そのさけび声をきいた者もなかった。とくにその一人など、角笛を口にあてているのに、頭部もろとも縦に唐竹割りになっているのを見ても、斬り手の刀術の凄じさが思いやられた。

その翌夜、二人。三夜めには五人。

しかも、敵は姿を見せない。——

このあたりに他国者が入れば気づかれぬはずはないというのは、道を歩いていてのことだ。一帯は渓谷を覆う密林で、しかも季節はようやく夏、樹々は鬱蒼としげって、そこへ逃げこんだら、ちょっと、ふつうの眼には入らない。

とはいえ、それにしても、この附近の山や森を自在に馳駆する国栖の男たちの眼にふれないとは、見た人間は声もあげることが出来ないうちに斬り捨てられるとしか思えなかった。

四夜めに四人。五夜めに三人。

屍体はしだいに三ノ公に近づいてゆく。

正確にいうと、吉野川は入の波部落の上流で二つに分れ、一方の北股川を遡ると、さらに支流三ノ公川となる。この一帯、雨のふる日など、水に消え入るばかりのわびしさだ。三ノ公川のほとりに「かくし平」「獄門平」と呼ばれるやや平坦な土地がある。そのかくし平の背にそびえる山の麓に岩窟があり、洞の奥に注連縄を張って格子が組まれ、その中に八坂瓊勾玉は安置してあるのであった。

そして六日め。

かくし平は方四町ばかりの平地で、東西に流れをひかえ、一種の要害といっていい。そこに阿波座監物と環は坐って、狭い河のすぐ向うの森の方を見ていた。ここ数日、彼らはここにいる。森の中には数十人の国栖衆がちらばっているはずで、常識的にはそこをつっ切って来れるわけはないが、たとえそれが可能だとしても、河を渡って来る人影が、眼に入らないということはあり得ない。

万一、来るならば夜だ。——

監物はそういって、夜は彼が起きていた。そして、ひるまは眠っている。ただし、草の中にあぐらをかいて坐ったまま。

ひるまは環が起きていることになっていたが、しかし彼女は魂の苦悶のために夜も眠れなかった。さればとて昼眠ることは許されないが、しかしあまりにもまぶしい夏の光にいつしか眼が霞んでいたらしい。

彼女はきらきらひかる五彩の幻影を見ていた。それは夜のうつつの間にも現われるものと同じで、愛くるしい裸の童子——というより、まんまるくなっている胎児の幻影であったが、真昼の夢は、そのうすもも色の肉塊が鮮血の網目に彩られた恐ろしいものであった。

いま、魂の苦悶といったけれど、しかし肉体から来た妄想もたしかにあったにちがいない。——懐胎してもう九カ月前後になったのではないか。妊婦の腹は末期一、二カ月で急速に目立って大きくなる。——二、三日前も監物がかえりみて、

「……こりゃ、おぼろ月の忍法もちと考えものじゃな」

と、苦笑したくらいだ。

誇りたかい環であったのに、怒りも羞恥もおぼえないほど彼女は恐れていた。そのときの来るのを。

——そして、やつれはて、腹はふくらみ、醜くなったはずなのに、言葉とは反対に

白髪の阿波座監物がふとごくりと生唾をのむような彼女の妖しい美しさであった。

「……しまった」

眠っているはずの監物がひくくつぶやいたので、環の視覚が戻った。やや離れて横にいる監物は、そのままの姿勢であったし、前方の河にも森にも異常はない。なんのさけびも聞こえない。

「ふりむかれるな、うしろじゃ」

監物はいった。

「洞のすぐ上の樹蔭にとまっておる。山の方から来るとは思いがけなんだが、しかしそれにしてもよくあそこに回ったの。……が、いま、しまったといったが、そのためにわれらがここに来たそのときが来たと申すものでござる。……や、七兵衛め、裸になっておるぞ。はて？」

ふりむこうにも、環は全身麻痺したようになっていた。

「きゃつ、何をたくらんでおるか。……環どの、やはり七兵衛の方にかかって下され。わしは兵斎が気にかかる。きゃつの形相、体容、何やら異様なものを思わせる。大事をとって。……では、よいか！」

重い跫音が背後に聞えた。

二人はふりむき、立ちあがった。

地ひびきは、洞のすぐ上から、洞を覆うように垂れ下がった樹の枝から牛袋兵斎と柳生七兵衛が飛び下りた音であった。

兵斎はちらっと洞を見た。

「ここじゃな、神璽は。――」

七兵衛はかえりみもせず、一眼でこちらを――環のからだを見たが、火のようにかがやいたその眼に、すでに抜きはらった一刀を押しあてると、すうと縦に動かした。一条の血のすじがタラタラと右の頬にながれ落ちた。

こうして忽然と決闘のときが来た。

……どうしてここへ来たのか。

むろん、ただ牛袋兵斎にみちびかれてのことだ。もともと大塔衆の首領株たるの貫録をもった兵斎であったが、ここへ出立して以来、彼は魔人を超えて、魔物めいて来た。同志六人すべてを失い、恨みの執念にとり憑かれたせいか。――いまでは人間と行を共にしているようではない。

森の中で彼は這う。

這ったまま、一刀をひたいにあて前にむけ、しずかに円を描いて移動させる。一念凝集するところ、それで敵の殺気が剣尖から伝わって来るらしい。

たまたま、どうしても国栖衆の哨戒のあいだを抜けられないときは、ひとり近づいていってこれを斬る。ふしぎなことに、足の下からかすかに葉や草の音が鳴っているのに、みるからに敏感そうな国栖衆が気づかず、気がついたときはでくの坊みたいに斬られた。

兵斎の海坊主めいた顔貌の眼鼻口はいよいよ埋没し、彼はほとんどものをいわなくなった。それが、いま、いう。

「七べ、女、殺せ」

もはや呼び捨てであるのみならず、あらゆる助詞は省略した言葉づかいだ。

「いや、おれは、あの阿波座監物とやらを」

七兵衛はもはや環のからだの異常さを知っていた。

環が孕んでいる！

――誰の子を？

彼の脳裡には、あの去年秋の桃香野に於けるつかのまの逢瀬の記憶がよみがえった。まるで鶺鴒の水浴びのような――いや、彼の信じるところでは竜王が炎に雨をたたきつけたような感じの交合であったが、しかし――あれではないか？

それは、たちまち確信となった。腹の大きさからしても適合する。

そのことを知ったとたんの彼の心境はちょっと書きしるしがたいものだが、そもそ

もそれをめんめんと書きつらねているいとまもない。

「女、殺せ」

「いや、監物を」

そういって、七兵衛は裸になった。下帯にさした常の刀のほかに、裸の背に金剛丸だけは残した。

彼は曾て京の五条の橋の上で、当時は敵であった大塔衆枕坂獄門を斃した経験を思い出したのだ。あのときは獄門の一撃に袴の紐を切られて袴が解け落ち、それで危くおのれの忍法伊賀の水月を発現出来たものの、そういうことがなかったら九死に一生もない絶体絶命であった。さればこそ、いまはじめから裸になって、阿波座監物に駈け向うという意志を示したのだが。

「女」

兵斎は、とんと認めない。認めないのは、監物相手では歯が立たぬという心か、七兵衛に妻たる女を討たせて大義を示せというつもりか、ほかに意味があるのか、もはやこの海坊主の心理は見当もつかない。ただその単細胞的語調に、常人には抵抗出来ない迫力があった。

かくし平を見下ろす山の上であった。そのまま兵斎は、例の剣尖をレーダーとするような姿勢のまま、まるで海底に沈む海坊主のごとく、洞の上の樹まですべり下った。

あわてて、七兵衛もそれを追う。

で。——

「勾玉、奪うぞ」

声もろとも、かくし平に飛び下りた両人だが。

「女、頼む」

最後に念を入れられた刹那、七兵衛はおのれの刀をたった一つの眼にあてて、われとわが眼をつぶしてしまったのであった。

「何をする？」

さすがの兵斎も、これにはめんくらったようだ。

「あの女に勝つには、盲になるよりほかはない。——見れば、負ける」

そして彼は——大刀の柄をひたいにあて、兵斎をかえりみもせず、草を蹴って駈け出した。

「環、参れ！」

と、呼ばわりながら。

「夫、柳生七兵衛と勝負せよ！　おれは眼が見えぬ！　声を出して、ありかをいえ！」

「あっ……七兵衛どの！」

これには、環も驚愕の声をあげずにはいられなかった。

が、その声が聞えたのか、聞えないか。——七兵衛はまるで眼あるもののごとく、もう一方の阿波座監物の方へ突進している。

盲目の七兵衛は、てきめんに方向感覚が狂ったのか。いや、そうではない。それはとっさの彼の兵法であった。前方に感じられる二つの生き物のうち、環の声のしない方へ駈け向うという。——

牛袋兵斎の測定剣から暗示は受けたがむろんそれほど精妙にはゆかない。しかし七兵衛は、しばらく伊賀で忍者の訓練を受けたおかげで、常人以上の或る感覚を体得したと自負していた。たとえば、闇中にも敵の気配を悟るがごとき。——

彼はあくまで阿波座監物にかかるつもりであった。それは牛袋兵斎の命令に対する彼の抵抗であるのみならず、いままざまざと間近く環を——身籠ったおのれの妻を見た刹那からの不動の決意であった。しかし、そのような忍びの術を彼に教えた阿波座監物に、盲目の突撃をして、果してそれが成功するか。

七兵衛はすでにいのちを捨てている。この場合には迷いのない、勇猛無比の男であった。

「ばかめ」

阿波座監物はつぶやいた。

彼はちらっと兵斎に眼をやって、兵斎がふきげんそうに動かぬのを見てとると白髪を吹きなびかせて、みずから七兵衛の方へからだを向けて歩み寄った。

国栖哀歌

「——あ、待って！」

無我夢中で、環はさけんだ。

さけんだつもりだが、恐怖のあまりのどもつまり、声にはならなかった。すでに阿波座監物の一刀に血けむりたてて倒れる七兵衛の幻影を見たような気がした。

声にはならなかったが、阿波座監物はふりむいた。

——この男に、やはりみれんがあるか、環。

あきらかにそう問い返す。しかし残酷な笑みをひからせた恐ろしい眼であった。彼は突撃して来る七兵衛に対し、まだ腰の戒刀さえ抜いていなかった。

ただ彼は、七兵衛の前にゆらりと立った。

「……あっ」

ふいに七兵衛はたたらを踏んだ。

盲目の彼は何を見たのか。彼は何も見ない。見えないからこそ、突如として惑乱に襲われたのだ。なんと——おのれの突撃してゆく前方に、女が出現したような。

——環？

盲目なるがゆえに、その戸惑いが彼の足にたたらを踏ませた。おのれは阿波座監物の方へ馳せ寄ったはずなのに？

次の刹那、七兵衛は腰をくの字に折り曲げ、二、三度それを波打たせ、恐ろしい苦悶の表情ともがきを見せると、刀を放り出し、どうっと転がった。いったい彼はどうしたのか。

斬れば斬れるのに、阿波座監物は、じろとそれを見下ろしたまま、うっそりと立っている。何が起ったのか。環にはわからなかった。女の彼女にはついにわからなかった。

その一瞬、白髪の骨ばった阿波座監物は女に化身したのである。

顔、かたちはそのままに、男だけに感得される女そのものに。

衣服はまとったまま裸身を見せる忍法「おぼろ月」、相手の男性をして射精させずにはおかない忍法「弓張月」、さらに全身女陰と変ずる八葉寺隼人の忍法「女陰変」、また半面女人を造型する猪丸塔五郎の忍法「半陰陽」もあらばこそ。

さすがは菊水党の首領株阿波座監物。

彼はなんら五感の上では異常なく、しかも相手の男に——男だけに——女の精髄を感じさせた。まさに忍法の極限。

柔らかな肌、ふるえる息づかい、花粉のような匂い、濡れた粘膜——いや、そんなものは存在しないといっているのだ。存在しないのに、そのすべての感覚が一つの熱風となって、男の骨髄に吹きつけるのだ。——みずから称して忍法「淫魔女精」。

柳生七兵衛をして地上に輾転させたのはその圧倒的な感覚であった。眼があいていたら、彼は射精したろうが、何が何だかわからないから、暗闇に粘膜で全身をつつまれたような気がする——。

——で、斬れば斬れるのに阿波座監物はそれを観察している。最初はおのれの忍法をたしかめるために。次には相手の苦悶ぶりが、彼から見てもやや意外であったために。

が、むろん斬るつもりであった。彼の手が、戒刀の柄にかかった。

「……ふ！」

しかし、その瞬間、監物は七兵衛を捨てて、ススと前へ出た。——いうまでもなく、もう一人の敵、しかも彼から見て真の大敵たる大塔衆首領牛袋兵斎の異様な気配を感覚したからであった。

「こやつはまかせた！」

と、監物はいった。背後の環にだ。

「そなた、斬れ。……大義のために、斬るのだぞ」

そして、彼は牛袋兵斎と相対した。

兵斎は、抜刀していた。——それが、ひたいに柄をあてて中天にまっすぐに剣を立てる例の構えではない。実に奇怪な刀の位置であった。彼はそれを横にして、腰のうしろにあてがったのだ。刃を腰に向け、きっさきは左手の掌さえかろく加えて。

これで、どうして敵に向うのか？

平然として牛袋兵斎は、例の眼鼻口さえさだかでない、海坊主みたいな表情で立っていた。

「？」

数歩、進み寄ったものの、さすがの阿波座監物も、こんどは彼の方が戸惑った顔で相手を見すえた。

寂寞。

密林の中に、ぽかっと巨大な筒のごとくひらいたこの一画。三ノ公の隠し平の蒼い天に、ピーン、カラカラカラ……と鳥が鳴いた。その密林の中には何十人かの国栖衆がひそんでいるはずだが、ここに、このような死闘が行われているとは夢にも知らず、ただその鳥の音にきき惚れていたにちがいない。

死闘？……何物も動かない、まさに寂寞たる死闘。

疑惑の表情は一刹那、白髪の阿波座監物の顔がすうと蠟細工みたいに白ちゃけた。

これで彼の「淫魔女精」の忍法は相手めがけて吹きつけていったのだ。

牛袋兵斎が、やや苦悶の表情になった。彼は動いた！

はじめての動きであったが、それは実に驚くべきものであった。何をしたか、阿波座監物にすら、とっさにわからなかったほどであった。腰のうしろに横なりにした兵斎の刀身は、そのまま腰の前に移動していた。

つまり、彼はおのれの腰を水平に斬ったのだ。敵をではなく、われとわが胴を。

「？」

それに気づいて、阿波座監物の眼が、ふたたび疑惑に見ひらかれた。かっと、張り裂けんばかりに。

彼は自分の眼を疑った。しかし、錯覚でも幻覚でもない。前に出た兵斎の刀は、たしかに血あぶらに濡れている。——

では、兵斎は、まるで豆腐のごとく音もなくおのれを胴斬りにしたのか。それはいったい何のためか。そしてまた、胴斬りにしつつ、なぜ倒れもせずにあのように立っているのか？

兵斎の刀は徐々にまっすぐに上ってゆく。顔は依然として呆けたような無表情であった。そしてその踏んばった両足の袴の裾から、ねっとりと白いものが草の上にしたたり出した。——精液だ。

——忍法淫魔女精が効いたのだ！

怪しみつつも——敵の刀の移動を知りつつも——相手の射精を確認して、

「……われ勝てり！」

その意気込みに、監物はみずから反射的に腕が動くのを禁じ得なかった。この敵を斃すには、いまの転瞬を置いてない！

一閃、戒刀がひらめくと監物は躍りかかっている。

ばさ！　濡手拭をはたくような音がした。ぴかっとその頭上に何やらきらめくと同時に、阿波座監物は、脳天から二つに裂けて、凄じい血潮をぶちまけながらつんのめっていた。

「……じぎれっ」

そうとしか聞えない怪声を発して。

手から離れ、おのれの足もとまで転がって来た監物の戒刀には全然無反応に、牛袋兵斎は相手を斬った姿勢のまま、

「七べ、おれの胴、縛れ」

と、いった。

実に妖刀としかいいようのない一撃であった。

剣と剣との勝負では、しょせん阿波座監物も敵し得べくもない中条流高足の腕には相違ないが——しかし、いったい牛袋兵斎は生きているのか？

「兵斎。……」

七兵衛ははね起きていた。

いまの決闘が見えたわけではない。が、盲目の世界に、突如おのれの肉体をつつんでいた異様な感覚が消滅したのをおぼえて、阿波座監物がこの世から消滅したことを彼は知った。いや、七兵衛としても、いまの濡手拭をはたくような音をきかなかったわけではない。

「早く、縛れ」

兵斎はまたいった。

彼は生きているのか。彼は生きている。まるで二つに分裂した単細胞が、双方とも生きているように。

はて、牛袋兵斎は、剣士であって忍者ではないはずだが！

またたとえ忍者であっても、おのれを両断してなお生きているというようなことは不可能なはずだが——それを、兵斎は可能とした。まさに彼は、一念凝集しておのれを単細胞的人間に変える境地に達したのだ。剣を核として。

むろん、そんなことを予期してではない。結果として、そうなったのだ。いま、阿

波座監物の淫魔女精に直面して、彼は股間から湧きたつ異様な感覚を意識するや、ほとんど反射的にそれを断つためにおのれの胴を斬るという挙に出た。着想ではない。衝動だ。そして、自由？になった上半身を以てこの妖敵を斃したのだ。——剣もここに至ると、忍と一致するといわざるを得ない。

しかし、斬った胴を縛れというのは？

縛れば、斬った胴がまたつながると彼は思っているのであろうか？

「七べ……」

むしろ鈍い声で、彼はまた呼ぶ。——七兵衛は、わけがわからずさけび返した。

「兵斎、おれには見えぬ。おれは盲なのだ！」

「お。……」

兵斎はそのことを忘れていたらしい。顔に埋没していたような眼が、細く銀色にひかり出して、七兵衛の方を見た。

「では、とりあえず、女、殺せ。……」

それは——彼は生きているつもりかも知れないが、すでにこの世の人間ではないものの声であった。

先刻、その命令に抵抗したはずの七兵衛が、まるで魔に憑かれたように空をさぐって這い出している。

その手に、柔らかい肉体が触れた。

七兵衛に触れられても、環は身動き出来なかった。異次元の世界のこととしか思えない凄絶幻妖の決闘を眼前に見て、彼女は麻痺していたのだ。

「殺せ、七べ」

「か、刀がない。——」

「金剛丸、おまえ、背中にある」

そろっと動き出した兵斎を見て、環ははじめておのれをとり戻した。懐剣を握りしめたとき、七兵衛の手は彼女の腹部にさわり、ぴたととまった。

「何、しておる、七べ」

兵斎は近づいて来た。胴を両断しているはずなのに、べつべつに生きている単細胞のごとく、そろそろと。——どこか、危なっかしいが、彼はまさに生きている。

七兵衛の手よりも、その言語を絶する悽惨の妖気に環は呪縛され、それ以上からだが動かなかった。……ただ、念力こめて心にさけんだ。

——忍法弓張月！

むろん、牛袋兵斎に対して必死の忍法だ。阿波座監物の忍法さえ効かなかったとは思い至らず。

とたんに、七兵衛がくるっと反転した。

その股間から、ピューッと白濁したものが飛んで、数歩の位置にまで寄って来た牛袋兵斎の両眼にしぶいた。眼は見えずとも、環の肌に触れることによって、忍法弓張月は発現したのだ。

いや――この場合、これは彼の忍法伊賀の水月であった。或いは両者の合作であったというべきか。

「七べ！　裏切ったな！」

片手で眼を押え、牛袋兵斎はわめいた。

同時に柳生七兵衛は、これまた片腕で背の金剛丸をひっつかむや、盲目のまま空中を薙いでいた。

すべて片膝ついたままの動作であったが、七兵衛の盲斬りが、みごと兵斎の右腕を、刀ごめに斬り離したのは、彼の忍剣もその域には達していたのか、またはこの行為が兵斎にとって思いのほかであったのか。……いや、やはり兵斎自身のからだが平生のものではなかったからであろう。

「しまった」

兵斎はさけんだ。

同時に、腕はもとより、その胴と下肢が二つに分れ、つまりその海坊主みたいなからだは三つに散乱した。胴と下肢との離断は、もとより先刻みずから斬った結果がいま現われたのだ。

それにしても、からだが三つになっていまさら「しまった」とは可笑しいが。

いや、そうなりながらそんな声を発したことこそ恐るべし。

刀を握ったまま宙に躍った兵斎の腕は、一定の角度を向いたまま、ふしぎに一瞬静止するように見えたが、次の刹那、これまたそれ自身生命あるもののごとく、七兵衛めがけて飛びついて来て、その左胸部にぐさとつき立った。

兵斎が、「しまった」とさけんだのは、実はそのあとといっていい瞬間のことであった。ましてや、盲目の七兵衛には逃げもかわしもならず。

「うっ」

うめいて彼は、がっぱと地に伏した。

「あっ七兵衛どの！」

環は狂乱したようにしがみついた。

なんたる魔剣か、刀はその三分の一まで七兵衛の胸につき刺さっている。――

「環。……」

七兵衛はしかしきゅっと唇をまげて笑った。

「よいか、強いおまえに似た子を生んでくれ。おれに似ぬ、女に強い男の子をな。……」

「七兵衛どの……七兵衛どのっ」
「も、もういちど、腹を。……」
環はわななく七兵衛の手をとって、自分の腹におしあてた。——と、七兵衛の股間から、またぴゅっと何やらほとばしって、そのまま彼はがくりと首を地につけてしまった。
なおそのからだにしがみつき、ゆさぶろうとした環は、そのときまた恐ろしい声をきいた。
「しまった。……そのつもりではなかった。七べ、生きて……神器を奪ってくれ。……」
声は地を這い、それっきり消えてしまったが、それは胴体から上だけ、片腕なしの牛袋兵斎の唇からもれたにちがいなかった。——しまった、と彼がさけんだのは、自分が斬られたことより、自分の腕が自動的に七兵衛を刺したことへの痛嘆であったのだ。
遠く近く、叫喚が聞えた。森の中から国栖衆が乱れながら河を渡って来る。やっとこちらの決闘に気づいたらしい。
が、環はふりかえりもせず、凝然とそこに立って、三つの屍骸を見下ろしている。七兵衛の死に対しての悲哀もさることながら、このとき彼女を縛っていたのは、大塔衆、菊水党双方の身の毛もよだつ神器への執念であった。

牛袋兵斎の断末魔の言葉はいまきいた通りだが、そういえば先刻阿波座監物が、「……じぎれ」というような怪音を発したのは、あれは「神器を護れ」といったのだ。自分に対して。
環は悪夢にうなされたような眼で、注連縄を張った岩窟の方をふり返った。
数刻ののち、隠し平から北へ向って立った十人の国栖があった。まんなかに螺鈿の小筐を捧持し、背に金剛丸を背負った環の輿をとりかこんで。
すぐ北方の国栖から西へ向け、賀名生の行宮へ帰るのだ。環はその小筐の中を見ていない。見れば眼がつぶれると国栖衆にいわれるまでもなく、もとよりのぞきみる気もないが、しかしそれより彼女の頭を真っ暗に燃やしているのは、両眼つぶれた柳生七兵衛の死顔だけであった。
ともあれ、彼らがかくも奪わんとし、かくも護らんとして死闘した八坂瓊勾玉とはいかなるものか。
これを実見したものは天下にただ御一人を除いてあるまいから、これはそれと類似の勾玉のことだが——滝川政次郎氏の「三ノ公紀行」にはこうある。
「勾玉の原形は、猪の牙、鹿の背椎骨、むささびの爪などに穴を穿って藤蔓でつないだ輪である。猪の牙は美化されて勾玉となり、鹿の背椎骨は変形して管玉となった。この類のものは、満州蒙古のシャーマンが呪具として使用している——」

——その一行が河から森へ消えたあと、隠し平の山上に立って、じっとそれを見送っている市女笠に虫の垂衣の小さな影があった。

南山巡狩録

……どんな事態にめぐり逢っても泰然自若としているかに見えた柳生舟馬が、この一ト月のあいだほど苦しんだことはない。

ふらりと帰って来た牢姫が、川上の三ノ公で、弟の七兵衛も牛袋兵斎も死んだことを告げた。まるで虫か何かが死んだような調子で。

むろん、いかな舟馬にもこれは大衝撃だ。なんとまあ、弟二人、七人の大塔衆ことごとくこれで死に絶えたことになる。——これはそも、現実のことであろうか。おれは悪夢にうなされているのではあるまいか。

しかし、やはりこれはほんとうだ。ほんとうだとすると——いったい、このことは、これほどの大犠牲を払ってまでやりとげねばならぬことなのであろうか？　さすがの舟馬も深刻な懐疑にとらえられざるを得ないのだが、同じ現実はそんな懐疑をもおし流す。二人の弟の死と兵斎の遺言。

「……われらが死んだら、頼み申すぞ、舟馬どの」

虫が知らせたか、あのとき兵斎はまたこうもいった。

「柳生谷をあげて、必ず三種の神器を！」

本来なら、約束通り、ここで柳生に帰って援軍を呼んで来るべきところであったかも知れない。

しかし、舟馬にはそんな気がなかった。——「敵」を思えば。あの三人の女人を敵と思えば。

けれど、あの女たちがほんとうに敵なのか？　敵にちがいない。げんに七兵衛又十郎を斃したのだから。……ただ舟馬は、もういちど双羽と逢って話をしてみたかった。とはいえ、逢うときは神器争奪のときだが、それよりほかに二人の運命はないのか？　そしてまた舟馬を苦しめたのは、ただこんな想いだけではなかった。

牢姫さまだ。

この姫宮が、舟馬にはよくわからない。

大塔の宮のお曾孫、十五歳、という以外、これまで熊野のどこで、何をしていたのかまったくわからない。

いったいに唖かと思われるほどものをしゃべらず、ときには白痴かと見えることさえある。

それに、舟馬には、なぜかめんとむかっていろいろ聴くことがはばかられるような

或る感じがあった。七兵衛はもとより、女に強い又十郎でさえ同じであったらしいが、この十五歳の姫宮は、なんと舟馬のような神経のふとい男に対してすら、その神経を根こそぎ震わせるような淫美と神聖美の結晶体なのであった。具体的にいえば、彼女に何をせよと命ぜられたら、理非を超えて、反射的にその通りにからだが動きそうな気がする。——

……さて、この牢姫さまが。

川上から帰って以来、何やらくびをかしげて考え込んでいるようになった。

そして、或る日、ぽつんと妙なことをつぶやいたのだ。

「あれが恋か」

「——は？」

舟馬は狐につままれたような顔をした。何かのききちがいかと思ったくらいである。

「又十郎、七兵衛。……お鏡。環。……いずれも殺し合いしとうない風であった。それどころか。……」

それっきり、黙って、また考え込んでいる。実は、又十郎や七兵衛の討たれた状況は、牢姫があまり詳しくしゃべらないので舟馬にもよくわからないところがあるのだが、これを機に聴こうと顔を見ると——牢姫さまはなぜか恍惚たる眼を宙にすえて、それが舟馬をぞっとさせる。

そしてまた二、三日たって、

「舟馬、わたしの腹にも子を作らぬかえ？」

と、突然いい出したのだ。

それが、二、三日まえのつぶやきと、どんな脈絡があるのか、この十五歳の姫宮の心理の飛躍は舟馬の理解を絶する。いや、舟馬にはそこまで考えない。ただ仰天した。

「わたしは一生子を孕んではならぬ。子を孕めば、死人剣の占いが成らぬゆえ——と教えられた」

——つまり、月水がとまるからだろう、と舟馬が気がついたのは相当時間をおいてからのことである。このときは、ひたすら彼は、口をあんぐりあけているだけであった。

「けれど、わたしは子を孕んでみとうなった。……」

牢姫は舟馬を見た。

「おまえの子を」

舟馬は笑おうとしたが、あごのあたりがこわばった感じであった。

彼ほどの男が、この十五歳の姫宮にじっと見つめられると、まるで蛇に魅入られた蛙みたいに呪縛された思いになった。

からくも、手をあげていった。

「ば、ばかな――神器のこと、まだ目的を達してはおりませぬのに！」
こちらからそれを盾にして持ち出すほかはない狼狽ぶりであった。けだるげに、牢姫はいう。
「あれはもうどうでもようなった」
「しかし、大塔衆は」
「大塔衆は、みな死んだ」
「中条兵庫頭どのが」
苦しまぎれに飛び出した名であったが、このとき改めて舟馬の頭を或る疑惑が掠めている。――中条兵庫頭どのはいったいどうなされたのだろう。
中条兵庫頭は京にいる。それはわかっているのだが、この期に及んで、あの人物がまだ京にいるということがいささかふしぎである。大塔衆すべて消え失せたというのに。
むろん兵庫頭は知らないのだろうが、知らないですませているということが面妖なのだ。このたびのことを発起し、あれほど熱情こめて柳生から自分たちをひきずり出した人物ではないか。
「中条。……左様」
牢姫はくびをかしげた。

「こんどの死人剣の占いは……神鏡のゆくえではなく、べつのことを占って見ようと思うておった」
「べつのこと、とは？」
「中条の心を」
「――え？」
「わたしも、何やら気にかかる」
わたしも、といったのは、舟馬のいまの疑いをすでに牢姫も読んだのであろうか。
「舟馬」
「は」
「この次の死人剣の占いがすんだら、わたしを孕ませてたもれ」
舟馬は返答に窮した。
しかし、牢姫のつぶやきをきいて、舟馬はふいに中条兵庫頭に逢いたいという思いにかりたてられた。
そもそも、なぜ自分たちはこのような奇怪な死闘の渦に巻きこまれなければならなかったのか、という最初からの疑問は、その後兵庫頭の度重なる説得によって氷解したつもりであったが、ことここに至って、また同じ不審が執拗にぶり返して来るのだ。
よし、この次の牢姫さまの死人剣の占いが――それが神鏡のゆくえについてか、兵

庫頭の心事についてかは知らず——すみ次第、いちど京に帰って兵庫頭どのに逢うて聴こう、舟馬はこう思案した。

「……で、姫のこの次の死人剣のおん占いは？」

と、彼はおずおずときいた。牢姫は答えた。

「あと五日。——」

しかし、その日を待つまでもなかった。その翌日、風のように外から帰って来た姫宮は告げたのである。

「伊賀の女たち、みな賀名生を出たぞ」

「え——、どこへ？」

「十津川に沿うて、南の山深く、十人の僧兵とともに——」

——いままでは死人剣の占いで神器のゆくえを知り、こちらが先に出て向うが追うというのが例であった。しかるにこんどは、向うが先に出立したのだ。しかも、三人ともに。牢姫はいった。

「どこへゆくかわからぬが、これで死人剣の占いは、その方には無用になった喃。……」

それは右大臣吉田宗房のいい出したことであった。

「神鏡は十津川の奥大塔村にある。それをこちらに移し参らせたい」

——そのとき、環はまだ半死半生であった。川上から神璽を護って帰って以来、ずっとそうなのだ。姉妹じゅういちばん気丈で活発に見えた環が、これまた昼間はよく涙があると思われるほど泣きつづけ、夜は「……七兵衛どの！」と魂をかきむしるようなさけびをあげるところは、一ト月前のお鏡と同じ症状である。

お鏡はやや恢復した。——とはいえ、そもそも双羽をふくめて、三姉妹すべてもう妊娠末期の姿であった。それでちっとも醜くならず、いよいよ哀艶をきわめているのはふしぎだが、しかし三人とも、もはやふつうの旅などむずかしいことは一見してもあきらかだ。

さて、宗房ははじめて大事を打ち明けたのだ。

「天朝、南北に相分れられて、以来ここに五十有余年。その自然ならざる姿が終るときが到来した。この秋、わが南朝は、めでたく京へ御還幸に相成る。——」

「えっ？」

予期はしていたが、三人ともに胸とどろかせた。

「内外種々の情勢より見て、神器のすべてをこの行宮に戻し参らせても、もはや大丈夫であろう。いや、いずれ京へ、帝とともに御還幸に相成る以上、あまり時迫ってあわただしゅうなっては、かえってまちがいのもととなる。さいわい、吉野山から来た僧兵、川上から来た国栖の者どももおる。いまのうちに移し参らせて、その日までお

護りさせよう」

宗房はいった。

「で、勘案の末、すでにここにお戻りなされた神剣神璽は国栖衆に護らせ、大塔村へは僧兵をやることにした。そこで、そなたらじゃが――そなたらのからだのこと、ようわかっておるが、そのうち一人でも僧兵どもの宰領としていってくれる者はないか」

三人は顔見合わせた。

「というのも、先ごろよりのなりゆきから、そなたらの忠節のほど、しかと見とどけたからじゃ。しかも、あの菊水党のめんめんすら討ち果たしたほどの曲者がまだ残っておる形跡がある。その難をふせぐのも、女人ながら、そなたらのほかにないように思う。いってくれる気があるか」

「……ま、参ります」

まず、双羽がいい出した。蒼白な顔色で、彼女の眼は、何者かの姿をそこに見るように宙にすえられていた。

「わたしが」

「いえ、わたしも」

「姉上、わたしも」

と、環、お鏡もさけび出した。

少くとも環とお鏡はこのとき「大義親を滅す」という心境になっていた。ついに神器は堂々と晴れて京へ凱旋するという。そのときまで神器を護らずして、何のためにいままでの辛苦であろう。このことさえ成れば、もはや死んでも悔いはない――いや、むしろ死にたい、という気持であった。

「おお、かくてこそ菊水党のめんめんが推挙しただけのことはある。では、頼んだぞよ」

「右大臣さま」

と、ふと双羽がいった。

「ひとこと、おうかがいいたします」

「なんじゃ？」

「南朝さまが京へお帰りあそばす。もとより日本でただ一つの天朝さまとしてでございましょうね？」

おっとりした彼女が、こんな切口上でものをきくのは珍しい。それはまるで眼に見えぬ何かが――菊水党の魔霊たちが、彼女の口をかりてこの大事な問いを投げかけさせたようであった。

「なぜ、そんなことをきく？」

「あの……京の公方さまが、どこかあてにならないお方のような気がいたしまして」

卒然と彼女はこのとき、お鏡からきいた将軍義満の人物と行状を頭に掠めさせたらしい。

「いや、それは細川武蔵守どのとの確約じゃ。あの人物はあてになる。あれこそ真の幕府――いや、日本の柱石ともいうべき人物、例えば。――」

宗房は管領細川頼之の人物論をやりかけたが、すぐにそんなことはこの際無用だと気づいたらしく、

「もとよりじゃ。そうでなくて、なんで京へ帰る意味があるか?」

と、胸を張っていった。

かくて――三姉妹は旅立ったのである。十津川沿いに南の大塔村とやらへ。

その前後に、五人ずつ、吉野山如意輪寺の僧兵がついていた。ただし、ふつうの行人の眼には、これが同じ道連れとは見えなかったかも知れぬ。双羽がわざと遠ざけたのだ。

――舟馬どの、来て!

双羽の必死のさけびであった。

――そして、わたしの話をきいて!

神器を奪おうなんて考えないで。神器は南朝さまのもの、そしてその南朝さまはついに日本国ただ一つの天朝さまとしてめでたく京へお帰りあそばすのです。いいえ、わたしの話をきかずとも、それさえわかったら、だれだって神器を奪おうなどと思わないでしょう。……

時は夏。

いや、北の下界はもはやその景観だが、南へゆくほど初夏といっていい風が吹く。青嵐というにも冷たい風が。

十津川の渓流から吹きあげる風であった。

すでに柳生舟馬は三人の女を遠望している。そして彼はおのれの眼を疑っていた。彼は三人の女が懐胎していることを知らなかったのだ。――牢姫や大塔衆は気づいていたかも知れないが、一語としてそれを口に出して教えてくれたことはないし、彼女たちと接触したはずの七兵衛や又十郎はそのまま帰らないのだから、いまはじめて舟馬はそれを目撃したわけである。

いや、そういえば牢姫さまはいちど口にはした。

「舟馬、わたしの腹にも子を作らぬかえ?」と。

が、あの言葉がこの事実と関連があろうとは夢にも想像しなかったし、またいま知ったところで、いよいよ結びつけようがない。だいいち舟馬はその事実を見ても、とっさに牢姫さまのあの言葉を思い出さなかったほどであった。

しかし、見るがいい、あの姿を。——双羽の姿を。
双羽は孕んでいる。だれの子を？
おれの子だ。一点の迷いもなく舟馬は確信した。
「見たかえ？」
うしろから牢姫がささやく。
男の舟馬さえ息を切らせる難路を、この姫宮は鳥のごとく、かげろうのごとく軽やかに越えて来る。
「美しい……女が孕むと、あれほど美しいかたちになるものとは知らなんだ。……」
しんそこからの嘆賞であった。
「あれを斬れるかえ、おまえに？」
「斬る？」
舟馬は水を浴びせられて悪夢から醒めたような顔色になった。
「あまりに美しゅうて、いままでわたしには斬れなんだ。……」
うっとりと、牢姫はいう。斬る？　この童女姫が人を斬る？　はじめて舟馬はいつかの兵斎の言葉を思い出した。牢姫さまは天稟の御剣士であらせられる。——おそらく中条兵庫頭どのも手においかねるほどの。
あり得ることだ。あのぶきみな占いをするためには、平気で罪なき人間の殺戮を命じるほどのお人だから。
「けれど、こんどは斬って見たいようにも思う。あの腹にスーとこの牢の御剣をあてて嘯。……」
匂やかな息を舟馬に吹きつけて、牢姫は笑う。
「そして、代りにわたしが孕むのじゃ。よいのう、舟馬。……」
醒めても悪夢は醒めぬ。いや、これは悪夢の精のごとき妖姫であった。

歌書よりも忍書に悲し

——待ち伏せる場所はどこにでもある。
両側に両手のつかえそうな奥吉野の峡谷だ。それをうがつ十津川に沿う道は、道ともいえない段のような場所も少なからず、また河の上に棕梠の綱を張り、野猿と呼ぶ原始的な籠で渡るところもある。そのはるか下に、十津川は夏とは思われぬ氷のようなしぶきをあげていた。
待ち伏せれば、敵が何十人いようと、ただ先頭の一人を相手にすればよい場所はどこにでもあるのに、大塔村から数里も手前の、やや空地になった山陰で、牢姫さまと柳生舟馬は待った。

あれから七、八日のちのことである。

「神鏡のある大塔村、そこにおる村人も、あの国栖衆に似ておる。……同じたぐいのきぢやであろう」

と、牢姫はいうのだ。

むろん、伊賀の三姉妹とそれを護る吉野の僧兵の目的地が大塔村だということをつきとめたのは、牢姫だけの偵察行為であった。

「けもののようなやつらゆえ、神鏡受取役のあるものどもだけ、ここらで待った方がよい。受取りにいった以上、必ず帰って来る」

この姫宮が、こんなにしゃべるのは珍しい。顔色さえ、いつもの白蠟のようなそれが、薔薇色に染まっている。——こんどの旅に出て以来のことだ。

「舟馬、斬るな?」

「……」

「中条に学んだというその腕見てやろう」

「……」

「とはいえ十人の僧兵と三人の女は手に余ろう。七人の僧兵と二人の女はわたしが斬る」

小さな姫宮が平然としてこんな驚くべき言葉を吐くのを、舟馬は茫乎としてきいている。思いは、ほかにあった。

「一人の女と三人の僧兵を斬って見や。……これ、きいているのかや?」

牢姫は、彼のふとい頸に両手を巻いて、ぶら下がった。

「む」

あわてたのは一瞬である。

次の瞬間、舟馬は昏迷におちいった。薔薇色の唇から吹きつけられる吐息の何という強烈な香ばしさ、十五歳の若々しさと三十女のような淫らさが溶け合って、それは淡紅色の雲のように彼の顔をつつんだ。小さな顔までが霧みたいに無限にひろがって、ただその中から二つの眼ばかりが黒い花のようにうすびかって舟馬を見いっている。

思わず、ぶら下がったからだを抱きしめようとして、危いところで硬直したままでとめたのは、剛毅な舟馬なればこそであり、またからくもその眼を意識したからであった。

「男。……」

牢姫はいった。そして、自分でも身ぶるいした。

「恋。……」

と、またいった。

何のことやらわからない。彼女は熊野でどんな生活をしていたのか。こんどこちらへ来て、はじめて男というものを意識したらしい。そして、どうやらそれは柳生兄弟と行を共にしたせいだけでなく、あの伊賀の姉妹と柳生の兄弟との「決闘」を目撃することによって触発されたらしい。そのあいだの、この十五歳の姫宮の心理の転機はまったく謎である。

もっとも、これは舟馬の考えたことではない。彼にはそんなことに思いをめぐらす余裕はない。ただ、

「……あふ！」

と、砂中の魚のごとくあえいだとき、

「来た」

と、牢姫がいった。ぶら下がったまま、彼女はくびをうしろにねじむけている。崖を回って、袈裟頭巾をかぶり、手に薙刀を持った僧兵たちが現われた。その次に、三挺の輿が。——

双羽は螺鈿の筐を抱いている。——その中に八咫の鏡が入っているのであろうか。

「？」

僧兵たちはこちらを見た。こんな山中にあるべからざる武士と市女笠に被衣の少女を異様に思ったらしい。が——少女はそのまま武士にしがみついているし、まさか、

と判断したのだろう。いずれにせよ、先を急ぐ大事な旅、そのまま袈裟頭巾の中から物凄い眼でこちらをにらみつつ、

「……ゆけ」

というように、輿にあごをしゃくった。

輿は通り過ぎてゆく。輿の上の環、お鏡も張り裂けるような眼で舟馬を見つめているが、一言の口もきかずに揺られてゆく。ただ、双羽だけは眼をとじていた。

その一行が草原の北へゆき過ぎて、また暗い山道に入ろうとしたとき。——

「待てっ」

裂帛のさけびを、牢姫はあげた。

そして、舟馬の首ったまから、ぱっと飛び下りた。

こんどは輿のうしろ側に回って歩いていた十人の僧兵たちは、ふりむいて、いっせいに眼をしばたたいた。

それはむろん、いまの声はあの奇妙な小娘か？　という疑惑のためもあったが、太陽に眼を射られたせいもあった。夏の太陽は、南からまっすぐにこの谷へ落ち込んでいるのだ。

「神鏡をおいてゆけ」

と、牢姫はいった。

「いや、本来あるべきところにとどめて置くのじゃ」

「なにっ」

僧兵たちは吼え、鴉みたいに舞い立った。

「舟馬、よいかや?」

牢姫はいった。かすかに笑った声であった。

——が、舟馬は動かない。彼は向うの輿の方を見やって、銅像のように立ったきりだ。

「では、わたしが見本を見せる」

そう牢姫がいうあいだにも、吉野の僧兵たちは薙刀や戒刀をひらめかし、もう十メートルばかりの距離に殺到していた。

と、牢姫は抜刀した。

どこにその刀があったかわからない。ただ淡紅色のあいだから、キラとひかってつき出されたのである。

僧兵たちはちょっと混乱した。それはいま挑戦の言葉を投げたのはその少女にちがいないが、まさか彼女自身が刃向おうとは思っていなかったためと、そしてつき出されたその刀が、鍔はなく、柄から三十センチばかりで折れているしろものであること

を見たからであった。

「な、なんじゃ、それは?」

ちょっとあっけにとられ、歩調をゆるめ、またどかどかと近づいて来た。

牢姫の刀があがった。

「うふっ」

「ぎゃっ」

突如、叫喚が奔騰した。叫喚ばかりでなく、凄じい血けむりまでが。

なんたること、まだ数メートル、僧兵の薙刀もとどかぬ距離なのに、彼らは斬られている。——はっきりと顔面断ち割られ、肩より袈裟がけになり、或いは胴斬りになって——彼らは算を乱し、屍を積んで重なった。

「まず七人」

と、牢姫はいった。

あとの三人の僧兵は、かっと眼をむいたまま、でくの坊みたいにつっ立っている。逃げるはおろか、あごががくがくと動くばかりで、声にもならぬていたらくだ。

「牢の御剣は影で斬る。……影の部分に、曾祖父大塔の宮の怨念が残っておるのじゃ」

牢姫はいった。

柳生舟馬もまたかっと眼をむき、あごをわななかすよりほかに芸はない。——刀の

影で人を斬る。牢姫のいった言葉の意味さえわからないが、しかしこれは眼前の現実だ。見るがいい、人の骨肉はおろか、僧兵たちの薙刀も数本みごとに切断されて散乱している。

「斬らぬか」

牢姫はいった。それから。

「ええ、面倒な。ではわたしがあの女たち、ここで、もひとつ斬ってやろう、見や、まず二人、頭から股まで断ち割って見せるぞえ」

と、身の毛もよだつ宣言をして、また牢の御剣を被衣のあいだから頭上へふりかざしていった。——いかにも、日を背に受けて、その折れた刀の影がスルスルとのびる。影だからよくわからないが、その影には何と折れた刀の存在しない部分があって、完全な一本の刀のようだ。

——草までが、一線、ピッ、ピッと切れてゆくのを見て、

「あっ、お待ち下され……」

舟馬は愕然として躍りあがった。

「せ、拙者が。——」

「斬るか」

「そ、それより、まず神鏡を」

「ええ、斬る方が早い」

牢姫は急速に女たちへの殺意の執念を燃やし出したかに見える。ふだんあまり顔色を変えたことのない舟馬が、まるで総身水を浴びたようになって、現実には苦悶の熱汗をちらしつつ歩き出した。

と、見て、反射的に三人の僧兵が薙刀を構えてふらりと寄る。

「くわっ」

舟馬は吼えた。

その腰からほとばしった大刀が、横薙ぎにこれを払いのけた。どこか放心したような一撃で、鈍重とも見える刀さばきであったが、それはまるで鉈でぶち切るように三人の僧兵の腰の蝶つがいを斬り離している。

そのまま彼は、夢遊病者のように輿の方へ歩いた。輿のかつぎ手たちはみんな腰がぬけたようにぺたんと坐ってしまって、地に置かれた輿の上に、三人の女はこれまた夢魔でも見るように眼を見ひらいていた。

「双羽」

しぼり出すように舟馬はさけんだ。

「神鏡をくれえ」

「いや、斬れ」

と、背後でまた牢姫がいった。

舟馬の顔はすでに死相にちかい。絶体絶命だ。牢姫の命令のみならず、事実自分の手で斬った方がせめてもの「夫の道」だというしかない。

輿を見下ろした舟馬のからだを、殺気の炎がふちどつたようであった。

とたんに——やっと夢から醒めたように、両側の輿の環とお鏡が立ちあがろうとした。いずれも、輿に横たえてあった刀をひっつかんで、

「姉上！」

左右からさけんだが、双羽はうなだれたまま動かない。——

それどころか、がくとふいに両腕をついた。

奇怪なことは、それと見て両側の輿から駈け下りようとした環とお鏡までが、ふいに崩折れて、これまた両腕をついてしまったことだ。

舟馬の全身に悪寒が走った。彼は牢姫の方をふりかえった。彼女が何かしたかと思ったのである。しかし、牢姫の牢の御剣は見えず、

「どうかしたかえ？」

と、いぶかしげに市女笠をかたむけるのが見えた。

もういちど三つの輿の方に眼を戻し、ふいに舟馬ははっとしたように、つかつかと二、三歩寄りかけたが、ふたたびつまさき立ちになって停止した。

「手伝うてくれ」

と、彼は輿のかつぎ手たちにいった。

「さなくば、斬るぞ」

そして、くるっと牢姫の方へ向き直り、彼女が歩いて来るのを見ると、大手をひろげた。

「ややが生まれまする」

そして舟馬は何思ったか、血まみれの大刀をつかみ直すと、おのれの左腹にあてておつりとつき刺し、いっきに、右へ引き回した。

「姫。……拙者には、この女ども斬れませぬ。神鏡奪取の大義にそむいたおわびに、拙者腹を斬りますれば、御慈悲を以て、せめてややだけは。……拙者の子をふくめて、三人のややとその母だけは……」

真夏の奥吉野の峡谷は凍結したかと思われた。太陽すら動きをとめて、ただ同じところにかがやいているようであった。

そんなはずはない。が、そう見えたのは、柳生舟馬が動かないからであった、腹に刀をつき立ててひいた姿勢のまま。

彼は倒れない。ただ、足もとにたまった血が、音もなく徐々にその輪をひろげてゆ

くだけだ。顔色は蒼白から藍色に変ってゆき、しかも眼は白くむき出されて牢姫の方にむけられている。さしもの牢姫もこれには射すくめられたようで、彼女もまた凝然として佇んだままだ。

むろん、動くものはあった。三人の女と、それをとりかこむ輿のかつぎ手たちが。

――しかし、ふしぎにそれすらも、透明な水中の光景か、異次元の幻影のようであった。

だから、時のながれさえさだかでない。どれほど時間が経過したかわからない。

「双羽、生めっ……強い、おれの子を！」

舟馬が、低い、しかし実に愉快そうな声でいった。

同時に彼は地ひびきたてて倒れた。……世にも美しい声があがったのは、それを合図にしてのようであった。

「おンぎゃあ！」

「おンぎゃあ！」

「おンぎゃあ！」

輿のかつぎ手たちの腕に、鮮血にまみれた三つの肉塊が抱きあげられたとき――それまで結ばれていた牢姫の唇がはじめて動いた。

「……ややは、あのようにして生まれるのか？」

風が起って、その被衣をゆるがせた。

「……女は、あのように苦しんでまで子を生むのか？」

その被衣のあいだから、またキラとひかるものが出た。牢の御剣だ。それが徐々に動くと、刀影は三つの輿と、それをめぐって動く人影の方へしだいにのび出した。……太陽が動かないように見えたのはむろん錯覚だ。何しろあかん坊が生まれるまでの時間である。それは西に傾いて、先刻の数倍もの長さにのびていた。

その恐ろしい刀影が、輿に達しようとして――ふっとかき消えた。

牢姫は市女笠をねじむけた。

日は雲に入っていた。

彼女はそこにじっと立っている。待っているようでもあるし、何か考え込んでいるようでもある。太陽は雲にかくれたまま、南にそびえる高い山に入ってしまうかも知れない。――

しかし、べつに考え込むこともあるまいに。――あかん坊を生んだばかりの三人の女は半死半生のはずであった。何も遠くから牢の御剣をあやつるまでもなかろう。

牢姫はやがて歩き出した。

柳生舟馬の屍骸のそばに立ってじっと見下ろす。むろん舟馬は絶命している。しかし立腹を切った男にしては、円満具足、大往生の相であった。

「みんな死んでしまった。……みんな、同じ顔をして」
と、彼女は風のような声でつぶやいた。そしてまた市女笠をかたむけた。
「それにしても、この男たちに頼んだ中条は何をしておるのか？」
それから牢姫は、三つの輿の方へ歩み寄った。ちらっと眼を横にやっていった。
「ほ、子はみんな、男の子ばかりじゃな」

嵐のあと

三人の子を生み落したあとの三つの輿は三つの血の槽にひとしい。その中に横たわった三人の女は、まだ母とも見えず、死の世界になかば浸ったようであった。
それをめぐる牢姫さまは、まるで死神のようだ。
「わたしは」
と、歩きながら彼女はなおひとりごとをいう。
「熊野にいたころ……皇位継承権第二位の女じゃと訓えられた。万が一、いまの南朝が北朝に屈するときは、三種の神器を捧持するのはこの牢姫であるべきじゃと訓えられた。訓えた者の中には、中条兵庫頭もあった。……」
一見、死神などとは見えなかった。

半透明の薄衣を市女笠から垂らしていたが、その本体そのものが半透明のようだ。むしろ天使に近い姿といっていい。生き残っていた輿のかつぎ手たちの中には、ふと近づいてその虫の垂衣の中をのぞいてみたい衝動を起した者もないではないほどであった。——ほんのいま、彼女がたしかに奇怪な術を以て七人の僧兵を斃したのを目撃しなかったならば。
「そのためと……死人剣の占いをするために……わたしは一生処女であれといわれた。なぜなら、月のものがとまっては、その占いが出来ぬからじゃ。……」
こういうことをしゃべるのが、十五歳相応の小柄な姿だから奇妙だが、声は三十女みたいに嗄れて、なまめかしい。
「それ以外に、わたしは何も知らなかった。……」
牢姫はつぶやく。
「こんど、吉野に来て、そのほかのことを知った。……男を……恋を」
垂衣の中から、ちらっとまた三つの輿の方を見たようだ。
眼には見えないが、それは死の閃光であった。……しかり、先刻から彼女は殺気を明滅させつつ、伊賀の女たちのまわりをめぐっている。
それを制止しているのは。——
「おンぎゃあ！」

「おンぎゃあ！」
「おンぎゃあ！」
という三人の生まれたばかりのあかん坊の声であったが、それ以外に——先刻からどうやら彼女の心を迷わせているものがべつにある風情だ。
「それは、あの柳生の男たちの子か？」
と、まだそのあかん坊に眼をそそいでいった。
「わたしは、おまえたちが憎い！」
と、いった。
それからまた被衣のあいだから例の牢の御剣を出した。戦慄すべき瞬間であった。
しかし彼女は——逆に歩いて、柳生舟馬の屍骸を彩る血糊を半ば折れた刀身にぬりたくりはじめたのである。
それから、その刀身をおのれの足もとに置き、またいで、仁王立ちになった。
「……月のものがめぐって来たようじゃ」
と、牢姫はニコリともせずにいった。
どうやら先刻、落日が雲にかくれて魔剣の影が消えたあと、ふいに彼女が考え込んでしまうようすになったのは、そのしるしを自覚したからではあるまいか。そしてそれ以後、何やら気が変った風に見えたのも、その根源はここに発しているかに思われる。

一ト月ごとに神器のゆくえを占った死人剣の占い。それがこんどにかぎって、その月がめぐって来る以前に、服部姉妹が出立したのを追うことになった。そして、いまそのときが来たらしい。
しかし、もはや神器のゆくえを占う必要はない。にもかかわらず、牢姫はこれから死人剣の占いを試みようとするかに見える。彼女は何を占おうとするのか？
牢姫はいった。
「どこにある？」
その両肢のあいだに横たえられた牢の御剣——柳生舟馬の血に塗られた刀に、ぽとっ、ぽとっ、と赤いしずくがしたたり出した。
血だ。牢姫の血だ。
血が血をはじいて——牢の御剣の刃の上に、蜘蛛の足みたいな亀裂が描き出されていった。
「中条の心はどこにある？」
牢姫はのぞきこみ、
「——や？」
と、彼女らしくない声をあげた。

さらに彼女は、長いあいだ——日が山に入るまでそれをじいっと見下ろしていた。
「ほほう。……」
やがてうなずいた声は、むしろ面白げでさえあった。
「……ひょっとすると、菊水党も？」
と、日の沈んだ山の方を眺めていたが、牢姫はふたたび三つの輿の方へ戻って来た。
「伊賀の女たち」
と、呼ぶ。
「これからおまえたちはどうするつもりじゃ？」
「あ、行宮へ帰りまする」
と、かすれた声で双羽がいった。
彼女たちはようやく気力をとり戻して来たのである。三人の女は、まだ血まみれの自分たちの子をそれぞれしっかりとおのれの胸に抱きしめていた。
「神鏡を持ってか？」
「は、はい。——」
「それをここで奪うといったら何とするぞ？」
三人の女の眼には、殺気さえひかったようだ。——環がいった。
「あなたさまは、どなたさまですか？」

「わたしは、大塔の宮の曾孫牢姫」
伊賀の三姉妹は鞭打たれたようであった。身をのけぞらせ、口をあけて、眼前の小さな影を眺めている。
この相手の正体は、とっさには彼女たちの敵愾心をも一撃のもとに粉砕するものであったらしい。次の瞬間、三人は、思わず輿の上に片腕をついていた。
「おゆるし下さいまし、わたしたちを！」
「けれど、神器は南朝さまのものでございます！」
「それを行宮に運びますまで、わたしたちを生かして下さいまし。お願いでございます！」
三人は身もだえしてさけんだ。
牢姫は黙っていた。恐ろしい沈黙であった。
「それが南朝のものになると思うか？」
と、やがていった。
「天日が天にお帰りになるのでございます」
と、双羽がいった。牢姫はしずかにいう。
「天たる京にはもう一つの天日がある」
「南朝さまがお帰りあそばせば、それは消えまする」

と、環がいうのに、お鏡が声を加えた。

「そうでなければ、南朝さまが御還幸あそばす理が立ちませぬ」

「それをおまえたちは信じるかや？」

「信じればこそ、信じればこそ。――」

三人の女の眼には涙がひかり出した。双羽は柳生舟馬の屍骸の方を見ていたが、ほかの二人も柳生七兵衛や柳生又十郎の屍骸の幻を見ていたであろう。

それを信じればこそ、彼女たちは死を賭けてそれらの「夫」たちとたたかったのであった。「逆賊」大塔衆柳生組から神器を護りぬいたのであった。

三人の女はさけんだ。

「この神器を南朝さまへお渡しさえすれば」

「わたしたちはもう死んでもようございます」

「いいえ、わたしたちは死ななければ！」

牢姫は可愛らしく鼻を鳴らした。

「ふふん」

それから。――

「ほんとうに、死んでもよいかや？」

三人の女は、はっとしたように腕の中のあかん坊を見つめた。

三人のあかん坊はこのあいだにも泣きつづけていた。それは生命の讃歌の大合唱であった。

「気が変った」

と、牢姫はいった。

「ここで神鏡を奪うばかりでなく、おまえたち三人、生かして帰さぬつもりであったが、気が変った。いのちはしばらくあずけて置こう。神器も持ってゆくがよい。――しかし、それはおまえたちの理に服したわけでも慈悲心を起したわけでもない。――」

声がうす笑った。

「おまえたちが、にくいからじゃ。あの男どもの子を生んだおまえたちがにくうてならんからじゃ！」

牢姫は足もとの牢の御剣を拾いあげた。被衣で血をぬぐうと、それをどこかにしまいこんだ。

「ひとまず、神器は南朝にあずけておく。持ってゆけ」

そして、その淡紅色の被衣はひらひらとひるがえりつつ、先に北へ駈けていった。すでに蒼茫の暮色を沈めた谷間に、それは妖しい光をひく胡蝶のように見えた。

「……おう、細川衆か」

「いや、今川の者だ！」

十津川の南大塔村へ往来しているたった十余日のあいだに、賀名生の奥の行宮は一変していた。めっきりときらびやかな武者がふえ、しかも呼びかわす声が、以前のように陰性のものでなく、不謹慎と思われるほど陽気だ。

……京軍が来たのだ。

その名乗りをきく前から、それを悟って、双羽たちは一驚せざるを得なかった。

南朝の本拠たる吉野行宮に足利軍が？　——まさに驚天動地のことで、本能的に不安が全身を這うのを禁じ得ない。

しかし、むろんこれが戦意を以て南朝のまっただ中に闖入して来たものではないことはすぐにわかった。

彼らは南朝の兵とあちこちで交歓している。決して腰は高くない。これは連絡のため京から派遣され、こちらで受け入れた小部隊で、このことから見ても南北朝の和睦が眼前に迫ったことはあきらかであった。

そして、これらの異変の影もない例の緑の穹窿の中で——。

黒木の御所で、伊賀三姉妹は大塔村から持ち帰った神鏡を、右大臣吉田宗房に捧げたのである。

「よう大役を果たした」

と、宗房はねぎらい、

「またこのたびのお役目のみならず、これまで神器を守護いたしくれた忠節は、たしかに上聞に達しておるぞ」

と、能面のような顔にもあきらかに感動の色を湛えて会釈した。

のみならず。——彼女たちはふたたび天上の声をきいたのだ。御簾のかなたから、

「秋になったら、京に参れや」

という後亀山天皇の御声を。

三人の女は、がっぱと大地にたたきつけられたように伏していた。

嗚咽がこみあげ、それを抑えるのにからだじゅうの骨も音たててわななないた。この一瞬、正直にいって彼女たちの念頭からは柳生兄弟のしかばねも吹っ飛び、まさに生けるしるしありといった感動のみが全身を満たしたといっていい。

宗房がいった。

「京方が入っておるのは、見たであろう。しかし、案ずることはない。もはや一体じゃ。ここまで事を運ぶのが容易ならぬことであったが、こうなっては大丈夫じゃ。もはやよそより神器に手をくだすものはあるべくもない。……そなたらは知るまいが、ここ一年ばかりが真に危うかった。知らずしてそなたらは、無数の魔手より神器を護ってくれたのじゃ。そなたらの忠節は末代まで残る。……」

それから、ふとわれに返ったように、
「そなたら、これからどうするな？」
ときいた。
三人ともわれに返った。
「ひとまず、伊賀に帰りまする」
と、双羽がいった。——森の彼方に残したあかん坊の泣声を彼女たちはきいたような気がしたのだ。
「左様か」
宗房はうなずいて、
「やがて伊賀にも篤く褒美をつかわすであろう。いや、その方ら、京へ参れ。かたじけなくもみかど直々の仰せである」
と、いった。
三人はまだ地べたへ頭をすりつけていたが、やがて顔をあげた双羽が、
「右大臣さま」
と呼んだ。
「京へお帰りあそばした南朝さまが、ほんとうの天朝さまでございましょうね」
「もとよりじゃ！」

と、吉田宗房は大きくうなずいた。
が——やがて森の外へ退いてゆく三人の伊賀の女の顔は、別人のように虚脱したものに変っていた。
終った。すべては終った。みごと神器護持の聖なる使命を果して。
しかし、自分たちには何が残ったか。すべては虚しかった。いや、死んだ「夫」たちを想えば、虚しいどころか胸も張り裂けそうであった。
——死。
彼女たちの胸を領していたのはその思いであった。わが任終る。あとは……わたしたちはあの人のあとを追って死ぬのだ！
ただ、その彼女たちを身ぶるいさせたのは、だんだん近くなって来る三人のあかん坊の泣き声であった。
そうだ、わたしたちにはあの子がいる。
あのひとたちの子が地上にいる。
わたしたちは、あの子たちのために生きなければならない。——
帰りなん、いざ、ふるさと伊賀へ。——彼女たちは顔見合わせた。京へゆく気などさらになかった。むしろいまとなってはこの天朝さまさえいとわしく、ひたすら子を抱いて伊賀へ逃れたかった。

三人の足は早くなった。一様に毅然たる母の顔になっている。

——しかし、天なり命なり、すべては終ったか。ほんとうに彼女たちの任務は終ったか。すべてはこれで大団円であったか。——否！

——彼女たちは伊賀に帰った。何という「凱旋」であったか。——

それから祖父の服部半阿弥と相談の上、すぐに柳生へ出かけていった。——三人のみどり児を抱いて。

「これが舟馬どののお子でございます」

「これが七兵衛どのの」

「これが又十郎どののお子です」

三人のあかん坊をさし出されたときの石刀自の表情はちょっと描写のしようもない。が、たちまちその皺くちゃの顔は涙だらけになり、狂気のように次々に抱きしめた。

「おう、これが……これが……これが……」

石刀自はすぐそのあとで三人の子息たちの非業の死をきいた。

三人の女はいった。

「もしわたしたちに死ねよと仰せられますならば、この場にても！」

むろん衝撃は大きく、また息子たちの死のよって来るゆえんを耳にして茫然となったが——にもかかわらず、そこにさし出された三つの小さな新しい生命は、老いた祖母のあらゆる感情をも涙の洪水でおし流してしまった。それにここ一年ばかりのあいだに、彼女はいよいよ老い果て、あれほど執念を燃やした神器のことすらどこかへ霞んでしまったような気配であった。

「なんの、そなたら嫁女を殺してよいものか？」

すがりつくような眼は、むしろ幼女に似て、

「そなたら、この柳生にいてたもるかや？」

「おばばさまがおゆるし下さいますならば！」

と、双羽、環、お鏡は涙を流しながら答えた。

かくて柳生城に秋深まり——十月の末、彼女たちは、ついに吉野から京へ、後亀山天皇が神器を捧じて還幸されたことを風の便りにきいた。——南北朝合体ここに成る?!

虚天平安

この一三九二年——南朝暦で元中九年、北朝暦で明徳三年は閏年にあたる。

秋、閏十月。いまの暦でいえば十一月の末。

柳生谷を彩った絢爛奇雅な紅葉もすでに散りはて、満目蕭条たる風光に一変したが、

屋形はもう春が来たようであった。

三人のあかん坊は、すでに天使のように笑う。でんでん太鼓の方に顔をむける。ばあ、とか、ぶう、とかいう声をたてる。みんな可愛らしく、むくむく肥って、そしてそれぞれ父親の面影をとどめていた。

毎日、馬に乗ってヨタヨタと服部半阿弥はやって来る。老人はいつももじもじしている。すでになかば呆けているような石刀自であったが、半阿弥の心はよくわかった。

——どの子を、伊賀のあとつぎにもらってゆこうぞ？

老人はそれを願い、迷い、かついい出しかねているのであった。

本来なら服部家へ婿にいった七兵衛の子をそれにあてるべきであったろう。しかし老人は、どの子もつれてゆきたいようであった。そして石刀自はどの子をも柳生に残しておきかった。

といって、もはや以前のような争いはあるべくもない。——

「おばばどの、柳生と伊賀、千年の平安はついに訪れたの」

しみじみと彼はいう。

「ほんとうに」

と、石刀自も心から答える。

「南北の天下もとうとう一つになられたとやら。いや、天下のことはどうでもよい。

天下がどうなろうと知ったことかい。伊賀と柳生だけは、まこと千年、これで一つになったぞよ」

そして二人は、どの子をもらおうか、残そうか、というようなことは忘れはてたかのように、眼も口も皺の中にたたんでしまう。

そんな祖父や石刀自を眺め、またみどり児たちにゆたかな乳房をふくませつつ、三人の若い母親は溶けるような思いがしていた。

ふり返れば闇夜のように恐ろしい。一瞬、二瞬、胸もはり裂けるような思いのすることもある。——実際彼女たちは、それぞれの「夫」が死んだときは、あの大事さえ果したあとは、すぐにでもそのあとを追う気でいた。しかし、いまはちがう。彼女たちは新しく生きる気力を得た。その根源はこの三つの小さい生命であった。

この冬の桃源郷に、飄然と舞い込んだものがある。十一月の末であった。——こがらしに、淡紅の被衣を吹きなびかせて。

「京から牢姫が来たと、伊賀のおんな衆に伝えてたもれ」

その小さな影は、傲然として屋形の番人にあごをしゃくった。

「？」

見知らぬ訪問者だが、その幼なさとその態度があまりそぐわないので、かえってめんくらってその意を通じた番人の知らせに双羽、環、お鏡はさっと顔色を変えた。

——ほんの二、三カ月前に別れたばかりなのに、まるで忘れていた遠い過去からものがが追って来たのを迎えたように。

妖々として牢姫は入って来た。

「……その後の京の次第、きいたかや？」

と、彼女は嗄れた声でいった。

——この秋十月廿八日、後亀山天皇は吉野を発し、奈良を経て、閏十月二日、京に入られた。南朝、神器を擁してついに凱旋す——と、世人には見えた。げんに奈良興福寺の日記には、この行列を見て、

「南北合体、一天平安」

としるされている。南北相分れてより実に五十七年目である。

が、また眼ある者はすでにその前途を危ぶみ、公卿綾小路信俊の日記にも、

「南朝は御進退粗忽か。定めて御後悔御座あるものか」

と、ある。——

これほどの進退を粗忽にきめてよいことではない。南朝の柱石吉田宗房と足利の柱石細川頼之とがひそかに交渉し、確約したことである。

むろん、南朝びいきの世人が夢みたように、このことで北朝を一掃し、南朝が正統

の政権として回復するということはあり得ない。条件は左のごとくであった。

還幸後、南朝の後亀山天皇は北朝の後小松天皇に「譲国の儀」を行われる。つまり現実には依然として北朝が立つことになるのだが、「譲国の儀式」が行われるという以上、これまでの正統の皇位は南朝にあったと公然幕府が認めることになる。そして後小松天皇のあとは次に南朝系の天皇がつがれ、以後かわりばんこに皇統をつなぐ、というのがこのたびの合体の条件であった。

しかるに。——

京へ帰った後亀山天皇はそのまま洛西嵯峨の大覚寺にとめおかれ、神器のみは傀儡政権北朝の皇居たる土御門東洞院に移された。それっきりである。——

後亀山天皇は、当然先帝として太上天皇の尊号を受けられるべきであった。それも約束の一つであった。それなのに北朝はこれにも異議を唱えた。

「太上天皇は皇位を踏んだ天子に限るべきである。南朝は正統の皇位とは認められないのだから、そのような尊号を奉るべきではない」

というのである。

結局この約束だけはその翌々年に至って、先例はないが「特別例外」ともったいをつけて履行されたけれど。——

あとの和平条件は全然黙殺されてしまった。暦は北朝暦がそのまま継続され、神器

を手に入れた北朝は居直り、居坐り——あと、連綿として現代につづき、そも南朝北朝のいずれが正統なりやという、いわゆる「南北朝正閏論」の大問題を残すのである。

この屈辱にたえかねて後亀山天皇がまた京から吉野へ出奔されたのは後年のことで、さらにそれ以前から「それ見たことか」と抗戦派が叛乱を起し、底なしの南北争乱は再開されたのだが。——

いっとき、表面的には「一天平安」と見えたこの秋にも、

「しまった。まんまと細川武蔵守にしてやられた！」

という大地を叩かんばかりの痛悔は、京へ帰った南朝を吹きめぐったであろう。

「京の次第」はかくのごときものであった。

「きいたかや？」

と、牢姫はいった。

三人の子供を抱いたまま、双羽、環、お鏡は凝然と眼をひらいたままであった。

「そなたら、こういうことになるために神器を護ったかや？」

牢姫はうす笑いしている。

「こういうことになるのを恐れて、柳生兄弟はたたかい、そして死んだ。——おまえたちが殺したのじゃ」

三人の女たちはふるえ出した。大地も震撼し、そこからゆらぎ上って来るふるえであった。

それはほんとか？

「いつわりと思うか」

どうしてこんなことになったのか？

「わたしは、中条兵庫頭のこんこんと申したことをようおぼえているが……そなたら、世阿弥とやらから何ときいた？」

そして牢姫は、乾いた声でからからと笑った。

「申さば、そなたらの働き、すべてむだ働きであった喃。そして、そなたらのために勝ちをゆずって死んだ柳生の男たちの死もみんな犬死。いや、それどころか、神器をあるべからざるところに移すための、いわば敵方を利するための死働きであったとはいえまいか。……」

「ま、参りまする！」

三人の女はさけんだ。

「京へ。——」

子供を置いて、彼女たちは立った。全身をわななかせながら。——

——間もなく、知らせをきいて石刀自がやって来た。ちょうど例によって柳生に来ていた服部半阿弥も駈けつけた。京へゆく、とすぐに知らされたが、なぜゆくのか、

何しにゆくのか、わからない。三人の女は、そのことを説明している余裕もない。いや説明するに耐えられない、いても立ってもいられない風情であった。

が、その顔色のただならぬのを見て、

「おまえたち、すぐに帰って来るのかや？」

「子供はまだ乳を欲しがるに――」

と、二人の老人はおろおろと、不安そうに声をかけた。

三人の母は、もういちどいとし子を抱きあげて乳房をふくませた。頬ずりをした。

「柳生にも、伊賀にも、あとつぎはござりまする」

微笑していったのは、双羽である。

「ゆかねばなりませぬ。わたしどもは、京へ」

と、環はいって金剛丸をとった。

「では、牢姫さま。――」

お鏡がいい、すでに死微笑としか形容のしようのない顔色をのこして、三人の女は妖しの少女とともに、柳生城を出ていった。

「一天平安」

と、細川頼之は微笑してつぶやいた。

「と評した者があるそうじゃが、まさにその感があるな。――頼之、六十四年の生涯、これに賭けて、ついに勝ったといえる」

例によって深沈たる声色であったが、禁じ得ぬ笑いの語韻がある。この人物が生まれてはじめてもらした悦楽の吐息といってよかろう。

「大奸は忠に似たりという語がある。後世、わしを評して大奸と評する者があるやも知れぬ。しかし、このたびのことは、大奸謀こそすなわち大忠そのものであった。万世のためにはこの法しかなかったとわしは信じて疑わぬ。――」

そして、ちょっと頭を下げた。

「礼をいう。そなたたちのおかげじゃ」

頼之の前には、二人の人物が寂然と坐っていた。

足利家剣法師中条兵庫頭と同じく幕府お抱えの能楽師世阿弥であった。――この両人が、相弟子のごとく相並んでいるのを見て、奇異に感じる者があったか、どうか。事実は、いずれも公方親近の身でありながら、二人が相並んで位置するなどいうことは、これがはじめてのことであったが。

「そなたらの尽力は、日本国の永遠とも思われる抗争の根を絶った。……わしの最も怖れたのは、南朝が神器を携えて京に還幸に相成る前に、南朝をめぐる抗戦派のうち、素性も知れぬ分脈の何者かが、このことあるを知って神器を奪い、日本のいずれか山

岳の奥深く逃れ去ってその姿をくらますことであった。かくては南朝北朝はおろか、日本国そのものが修理固成なされる前の海月なす漂えるときと同じ姿と相成ったであろう。なんとしても、その事態は防がねばならなんだ」

二人は黙ってきいていた。

「その分派の一つ――大塔衆は最も危険なやつであった。菊水党といえども、南朝がかくなるものと知っておったならば、いかなる行動に出るか、はかりがたいものがあった。とはいうものの、神器がまとまってこの双方のいずれかの手中にあれば、まだ処置のしようがある。――何よりも、この両派を相たたかわせることは両派を討殺するのみならず、自然とほかの分派も手控えさせる効果があった。――いずれにしても、そなたら両人の労を多とする」

中条兵庫頭と世阿弥はしかし笑わなかった。

どうして笑えようか。彼は自分のなしたことを想起してみずから心の凍るのを禁じ得ない。……あの大争闘の開始されるとき、それぞれはからずも「豆を煮るに豆がらを焚く」という詩を口ずさんだのは、決して菊水党大塔衆をあざ笑うためではなく、自分たちの所業に対する痛嘆であったが、いま万事終って、彼らの胸を領するのはいよいよ深刻な罪の意識であった。

「両人、安んじて励め。兵庫は剣の道に、世阿弥は芸の道に」

ふたりが黙然としているのを見て、珍しく頼之はおだてるような口調になった。

「ただ兵庫、せっかくの剣法がこれからは無用になるかも知れぬが」

「いや、武はその文字通り戈を止めるのがその奥儀でござれば」

と、兵庫頭ははじめてやや微笑した。

「世阿弥は本望であろ？」

「は。――」

これは、ほのかに――しかし満足げに笑った。世阿弥はようやく現在つかんだ自分の立場を思い出したのである。

世阿弥が有名な「風姿花伝」を著わしはじめるのはこの八年後になるが、すでにこのころから彼は芸の鬼となっていた。

おのれの芸術を完成させる裏付けとして、幕府の庇護を受けることは絶対必要であった。とくに彼のような楠木一族という素性の人間には、公儀の大柱石たるこの人物の意志に従うことが至上命令で、それ以外のものはすべて蹂躙して悔いはない。

――ただ、芸道のためには！　彼はこう決意していた。

決意して乗り出したことであり、その結果としていま笑いはしたが、やはり――これだけの権謀をほしいままにして従容たるこの足利家の大軍師には、いまさらながら舌をまかざるを得ない。

「……で」
と、彼はいった。
「公方さまには、みな御承知のことでござりまするか？」
「なんのなんの」
頼之はくびをふった。
「あのお方は童子のようなお方じゃ。またそのようにお育て申しあげた。——かかるいとわしき悪謀にはあずかり知られぬ。天性、玉のごとき大将軍。——」
といいかけて、そのくびをかしげ、
「と申しあげたいが、ちと天衣無縫であらせられ過ぎる」
とつぶやいた。
「こまったことがあるぞ。公方さまにはちかく三種の神器をこの眼で実見したいと仰せ出された。途方もないことと、きびしくおいさめ申しあげたが、知っての通りの大だだっ子、おやりになりかねぬ。——」
そのとき、中条兵庫頭がふっと顔をあげて、頭をめぐらした。——庭むきの大障子の方へ。
「どうした？」
夜の細川屋敷である。兵庫頭は、つと立っていって障子をあけた。庭には物音はな

いが、十数人の黒影がひたひたと詰めている。中条道場の弟子たちで、彼らがここにいることは細川頼之も承知の上であったが、兵庫頭が今宵彼らをここへつれて来て、かくまで警戒するのを怪しんではいた。
「だれも庭に入った者はないな」
と、兵庫頭はいった。
「異常ござりませぬが。——」
と、不審げに弟子の一人が答えた。
「中条、いったい何者にそのように備えておるぞ？」
「先刻、世阿弥にききましたところ、伊賀の生き残りの女三人は柳生におる由、これはたとえ現われても大事ござりませぬが、ただ一人」
と、兵庫頭がいった。
「恐るべきお人がござる」
「それは？」
「例の大塔の宮のおん曾孫姫。——」
「やあ、あれか、きいておる」
と、頼之はうなずいて笑った。
「しかし牢姫さまはたしかまだ十五歳であらせられたな、十五歳の少女を中条ともあ

ろう者が、なにゆえそれほど恐れるぞ？」

「夜、または雨の日、影のない世界ならば恐れることはござりませぬが」

と、兵庫頭はいった。声に、かすかなふるえの尾がひいた。

「影のある白日の下ならば、この兵庫頭さえも恐るべし。――南北朝の御合体以来の始末を知って、あの姫君が凶念を以て迫らるることも充分あり得ますれば」

秘すれば花

花の御所に、笛や鼓の音が流れていた。

それはべつに珍しいことではない。ここには大書院と向い合って、世阿弥の設計になる大がかりな能舞台が庭園に設けられ、ほとんど数日おきに主が申楽能を見物する。――ただ珍しいのは、それが夜に入ってからということであった。しかも、霜月の寒月の下で。

いや、月はいつしか雲にかくれた。

その代り、十幾つかの篝火がつらねられ、薪能。――それはべつに夜を主とする行事ではないが、薪を焚いて能を行うというアイデアは、諸国の雑芸を貪婪に摂取する世阿弥に、いちだんと深い興味を抱かせたであろう。この行事はいつぞや公方にも話したことがあったが、それをこの夜義満が催すとは思いがけなかった。

「花もない季節じゃ。折よく、それは面白かろう」

と、数日前に突然いい出し、たんに自分が愉しむのみか朝臣の主だった人々まで招いて、この夕刻から酒宴をひらき、さて世阿弥一座の申楽見物に移ったのである。で、その大書院はおろか、庭をめぐる母屋の回廊を桟敷として、それら公卿や幕臣やさらに御台の康子はもとよりその他の愛妾、侍女たちまで居流れて、おびただしい篝火のせいばかりでなく、その絢爛さは、だれにも夜空の寒雲を忘れさせるほどであった。

この中で、ただ一つ沈痛懊悩の相を見せている顔に気がついた人間があったか、どうか。

管領細川武蔵守頼之その人であった。

彼もまたこの二、三日前に今宵の催しのことを主君からきいたのだ。義満はいった。

「さんぬる御合体の慶事に際し、骨折ってくれた公卿どのたちをねぎらいたい」――招くべく挙げた人々は、いかにも合体に奔走した南北の朝臣たちである。この思いつきに頼之も異を唱える理由はなかった。

ただ、頼之には何やら気にかかることがあったのだ。合体以来の義満だ。あれ以来彼は顔もからだも一まわり大きくなったように見える。自分と対しても、小山のごとくそびえているかに思われる。――この将軍を大器たらしめようと生涯をかけて教育

し演出して来た頼之であった。いまや幕府泰山の安きに置かれて、将軍またいちだんと威風を加えたことに異議のあろうはずがない。——しかし頼之には、義満がただ大きくなったというだけではない、たんに天衣無縫の度を超えたというにとどまらない、自分の手にさえおえぬ怪物と化したかのような違和感をおぼえ出していた。

そして、その義満の口から、はじめてきいた。先刻、今宵の催の真の意味を。

申楽のはじまるほんの少し前である。それ以来、頼之は、たんに沈痛どころか、恐怖のために麻痺したような表情になってしまった。

なんと義満は、今宵、土御門東洞院（つちみかどひがしのとういん）にある内侍所から、ひそかに三種の神器を運ばせて、ここで実見するつもりであるという。——むろん、現在それを禁衛している衛兵たちを脅したか、買収したかにちがいない。——しかし、それ以外の廷臣がこれをきいたなら、属するところ南北を問わず、承知するはずがない。まさに日本開闢（かいびゃく）以来、髪も逆立たんばかりの驚きの行為だ。なるほどこれは、義満が内侍所に推参しても成らぬ。運び出すことさえ、ひるまなら目に立って不可能だ。

「……で、左様にいたすとな、今宵ここで口をあけて同座しておる公卿らはみな同罪ということになる」

といって義満は、巨大な童子のごとくいたずらっぽく笑った。

彼が皇位に対してすら野心を露（あら）わにしたのは後年のことだが——その鋒芒（ほうぼう）はすでに

頼之も感じている。感じて、戦慄している。頼之は思い出した。いつぞや義満が、

「……天下の何ぴともが、いちども見たことのないものをめぐって、日本中、二つに分れて修羅の争いを争う。かかる愚かしき日本人なるものは、わしは四海に珍しい馬鹿と思う。さればによって、わしはいちど三種の神器を。——」

と呟（つぶや）いたことを。

ふいに思いついた気まぐれではない。最近になっても、同じことを口にして、見たい、といい出している。根は深い。

まさか？　とは思ってはいたが、ではその破天荒の欲望を、ついに今宵実行に移そうというのか。——

さしもの頼之も、あっと眼をむいたきり、しばしいうべき声を失っていたが、ややあって、

「あいや上様、そ、そればかりは、頼之、死すとも、そればかりは。——」

と、のどをひきつらせてあえぎ出したとき、義満はきらと睨（にら）んだ。

「武蔵、いつまでもそちはわしの師父と思うておるか？」

そして笑った。

「義満は、もはや以前の義満ではないぞ」

たんなる言葉以上に、完全に、この足利幕府確立の大功臣に訣別（けつべつ）を告げる眼であり、

笑いであった。

そのときから頼之は、からだも心も凍りついたままでいる。——自分に謀らずして、いつ、いかにして将軍がかかる破天荒のことを企まれたのか？　もはや、とめてとまらぬ——ということを認識した絶望もさることながら、将軍そのものがたしかに自分の手を離れ、愛すべき卵から大魔鳥と化して飛び去ってゆくのを実感した衝撃のためであった。

……自分が、しかし、その卵を抱き、あたため、かえしたのだ！　それにしても、幾十星霜、心血をしぼって権謀をめぐらして来た自分の手の上で、天真爛漫、やりたい放題の大だだっ子のごとく思われたこの主君に、なんぞ知らん、自分が子供のごとく使役されていたにひとしいとは！

「死にたくば、武蔵、勝手に死ね」

軽やかに、義満はいってのけた。

鼓と囃子音がいちだんと急調子になって、能舞台では面をつけた世阿弥が扇を持って烈しく舞っていた。曲は「国栖」であった。

「上様」

背後の唐紙をあけて、女が一人忍びやかにすり寄って来た。

按察の局である。曾ては上皇の御愛妾であったこの女性は、大悶着のあといまは完

全に義満の手に入って、彼を「上様」などと呼んでいる。——

「……お、来たか」

と、義満はふりむいて、顔色を改めた。

三種の神器が内侍所から届けられて来たのだ。それを主君は能を見物がてら実見しようとしている。どうやらこのことの斡旋役は按察の局らしい。——と気がついて、細川頼之は恐怖の呻きをもらそうとして、のどもつまったようになった。

「これへ」

平然として義満がうなずいたとき、庭の向うで一つの声がたばしった。

「火を消せ！　篝火を消せ！」

家臣団の中から走り出て来たのは、中条兵庫頭であった。

——どんな場合にも岩のごとく重厚冷徹な風格を梓っていたこの大剣人が、あるまじき血相となって、そうさけびつつ、みずから近くの篝火を蹴たおし、踏みにじってる。

はて、あの人物が発狂したのか？

静寂を極めていた見物の人々はどよめいた。が、たちまち彼らは、そこの庭にべつの場所から流れ出した四つの影を見た。

花の御所に奉公する侍女たちの席のうしろから現われた四人の女であった。三人は

抜き払った刀身をひっさげ、もう一人、小さな影は、なんと市女笠に虫の垂衣を垂らしている。

「逆賊義満、頼之。――」

「大逆は許さぬ」

「神器はまことの天に返し候え」

彼女たちは庭を真一文字に大書院めがけて走り寄った。

いうまでもなくこれは伊賀の三姉妹であった。

そうと知る者はむろんないが、あきらかに凶念ありと見える女がいつそんなところにまぎれこんでいたのか――疑うよりも、それが女たちであるだけに、そこにいた侍たちはあっとばかり仰天して、かえって金縛りになってしまった。

この場合に、急霰のごとき早鼓と謡いの声を聞いた者があったか、どうか。

「……遠くつづける吉野山、あの谷々峰々より出で合いて、この狼藉人を討ち止め候え。討ち止め候え」

ただ、ななめに走って、曲者たちと大書院のあいだに立ちふさがったのは、中条兵庫頭だ。

「火を消せ！」

彼はなお呼ばわった。

「兵庫どの。……あざむかれたな」

さけんだのはお鏡だ。可憐な顔が、篝火の遠明りに燃えるように染まっている。

「あざむかれた柳生又十郎に代り、御首頂戴」

「弁解はせぬ。この際、ふびんながら。――」

いいおえるのも待たず、風鳥のように躍りかかったお鏡が、ふいに静止した。そのままの姿勢で彼女はつぶやいた。

「返らじとかねて思えば梓弓亡き数にいる名をぞとどむる」

その肩から脇腹にかけて血の花が咲くと、彼女はどうと地に崩れ落ちた。

いつのまにか眼にもとまらず中条兵庫頭は抜刀していて、そのきっさきから、ぽとっ、ぽとっと血のしずくが垂れている。

実にききしにまさるわざであったが、しかしその刀身は瘧にでも犯されたようにおののいていた。眼をとじて、ぐらりとよろめきさえしたようだ。

「火を。――」

だれか、しずかにいった。

嗄れてはいるが、たしかに女の声であった。

それが、やや離れたところに立っている市女笠の少女の唇からもれたと知ったのは、

兵庫頭だけであったろう。

彼はわれに返ったように、かっと眼を見ひらいた。あきらかに恐怖の眼であった。

そのときまでに双羽と環は左右にぱっと飛び離れて、庭の両端につらなっていた篝火のもとへ駈けている。

燃えている薪をそれぞれ片手につかんだのを見て——なぜ市女笠の女が「火を」といい、兵庫頭が「消せ」といったのかは知らず——ようやくあたりの武士が騒然と乱れ立って駈け寄ったが、たちまち、

「ううふっ」

「げふっ」

怪声を発して、みんなまるくなってしまった。——彼らはいっせいに射精したのである。

花の御所に咲いた妖花のごとき忍法おぼろ月、忍法弓張月であった。

中条兵庫頭はそのいずれへ走らんかと一回転し、一瞬ののち、右の双羽の方へ跳躍しようとした。その前に、すっと市女笠が入った。

「……おうっ」

何を見たか兵庫頭ははね返り、まろぶように逆の方へ走った。彼のみぞ知る、「影のある白日の下ならば恐るべし」と彼自身いった。いま影のない夜ではあったが、火

があった。影を生む篝火の炎があった。その恐怖から発するさけびであり、また反射的行為であった。

片手に金剛丸、片手に燃える薪を持って、環はこれと相対した。鏘然たる刃の音がいちど鳴り、火粉が散った。刃の余韻とも聞える声がながれた。

「最後の一念によって善悪の生を引くといえり。七生まではただ同じ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばや。……」

そして環は、金蛾のような火の粉の中にこれまた崩折れた。

その一瞬に、兵庫頭は彼女がにいっと笑ったのを見ている。中条兵庫頭ほどの剣士を相手に、いちどでも刃をかみ合わせた冥利を笑ったのか、いやそれどころか、兵庫のみけんにもななめに血の糸が走っている。あきらかに返り血ではない。——が、眼に入るその傷をおさえるにいとまあらず、彼はふりむいた。

その刹那、遠い大書院で、管領細川武蔵守頼之が血しぶきたてて倒れるのが見えた。

火を消せ。

という兵庫頭の絶叫に従ったのが、かえってたたったのかも知れない。——

突如巻き起った庭の妖闘に金縛りになった義満や御台や愛妾をよそに、宰相頼之だけが動いて燭台を消し、その一画をおぼろ闇と変えている、そして。——

「上様、お早う」

と、義満に逃れるように声を張ったが、なお義満が腰がぬけたように動かないのを見てとると——いや、それより前に、何かは知らず本能的な危険をおぼえたらしく、頼之は義満をかばうようにその前に立った。

その刹那。

彼は脳天から血の糸をたばしらせて棒立ちになったのである。何ぴともその傍に近づいた者もなかったのに。

「秘すれば花」

血泡とともにこの足利家の大柱石はつぶやいた。これが能楽師世阿弥の平生口にする芸道の言葉だと思い出したのはのちのこと。

「天下に見る人なきゆえの神器でござる。——御覧あそばすな」

そういうと、細川武蔵守は打ち倒れた。あとでわかったことだが、この老宰相はほとんど二つになっていた。

影によって人を斬る牢の御剣。

その昔大塔の宮が半ば嚙み折られたその妖剣によってここに足利家の大宰相が生命を終えたのは魔天の配剤というべきか。

さあれ頼之を血しぶきたてて斬り伏せたのが、十数メートル離れた庭に立つ市女笠、

虫の垂衣の少女だとは、斬られた頼之は或いは知っていたかも知れないが知らない義満も、わけがわからないゆえにいっそう夢魔的恐怖にとらえられた。

「……おうっ、天魔牢姫っ」

知っている中条兵庫頭は絶叫して牢姫よりも、その背後に位置する双羽に躍りかかった。牢姫のふるう剣を背後から篝火の薪で照らしている双羽に。

凄惨な音がした。

が、それにつづいたのは、優雅とも聞える双羽の声であった。

「三種の神器、世に伝うること、日月星の天にあるに同じ。……」

そのまま、彼女の影は、小さな牢姫のうしろについて回った。その守護神のように。

完全に斬った、という自信を以て、まことの大敵牢姫に刃をめぐらせようとした兵庫頭は、

「……あっ」

惑乱の絶叫をあげて飛びすさったが。——

「伊賀の女、あっぱれ忠死をとげたか」

牢姫の声とともに、ばっさり兵庫頭の左腕が肩から離れて地に落ちた。

「中条、なんじの剣と牢姫の剣、いずれが勝つや。——おん祖父御覧候え」

牢姫のなまめかしいとしかいいようのない声がひびいた。

が——このとき双羽もまた大地に打ち伏したのである。投げ出された薪から火の粉が散り、黒煙が湧きあがった。

「おうっ……勝負っ」

これは歓喜とも聞える中条兵庫頭の恐ろしい声が流れた。

火の影はなお庭にあった。しかし篝火の大半は——兵庫頭の下知というより人々の恐怖の奔馳によって踏み倒され、いたるところ黒煙があがり、渦巻いていた。まるで地に黒雲が舞い下りたようであった。

その中で、鼓膜をつんざくような刃の音がいちど鳴った。

——それだけである。

やがてまた自然と燃えあがった地上の篝火がそこを照らしたとき——身首を異にした、日本剣法史上開巻第一頁にしるされる大剣士の屍骸が横たわっていた。また舞い落ちた市女笠と虫の垂衣があった。真紅の血潮に染まって。

しかるに、実に信じられぬ怪異だが、その実体たる牢姫の姿は、魔天へ飛び去った雲に乗ったかのように、忽然としてそこから消え失せていたのである。

寂寞としてそれを見まもる義満や公卿や侍たちの耳に、べつの交響がやっと入って来た。それは先刻から流れつづけている鼓と謡いの声であった。

「身は十善の甲斐ぞなき、身は十善の甲斐ぞなき、一葉の舟のゆくすえ、万乗の位つ

いになど帰らざらめや都路に。……」

謡っているのは舞台の世阿弥であった。

「少女子が、少女子が、その唐玉の琴の音に、神々も来臨し。……」

すでに能舞台も、火光と黒煙になかば冥界の世界に見える。その上で、世阿弥が謡い、舞っているのは、ただ恐怖のためだけであった。眼前の事象よりも、おのれの心の中の地獄のために。またおのれの未来に待つ悲運への予感のために。

「一足をひっさげ、東西南北、十方世界の、虚空に飛行して、普天の下、卒土のうちに、王威をいかで軽んぜん。……」

——約百三十年を経て、柳生に剣聖柳生石舟斎、伊賀に大忍服部半蔵を生んだのは、この物語に於ける伊賀三姉妹が残した三人のあかん坊のうち、どの子の裔であったか。それらの雲煙の未来を知るよしもない三人の若い母は、花の御所の夜の庭に、死微笑浮かべて伏していた。

あたかも湊川或いは四条畷で、天皇旗の馬前で討死した楠木一党のごとく。

（了）

単行本　あとがきにかえて

未刊行のままになっていた「忍法創世記」が出版芸術社から出ることになり、もうすぐという時に山田（風太郎）は帰らぬ人となってしまいました。版元の原田社長は、私に「あとがき」を書くようにとおっしゃいます。固くお断りしましたが、なにぶん原田さんとは三軒茶屋以来五十余年にも及ぶおつきあいですので、とうとうお引き受けせざるを得なくなってしまいました。

山田は生前「人間臨終図巻」で他人様の最期のご様子はいろいろ書いていますが、自分の項目は当然ながら白紙のままです。それを埋めようなどというおこがましい話ではありませんが、とりあえず発病から他界までのあらましを思い出すままに書き記し「あとがき」にかえさせていただきます。

平成七年の春頃、眼が見えにくいと言うので眼鏡屋さんに行きましたところ、これは眼鏡というより専門の眼科医に診てもらった方がよい、というアドバイスを受けました。そこで、武蔵野日大に名医がいらっしゃると聞き、最初はその先生に、しばら

平成十三年八月

山田　啓子

くして、出身校の東京医大の方でも検診していただくことにしました。

東京医大の先生は、山田が病院のロビーをチョコチョコと小刻みに歩く様子をご覧になって、パーキンソン病の疑いを持たれたようです。精密検査を受けましたところ、やはりそうらしいということで、検査入院一カ月の後、前立腺や血圧の異常も発見されました。

本格的な闘病はそれから始まったわけですが、そう言えばその三、四年前頃から、よく転ぶようになり、歩き方や手の曲げ方がぎこちなくなるなど、今から思えばすでに兆候が現れていたようです。ご承知のようにパーキンソン病は特に珍しい病気ではありませんが、まだ原因も治療法もよく解っていない難病です。山田もいろいろな薬を試した結果、最終的にはシンメトレルという名の錠剤が一番効くことがわかり、朝晩一錠ずつ飲んでいました。

平成八年には白内障の手術もしましたが、眼はほとんどよくならず、病状だけは少しずつ進行していたようです。今年の六月六日、呼吸が苦しそうになりましたので、かかりつけの桜丘のお医者さんに来ていただき、救急車で多摩市の日本医大永山病院に入院しました。そのまま家には戻れず、七月二十八日午後五時三十分、七十九歳で永眠いたしました。半年ぐらい前からしゃべれなくなっていましたが、意識は確かで、救急車で運ばれるまでは大好きなお酒やビールを少量ながら飲むことができました。

山田はよく奇想天外と評されますように、書くものは一風変わっていましたから、世間では奇人のように思われているようですが、行動はごく普通で私にはよい夫でした。気が短くて時にはカンシャク玉を爆発させることもありましたが、高校を卒業した春、なにも解らないまま結婚した私は、文士とはこんなものなんだろうと思い込んでいましたから気にもかからず、夫の気分を鎮めて書きやすくしてあげるのが自分の役目と信じて今日に至った次第です。

長年、山田を支えてくださいました読者や編集者の皆様に厚く御礼申し上げます。

解説

縄田一男
（文芸評論家）

亡くなってから四年の歳月が経つというのに、未だ逝かれた気がしないのが山田風太郎である。試みに今、書店を訪れれば、『山田風太郎忍法帖』全十四巻（講談社文庫）をはじめとして、『山田風太郎明治小説全集』全十四巻、『山田風太郎忍法帖短篇全集』全十二巻（以上、ちくま文庫）、『山田風太郎ミステリー傑作選』全十巻（光文社文庫）、『山田風太郎傑作大全』全二十四巻（廣済堂文庫）、『山田風太郎コレクション』全三巻（出版芸術社）、そして現在第三巻まで刊行中の『山田風太郎忍法帖シリーズ』（河出文庫）等が並べられており、これに各社から単発で刊行された文庫、単行本の類を加えると、これほど大量の山田風太郎作品が手軽に読める時期は未だかつてなかったといってよく、死して一大ブームを築くとはいかにもこの作者らしい逆説――あたかも書店の一隅から作者の飄飄（ひょうひょう）とした貌（かお）がさながら幻術の如く浮かび上がって来そうな気がするのも私だけではあるまい。

これらの作品の中には今まで未刊行だったものも少なくなく、実は、山田風太郎ほ

ど自身の作品管理にきびしい作家も稀（まれ）であったというべきであろう。山田風太郎の熱心な読者なら、まず掲げるべき標語は〝山田風太郎に駄作なし〟であると思うのだが、当の御本人が「いやいや、これは駄作だから」と再刊を拒んでいた作品数はかなりの数にのぼる。実際、私が、或るアンソロジーに旧作の収録を請うたところ、「このままでは本にするわけにはいかないから」と何十年ぶりかに手を入れられることもあった。

その風太郎作品がほぼ解禁されるようになったのは、最晩年のことで、本書『忍法創世記』は、その中でも目玉中の目玉、未刊行作品を中心に編集された前述の『山田風太郎コレクション』の第二巻として平成十三年十月、出版芸術社から刊行された。作品が連載されたのが、「週刊文春」の昭和四十四年四月二十八日号から四十五年二月二日号にかけてのことだから、読者は約三十年間も本書の刊行を待ちわびていたことになる。

連載に先立って山田風太郎は作者の言葉として

……はじめに伊賀はかたちなし、虚しくして闇淵（やみわだ）の面にあり。神、忍法あれといいたまいければ忍法ありき。／また、はじめに柳生もかたちなく、虚しく闇淵の面にあり。神、剣法あれといいたまいければ剣法ありき。／――これは相隣りする伊賀と柳生にいかなる由来で忍法剣法が誕生したかというお話です。時は南

北朝の終末ちかく、すなわち室町時代全盛のころ。古典は知らず、ほんものの三種の神器が時代小説に登場するのも、おそらくこれをもって嚆矢とするでしょう。と記しているが、作品の舞台背景としては、年代的に忍法帖シリーズのトップに位置し、執筆時期からいえば、その掉尾を飾る大作ということになる。

これまで未刊であった理由としては、作者自身、失敗作の烙印を押したからだとも、作中に〝三種の神器〟の争奪戦が扱われているからだともされているが、今となっては詳らかではない。ともあれ、今、全貌を現わしたこの一巻を読んだ読者諸兄は、これが失敗作であるどころか、異形の傑作であることが分かって呆然とされたことだと思う。

物語は、南北朝が両立してから半世紀余を経た室町中期、同じ南朝方でありながら、〝千年の宿敵〟ともいうべき伊賀と柳生が互いの抗争に終止符を打つべく、双方、三組の男女をめあわせてその禍根を断つ、奇怪なるしとね合戦で幕があく。ところが、ここにこの腐心を一蹴する事態が出来する。南北朝合一に先んじて、柳生には、三種の神器を北朝に渡すくらいなら、これを破壊するも可なり、という過激派・大塔の宮護良親王の曾孫牢姫の命を受けた中条兵庫助が、そして伊賀には、この動きを阻止し、神器を守らんとする能楽師世阿弥が訪れる。かくて、ようやく訪れたかに見えた平和は乱離骨灰、柳生には大塔衆が、伊賀には菊水党が、というように、ここに〝風太郎

忍法帖〟ではお馴染みとなった術者同士の死のトーナメントが開始されることになる。

しかも、中条兵庫助が創始した剣法と、亡き楠木正成を開祖とする忍法は、長い戦乱の中にあって、ようやく兵法として認められたばかり。これぞ題名に偽りなし——正しく『忍法創世記』。しかしながら、作者の言葉にある如く、また多くの時代小説において、作中人物たちの争闘の手段は、ほとんどこの二つ、剣法と忍法に限られており、その意味で本書は文字通り、風太郎流チャンバラ創世記でもあるわけだ。

かくしてまだ真の争奪戦がはじめられていないにも拘わらず、有事に備えて行われる〝忍法勝負〟は、その背後に国体を左右する神器を見据えつつも、神武天皇以来の日本の歴史をパロディックに裁断しており、縦横無尽。男女の性を媒介として繰り出される奇想天外の忍法、ここに極まれり、というべきであろう。

それがうかうかと楽しんでばかりいられないのは、三種の神器について、「かほど天下の歴史を司り、運命決する宝器にして、その実体はいかなるものか、何ぴとといえども見たことがない」と作中において喝破されるからに他ならない。そして後半、真の争奪戦が開始されるや、この実態なき国家の幻影は、風太郎作品に描かれた魔界の住人の中でも最大級の妖人牢姫を現出させしめ、今や相思相愛の仲となった伊賀・柳生三組の男女に惨たる選択を迫る——。

この魔界の顕現は今さら喧伝するまでもなく、他の山田風太郎作品同様、八月十五

日に至る伏線として歴史の連続性の中に打ち出されたものであり、奇しくも、戦後六十年を迎えた今夏、本書を読み返していると、作者が繰り返し、作品で訴え続けていたテーマを思い出し、感慨深いものがある。

すなわち、時代は変わっても、人間が仕出かす愚行は変わらない。

山田風太郎、恐るべし——その思いとともにこの解説を終えさせていただくことにしたいと思う。

影裁き　蘭方医・石庵事件帳

勝目　梓

練達のバイオレンス作家・勝目梓が江戸を舞台に描く痛快時代巨編。八百八町を震え上がらせた猟奇事件に石庵怒る！

忍法創世記

山田風太郎

柳生に剣法、伊賀に忍法が誕生した由来を描き、すさまじい三種神器争奪戦がくり広げられる。幻の長篇忍法帖初の文庫化。

太平記鬼伝――児島高徳

火坂雅志

動乱の南北朝時代、後醍醐天皇への信義を貫き、足利尊氏と戦い続けた五流山伏・児島高徳の苛烈な生涯。

世話焼き家老星合笑兵衛　竜虎の剣

中里融司

藩政を幕府に返上しようという、領民を活かすために進めてきた奇策に幕府転覆の大陰謀が立ちはだかる。

口中医桂助事件帖　南天うさぎ

和田はつ子

虫歯で悩む人たちを長崎仕込みの知識で救う名歯科医・藤屋桂助が、江戸の町に次々と起きる事件の真相に迫る！

秋の金魚

河治和香

幕末から明治、〈咸臨丸〉使節に選ばれた二人の青年士官。明暗分かれる男たちの狭間に揺れる一人の女がいた……。

妖怪文藝〈巻之参〉　魑魅魍魎列島

東雅夫／編

泉鏡花、室生犀星から小松左京、東郷隆まで、全国各地の妖怪が、古今の作家により甦る。水木しげる幻の妖怪小説も初収録！

ALWAYS　三丁目の夕日

山本甲士

西岸良平氏原作の超ロングセラー・コミックをもとに書き下ろされた心なごむ珠玉のハートウォーミング・ストーリー。

私の頭の中の消しゴム

木村元子

映画「私の頭の中の消しゴム」から生まれた、ショート・ストーリー・ブック。

この胸いっぱいの愛を

梶尾真治

映画「この胸いっぱいの愛を」原作者が書き下ろした異色ノベライズ。映画と異なる結末で2倍楽しめる！

冒険の日々 ～マイ・ホームタウン

熊谷達也

自然の中で生きる人間を描いて直木賞を受賞した著者の自伝的ボーイズ・ストーリー。

妖怪文藝〈巻之弐〉　響き交わす鬼

東雅夫／編

強力なラインナップで贈る特選妖怪アンソロジー。第2弾の特集は、特別書き下ろし2編を含む「夢の鬼譚」精華集。

私の悪魔

サラ・グラン
田辺千幸（たなべちゆき）／訳

あなたの心に棲む「魔」が憑依を呼ぶ。じわじわと迫り来る恐怖、戦慄のサイコノベル!! 赤い夢は、悪魔の夢——。

リンボウ先生の新味珍菜帖

林望

料理好き作家の独創性が際立つクッキングエッセイ。作って食べるのはもちろんのこと、読むだけでも旨い！

[文庫版]メタルカラーの時代11 わくわくする大科学の創造主

山根一眞（かずま）

ハワイ島標高4200メートル山頂に建造された、日本の「すばる望遠鏡」は、世界最大最難のプロジェクトだった！

定年漂流

西田小夜子

「定年」を迎えた夫婦のさまざまな生き方や葛藤を凝縮して描いた、小説仕立てのノンフィクション全15話。

タッチ もうひとつのラストシーン

青木ひかる

実写映画公開に合わせて書き下ろされた「タッチ」小説版。心理描写たっぷりの、浅倉南をめぐる夢と友情の青春物語。

感染

仙川環（せんがわたまき）

ウィルス研究医・仲沢葉月は、続発する幼児誘拐殺人の謎を探るうち、医学界を揺るがす危険な策謀を知って……。

SHOGAKUKAN BUNKO
好評新刊

記憶の光景・十人のヒロシマ

江成常夫

十人の原爆体験を、〝負の昭和〟を追い続ける写真家が、聞き書きと現在の風景で再現した「鎮魂の書」。

50CCバイクで島の温泉日本一周

賀曽利隆

50CCバイクで188の島を巡って日本一周。寒さ疲れは温泉で癒し、島人の温かさに触れる旅。

ほどよく長生き 死ぬまで元気

鈴木輝一郎

世を挙げて高齢化社会。同時多発、介護お悔やみ時代の今におくるスラプスティックス〝死〟小説、待望の文庫化。

妖怪文藝〈巻之壱〉モノノケ大合戦

東雅夫（ひがしまさお）／編

日本文学を徘徊するモノノケたち。文豪の名作から現代人気作家の作品まで、活字の海から妖怪たちが躍り出る。

ビー・クール

エルモア・レナード
高見浩／訳

2005年秋公開映画の原作。音楽業界を舞台に、元高利貸しが、イカレた奴らを相手にクールな戦いを展開する。

千里眼 トランス・オブ・ウォー（上）（下）

松岡圭祐

人質救出に向かったイラクにたったひとり取り残された臨床心理士・岬美由紀が遭遇した人生最大の危機。

新ゴーマニズム宣言⑨

小林よしのり

反日に隠れて中国が行ったチベット民族浄化の実態とは？　いま進行中の中国の「犯罪」から目を背けるな！

失踪

西村京太郎

十津川警部と並んで西村京太郎ミステリーのもう一つの人気シリーズ、私立探偵・左文字 進、傑作長編推理。

名古屋の不思議

@ニフティ／編

味噌カツやエビふりゃ～どころではない！　不思議の国・名古屋の〝謎の物体〟を徹底追及してみた!!

熱域（ヒートゾーン）

森 真沙子

人体自然発火はありうるのか。近未来メガロポリス東京を襲う炎熱地獄。焼死した弟の死因を追う姉に迫る謎……。

ぱちもん

山本甲士

胡散臭いイメージを地でいく探偵たちの実態を多彩な味つけで、ユーモアたっぷりに描く、ブラック系連作短篇集!!

フルスウィング

須藤靖貴

愛すべきは野球であり、人生なのだ――。パワーあふれる気鋭が、多彩な趣向を凝らした野球短編小説集。

男の民俗学Ⅲ 大漁編

遠藤ケイ

海士（あまコンブ）、見突き漁、追い込み漁、ザザ虫捕りなど、海や川で男たちが培ってきた多彩な漁法、捕獲法を紹介。

神々の世界（上）（下）

グラハム・ハンコック

世界各地の海底遺跡を著者自らダイビング調査。氷河期末の大洪水で水没した太古の文明の謎に迫る。

雷電本紀

飯嶋和一

江戸天明期、日本中に名を轟かせた伝説の相撲取り・雷電の一生を描いた大傑作歴史巨編。飯嶋和一の出世作！

お江戸風流さんぽ道

杉浦日向子

ファッション、グルメ、長屋暮らしに色に恋。江戸の庶民の息づかいを生き生きと今に伝える江戸案内の決定版！

銭道 恋愛編

青木雄二

世界の両輪は「銭」と「愛」。銭を語り尽くした青木雄二が、愛なき現代に問いかける最初で最後の恋愛論！

八重子のハミング

陽（みなみ）信孝（のぶたか）

四度のがん手術から生還した夫がアルツハイマーの妻に贈った、三十一文字のラブレター。待望の文庫化！

四度目のエベレスト

村口徳行

22歳からカメラを担いでエベレストを働き場所とし、年間100日ほどを暮らす男が見た「聖なる山」の真実。

わが人生のホリプロ いつだって青春

堀　威夫

ホリプロ創業者の、ミュージシャン時代から会社の旗揚げ、山口百恵の引退まで、秘話と写真で綴る異色の芸能史。

オトナこそ歯が命

国立保健医療科学院口腔保健部長
花田信弘

えっ!?　自分の歯が少ない人はボケやすい!?　大人の幸せを約束する、究極の予防・治療法「3DS」などを大紹介。

逆説の日本史(9) 戦国野望編　鉄砲伝来と倭寇の謎

井沢元彦

300万部に迫る国民的ベストセラー待望の文庫最新刊。信長、信玄、謙信。混迷の時代を勝ち残る条件とは。

最澄と空海 日本人の心のふるさと

梅原　猛

最澄と空海、二人の教えは対極にありながら、われわれの心情と深く響き合う日本文化の源泉である。

水木しげるの憑物百怪(上)(下)

水木しげる

日本各地に起こった、古今東西の憑依現象を考察し、「憑物」を見事に絵画化した。図版オールカラー。

罪

カーリン・アルヴテーゲン
柳沢由実子／訳

借金返済を約束されて探偵役を引き受けたベーターは、謎の女を追ううちにいつしか巧妙な罠にはまっていた。

銭道　実践編

青木雄二

青木流・株指南から、究極の借金返済術まで。ピンチをチャンスに変える不況下の金儲けの実践的ノウハウが満載。

うつ病かな？と思ったときに読む本

上島国利

〝こころの風邪〟と言われるうつ病は治療をすれば必ず治る病気。思い込みを払拭して、正しい理解と早期発見を！

三回死んでわかったこと

川津祐介

「一九歳で地獄に行き、三十四歳で天国を見た」人気俳優が三度目の「死」で悟った「大いなる者に生かされる人生」。

釣りは天国

森下雨村

人生を二毛作ととらえ、老後を自然体で生きた雨村のスタイルに大定年時代を生き抜くヒントが隠されている。

A SHU RA ストーリー・オブ・ザ・ムービー　阿修羅城の瞳

出水秋成（いずみあきなり）

鬼になっても、おまえは俺の女だ——2005年4月公開映画「阿修羅城の瞳」から生まれた悲恋の物語。

——本書のプロフィール——

本書は昭和四十四年四月二十八日号から四十五年二月二日号にかけて週刊文春に連載、平成十三年十月、出版芸術社から単行本として刊行されたものです。

シンボルマークは、中国古代・殷代の金石文字です。宝物の代わりであった貝を運ぶ職掌を表わしています。当文庫はこれを、右手に「知識」左手に「勇気」を運ぶ者として図案化しました。

——「小学館文庫」の文字づかいについて——

- 文字表記については、できる限り原文を尊重しました。
- 口語文については、現代仮名づかいに改めました。
- 文語文については、旧仮名づかいを用いました。
- 常用漢字表外の漢字・音訓も用い、難解な漢字には振り仮名を付けました。
- 極端な当て字、代名詞、副詞、接続詞などのうち、原文を損なうおそれが少ないものは、仮名に改めました。

心に届く小説を！ 新しい才能を求めています

第8回

小学館文庫小説賞

作品募集

賞金100万円

【応募規定】

〈募集対象〉読者に読む楽しさを提供しうる小説。物語の新しい試みを有する作品。プロ・アマを問わず、自作未発表に限る。ジャンルも不問とします。

〈原稿枚数〉400字詰め原稿用紙換算で200枚から500枚まで（枚数厳守）。

〈原稿規格〉A4サイズの用紙に40字×40行（縦組み）で印字のこと。必ず表紙をつけ右肩を綴じ、題名、氏名（筆名）、年齢、略歴、住所、電話番号、メールアドレス（有れば）をご記入ください。また表紙の次ページに800字程度の梗概を付け、400字換算枚数を書き込んでください。

〈締め切り〉2006年9月30日（当日消印有効）

〈原稿宛先〉〒101−8001　東京都千代田区一ツ橋2−3−1
小学館　出版局「小学館文庫小説賞」係

〈選考方法〉小学館「文庫・文芸」編集部及び編集長が選考にあたります。

〈当選発表〉2007年2月刊行の小学館文庫巻末ページで発表します。賞金は100万円（税込み）。

〈出版権他〉受賞作の出版権は小学館に帰属し、出版に際しては規定の印税が支払われます。また雑誌掲載権、Web上の掲載権及び二次的利用権（映像化、コミック化、ゲーム化など）も小学館に帰属します。

〈応募注意〉二重投稿は失格とします。応募原稿の返却はいたしません。また、選考に関するお問い合わせには応じられません。

*応募原稿にご記入いただいた個人情報は、当賞の選考および結果のご連絡の目的のみで使用し、あらかじめご本人の同意なく第三者に開示することはありません。

忍法創世記

著者　山田風太郎

二〇〇五年十一月一日　初版第一刷発行

編集人――飯沼年昭
発行人――佐藤正治
発行所――株式会社 小学館

〒一〇一―八〇〇一
東京都千代田区一ツ橋一―三―一
電話　編集〇三―三二三〇―五六一七
　　販売〇三―五二八一―三五五五
振替　〇〇一八〇―一―二〇〇

印刷所――図書印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作局」（☎〇一二〇―三三六―三四〇）あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。（電話受付は土・日・祝日を除く九時三〇分～一七時三〇分までになります。）

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除いて禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎〇三―三四〇一―二三八一）にご連絡ください。

©Keiko Yamada　2005

Printed in Japan

ISBN4-09-408053-8

小学館文庫

この文庫の詳しい内容はインターネットで24時間ご覧になれます。またネットを通じ書店あるいは宅急便ですぐご購入できます。
アドレス　URL http://www.shogakukan.co.jp